

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和33年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001186

昭和 33 年度
国立国語研究所年報

— 10 —

国立国語研究所

1959

は じ め に

昭和33年度における調査研究の概要を収めることとした。

まとまった研究としては、研究報告の13及び14をこの年度に刊行している。ほかに国語年鑑昭和33年度版を編集し、月刊誌言語生活を監修して、国語問題解決の機運に培うことにつとめた。

この年報が10を数えるにいたったことに関して、一言しておきたい。それは、国立国語研究所が創設されてから十年を経過し、その間、国語問題解決のための問題と取り組み、国語合理化の確実な基礎を築くために尽力された全所員の協力である。なお、この研究所が創設されてから、主要な研究事項に関し、貴重な助言をいただいた評議員会のご支援である。あわせて感謝の意を表し、年報10の刊行のこととする。

昭和34年12月

国立国語研究所長 西 尾 実

目 次

はじめに

昭和 33 年度の調査研究のあらまし	1
話しことばの調査研究	
話しことばの文型の調査研究	3
書きことばの調査研究	
雑誌一般の用語の概観調査	9
外来語の分析	10
地域社会の言語生活の調査研究	
日本言語地図作成のための調査	21
北海道の言語についての調査	41
国語教育に関する調査研究	
言語能力の発達に関する調査研究	71
言語の効果に関する調査研究	
新聞の文章のわかりやすさに関する調査研究	111
国語の歴史的発達に関する調査研究	
明治時代語の調査研究	172
特殊問題の調査研究	
同音語の調査	183
中国の文字改革に関する調査	186
国語関係文献の調査	194
図書の収集と整理	200
庶務報告	210

昭和33年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目は次の通りである。

(1) 話しことばの文法に関する調査研究——文型を中心として（継続）

話しことば研究室

(2) 雑誌一般の用語の概観調査（継続）

書きことば研究室

(3) 日本言語地図作成のための調査（継続）

地方言語研究室

(4) 言語能力の発達に関する調査研究（継続）

国語教育研究室

(5) 新聞の文章のわかりやすさに関する調査研究

言語効果研究室

(6) 明治時代語の調査研究（継続）

近代語研究室

(7) 同音語の調査

第一資料研究室

(8) 中国の文字改革に関する調査

第二資料研究室

(9) 国語関係文献の調査

第三資料研究室

新しく本年度から始めた研究項目には、「新聞の文章のわかりやすさに関する調査研究」と「同音語の調査」がある。前者は新聞の文章の改善を計るためのもので、「わかりやすい」ということには、どのような条件があるかを考えようとした。後者は、漢語を使う結果として多く生じている同音語について、一体現代の言語生活のなかで、障害を起すような同音語がどのくらいあるのか、また、同音語を少なくするにはどうしたらよいかを考えて行こうとするものである。

なお、文部省科学研究費（総合研究）を得て、

北海道の言語の実態と共通語化の過程

という題目で調査を行うことになった。これは、これまでほとんど手の着いていない北海道の言語を明かにし、同時に、北海道に生じた“共通語”がどのような過程をとって来たものかを明かにしようとするものである。そしてこの北海道における共通語化の過程を明かにすることは、今後の日本全国にわたる共通語化、標準語化の方策を考える上に参考資料となるものである。

本年度の研究機構および配置は次の通りであるが、新しい国語教育研究室の主任として 芦沢節が、近代語研究室の主任として 見坊豪紀が当ることになった。

第一研究部	(部長) 岩淵悦太郎				
	話しことば研究室 (主任)	大石初太郎	飯豊毅一	宮地 裕	吉沢典男
	書きことば研究室 (主任)	林 大	斎賀秀夫	水谷静夫	石綿敏雄
	地方言語研究室 (主任)	柴 田 武	野元菊雄	上村幸雄	徳川宗賢
第二研究部	(部長) 興 水 実				
	国語教育研究室 (主任)	芦 沢 節	高橋太郎	村石昭三	
	言語効果研究室 (主任)	永 野 賢	林 四郎	渡辺友左	
第三研究部	(部長) 山 田 巖				
	近代語研究室 (主任)	見 坊 豪 紀	広浜文雄	進藤咲子	
第四研究部	(部長) 岩淵悦太郎				
	第一資料研究室 (主任)	松 尾 拾	市川 孝	大久保愛	
	第二資料研究室 (主任)	高 橋 一 夫	村尾 力		
	第三資料研究室 (主任)	上 甲 幹 一	有賀憲三	高田正治	

(岩淵悦太郎)

話しことばの文型の調査研究

A. 前年度までの経過

話しことばの文型の調査研究は、前々年度からの継続である。すでに過年度の年報で述べたように、この仕事は、話しことばの文法研究という立場で取り上げた。

研究方法の基本は次のとおりであった。

- (1) 共通語における各種の対話のことばを資料とし、実験・内省によって、これに補充やたしかめを加える。
- (2) 文を表現意図と形式との対応においてとらえ、その型の体系を求める。
すなわち、表現意図・構文・イントネーションの総合において文型をとらえようとする。

第1, 2年度においては、資料の収集・整理、表現意図・構文・イントネーションのそれぞれについての基礎的研究、および表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの面からの資料の分析が進められた。しかし、第2年度を終えたとき、われわれにはなお基本的研究の上で残されているものがあり、その仕事が第3年度に続行されることになった。

B. 担当者

前年度にひきつづいて話しことば研究室の下記4名が当たったが、表現意図・構文・イントネーションの研究は付記するような分担により、随時それぞれの問題を共同討議にかけて進めた。

大石初太郎 飯豊毅一（構文） 宮地 裕（表現意図）

吉沢典男（イントネーション）

なお研究補助員2名が常時、作業を助けた。

C. 作業の概要

1. 表現意図・構文・イントネーションの研究の進行 表現意図・構文・イントネーションのそれぞれについて、残された基礎的研究と資料分析とを進めた。表現意図については、前年度その体系的分類を立て、それに応ずる文末形式の整理を行ったが、さらに分類そのものに吟味を加え、文末形式の整理のしかたにも修正を加えるところがあった。構文については、その分析の方法の上で、文の成分の切り取り方や格の定め方などの上に、品詞論の見方にも関係して、吟味修正を加えた。イントネーションについては、前年度一応、文末イントネーションの型のとらえ方をきめ、その表記法を定めたが、さらにイントネーションの本質・機能について考察を進め、それらにもとづいて、文型のためのイントネーションの作業に関する限定を進めた。

これらの基礎的研究には本質論につながる問題がそれぞれあり、その根本的解決による処理は短時日にできあがるものとは思えない。この仕事においては理論的になるべく矛盾するところがなく、一応体系的整備をもつところで見切って作業を進めることとし、その立場ではほぼ整理完了に近づいたといえる。

以上の仕事と並行して、文の認定についての見解を固めて文的単位の切り方の最終的決定を行い、それによって問題例の処理をするなどして、文型研究の作業の基礎を定めた。

なお、資料の操作に関して付記する。

日常的な対話の録音資料の操作の困難については前年度年報でも述べたが、本年度われわれは高性能のレシーバーを用いて録音資料の聴取を行った結果、前年度聴取不能だった部分で聴取可能となったところが少なくなく、また、前年度の誤聴を訂正するところも少なくなかった。しかし、それでもなお、音不明瞭で聞き取りえない部分が残し、それは資料外として切り捨てざるをえなかった。また、ふたり以上が何回か聞いてみた上で、ほぼ誤りがないと思われるものに推定した部分も多かった。

2. 独話資料の取扱い 話しことばの文法研究として文型を取り上げたとき、話しことば的性格の最も濃い領域として、われわれは対話を取り上げた。しかし、話しことばを全体的に考えればもちろん対話は限定された領域であり、対話に対立し、性格がかなり相違すると考えられる独語を取り上げることもでき

る。話しことばの文型というためには、したがって、対話だけを資料とするのでは不十分であり、独話資料を取り扱うことも必要だともいえる。両面を合わせた総合的な割り出し、両面の対照比較によって全体的なものを明らかにするということも考えられる。そういう考え方から、われわれは、本年度、独話資料をも取り上げた。目標は、独話資料について文型の小調査を行い、対話の文型との相違と関連について、ある程度の見通しを得るための比較作業をしようというところにあった。そういう計画でわれわれが取材した独話資料は、次のようなものであった。

三つの語彙調査（講演） 時間17分40秒 おくれた子供の教育（講演）12分
 立会演説会（演説）43分30秒 放送会館案内（説明）15分 結婚式祝辞（祝辞）15分
 趣味の手帳2種（ラジオ談話）30分 女性講義4種（ラジオ講義）33分15秒
 主婦日記（ラジオ講義）15分 皆さんの健康（ラジオ解説）15分 計 3時間16分25秒

以上の録音資料について、文字化・訂補等、対話資料と同様の操作を経て分析に着手した。（なお、独話資料による文型の調査研究は、次年度において、対話資料による調査研究と別に、あらためて続行することになったので、対話資料だけによる調査研究の結果をひとまずまとめることにしている。）

（付） 対話資料の共通資料（前年度年報参照）と独話資料とを、表現意図から見た文的表現の分類によって比較してみた、カード枚数一覧表をかかげる。

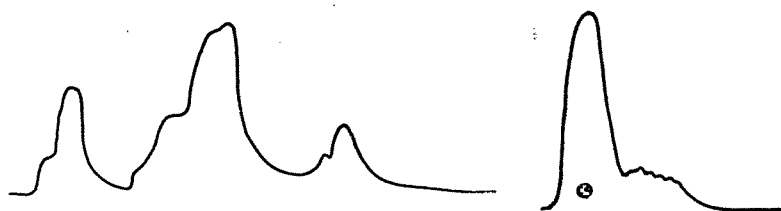
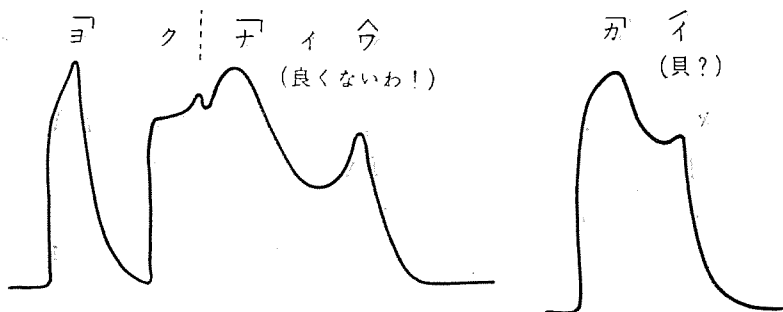
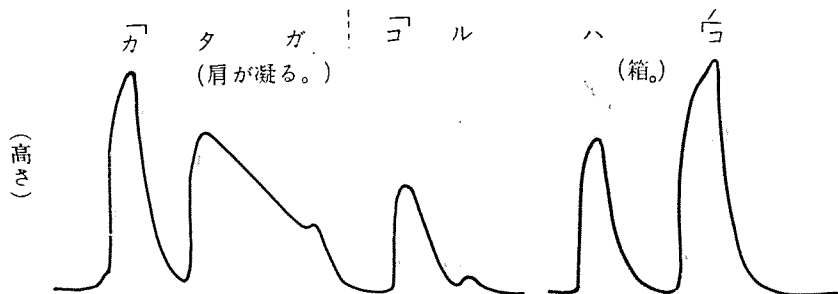
	表現 意図 リ ー ル No.							録音 時間	録音内容		
		詠嘆	判叙	要求	応答	問題 カード	計		形式	題名	話手
対 話 資 料	3	43	284	154	245	51	777	分 秒 28.55	雑談	三人の女性	女9人
	5	82	299	323	196	40	940	26.30	問答 (ラジオ)	新聞人 二十の扉	アナほか 男6人
	12	2	198	277	139	76	692	35.59	窓口問答	職安女子部	男1人 女8人
	16	20	448	169	169	111	917	34.45	雑談	三鷹学生	男4人 女1人
	22	14	400	151	175	84	824	31.55	雑談	“葦” 雑談	男3人 女2人
	27	3	95	81	100	44	323	32.45	窓口問答	結婚式申込	男5人 女3人
	計	164	1724	1151	1024	406	4473	時 分 秒 3.10.49			

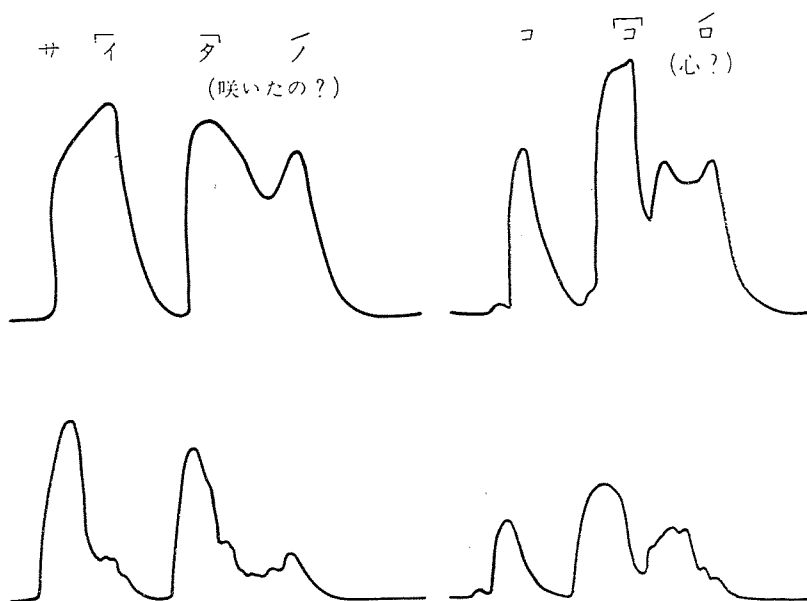
リール No.	表現 意図	詠嘆	判叙	要求	応答	問題 カード	計	録音 時間	録音内容		
									形式	題名	話手
独 話 資 料	82	0	64	0	0	1	65	分 秒 17.40	講演	三つの語彙 調査	男1人
	83	0	44	1	0	3	48	12.—	"	おくれた子 供の教育	"
	84(1)	0	100	6	0	0	106	24.30	演説	立会演説会	"
	84(2)	0	106	5	0	4	115	19.—	"	"	"
	85	0	76	1	0	4	81	15.—	説明	放送会館案 内	"
	86	0	47	0	0	4	51	15.—	祝辞	結婚式祝辞	男2人
	87(1)	0	19	0	0	0	19	15.—	談話 (ラジオ)	趣味の手帳	男1人
	87(2)	0	21	0	0	2	23	15.—	"	"	"
	88(1)	0	31	2	0	13	46	10.45	講義 (ラジオ)	女性講義	女1人
	88(2)	0	40	1	0	1	42	6.40	"	"	"
	88(3)	0	36	4	0	5	45	8.30	"	"	"
	88(4)	0	31	4	0	0	35	7.20	"	"	"
	89	0	43	1	0	10	54	15.—	"	主婦日記	"
	90	0	46	2	0	6	54	15.—	"	皆さんの健 康	男1人
	計	0	704	27	0	53	784	時 分 秒 3.16.25			

(このうち、倒置表現 { 対話…………… 302 } この表についての細かい説明は省略する。
独話…………… 5)

3. ピッチレコーダーによるイントネーションの分析 イントネーションの実験的
分析のために、前年度においてもピッチレコーダーを使用した。研究所にペ
ン書きオシログラフ装置のピッチレコーダーが購入されたため、本年度はこ
れを使用した。機械は日本電子測器KKの製作による Pitch & Intensity
Recorder. Model P1—1 である。これによれば、音の高低・強弱の変化
が、記録紙にペン書きされ、電磁オシログラフのばあいのような撮影・現像・
定着等の手数を要せず、簡易に記録が得られる。ただし声の個別的状況に合わ
せて機械を設定する技術の必要や、ある特殊の声はとらえにくいという制約な
どについては、電磁オシログラフと同様である。

記録図の例を次にかかげる。





注1. 被験者はNHKアナウンサー，昭8生れ，女性。

2. 無声音（たとえば，タの[t]，コの[k]など）の部分は高さがゼロで谷をなすが，音調を見る立場では，その谷を埋めて読みとるようにしなければならない。

4. 今後の見通し 話しことばの文型の調査研究は，来年度以降，対話資料にひきつづき独話資料によってさらに進める予定であるが，対話資料による調査研究は来年度のうちに完了，報告書を刊行する予定である。

（大石）

雑誌一般の用語の概観調査

従来、書きことば研究室で行なってきた語彙調査に、調査対象として、雑誌という形態をとる刊行物の中から婦人雑誌また総合雑誌という類を個別的にとりあげたのであるが、前々年度から手をつけたこの調査は、雑誌の種類を5部門に広げて、広く雑誌の用語の概観を試みようとするものである。

調査対象 5部門90種の雑誌、昭和31年1月号から12月号まで（増刊および付録を含む）の本文の全用語。

5部門90種とは、(1)評論・文芸—12種、(2)庶民—14種、(3)実用・通俗科学—15種、(4)生活・婦人—14種、(5)娯楽・趣味—35種。

抽出比 約二百三十分の一（広告を除いた全紙面から抜いた1/8ページ大の部分約八千箇所について、 β 単位の語を採集する。採集箇所の1/3については助詞・助動詞をも調査する。）

標本延べ語数 約五十三万（うち助詞・助動詞約九万五千）

作業の段階 各部門を通じて9段階に分け、3段階ごとに集計する。

前年度までの経過 資料用雑誌の決定、その収集、採取箇所の抽出、第5段階までの採集用カードのリプリント、第3段階までの採集および検査、第1段階のカード整理。

本年度は、全段階の採集用カードのリプリントならびに採集および検査を完了し、第3段階までのカードを整理、集計した。この段階では、延べ語数十四万四千余、異なり語数二万三千余（助詞・助動詞を除き、固有名詞、数詞等を含む。）を得た。なお、漢字および語の表記の調査のため、第3段階までのカードの転記作業を始めた。これらの作業には、本年度も「伝達の効率化に関する、基礎的言語研究」の題で、文部省科学試験研究費の交付をうけた。（林大）

外来語の分析

語彙の記述には諸種の方法が考えられる。その出自別に和語漢語外来語に分け、それぞれについて記述するのも一つの方法であろう。

雑誌一般の用語の概観調査の抽出標本はそれに9個の小区分を施して整理するが、これはそのひとつすなわち全標本の1/9の大きさ（前ページにいう作業の段階の第1段階）を調査範囲として、外来語について分析したものである。ただし表記については範囲を広げて、全体の1/3について調べた。

ここでいう「外来語」とは、報告13の80ページの「洋語」に同じく、いわゆる漢語以外の外国語から国語のなかにはいつてきたものをさす。

調査に用いた語の単位は、概観調査に用いた β 単位による。(註)

調査範囲はⅠ評論・文芸、Ⅱ庶民、Ⅲ実用・通俗科学、Ⅳ生活・婦人、Ⅴ娯楽・趣味の各部門に別れている。これは各部門の全標本のそれぞれ1/9ずつに当り、その延べ語数は詞（辞に対する）だけで合計約四万九千五百語である。

この分量では分析を行なうためには必ずしも十分ではない。今回は、将来更に資料を増して調査しようとする場合の分析の方法を、予備的に検討するにとどまった。

分析の方法にはいろいろ考えられるが、主として各部門別・原語別の分布、意味、語構成、表記などの観点から行なった。

1. 各部門による使用度数の相違

延べ語数 49482 語のうち外来語または外来語を含む語の数は延べ1558語であり、全体に対して約3.2%である。異なり語数は770語である。これを部門別にみて、外来語を含む率の部門による相違をみることができる。第1表では婦人雑誌に最も多く、評論文芸誌に最も少ないという結果が出ている。なお総合雑誌の調査（報告13、81ページ）でも外来語を含む率は1.4%であって、この

(註) 総合雑誌の調査で用いた β 単位は概観調査では部分的に修正された。すなわち総合雑誌では複合語の場合その構成要素の一つが4音節を越えるときはこれを二単位に数えたが、概観調査では全体で7音節までのものはそれを1単位とすることにした。たとえばサラリーマンは総合雑誌ではサラリー／マンの二単位としたが、概観調査ではサラリーマン全体で一単位とした。

表のⅠの層の数字に似ている。

第1表 外来語の割合

部門別	(1)詞の延べ 語数	(2)外来語の 延べ語数	(3) (2)÷(1)%	(4)外来語の 異なり語数	(5) (2)÷(4)
Ⅰ 評論・文芸	5161	60	1.2	46	1.3
Ⅱ 庶民	8451	143	1.7	114	1.3
Ⅲ 実用・通俗科学	9832	239	2.5	144	1.7
Ⅳ 生活・婦人	9540	685	7.2	307	2.2
Ⅴ 娯楽・趣味	16498	431	2.6	304	1.4
計	49482	1558	3.2	770	2.0

日本の外来語は、登山用語とか医学用語とか美術用語とかの区分によって相違があるように考えられるが、この語彙調査の層分けは記事別話題別でなく雑誌別になっており、たとえば娯楽雑誌の中にも音楽用語も野球用語も取り扱われている。

2. 原語別の分布

現代の外来語は英語から来たものが多いといわれているが、実際にはどのく

第2表 原語別にみた外来語の割合

原 語	明解国語辞典による				広辞苑による			
	異なり語数		延べ語数		異なり語数		延べ語数	
英語	598	84.3%	1344	86.3%	597	84.2%	1354	86.9%
フランス語	38	5.4	72	4.6	39	5.5	63	4.0
ドイツ語	19	2.7	25	1.6	18	2.5	28	1.8
オランダ語	15	2.1	35	2.2	12	1.7	28	1.8
ポルトガル語	4	.6	25	1.6	4	.6	20	1.3
スペイン語	5	.7	11	.7	6	.8	20	1.3
イタリア語	6	.8	9	.6	8	1.1	11	.7
ギリシア語	—	—	—	—	1	.1	1	.1
ラテン語	2	.3	2	.1	1	.1	1	.1
ロシア語	1	.1	4	.3	2	.3	5	.3
中国語	1	.1	1	.1	1	.1	1	.1
その他	11	1.5	14	.9	11	1.5	10	.6
混	10	1.4	16	1.0	10	1.4	16	1.0
計	710	100	1558	100	710	100	1558	100

らいあるのか、その他の外国語はどれほどか。こういう点について調べることもできる。原語の決定については問題のある語があるので、いま二種の辞典を利用した。すなわち明解国語辞典改訂版と広辞苑である。この結果を第2表に示す。(国語および漢語と結合して一単位となるものは、ここでは外来語のみについて考えた。)

表中「その他」は英語～中国語以外の外国語、混は混種語 (hybrid) である。

上の結果の範囲内ではいずれの場合でも英語が圧倒的に多いことがわかる。明解国語辞典によっても広辞苑によっても結果はほとんど差がなく、異なり語数によってみた場合と延べ語数によってみた場合とはあまり変らない。

3. 部門別と原語別の組み合わせ

1の部門別と2の原語別を組み合わせるとどうなるか。第3表は原語別を明解国語辞典により、異なり語の分布を示したものである。

第3表 外来語の部門×原語別にみた割合

原 語	Ⅰ 評論・文芸		Ⅱ 庶民		Ⅲ 実用・通俗科学		Ⅳ 生活・婦人		Ⅴ 趣味・娯楽	
英語	33	75.7%	85	75.9%	95	70.9%	232	85.9%	271	91.9%
フランス語	3	6.8	6	5.4	7	5.2	20	7.4	10	3.4
ドイツ語	1	2.2	8	7.1	11	8.3	1	.4	2	.7
オランダ語	2	4.5	3	2.7	8	6.0	6	2.2	4	1.4
ポルトガル語	1	2.2	2	1.8	1	.8	2	.7	2	.7
スペイン語	—	—	1	.9	1	.8	2	.7	1	.3
イタリア語	—	—	4	3.6	—	—	1	.4	1	.3
ギリシア語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ラテン語	1	2.2	—	—	1	.8	—	—	—	—
ロシア語	1	2.2	—	—	—	—	1	.4	1	.3
中国語	—	—	1	.9	—	—	—	—	—	—
その他	2	4.5	1	.9	6	4.4	1	.4	1	.3
混	—	—	1	.9	4	3.0	4	1.5	2	.7
計	44	100	112	100	134	100	270	100	295	100

この結果によれば、英語はどの層にも多いが、その他の外国語は娯楽雑誌にかなり少なく、実用・通俗科学の雑誌に割合に多いようである。そのほか婦人

雑誌にフランス語が多く、実用・通俗科学の雑誌にドイツ語がやや多いなど、いくつかの傾向がみられるようであるが、もっと調査の数を増して見なければならぬであろう。

4. 意味の分析

語の分析に当ってはその意味を取りあげることが重要である。これには一語一語の意味を記述する方向もあるが、他方これをいくつかのグループに分け、それぞれが意味の体系のどの部分を受け持つか、生活の分野のどんな面に用いられているかを調べることも必要である。

そこで語をいくつかのグループに分類するとどうなるか、そのなかに特に注目される現象があるかどうかについて摘出、記述してみる。（記述の順序は大体分類語彙表〔報告13, 51ページ〕によるが、その取扱いはかなり便宜の方法を用い、全体としては生活分類に近づけた点が多い。たとえばギャザー、タック、ダーツ、フリルなどはその表では1.1の「抽象的關係」のうち物の形に、ガータ編み、メリヤス編み、二目ゴム編み、アップリケなどは1.3の「精神および行動」の項に属するはずであるが、これらを服飾用語としてウール、ブラウスなどの衣服の項にまとめて入れてある。）

計量単位に関する語、数字を受ける助数詞的な語。異なり語数19、延べ語数268。語例、パーセント、キロ、キロメートル、メートル、センチ、センチメートル、ミリ、インチ、ヤード、マイル、グラム、キログラム、オンス、トン、ページ、ドル、フラン、ポンド、ペンス。このグループの特徴として、異なり語数に対して延べ語数が多いことが注目される。このうち延べ138回はセンチとセンチメートルが占め、主として婦人雑誌に用いられる。これを除いた平均出現度数は7.6。

職種的な名前に関連ある語。異なり語数32、延べ語数59。平均出現度数1.9。語例、メーカー、マネージャー、スポンサー、ブローカー、プロジェクター、カメラマン、アナウンサー、モデル、デザイナー、ドレスメーカー、バーテン、ウエートレス、ボクサー。

人間関係その他を表わす語。異なり語数12、延べ語数21。平均出現度数1.7。語例、インテリ、サラリーマン、スポーツマン、オフィスガール、BG、ホー

プ、ベテラン、チャンピオン。

場所の名。異なり語数12, 延べ語数16。平均出現度数 1.3。語例, ダンスホール, バー, キャバレー, レストラン, カフェー, ホール, オフィス, ファッションルーム, アパート。

思想, 政治, 経済, 労働などに関する語。異なり27語, 延べ44語。平均出現度数 1.6。語例, ヒューマニズム, ファシズム, ロマンチズム, リアリズム, インフレ, デフレ, ストック, ブーム, マスプロ, コスト, アルバイト, デモ, スト。

言語・伝達関係の語。異なり語数25, 延べ語数31。平均出現度数 1.2。語例, アンケート, メモ, ボナンザグラム, レッテル, サイン, マスコミ, メッセージ, プロポーズ, ネーム, タイトル, トピック, ニュース, デマ, テキスト, ロマンズ。

映画演劇音楽関係の語。異なり語数28, 延べ語数38。平均出現度数 1.4。語例, ショー, レビュー, シネマスコープ, シネラマ, コメディー, ラブシーン, ドラマ, パレー, クランク・イン, ロケーション, ジャズ, チャチャチャ, スイング, シンホニー, クラシック, ソプラノ, メロディー。

スポーツ関係の語。異なり語数75, 延べ語数 114。平均出現度数 1.5。語例, スキー, スケート, フェンシング, ラグビー, ピッチャー, バッテリー, バッター, ランナー, センター, ライト, マウンド, ライナー, ホームイン, ヒット, パンチ, スイング, KO, ニークランチ, ピクニック, ハイキング。これは語の種類が多いことが注目される。

材料, 原料などに関する語。異なり語数21, 延べ語数32。平均出現度数1.5。語例, セロハン, ボール紙, プラスチック, ブリキ, パイプ, ゴムテープ, アセテート, ビスコース。

衣服, 服飾関係の語。異なり語数 196, 延べ語数 381。平均出現度数 1.9。語例, (生地名) メルトン, ホームスパン, ベンベルグ, ブロード。(形状を示すもの) タック, ダーツ, サイドダーツ。(人間の行為を表わす語) メリヤス編み, ステッチ。(製品名) ワイシャツ, ワンピース, ブラウス。(部分名) スリーブ, ポケット, カラー。このグループは語の種類が非常に多く, 主とし

て婦人雑誌に用いられている。

食品関係の語。異なり語数35, 延べ語数53。平均出現度数 1.5。語例, マヨネーズ, ソース, ウイスキー, ビール, カクテル, コーヒー, パン, バター, フライ, ビフテキ, キャラメル, ビスケット, トマト, パセリ。

住居関係の語。異なり語数8, 延べ語数17。平均出現度数 2.1。語例, バラック, ドア, ベッド, テーブル, カーテン, ストープ。このうちの使用度数の多いものはドア, ベッドである。

道具, 用具, 機械類の名。異なり語数82, 延べ語数 147。平均出現度数1.8。語例, グラス, カップ, マイク, パラソル, ノート, タイプライター, ペン, カメラ, フィルム, ステッキ, ピアノ, テレビ, ラジオ, エンジン, ガスタービン, サイドカー, バス, オートバイ, ジープ, タクシー, ボート, パラシュート。この類も異なり語数が多い。

色彩用語。異なり語数8, 延べ語数13。平均出現度数 1.6。語例, グレー, ピンク, ブルー, パープル。これはいずれも婦人雑誌に現われた。

自然, 物質関係の語。異なり語数18, 延べ語数25。平均出現度数 1.4。語例, メタン, プルトニウム, トリウム, ソーダ, セレサン, クリソー, ガス, ウラン, イオン。これは実用・通俗科学の雑誌に多い。

動物・植物・生物の名。異なり語数23, 延べ語数26。平均出現度数 1.1。語例, カンナ, カーネーション, スイートピー, オリーブ, レモン, カナリア, ペンギン, ネマトーゼ, ウイルス。

医学用語。異なり語数5, 延べ語数11。平均出現度数 2.2。語例, カリエス, ノイローゼ, ビタミン, ホルモン, ショック死。

形容動詞的な語。異なり語数16, 延べ語数24。平均出現度数 1.5。語例, オーソドックス, スマート, シック, プラトニック, ロマンチック, ヒステリック, プレーン。

ABCなどが順序などを表わすもの。異なり語数7, 延べ語数28。平均出現度数4。

以上で関説し得なかった語は異なり語数 121, 延べ語数 210 である。これを分類すると更に細かくなるので以上でとどめるが, このなかにはパス, チャン

ス、ボリューム、グループなどのような抽象的関係を表わす語、ロココ、バロック、ヤンキー、インデアンなど外国の文化様式や人種名を表わす語、アイデア、サービス、プレゼント、テクニクなど人間の行為に関する語、ジャングル、トンネルなどの土地に関する語、アベ（マリア）、アーメンなど感動詞的なことばなど種々のものが含まれている。

以上を通覧すると、一般にいわれているように、服飾用語やスポーツ用語として外来語が多く用いられている。道具機械類のような具体的なものの名前にも多いといえよう。

5. 外来語の結合形式

この分析の範囲では延べ1558語のうち942語が文法的にみて単独に用いられ、残りの616語が他の語と結合して用いられている。

他の語と結合するとき、どんな結合のしかたをするかということも調査の一

第4表 外来語の結合形式

結合の相手	前部分としての結合			後部分としての結合		
	延べ 語数	異なり 語数	語 例	延べ 語数	異なり 語数	延 べ
①漢語名詞						
{ 一字の	28	22	<u>アンデバンダン</u> 展	6	5	大 <u>フェン</u>
{ 二字の	62	53	<u>スポーツ</u> 新聞	52	46	進学 <u>テスト</u>
{ 三字以上の	3	3	<u>プレス</u> 関係者	16	15	未亡人 <u>サロン</u>
②和語名詞						
{ 名詞	13	7	<u>セーラー</u> 型	14	7	玉縁ボタンホール
{ 居体言	3	2	<u>コスト</u> 切下げ	4	3	貸切 <u>バス</u>
{ 形容詞語幹	—	—	[<u>ゴール</u> 間近]	2	2	黒 <u>アストラカ</u> ン
③洋語名詞	38	33	<u>ガソリン</u> スタンド	42	36	ロケット <u>エンジン</u>
④混種語名詞	3	3	<u>タクシー</u> 乗場	7	4	赤字 <u>バランス</u>
⑤固有名詞	3	3	<u>ミセス</u> 羽仁	14	14	李 <u>ライン</u>
⑥数 詞	4	4	<u>ウラン</u> 233	270	21	3 <u>センチメー</u> トル
⑦その他	—	—	[<u>MS A</u> 第七次交渉]	4	5	余生安樂型 <u>マダム</u>
⑧動詞《する》	26	22	<u>タッチ</u> する			
⑨《する》以外の 動詞型接尾語	—	—	[<u>インテリ</u> ぶる]			
⑩形容詞型接尾 語	2	2	<u>ジュニア</u> らしい			
計	185	154		431	158	

項目として立てることができる。

年報 9 の 36 ページに総合雑誌（報告 12, 13）における洋語名詞の結合形式が表示されている。その整理法に従ってこの分析の結果を示す。

6. 単独の語の用法

他の語と結合せず単独で用いられた語の文法的な用法は次のようである。

第 6 表 単独の語の用法

用 法	延べ語数	異なり語数	語 例
1 名 詞	932	479	<u>トンネル</u> の中
2 形容動詞 ～な	10	9	一番 <u>オーソドックス</u> な方法
3 動 詞	—	—	〔 <u>サボル</u> 〕
計	942	488	

外来語が文法的に単独で用いられるときは、ほとんど名詞としての用法であるといえよう。形容動詞はたまたま「～な」の形しか用いられず、他の形は現われなかった。

7. 表 記

外来語の表記については、その語形と関連して種々の表記が可能であることが問題になる。

そこで、同一の語で二とおり以上の異なった表記形式をもって現われたものを集め、これを国語審議会の第 20 回総会（1954 年 3 月）における術語表記合同部会報告（以下「報告」という。）に示された項目によって整理してみた。以下の項目の初めの数字は「報告」における項目の番号、「 」内は「報告」にある文、語の次に示す数字はこの分析の標本度数である。なお表記の分析に限り調査範囲を拡大して全体の 1/3 について調べた。

1. 「報告」に「外来語は、原則としてかたかなで書き、別表『外来語を書くときに用いるかなと符号の表』の範囲内で書く」とあるが、かたかなで書かれたものとひらがなで書かれたものがあるのは、

たばこ屋 1 タバコ屋 1 とんかつ 1 豚カツ 2

である。かなのと漢字のとあるのは、

ドル	30	弗	3	ページ	6	頁	31
トン数	4	屯数	1	ボタン	18	釦	4
ガラス	8	硝子	3	木ボタン	1	木釦	1
ボタン穴(孔)	2	釦穴	1				
タバコ	6	煙草	10	莧	2		

かなのほか、ローマ字でも書かれたものは、

ヤール幅, 巾	7	Y幅, 巾	5	ワット	1	W	5
ダブル幅, 巾	2	W幅, 巾	4	キロワット	6	KW	7
センチ	161	C	42	バスト	3	B	1
ヒップ	4	H	2	バスト線	5	B線	1
ウエスト, ウェスト	18	W	12				
ウエスト線	7	W線	1				
ウエストライン	2	W・L	1				

があり、いずれも略表記である。ローマ字で書かれたものは、主として横書きの文中または図表の中に現われたものである。ただし、Y幅・巾, W幅・巾, B線, W線は縦書きの文中でも用いられている。

漢字とかなとローマ字の用いられたものは、

メートル	11	米	7	m	6
センチメートル	1	糎	47	cm	74
キロメートル	1	浬	1	km	2

m, cm, km, は横書きの文中、または図表の中だけに現われている。

このほかに、

パーセント	10	%	63
-------	----	---	----

のようなものもある。

2. 「慣用の固定しているものは、これに従う。」

セーター	3	スエーター	4
------	---	-------	---

3. 「はねる音は『ン』と書く。」

ジャンパー	3	ジャムパー	1
カンパ	1	カムパ	1

6. 「よう音は、小さく『ヤ』『ユ』『ヨ』を書き添えて示す。」

チェック	2	チエック	2
リュウマチ	1	リウマチス	1

7. 「長音を示すには、長音符号『ー』を添えて示し、母音字を重ねたり、

『ウ』を用いたりしない。なお、原音における二重母音の『エイ』『オウ』は長音とみなす。」

メンバー	4	メンバア	1	バー	2	バア	1
スリラー	2	スリラア	1	スター	13	スタア	8
バーテン	2	バッテン	1				
タクシー	5	タクシイ	2				
ドレッシー	1	ドレッシイ	1				
ジャージー	1	ジャージイ	2				
ツーピース	3	ツウピース	1				
ロケーション	4	ロケイション	1				
ニューフェース	1	ニューフェイス	1				

10. 「原音における『ファ』『フィ』『フェ』『フォ』・『ヴァ』『ヴィ』『ヴ』『ヴェ』『ヴォ』の音は、なるべく『ハ』『ヒ』『フ』『ヘ』『ホ』・『バ』『ビ』『ブ』『ベ』『ボ』と書く。ただし、原音の意識がなお残っているものは、『ファ』『フィ』『フェ』『フォ』・『ヴァ』『ヴィ』『ヴ』『ヴェ』『ヴォ』と書いてもよい。」

グローブ	1	グローヴ	1	カーブ	6	カーヴ	1
オーバー	5	オーヴァー	4				
キャンバス	1	カンヴァス	1				
ラブシーン	3	ラヴシーン	1				
ハーベスト	1	ハーヴェスト	1				

11. 「原音における『ティ』『ディ』の音は、なるべく『チ』『ジ』と書く。ただし、原音の意識がなお残っているものは、『ティ』『ディ』と書いてもよい。」

プラスチック	2	プラスティック	1
ロマンチック	1	ロマンティック	3

12. 「原音における『シェ』『ジェ』の音はなるべく『セ』『ゼ』と書く。ただし、原音の意識がなお残っているものは、『シェ』『ジェ』と書いてもよい。」

ゼネラル	2	ジェネラル	3
------	---	-------	---

13. 「原音における『ウィ』『ウェ』『ウォ』の音は、なるべく『ウイ』『ウエ』『ウオ』と書く。」

ウエスト	12	ウェスト	6
ウイスキー	2	ウィスキー	2

18. 「原音における『テュ』『デュ』の音は、『チュ』『ジュ』と書く。」ではスチュワーデスなどの例があげてあり、〔例外〕としてプロデューサーと書くことになっている。この分析では

プロデューサー	2	プロジュ－サー	1
---------	---	---------	---

以上は「報告」の19か条に含まれると考えられるものである。この分析の範囲内で以上19か条にははいるないと考えられるものを以下にあげてみる。

a なかてんを使うかどうかの問題

サイズリボン	1	サイズ・リボン	1
チームワーク	1	チーム・ワーク	1
ハイネック	2	ハイ・ネック	1
ハンドバッグ(ク)	4	ハンド・バッグ	1
ハンスト	1	ハン・スト	1
レモンイエロー	1	レモン・イエロー	1
ショールカラー	1	ショール・カラー	1

b 「ファ」と「フア」など

ファン	19	フアン	8
-----	----	-----	---

c 「ティ」「ディ」を「テ」「デ」にするもの

パーティ(ー)	3	パーター	1
メロディー	1	メロデー	1
アイディア	2	アイデア	2

d 英語の〔kæ〕の音に当るもの

カメラ	27	キャメラ	1
カメラマン	5	キャメラマン	1
カンヴァス	1	キャンバス	1

e 母音の長さに関するもの

キャミソール	2	キャミソル	1
ニュアンス	3	ニューアンス	1
ボリュウム	1	ボリュム	1
アダジオ	1	アダ－ジオ	1

f その他

ベティコート	7	ベテイコート	1
ブラシ	3	ブラッシュ	1
ハンド(・)バッグ	4	ハンドバック	1

(石綿)

日本語地図作成のための調査（第2年度）

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 はじめに | 3-3 仮整理の分布地図数枚 |
| 2 調査にたずさわった人々 | 3-31 ニオイ（匂） |
| 3 調査の進行状況 | 3-32 アゼ（畦・畔） |
| 3-1 臨地面接調査・調査地点 | 3-33 ヌカ（糠） |
| 3-2 被調査者の経歴表から | 4 来年度以降の見通し |
| 3-21 被調査者の年齢 | |
| 3-22 被調査者の在学期間 | |
| 3-23 調査にかけた時間 | |

1 はじめに

7か年計画で、昭和32年度に始めた「日本語地図作成のための調査」は、第2年度を迎えて、本昭和33年度までに、666地点の臨地面接調査を終った。調査の目的・内容・方法などについては「年報9」にゆずることにして、ここでは、調査の進行状況と、今までに集まった資料からわかった限りの、調査結果の概略とについて述べることにしよう。

2 調査にたずさわった人々

この調査は、「年報9」でも述べたように、国立国語研究所地方言語研究室がセンターとなって、調査全般の企画・運営および結果の整理にあたった。一方、臨地面接調査は、地方研究員が地域を分担しておこない、地方言語研究室の室員も随時これに加わった。

本昭和33年度の調査に従事したものは次の通り。

調査者 番号	担当地域	氏 名	勤務先（1954年4月現在）	住所（左に同じ）
01	北海道Ⅰ	五十嵐三郎	北海道大学文学部（助教授）	札幌市北28条東3丁目
02	北海道Ⅱ	長谷川清喜	北海道学芸大学（助教授）	札幌市北24条西9丁目 札幌住宅201
03	北海道Ⅲ	石垣 福雄	道立札幌北高校（教諭）	札幌市北2条西12丁目
04	青森	此島 正年	弘前大学教育学部（教授）	弘前市袋町20
05	岩手	小松代融一	県立杜陵高校（教頭）	盛岡市下小路63

48	宮城	加藤 正信	東北大学大学院(学生)	仙台市長町北町 146 早坂方
07	秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部(教授)	秋田市手形東新町 1
08	山形	後藤 利雄	山形大学文理学部(講師)	山形市緑町 2 丁目 4 の 4
09	福島	菅野 宏	福島大学学芸学部(助教授)	福島市入江町94の15
10	茨城	宮島 遼夫	科学体系研究所(所員)	東京都中野区川添町 5 永井アパート
11	栃木	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部(助教授)	宇都宮市一ノ沢町196
12	群馬 埼玉	上野 勇	県立沼田女子高校(教諭)	沼田市810
14	千葉	加藤 信昭	都立大学大学院(研究生)	東京都渋谷区代々木 上原1172
49	東京・神奈川	日野 資純	駒沢大学文学部(助教授)	東京都町田市大蔵町459
16	新潟	剣持隼一郎	県立柏崎高校(教諭)	柏崎市北園町若葉荘
17	富山・石川	岩井 隆盛	金沢大学教育学部(助教授)	石川県河北郡津幡町字清水 313
18	福井	佐藤 茂	福井大学(教授)	福井市湊新町66
19	山梨	清水 茂夫	山梨大学学芸学部(助教授)	山梨県中巨摩郡白根町 百々3062
20	長野	青木千代吉	篠井市立通明中学校(教諭)	長野県更級郡更北村中氷 鉋1089
21	岐阜	谷開 石雄	県立中津高校(教諭)	中津川市淀川町 伊藤駿方
22	静岡	望月 誼三	静岡大学教育学部(教授)	静岡市小鹿 1 静大公務員 宿舎
23	愛知	山田 遼也	日本福祉大学(講師)	名古屋市中村区大秋町 3 の24
47	三重	杉浦 茂夫	県立神戸高校(教諭)	津市乙部730
50	滋賀	寛 大城	県立虎姫高校(教諭)	滋賀県東浅井郡浅井町山 ノ前267
25	京都	奥村 三雄	岐阜大学学芸学部(助教授)	岐阜市長良六本松岐大公務員宿舎
26	大阪	前田 勇	大阪学芸大学(教授)	大阪市東住吉区田辺西ノ 町 6 の34
27	兵庫Ⅰ	和田 実	神戸大学文学部(講師)	神戸市垂水区西垂水町神 田122
28	兵庫Ⅱ	岡田荘之輔	町立温泉小学校(校長)	兵庫県美方郡温泉町湯

1293

29	奈良	西宮 一民	帝塚山学院短大(助教授)	枚岡市河内町920
30	和歌山	村内 英一	和歌山大学学芸学部(助教授)	和歌山市真砂町1 大学住宅
31	鳥取	広戸 惇	鳥根大学文理学部(教授)	出雲市元宮町
32	鳥根	岡 義重		鳥根県簸川郡斐川村大字富村
33	岡山	虫明吉治郎	県立岡山操山高校(教諭)	岡山市高島新屋敷354
34	広島	村岡 浅夫	村立吉和中学校(校長)	広島県佐伯郡五日市町屋代
35	山口	阿波 陽	県立大津高校(教諭)	山口県大津郡日置村古市
36	徳島	宮城 文雄	徳島大学学芸学部(助教授)	徳島県那賀郡那賀川町島尻932の2
37	香川	近石 泰秋	香川大学学芸学部(教授)	高松市三条町571 三条住宅R B 133
38	愛媛	杉山 正世	新田高校(講師)	今治市松本通2 丁目
39	高知	土居 重俊	高知大学(助教授)	高知市弥生町44
40	福岡	都築 頼助	福岡学芸大学(教授)	福岡市高宮玉川町93
41	佐賀	小野志真男	佐賀大学教育学部(教授)	佐賀市赤松町中館
42	長崎	西島 宏	長崎大学学芸学部(助教授)	長崎市西北町第二団地130号
43	熊本	秋山 正次	熊本大学(助教授)	熊本市健軍若葉町36
44	大分	糸井 寛一	大分大学学芸学部(助教授)	臼杵市海添190
45	宮崎	岩本 実	宮崎大学学芸学部(助教授)	宮崎市下鶴町190の1
46	鹿児島	上村 孝二	鹿児島大学(教授)	鹿児島市武町965
51	沖縄	仲宗根政善	琉球大学(教授)	那覇市宇大道262

以上地方研究員47名

99	柴田 武(室長)
98	野元 菊雄
97	上村 幸雄
96	徳川 宗賢

以上研究員4名

なお、地方言語研究室では、この調査について言語地理学の専門家W・A・グロータース神父の協力を受け、また、研究補助員白沢宏枝が、室員の調査研究を助けた。

3 調査の進行状況

3-1 臨地面接調査・調査地点 昭和33年度、すなわちこの調査の第2年度には、343 か所での臨地面接調査をおこなった。第1年度と合わせれば666地点となる。なお、本年度から、新たに沖縄の全域がわれわれの調査地域に加わったことを、付記しておく。これで、われわれの調査は、「日本語地域」すべてに及ぶことになった。

以下に、本昭和33年度調査した地点の地名と、その調査者を番号で示そう。

調査地点	調査者番号	調査者	番号
北海道		久慈市下戸鎖	05
札幌市北8条西6丁目	01	下閉伊郡川井村川井中川井	05
小樽市銭函町	01	下閉伊郡岩泉町大川下町	05
美唄市有為第2区	03	下閉伊郡田老町川向	05
石狩郡石狩町親船町	01	下閉伊郡田野畑村田野畑	05
茅渚郡森町字本町	03	岩手郡玉山村簗川	05
茅渚郡鹿部村字鹿部	03	岩手郡玉山村外山	05
爾志郡熊石村字鳴神	03	二戸郡一戸町高善寺字野田	05
瀬棚郡瀬棚町字梅花都	03	二戸郡浄法寺町	05
浦河郡浦河町旭町	01	九戸郡軽米町小軽米	05
河西郡茅室町字毛根	02	九戸郡種市町中野	05
広尾郡広尾町東通り9丁目	02	九戸郡野田村大字野田	05
中川郡池田町字西1条5丁目	02	宮城県	
網走郡津別町字活汲	02	古川市二の構	48
常呂郡留辺蘂町元町	02	名取市増田字田高	48
上川郡永山町	01	刈田郡蔵王町平沢	48
青森県		柴田郡柴田町槻木新町	48
八戸市大字湊字縄張	04	亶理郡亶理町荒浜	48
東津軽郡平内町大字小湊字沼館	04	亶理郡山元町坂元館下	48
西津軽郡木造町大字種取	04	秋田県	
西津軽郡車力村大字車力字花林	04	秋田市東根小屋町	07
中津軽郡岩木村大字駒越字平田	04	男鹿市船川港字船川	07
南津軽郡碓ヶ関村大字碓ヶ関字白沢	04	大曲市下柴町	07
北津軽郡市浦村大字相内字相内	04	南秋田郡昭和町大久保	07
上北郡七戸町大字前川原	04	鹿角郡八幡平村長谷川字長嶺	07
上北郡百石町字下明堂	04	山本郡山本村森岳字小狭間	07
上北郡浦野館村大字大浦字寒水	04	河辺郡河辺町岩見三内三内字田尻	07
岩手県		河辺郡雄和村字種沢	07
		仙北郡西仙北町刈和野	07
		山形県	

米沢市笹野町字下笹野小字一本杉	08	塩谷郡栗山村大字湯西川小字花和	98
新庄市大字飛田	08	群馬県	
東村山郡天童町大字天童	08	高崎市宮元町	12
西村山郡河北町大字谷地	08	沼田市柳町	12
北村山郡尾花沢町大字尾花沢字麓	08	富岡市曾木	12
福島県		勢多郡赤城村久田西宿	12
福島市土湯温泉町字川上	09	勢多郡大胡町茂木	12
須賀川市東八丁目	09	北群馬郡長尾村北牧鍛冶谷戸	12
相馬市大字玉野字町	09	多野郡鬼石町大字三波川字月吉	98
相馬市大字中野字北反町	09	邑楽郡千代田村大字舞木	97
勿来市勿来窪田町字馬場	09	利根郡水上町大字藤原字須田貝	97
伊達郡川俣市字鉄炮町	09	利根郡水上町川上	12
伊達郡梁川町大字山舟生字上板木	09	利根郡片品村須賀川前田	12
石城郡田人村大字旅人字宝坂	09	利根郡川場村谷地中原	12
石城郡川前村大字川前字們立	09	埼玉県	
双葉郡浪江町大字昼曾根字昼曾根	09	川越市松郷下松江町	99
相馬郡鹿島町大字鹿島字町	09	秩父郡大滝村字中津川	96
茨城県		秩父郡大滝村大字大滝字槌打	96
土浦市飯田町	10	秩父郡荒川村大字上田野字事上	96
石岡市石岡	10	大里郡寄居町大字桜沢	97
竜ヶ崎市田町城下	10	北葛飾郡幸手町大字権現堂小字下谷	98
那珂郡山方町山方宿	98	千葉県	
鹿島郡神栖村知手浜	98	木更津市木更津	14
新治郡八郷町柿岡下宿	10	柏市豊町	14
新治郡出島村南根本	10	安房郡和田町大字中三原小字神田	98
筑波郡伊奈村小張上中宿	10	夷隅郡大多喜町小沢又	14
筑波郡大穂町大砂	10	夷隅郡大原町高谷	14
結城郡八千代村沼森	10	君津郡上総町市場	14
猿島郡境町上町	10	長生郡長南町大字坂本小字小金	98
栃木県		市原郡南総町奉免	14
宇都宮市駒生町	11	印旛郡八街町西林	14
栃木市沼和田町	11	東京都	
鹿沼市西大芦大字草久小字押越	98	江東区深川古石場4丁目	99
小山市稲葉郷上之町	10	目黒区駒場町	49
上都賀郡栗野町口栗野	11	八王子市八日町	49
下都賀郡壬生町大字壬生	11	青梅市森下	49
河内郡上三川町大字上三川	11	神奈川県	
芳賀郡茂木町上町	11	横須賀市鴨居	49
那須郡烏山町金井町	11	相模原市当麻	49
那須郡黒磯町越堀	11	中郡大磯町南下町	49

足柄下郡箱根町仙石原下向	99	南巨摩郡身延町身延	19
津久井郡相模湖町若柳奥畑	49	南巨摩郡早川町奈良田	99
新潟県		南巨摩郡早川町上湯島	19
長岡市関原町三丁目	16	南巨摩郡早川町葉袋	99
見附町本明町	97	北都留郡上野原町諏訪	49
糸魚川市小滝瀬野田	16	北都留郡小菅村川池	99
新井市三俣	16	長野県	
東蒲原郡鹿瀬町日出谷字中村	97	中野市栗和田	20
東頸城郡安塚町大字小黑	16	東筑摩郡洗馬村芦ノ田	20
中頸城郡柿崎町大字柏崎仲町	16	西筑摩郡福島町下町	20
中頸郡吉川町大字山直海字村屋	96	西筑摩郡上松町本町	20
中頸城郡清里村大字菅原	16	西筑摩郡木祖村蔽原	20
中頸城郡妙高村関山	16	西筑摩郡開田村大字西野（把ノ沢）	
西頸城郡能生町字筒石	16	入江	96
西頸城郡青海町本町2丁目	16	南安曇郡奈川村古宿	20
西頸城郡青海町大字市振	17	上高井郡東村大字仁礼関谷	20
三島郡互板町南新町	16	上高井郡野沢温泉村大字虫生小字	
三島郡出雲崎町石井町	16	十二沢	96
刈羽郡北条町字北条	16	上水内郡豊野町豊野伊豆毛	20
佐渡郡畑野村畑野	97	上水内郡信濃町古間	20
佐渡郡畑野村松ヶ崎	97	下水内郡栄村字小赤沢（秋山）	96
佐渡郡相川町大字五十浦	97	下伊那郡浪合村中下町	96
富山県		埴科郡戸倉町今井	20
魚津市橋向町	17	小県郡塩田町大字別所日影	20
黒部市三日市町三日市	17	岐阜県	
石川県		岐阜市長良天神	21
金沢市巴町	17	美濃加茂市太田町	21
小松市土居原町	17	恵那市武並町大字竹折小字上野	21
羽咋市川原町	17	土岐市本郷町下	21
石川郡鶴来町本町四丁目	17	揖斐郡大野町西方	21
石川郡松任町東三番丁	17	恵那郡岩村町大字飯羽小字分根	21
福井県		静岡県	
吉田郡上志比村山王	18	浜松市中島町	22
坂井郡三国町下西	18	沼津市下香貫	22
丹生郡国見村三本木字長原	18	清水市辻町	22
山梨県		島田市横井町	22
塩山市上於曾	19	焼津市大村新田	22
韭崎市本町	19	庵原郡由比町東山寺	22
西八代郡市川大門町	19	安倍郡玉川村落合	22
南巨摩郡中富町揚	19	安倍郡井川村井川下島	99

榛原郡本川根町奥泉	99	養父郡八鹿町八鹿	28
周智郡森町	22	養父郡大聖町和田	28
磐田郡水窪町向島	99	養父郡関宮町関宮	28
愛知県		朝来郡朝来町山口	28
岡崎市本宿町字広畑	23	朝来郡生野町口銀谷	28
半田市勘内町	23	美方郡村岡町村岡	28
南設楽郡新城町	23	氷上郡春日町黒井	28
海部郡蟹江町	23	氷上郡柏原町柏原本町	28
幡豆郡一色町大字赤羽下郷中	23	多紀郡多紀村福住	28
三重県		多紀郡篠山町下二階町	28
松阪市日野町	47	奈良県	
桑名市外堀	47	宇陀郡大宇陀町拾生内垣内	29
鈴鹿市神戸本多町	47	和歌山県	
名張市中町	29	和歌山市北田辺町2丁目	30
亀山市西町	47	海南市日方	30
度会郡南勢町宿浦	47	東牟婁郡那智勝浦町那智山	30
滋賀県		海草郡野上町勳木	30
大津市膳所伊勢屋町	25	鳥取県	
長浜市南船町	50	鳥取市立川町	31
滋賀郡堅田町衣川	50	岩美郡岩美町浦富	28
坂田郡伊吹村吉槻	50	八頭郡河原町字袋河原	31
京都府		島根県	
京都市左京区鞍馬本町	25	飯石郡傾原町大字花栗	32
京都市上京区元誓願寺通	25	邇摩郡温泉津町湯里中組	32
舞鶴市字倉谷	25	邑智郡石見町矢上字下京	32
熊野郡久美浜町久美浜	28	鹿足郡日原町大字枕瀬	32
大阪府		鹿足郡六日市町大字七日市	32
堺市今池町2丁目	26	周吉郡中村大字中村字郡	32
豊能郡能勢町下田尻北脇	27	穂地郡五箇村大字北方	32
兵庫県		岡山県	
姫路市一丁目	27	倉敷市元町	33
芦屋市岩園町	26	西大寺市西大寺	33
豊岡市大開通	28	総社市秦下	33
西脇市上本町	27	御津郡御津町金川	33
多可郡中町森本	27	和気郡備前町西片上	33
揖保郡御津町室津	27	邑久郡邑久町尻海	33
揖保郡新宮町馬立	27	吉備郡足守町上足守	33
宍粟郡一宮町上岸田	28	広島県	
城崎郡香住町香住	28	広島市己斐本町	34
出石郡出石町出石本町	28	呉市吉浦本町4丁目	34

三次市三次町寺戸	34	糸島郡前原町大字板持字養老	40
庄原市紅屋町	34	八女郡黒木町字黒木	40
安芸郡海田町海田市上市	34	佐賀県	
佐伯郡佐伯町津田かじや川	34	伊万里市波多津町大字畑津	41
山県郡大朝町大字大朝	34	伊万里市伊万里町上仲町	41
高田郡吉田町1丁目	34	長崎県	
比婆郡西城町中野	34	長崎市大浦元町	42
山口県		佐世保市山手町	42
宇都市浜	35	島原市安中	42
宇都市大字東岐波字磯地	35	西彼杵郡大瀬戸町瀬戸檜浦	42
防府市大字三田尻村	35	南高来郡小浜町北野	42
美禰市伊佐町牛明	35	南高来郡加津佐町大和町	42
吉敷郡小郡町東津	35	北高来郡飯盛村江浦下釜	42
厚狹郡楠町大字船木字下田町	35	南松浦郡有川町鯛之浦	42
厚狹郡楠町東吉部字市	35	熊本県	
徳島県		水俣市大字浜	43
那賀郡相生町朴野	36	牛深市牛深町真浦	43
海部郡由岐町西ノ地	36	上益城郡益城町木山大字寺迫	43
海部郡日和佐町山河字本村	36	天草郡松島町大字合津小字古園	43
香川県		天草郡五和町大字二江字通詞	43
大川郡志度町大字志度	37	天草郡倉岳村大字浦字中浦	43
香川郡香南町大字由佐	37	天草郡天草町高浜地区内内野区	43
愛媛県		大分県	
西条市東町1丁目	38	北海郡郡大在村大字横田	44
伊予三島市三島町字上町	38	大分郡大南町中戸次字市	44
越智郡吉海町幸新田	38	大野郡緒方町大字小原字小原	44
周桑郡玉生川町新町	38	大野郡犬飼町大字犬飼二部区	44
宇摩郡土居町大字上天満字寺の下	38	大野郡三重町大字赤嶺字下赤嶺	44
高知県		直入郡久住町久住	44
土佐清水市越	39	宮崎県	
安芸郡室戸町領家	39	延岡市松山町	45
安芸郡佐喜浜町舟場中里	39	串間市福島町上郡元	46
香美郡野市町西野	39	東臼杵郡西郷村大字小原字笹陰	45
吾川郡伊野町大和町	39	東臼杵郡椎葉村大字下福良字尾八重	45
高岡郡東津野村舟戸桂	39	西臼杵郡五ヶ瀬町大字鞍岡字折立	45
福岡県		西臼杵郡高千穂町大字押方字片内	45
福岡市(博多)片土居町	99	児湯郡高鍋町上江字北平原	45
久留米市御井町字仲ノ町の東	40	鹿児島県	
遠賀郡水巻町大字頃末字国定	40	鹿児島市武町上武	46
筑紫郡太宰府町大字太宰府字大町	40	揖宿郡開聞町大字十町小字松原田	46

揖宿郡喜入町大字瀬々串小字中	46	大島郡伊仙村伊仙小字中伊仙	46
出水郡東町大字鷹巣小字上揚	46	大島郡和泊町大字和泊	46
出水郡東町大字山門野小字上	46	沖繩	
嚙喉郡財部町南俣小字阿耶里	46	南部地区(島尻郡)玉城村字奥武	51
嚙喉郡末吉町大字二之方小字上新地	46	南部地区(島尻郡)具志川村字仲地	51
大島郡徳之島町大字亀徳小字里晴	46	南部地区(島尻郡)仲里村字比嘉	51
大島郡天城村大字岡前小字前野	46	北部地区(国頭郡)今帰仁村字与那嶺	51

以上 343 地点

このうち次の地点では、地方研究員と、調査センターである地方言語研究室員が同行して調査し、調査現場で起こるいろいろな事態について打ち合わせをして、全国での調査が統一しておこなわれるようにつとめた。昭和33年度に同行調査した21か所の地点は次の通り。

昭和33年度同行調査地点名	地方研究員氏名	同行室員氏名
北海道上川郡永山町	五十嵐三郎	上村 幸雄
〃 中川郡池田町字西 1 条 5 丁目	長谷川清喜	野元 菊雄
〃 美瑛市有為第 2 区	石垣 福雄	柴田 武
青森県上北郡七戸町大字前川原	此島 正年	〃
岩手県岩手郡玉山村外山	小松代融一	徳川 宗賢
宮城県亶理郡山元町坂元館下	加藤 正信	〃
秋田県河辺郡河辺町岩見三内三内字田尻	北条 忠雄	上村 幸雄
山形県東村山郡天童町大字天童	後藤 利雄	〃
福島県福島市土湯温泉町字川上	菅野 宏	野元 菊雄
茨城県土浦市飯田町	宮島 達夫	〃
栃木県上都賀郡粟野町口栗野	多々良鎮男	〃
群馬県利根郡川場村谷地中原	上野 勇	上村 幸雄
千葉県柏市豊町	加藤 信昭	野元 菊雄
神奈川県津久井郡相模湖町若柳奥畑	日野 資純	柴田 武
新潟県刈羽郡北条町字北条	剣持隼一郎	徳川 宗賢
山梨県南巨摩郡早川町上湯島	清水 茂夫	柴田 武
長野県上水内郡信濃町古間	青木千代吉	徳川 宗賢
静岡県島田市横井町	望月 諒三	柴田 武
兵庫県出石郡出石町出石本町	岡田莊之助	〃
山口県吉敷郡小郡町東津	阿波 陽	〃
福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府字大町	都築 頼助	〃

以上21か所

3-2 被調査者の経歴表から 調査の結果は、項目ごとのカード（1地点ごと

に 230 枚) と地点ごとの被調査者の経歴表, および地点を示す地図となって, 全国から地方言語研究室あてに送られてくる。

地方言語研究室では, 地図によって地点の番号をきめ, 経歴表をさらに保存用カードに転写し, カードを分類して項目ごとに白地図に記入して行く。次に, 第 2 年度までの 666 枚の経歴表から, 結果の一部を紹介しよう。

3-21 被調査者の年齢 「調査の手引き」には, 被調査者の条件として, 年齢について, 「1903 年 (明治 36 年) 以前に生まれた男子」と示してある。言いかえれば, これは 1958 年 (昭和 33 年) に満 55 歳以上の男子を被調査者として選ぶということになる。

この条件の文面からは, 90 歳の人でも 100 歳の人でも適格と認めうる。しかし, あまり高齢な人は, いろいろの肉体的・精神的条件から, 調査の対象として適当でない場合が多い。また, 全国での調査水準をそろえる点からも, 被調査者の年齢層が厚い—55 歳から 100 歳以上にわたる—ことは好ましくない。そこで手引きには「明治 20 年以降生まれの人が望ましい」という添え書きがある。ここで明治 19 年以前に生まれた人を不適格として厳しく排除しなかったのは, 条件をあまり厳しくしたために, 実際の調査にさしつかえの生ずることをおそれたからであった。われわれの希望する被調査者—条件は年齢だけについてあるのではない—をさがすことは, 調査の現場ではなかなかむずかしい。

この調査の第 2 年度を終って, 666 地点での被調査者の年齢をまとめてみよう。

生 年	年齢 (1958 年現在)	人数
1899 年から 1903 年 (明治 32 年から明治 36 年) まで	55 歳から 59 歳まで	186
1894 " 1898 " (" 27 " 31 ") "	60 " 64 " "	173
1889 " 1893 " (" 22 " 26 ") "	65 " 69 " "	154
1884 " 1888 " (" 17 " 21 ") "	70 " 74 " "	88
1879 " 1883 " (" 12 " 16 ") "	75 " 79 " "	36
1874 " 1878 " (" 7 " 11 ") "	80 " 84 " "	16
1873 年以前 (" 6 年以前)	85 歳以上	10

明治 20 年以降生まれの人が望ましいという希望条件は, ほぼ満たされていると言ってよからう。静岡県磐田郡水窪町と兵庫県洲本市での被調査者が, ともに 1868 年 (明治元年) 生まれで, 最年長者であった。

なお、666 地点の中には、3 地点だけだったが、年齢についての条件に合わない被調査者について調べた地点があった。1904年生まれの被調査者について調べたのが2 地点、1905年生まれの被調査者について調べたのが1 地点あった。これらは、本来ならば別の被調査者を探して調査しなおすべきだったが、いろいろの理由——その地点では、他に適当な人がいないなど——から、特に適格者に準ずるものとして認めることとした。

3-22 被調査者の在学期間 「調査の手引き」には、学歴について特に基準を示していない。これは、被調査者の年齢の場合と同じく、条件を厳しくすることによって、調査現場での被調査者選択を極端にむずかしいものにするをおそれたからであった。ただし、「できるだけその地点を平均的に代表する人であることが望ましい。その土地でひとりふたりしかいないような学歴の高い人などは望ましくない」という希望条件はつけてある。

666 地点で調べた被調査者の在学期間を中間的に報告するならば、うちわけは、次の通りであった。

在学期間	人数	在学期間	人数
0 か年	4	8か年	268
1 "	1	9 "	20
2 "	5	10 "	13
3 "	8	11 "	22
4 "	134	12 "	12
5 "	12	13 "	10
6 "	135	14 "	0
7 "	20	15 "	2

尋常小学校ないし高等小学校卒業程度の人が圧倒的に多く、ほぼ期待通りの結果と言ってよいだろう。学歴の高いものは、就学のために長期間生地を離れる場合が多いので、「よその土地で生活した経験が36か月以下」という、被調査者選択についての別の条件にさわり、その点からふるい落される傾向が強い。また、学歴のないもの、あるいは1 か年ないし3 か年のものは、間に人を介して被調査者を選ぶ場合には、われわれの前に紹介されて来ることが少いようだ。

3-23 調査にかけた時間 経歴表は、調査に使った時間、つまり調査の所要時

間を報告するように求めている。同条件の被調査者に対して、同内容の調査をする際に、調査時間の長短が、調査の巧拙を示すひとつのめやすとなると考える人が、あるいはあるかもしれない。同じ調査なのにAという調査者は2時間で終り、Bという調査者は4時間かけたというのでは、Aの方が調査が巧みであり、Bは能力が劣っていると考えられるかもしれない。しかし、調査所要時間の報告を求めたのは、そのようなことを確かめるためのものではなかった。だいたい同条件の調査が現実にあるだろうか。

言うまでもなく、調査は、調査者が全能力をあげて、その土地の言語の実態を、できうるかぎり完全な形で追求するように進めるべきものと考えられる。調査には、むしろできるだけ余裕を持って、時間をたっぷりかけた方がよいとさえ言える。この「日本言語地図作成のための調査」についても、調査者たちは、自己のペースに従って、できるだけよい調査結果を得るように努力している。調査者ごとに習慣の違いもあることだし、所要時間にへだたりのあることは、むしろ当然と言えよう。

調査所要時間の報告を求めたのは、Aという調査者とBという調査者と、どちらが時間を多くかけて調査したかを調べるのではなく、たとえばCという調査者が、自己の調査のうちで、甲地点と乙地点とで、どちらに時間を多くかけたかを知るためだった。同じ調査者でありながら、地点によって所要時間が違うということは、それぞれの調査現場における諸条件が異なるためと考えられる。音声に特徴のある場合や、被調査者が考え考え答えるならば、時間は長びくだろうし、被調査者がてきぱきと答えれば（また少し軽はずみな場合も）調査は早く進むと想像される。そのほかにもいろいろ考えられようが、このような調査現場での諸条件を、その現場にいわせない人に対して明らかにするひとつの手段として、所要時間を求めたのだった。

したがって、次に示すような2時間以上かかったのは何地点、3時間以上かかったのは何地点というような表は、実はあまり意味のあるものではない。しかし、230項目のわれわれの調査票には、一般にどれくらい時間がかかるのかその大体的見当をつける資料にはなるだろう。なお、各項目についてアクセントの綿密な調査を行なったため、他に比較して調査時間のかなり長いものも含

んでいることに注意したい。

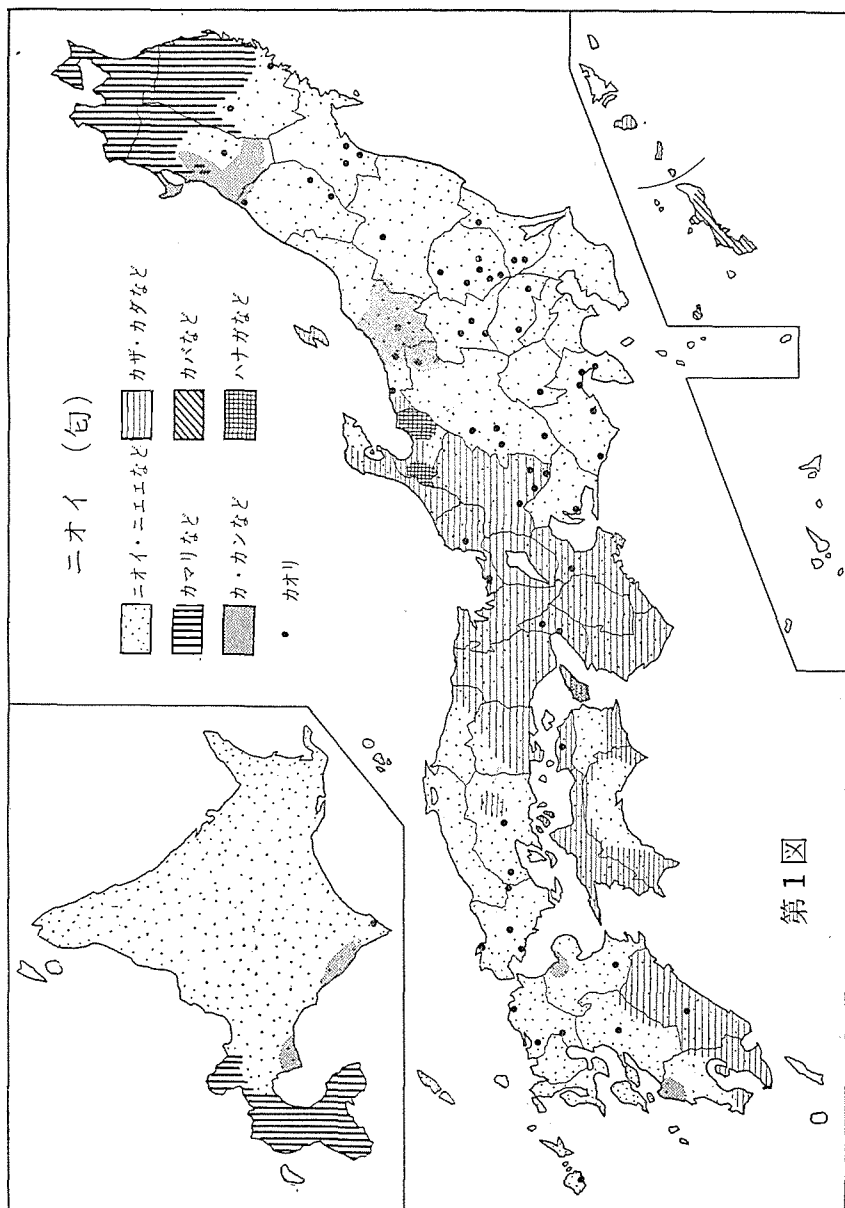
調査時間	人数
1 時間未満	0
1 時間 0 分から 1 時間 29 分まで	36
1 時間 30 分から 1 時間 59 分 "	156
2 " 0 " 2 " 29 " "	216
2 " 30 " 2 " 59 " "	154
3 " 0 " 3 " 29 " "	71
3 " 30 " 3 " 59 " "	19
4 " 0 " 4 " 29 " "	12
4 " 30 " 4 " 59 " "	1
5 時間以上	0
不明	1

3-3 仮整理の分布地図数枚 666 地点分・各地点 230 枚のカードは、項目ごとに分類しており、仮整理図が次々にできあがりつつある。整理は、方言形を符号に変えて白地図に記入する方法をとっている。白地図には、年報 9 で説明した方言調査基礎図のシステムによった B 全紙版のものを使う。

次に、いままでに仮整理を終った分布地図のうちから、数枚をえらんでその大体を説明しよう。仮整理図は、そのまま転載することができないので概略図に書き改めた。またわずかの地点でしか聞けなかったいわば珍しい形は除いたものもある。

なお、いままでに国立国語研究所要覧の 1957 年度版にオンナ(女)、同 1959 年度版にタク(飯を炊く)・ニル(煮る)の分布地図略図を発表した。また、雑誌「言語生活」昭和 33 年 6 月号にはシアサッテ(明明後日)・ヤノアサッテ(明明後日の翌日)の 2 枚の図が、同 8 月号にはスッパイ(酸い)・カライ(塩からい)・アカイ(明かるいという意味に使うかどうか)の 3 枚の図がある。さらに、同じ雑誌の昭和 34 年 9 月号には、ツバ(唾)・スッパイ(酸い)・ウロコ(鱗)・オトトイ(一昨日)・ツユ(梅雨)・オオキイ(大きい)・カボチャ(南瓜)と大量の略図が発表されている。(昭和 34 年 9 月現在計 14 項目)。

3-31 ニオイ(匂) 以下に、このニオイの分布図を含めて 4 枚の言語地図を示すが、その比較だけでもわかるように、言語地図は、項目ごとに多かれ少かれ



分布の姿に相違がある。このことを最初に注意しておきたい。1枚ごとに、おのおのの歴史と将来の方向を語りかけてくる。

第1図は、ニオイ、それもよいニオイ(たとえば梅の花のニオイ)に対する、種々の言い方の分布図だ。いくつかの言い方のうち、ニオイにあたる形が、現在もっとも広く使われていることがわかるが、カザ・カダにあたる形も、北陸・岐阜・近畿・山陽・四国・九州東南部・奄美となかなか広い。しかも、分布地域が連続していて、新しい発生を思わせる。ただ、現在調査の途上にあるので、立ち入った解釈は、いまのところさしひかえたい。

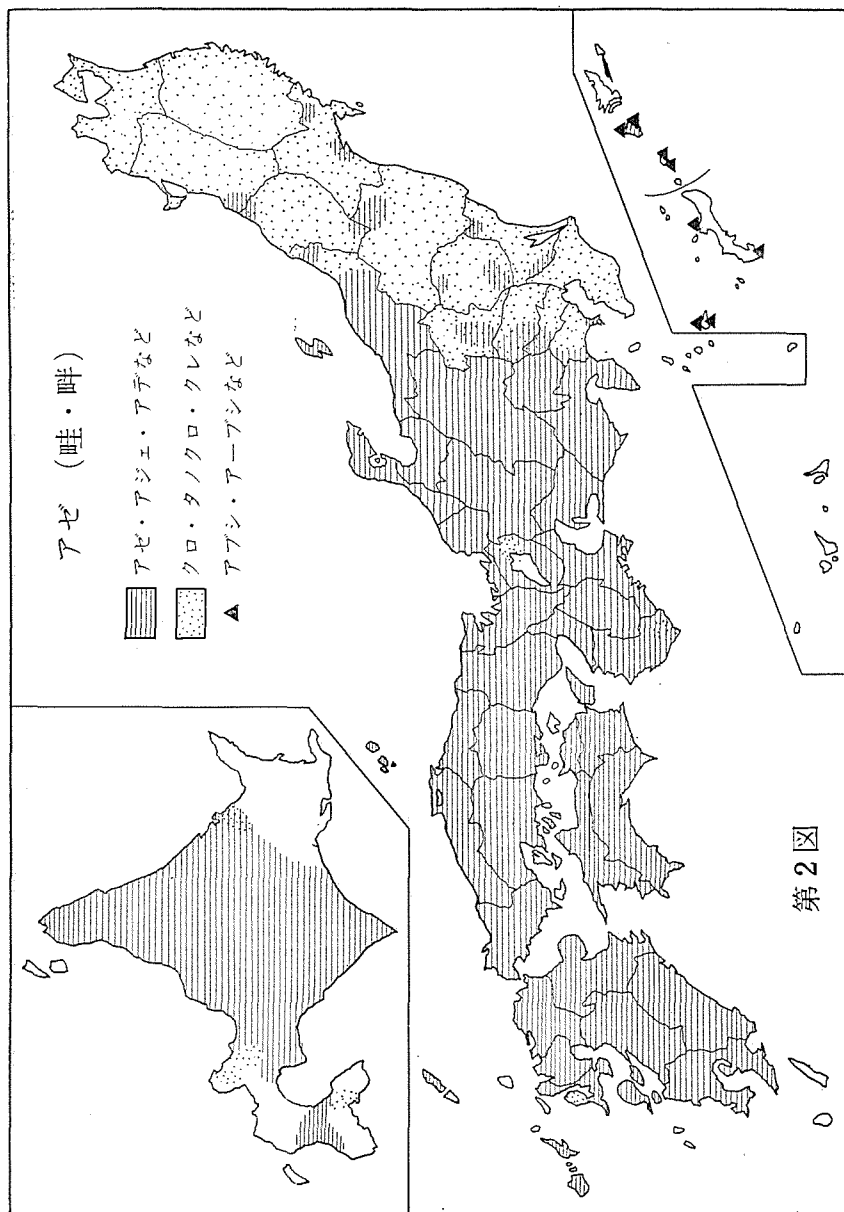
北海道南部と本州北部のカマリは、この地方で使われる動詞カマル(意味は嗅ぐ)の連用形だろう。北海道南部にこの語形が分布するのは、対岸青森方面からの影響に相違ないが、本州北部において現在の分布の姿をとるに至った経過は、いまのところ不明。沖縄のカバは、形容詞カンバシイと関連があると考えられるが、本土方面では見当らない語形だ。

なお、われわれの調査票には、このよいニオイのほかに、悪いニオイ(たとえば髪焦げるニオイ)についての項目や、動詞カグを調査する項目があって分布地図もできあがっている。分布地図の相互の比較によって興味深い結果が期待される。

3-32 アゼ(畦・畔) 第2図。北海道・奄美・沖縄を除いて、大ざっぱには東日本クロ、西日本アゼと言える。東西をわける境界線は、かなり東に寄っていることが、まず注目される。

現代東京語では、そのものが生活に密着していないとは言え、まずアゼ。その影響がどうかいまのところ不明だが——農業関係の用語について、東京語の影響がどの程度及ぶものか不明——アゼの方が現在優勢らしく、クロの地域にアゼが侵入しているようにみえる。新しい開拓地北海道に、アゼが広く分布していることも、現在アゼ優勢のひとつの証拠と言えるだろう。なお、略図にはのせなかったが、全国的に新しい農業用語としてのケイハン(畦畔の字音)を受け入れる傾向もみえる。

西部日本の滋賀県・和歌山県・長崎県にクロにあたる語形があって興味深い——ちょっと見たところでは、残存形のような——、この分布から、過去の



ある時代に日本全土にクロが広がっていたと速断することは、現在の段階ではさしひかえるべきと考える。

いったい田のアゼには、地方の習慣や地形の関係から、いろいろの形態があって、名称も部分名称などが多く、単純でない場合がある。「梯形の断面を持ったものがアジェ、三角形の断面を持ったものがテアジェ」(福井)などという注記のある報告もある。アゼの大きさ・機能による名称の違いにも注意しなければならない。「一般のものはタノクロ、幅の広いものはオーナ」(岩手)「他人の田との境はアゼ、自分の田地内での境はタノクロ」(栃木・埼玉)「全体はアゼ、上の面はクロ」(群馬)など。

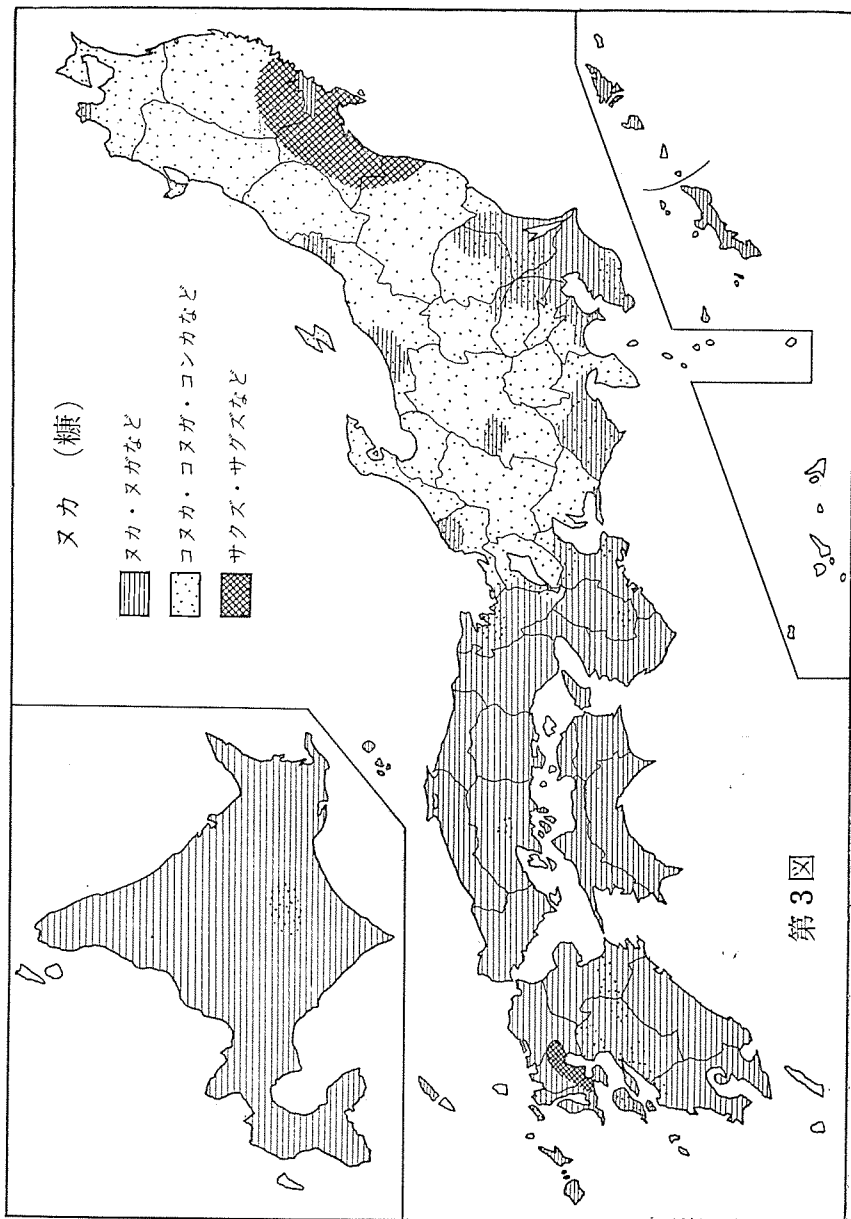
問題となる西部日本のクロについても、滋賀県のものについては、その地点ではないが、隣接の福井県に「一般はアジェ、アジェの外(土をぬる所)をクロ」と答えた地点があった。また、和歌山県のクルと答えた地点のカードには福井県からの報告とはちょうど逆になるが、「アゼはクルの外(土をぬる所)」という注記がある。アゼに対する名称は、関連概念について注目しつつ——意味のずれが過去にあったかもしれないと予想しながら——考えていく必要があるだろう。

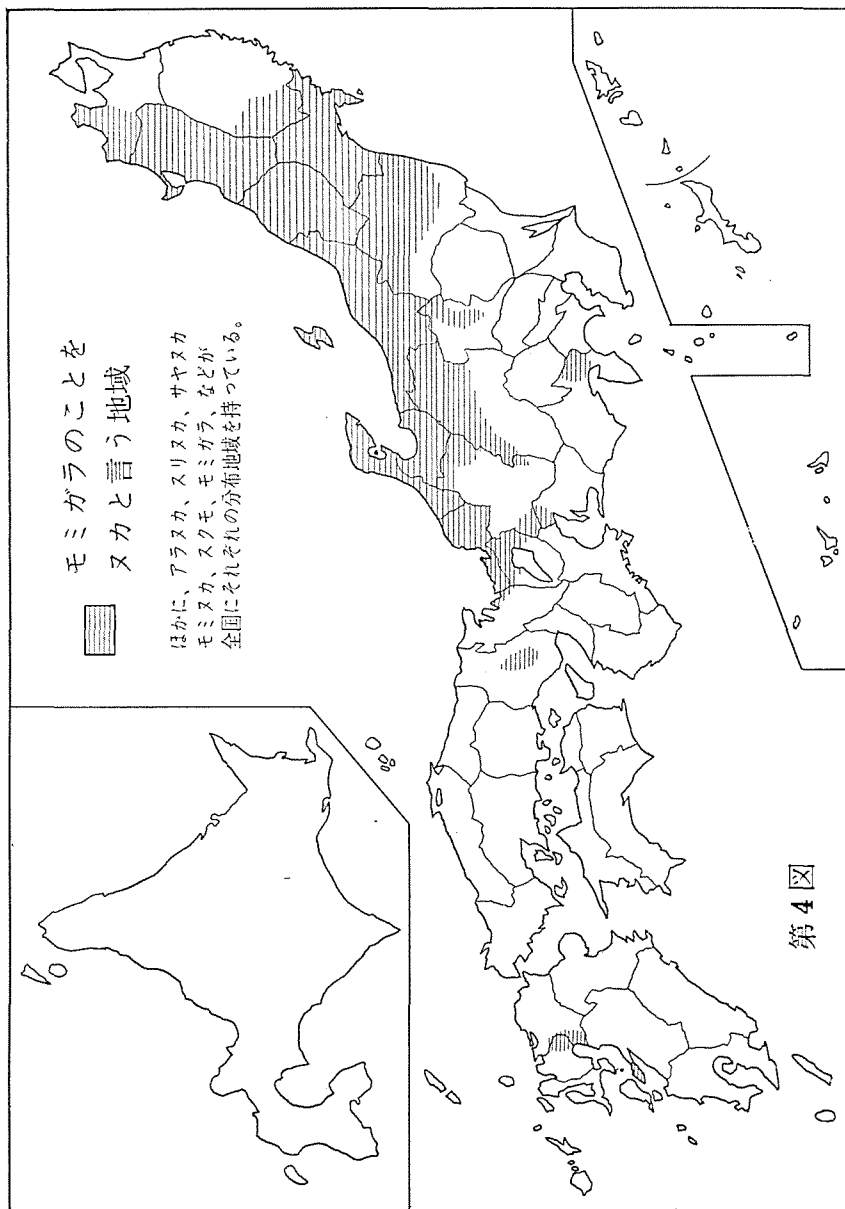
なお、ケイハンというようなことばは、生硬・難解で、避けるべきものと考ええるむきもあるが、民衆の日常生活で使うアゼとは何か、をふりかえてみるならば——いろいろな意味、しかもたがいに関連が深く、誤解を招きやすい意味が付与されている——全国に通ずるあるひとつの概念に対する、誤解を避ける新しいひとつの語形として、あながち捨てるべきではないと考えられる。ちなみに、このケイハンということばは、農地面積を算定するときに使われはじめたものらしい。

3-33 ヌカ(糠) 第3図。大まかに言えば、東日本コヌカ、西日本ヌカだが、そのほかに東北地方と九州にサクズがある(この分布はおもしろい。2地方のサクズは関連があるものかどうか。関連があるとすれば、どんな関連か。または、たがいに無関係に別々に発生した新しい言い方)。

関東・東海地方にかなりの勢力を持っているヌカは、いちおう西日本語の侵入と考えてよいだろう。東京語はヌカ。

このヌカという項目は、モミガラの方言と比較することによって、興味深い





結果を導きうるものと予想される。モミガラの方言の分布地図を見ると、かなり広い地域に、モミガラのことをヌカ（あるいはそれに準ずる形）という地点が分布している（第4図参照）。もしヌカ（糠）の共通語がヌカであるならば、これらの地方に共通語が普及する場合抵抗があるにちがいない。

コヌカは、まず東日本に広い勢力があると認められるが、近畿以西にも、特に九州中央部で、ヌカの地域の中に、点々この語形が使われていることが注目される。

4 来年度以降の見通し

この日本言語地図作成のための調査は、今後ひきつづき5年間、すなわち昭和38年度まで継続する予定になっている。調査の内容・方法は変更しないで、ただ調査地点の網の目が細かくなっていく。全国にばらまかれる地点の数は、最終的にはほぼ2300地点になるだろう。

なお、本報告3-1の終りにのべた同行調査は、調査者全員ができるだけ統一した方法によって調査を行なうための作業だから、昭和34年度中には、いちおう完了したい。中国・四国・九州の各地方へ室員が出張する予定になっている。

（徳川）

北海道の言語についての調査

1 研究の目的

東京語に近いといわれる「北海道共通語」が、どのようにして成立しつつあるかを明らかにして、日本全国の共通語化の方策と、共通語教育の方法をたてるのに有効な知識を得ることにある。

2 研究費

以上のような目的のもとに、「北海道の言語の実態と共通語化の過程」の題目で昭和33年度科学研究費交付金（総合研究）を受けて（課題番号1117）、調査を実施した。

3 研究担当者

代表者 岩淵悦太郎（国立国語研究所第1研究部長）

分担者 柴田 武（国立国語研究所地方言語研究室室長）

野元 菊雄（国立国語研究所地方言語研究室室員）

上村 幸雄（ " " ）

徳川 宗賢（ " " ）

五十嵐三郎（北海道大学文学部助教授）

長谷川清喜（北海道学芸大学札幌分校助教授）

石垣 福雄（北海道立札幌北高等学校教諭）

協力者 佐藤 誠（北海道学芸大学函館分校教授）

4 第1次調査

4-1 目的 北海道をよく代表する数地点で、第1世・第2世・第3世（内地から、言語形成期を過ぎたのち移住してきたものを「第1世」という。以下、その子・孫を「第2世」「第3世」とする）の、原則として男がそろい、かつ第3世が15歳以上である家族を探し、世代による変化を、言語の各面から記述して、言語のどの面が変わるか、どの面が変わっていないか、変わるとすれば

どの世代とどの世代との間で変わるか、などを明らかにすると同時に、いわゆる「北海道共通語」がどのようにして形成されつつあるかを調べる。なお、できる限り、第1世の故郷は西日本とするよう努めた。少なくとも、第2世・第3世には、東北方言・東京語の影響があると考えられるので、その影響が第1世からのものでないようにしたわけである。

4-2 調査の実施 以上のような目的で、4地点を選び、調査者2人ずつで一つの班を作って、調査を実施した。その班は、次のようである。

班別	担当者	調査地点	地点の最初の入植方法	調査期日
第1班	柴田・石垣	<small>ビ バ イ シ</small> 美幌市（旧空知支庁）	屯田兵	8月6日—14日
第2班	野元・長谷川	<small>ナカガワ ナカガワ ダンセイ ゲ</small> 中川郡池田町（十勝支庁）	集団移住	8月16日—24日
第3班	徳川・佐藤	<small>ア ブ タ ダン タツ チ ヤン チロー ン リベ ン</small> 虻田郡倶知安町（後志支庁）	自由移民	8月16日—25日
第4班	上村・五十嵐	<small>カ ワ カ ミ ダン ナ ガ ヤ マ マ チ カ ミ カ ワ</small> 上川郡永山町（上川支庁）	屯田兵	8月23日—31日

この調査地点でわかるように、すべて、北海道の内陸部である。内陸部だけを、「北海道をよく代表する」と認めたのは、入植の歴史、したがってその言語が、われわれの調査目的に、より合致すると考えたからである。すなわち、海岸部（たとえば、函館市・松前町のような、特に半島部のそれ）は、植民の歴史も相当古く、その言語は本質的には、東北方言に属するといっている。そこへはいってきた第1世は、東北方言の行なわれている地方に移住したのと変わらない。だれもいないところ、すなわち、言語的伝統のないところに、入植して、集団として一地方のことば、あるいは、各地のことば（したがって雑多な方言）を持ってきた結果、どのような言語ができあがるかを調べた方が、われわれの調査目的にかなうであろう。

さて、実際に調査した家族の氏名と、その出身地は次のとおりである。1地点で2家族以上あるものは、一番上の家族を主として調べた。なお、第1班が調査した稲垣家の調査地点は、ソラチ
ダン
ナ
イ
ニ
チ
ロー空知郡奈井江町（入植方法：屯田兵）である。

（ ）内は調査当時の満年齢。

第1班	橋本伊三郎(86)―伝(58)―貞信(33)	<small>ナガナカ ダン ゴ メン マチ</small> 高知県長岡郡後免町
	常盤房次(89)―茂(44)―淳(17)	<small>タ ムラ ゲン ミ タ テム ラ</small> 福島県田村郡御館村
	稲垣文七(85)―茂(53)―英男(23)	<small>ニ シ ム ロ ダン イ ワ ダ ム ラ</small> 和歌山県西牟婁郡岩田村
第2班	小野田弥作(77)―勝太郎(46)―博信(21)	<small>ヨシ ダ ダン カ ワ ム ラ</small> 福井県吉田郡河合村

吉田磯吉(77)―岩松(53)―武夫(29) 福井県坂井郡大石村
サカイ ダンケーインシュラ
 松浦敦之助(80)―繁松(45)―正治(19)
ミロザイダンシメンゾカニヤマムラ
 第3班 上野万平(75)―元年(46)―春満(15) 徳島県名西郡下分上山村
ミロザイダンシメンゾカニヤマムラ
 (由一)―満(15)
 第4班 近藤伊平(82)―儀一(58)―陽子(31) 徳島県板野郡板東町
イタノ ダンバンドーチヨウ
 福島喜代太郎(65)―勇(45)―堅一(17) 徳島県美馬郡郡里町
ミマ ダンヨウチヨウ

第3班上野由一は調査しなかった。第4班近藤陽子は女である。実際には、われわれの条件にかなった家族を探し出すのはなかなか容易でなかった。

5 第2次調査

5-8 目的 第1次調査の結果はのちに述べるが、北海道第3世のことは、地域が違って、ほぼ共通と認められた。幾分の個人差はあるが、このことは、北海道共通語ともいふべきもので、それは徐々に安定しようとしている。

そこで、この第3世の北海道共通語を、もっと多くについて調査して明らかにしようと考えた。第3世を多人数、能率よく得るために、まず都会地で調査することにした。都会地として、北海道の中心都市であり、言語的にも影響力を持っていると考えられる札幌市、農村地帯の中心都市として、第1次調査の調査地点と関係が深いとも考えられる帯広市を選んだ。さらに、参考のために海岸部都市の釧路市をも調査することにした。釧路市は海岸部ではあるが、半島部には属していないため、北海道共通語の影響を強く受けているのではないかと考えたためである。

5-2 調査の実施 以上のような目的で、国立国語研究所側の分担者4人が共同して調査した。方法は、各調査員が被調査者に1人ずつ面接して、調査票によって調査した。調査の月日および被調査者の内訳は次のとおりである。なお男0、女1、女2の0,1,2は生年を表わす。大正14年以前生まれが0、昭和11年以後生まれが2、その中間が1である。

調査地	調査日	被調査者数	男 0	男 1	男 2	女 0	女 1	女 2
札幌	12月 8 日—10 日	52	1	12	16	1	3	19
帯広	12月12日—14 日	48	1	5	26			16
釧路	12月16日—18 日	61	3	13	17		5	23

計	161	5	30	59	1	8	58
		94			67		

この調査では、第3世の定義を非常にゆるくした。すなわち、両親のどちらかが北海道生まれならいいとした。それでも、なかなか該当者を見つけることがむずかしかった。

6 第1次調査の結果

6-1 語彙について a. まず、「日本言語地図作成のための調査」に使われている調査票の語彙230について、第1世・第2世・第3世のどの世代でことばが変わるかを調べて、その数を合計すると次のようになる。()内は%。
 $1 \neq 2 = 3$ とあれば、第1世と第2世とが違う語形、第2世と第3世とが同じ語形をもって反応したことを示す。以下これに準ずる。

調査地点 家族	美唄 橋本	池田 小野田	倶知安 上野	永山 近藤
$1 \neq 2 = 3$	53(23.0)	50(21.7)	47(20.4)	80(34.8)
$1 = 2 \neq 3$	3(1.3)	7(3.0)	14(6.1)	4(1.7)
$1 = 3, 1 \neq 2$	1(0.4)	6(2.6)	12(5.2)	0(0.0)
その他	7(3.0)	6(2.6)	14(6.1)	8(3.5)
計	64(27.8)	69(30.0)	87(37.8)	92(40.0)

なお、この表では、3世代を通じて変わっていないものは省いてある。

$1 \neq 2 = 3$ 、すなわち、第1世と第2世との間でことばの変換が多いことがわかる。語彙は、まずここに断層のあることがはっきりしている。この例を各地から少しずつ拾ってみよう。

		第1世	第2世	第3世
美唄—橋本	○「なোস」を片附けるの意味に	使う	使わない	使わない
	○こげくさい	cinaku ⁷ sai	キナクサイ	kinakusai
	○鱗	u ⁷ roko	ウロコ	uro ⁷ ko
	○片足跳び	ʃi ⁷ ʃi ⁷	keŋkeŋ	keŋkeŋ
	○「すてる」を紛失するの意味に	使う	使わない	使わない
池田—小野田	○片足跳びをする	ʃe ⁷ ŋu ⁷ ri ʃka ⁷ kʉ	ケンケンスル	ケンケンスル

	◦ 小指	ko ^ɾ itʃi ^ɾ bi	コニビ	コニビ
	◦ とかげ	˜tokjakɯ	トカゲ	トカゲ
	◦ 昨晚	˜jombe	ユーベ	ユーベ
	◦ 「はそんする」を 修繕するの意味に	使う	使わない	使わない
俱知安—上野	◦ こげくさい	sokokusai	ko [˜] gekusai	ko [˜] gekusai
	◦ あざ	totojake	aza	aza
	◦ 飯用の米	kitʃigome	urumai	urumai
	◦ つくし	ho:ʃiko	tsukufi	tsukufi
	◦ 「こわい」を疲れ たの意味に	使わない	使う	使う
永山—近藤	◦ 蛙	go:ta	kaeru	kaeru
	◦ 「あかい」を明る いの意味に	使う	使わない	使わない
	◦ すっぱい	sui	suppai	suppai
	◦ お手玉	ogami	aja	aja
	◦ カッテキタの意味	借ってきた	買ってきた	買ってきた

調査者によって表記法に多少の差がある。以下でも同様。

1 = 2 ≠ 3, すなわち, 第3世だけが違っているものも多少はある。しかし, これは, 変化の主流ではない。この例をやはり少しあげよう。

		第1世	第2世	第3世
美唄—橋本	◦ 「あずける」を与 えるの意味に	使わない	使わない	使う
	◦ 明後々日	˜ʃiasastte	シアサッテ	ja ^ɾ noasat ^ɾ te
池田—小野田	◦ 明後々々日	go ^ɾ jasat ^ɾ te	ゴアサッテ	ヤノアサッテ
	◦ 昨日	ki ^ɾ nno:	キンノ	キノー
俱知安—上野	◦ 匂い	kaza	kaza	pioi
	◦ 正坐する	kafikomaru	kafikomaru	suwaru
永山—近藤	◦ 明後々々日	NR	goasatte	janosatte
	◦ 案山子	kagaʃi	kagaʃi	kakaʃi

この型の変化は数が少ないにもかかわらず, 各家族とも(上に例はあげなかったが, 上野家にもあった)日の名まえが関係しているのは偶然であろうか。

1 = 3, 1 ≠ 2 は, 第1世と第3世との言いかたが等しいものである。数は上の表に見るように少ないが, ここで関係があるとも思われるのは, 第3世の年齢である。美唄・永山の第3世はともに30代, 池田のそれは20代, 俱知安の

それは10代である。家庭にあって、いつも祖父（母）と顔を合わせることが比較的多いのは若いころであって、学校を終わって社会に出れば、祖父の影響はだんだん消えていくものであろうか。もちろんこれは、この調査だけで確言することはできないが、ありうることである。この型の例をあげよう。

	第 1 世	第 2 世	第 3 世
池田一小野田			
○「にわ」を家の前の 仕事場の意味に	使わない	使う	使わない
○つば	tsu ^h ba, ˈtsuabaki<少>	ツバキ	ツバ
倶知安—上野			
○一昨日	ototsui, ototoi	ottoi<多>, ototoi	ototsui
○「にわ」を家の前の 仕事場の意味に	使う	使わない	使う
○こめびつ	tobitsū	komebitsū	tobitsū

なお、俱知安—上野の傍系第3世の満も、具体的な語は違うけれども同数だけ第1世とだけ同じ答をしている。

上の表で「その他」というのは、変化が漸進的なものである。すなわち、第2世が、第1世と第3世との両方の形をあげ、しかも、第1世と第3世とで形が違うものである。例をあげよう。この型も案外少ない。

		第1世	第2世	第3世
美唄—橋本	。つむじ	ˈmaimai<多>, girigiri	girigiri, maimai	girigiri
	。昨日	ˈkinjoː	キノオ, キニョオ	kiˈnoː
池田—小野田	。蜘蛛	kuˈbo	クモ, クボ<少>	クモ
	。カッチクルの意味	借ってくる	両方	買ってくる
俱知安—上野	。「おどろく」を目 が覚めるの意味に	使う	希に使う	使わない
	。胡坐する	qiza kumui	agura kaku, qizao kumui<希>	agurao kaku
永山—近藤	。かたつむり	dendemmuʃi	dendemmuʃi <幼時>, katatsūmuri	katatsūmuri
	。塩の味	karai	karai, ʃoppai	ʃoppai

b. 上の「日本言語地図作成のための調査」の語彙のほか、北海道の共通語彙と考えられるものについて、どういう形が使われているかを調査した。全部で30問のうち、集計に使われたのは、次の24問である。なお、ローマ字は、前

が全国共通語、後ろが北海道共通語と考えられるものである。

01. 靴をはくとき下にはくもの。これを何と言いますか。

kutusita~kututabi

02. 雨の降るとき着るもの。カヤとかスゲなどで編んだ雨具のことを何と言いますか。

mino~kera

03. 雨と雪とがまじって降ってくる。何が降と言いますか。

mizore~amayuki

04. 冬の寒いときに石炭や薪をたく、暖房のための道具を何と言いますか。

sutôbu~sutohu, kahero

05. ストープの火をかきまぜる棒。先のまがった鉄の棒のことを何と言いますか。

hikakibô~derekki

06. 煙突から出る黒いもの。白い着物などに付くとよごれます。雪も黒くなるそうですが、何と言いますか。

baien~huran, yuen

07. 氷の上を滑るはきもの。下駄の歯を抜いたようなものにカスガイを打ったものを何と言いますか。

sukêto(A)~gerori

08. それより上等な、革靴に金具をとり付けたもの、つまり正式な氷滑りのはきものを何と言いますか。

sukêto(B)~suketto

10. 魚の名まえ。秋になると、海から川に上ってくる大きな魚。北海道の名産です。何と言いますか。

sake~akiazi

11. 魚が呼吸するたびに動くところ。これを何と言いますか。

era~sasame

12. カンランと言うのですか。大きな葉が巻いて玉になる野菜。何と言いますか。

kyabetu~kaibetu

13. パンを作る粉になる麦を何と言いますか。

komugi~kobaku

14. あんを作ったり、赤飯に炊き込んだりする赤い豆を何と言いますか。

azuki~syôzu

15. 小学校へ通っているぐらいの年かっこうの人たちを、何と言いますか。
一人前とは言えません

kodomo, kodomotati~warasi, warasyando

16. 短かく髪の毛を刈った頭のことを何と言いますか。

marugariatama~zyanboatama

17. このあたりのことを何と言いますか。 hitai~nazuki

18. ガッチャキという病気がありますね。このことばを使いますか。若いころも使いましたか。 zi(zirô?)~gattyaki

19. 体が丈夫で、健康だというのはの反対は何ですか。病気にかかりやすいということですか。 yowai~kainai

20. 人（樹木など）が成長する、体が大きくなるということを、ふだんのことばでは何と言いますか。 seityôsuru~ogaru

21. くすぐったい感じを起こさせるようにコソコソとすることを、どうすると言いますか。 kusuguru~kosoguru, kotyogasu

22. 腰を下ろすことを何と言いますか。立つの反対です。

suwaru~nemaru

23. 丸いものをコロコロとすることを、何と言いますか。

korogasu~makurakasu

24. 荷物を持ち上げることをふつう何と言いますか。

motiageru~tanaku

28. 夕方（晩）に人の家を訪ねたときは何と声をかけますか。

konbanwa~oban desu

以上は、いろいろの文献から、北海道共通語彙と見られたものであるが、実際の集計の結果は次のようである。予想された北海道共通語彙が、どの世代にあらわれたか、という観点からまとめてみる。番号は問題番号である。

	第1世だけ	第1世と第2世	第2世だけ	第2世と第3世	第3世だけ	第1~3世	第1世と第3世
美唄一橋本	01, 02, 08, 22	04, 18			13, 20	05, 06, 10, 12, 14	24, 28
池田一小野田	07	08, 22	14	03	20	04, 10, 12, 28	
倶知安一上野	08, 10, 23	02, 11, 14, 20	03, 05			12, 28	04
永山一近藤	13, 14	04, 08				05, 10, 12, 28	

これによると、予想された語形がまったく出なかったのは、15 (warasi, warasyando), 16 (zyanboatama), 17 (nazuki), 19 (kainai), 21 (kosoguru, kotyogasu) である。これらは、あるいは半島部の方言かとも思われる。

さらに、第1世に多く使われるか、第3世に多く使われるか、という観点から、同じ北海道共通語彙といっても、古いものと新しいものがあることがわかる。

古いものとしては、02, 07, 08, 11, 18, 22などがあげられ、新しいものには、03がある。新しいもの、つまり独特な北海道共通語形というものの数は少ないであろうし、これから新しく出てくることもそんなにはあるまい。必要があればそのような形をとらずに、ただちに全国共通語をとるのであろう。

各世代に平均的に使われているものが、この限りでは真の意味の北海道共通語形と言えるであろう。次のものである。04, 05, 06, 10, 12, 20, 28。ただし、03 は yuen しかあらわれない。これが北海道独特の共通語形と言えるかどうか疑問である。huran の方は1回も出ていない。すでに失なわれてしまったものか、あるいは半島部の語形であろう。

c. 池田では、福井県の方言集から、被調査者家族の出身地の里言を抜き出して、それを今使うか、あるいは聞いたことがあるかなどを調べた。調査語は合計49。これが各世代でどうなっているかを数えてみよう。

		使う	昔は使った	知っている	全然知らない
小野田	第1世	25	16	3	5
	第2世	19	2	15	13
	第3世	6	1	20	22

近似的に「使う」に3点、「昔は使った」に2点、「知っている」に1点、「全然知らない」に0点を与えて計算すると、第1世110点、第2世76点、第3世40点、となる。この限りでは、第2世はちょうど中間となっている。ここで調査した語彙は、もし福井にまったく関係のない、全国共通語の話し手に聞いたならば、おそらく合計でも0点にしかならないと思われるものであるから、第3世も、第1世の影響を相当受けていることがわかる。

このような語彙で調査した限りでは、上のaで述べたような結論とは、多少

違った結論が出てくる。すなわち、「使う」のところに焦点を合わせると、むしろ第2世と第3世との間に断層がある。しかし、「知っている」以下を見ると、やはり第1世と第2世との間に差を認めるべきであろう。

「知っている」はおそらく第3世を頂点として、第4世から急激に減って、「全然知らない」が非常に多くなるという推移をとって福井色がまったくなくなっていくのであろう。

なお、第3世が「使う」で、したがって3世代とも使うのは、次の語である。火葬場～サンマイ、雑炊～ゾロ、昼畠仕事を終わって家に帰ること～ヒラガリ、十能～センバ、楽な～オモイデナ、おしゃれする～ダテコク。以上は、「火葬場」を除いて、すべて家庭的な語である。「火葬場」は、この小野田家から池田町市街地への途中に火葬場があるため、小野田家にとってはこれも家庭的な語であって、福井の里言形が保存されたのであろう。

6-2 文法について 美唄一橋本では、次のことが観察された。

まず、現在進行と完了とを語形の上で区別するのは、第1世・第2世で、それぞれ、「サケ ノミヨル」「サケ ノンデョル、ノンドル、ノンデル」と言う。ところが、第3世は、どちらをも「ノンドル、ノンデル」と言う。

また、第1世は、状況可能と能力可能とを否定の場合だけは語形の上で区別する。たとえば、「暗い状態にあるから書くことが不可能である」のことを、「クライキニ カケン」と言う。これに対して、「学校へ行かなかったから書くことが不可能である」のことは「ガッコー イカナンダキニ ヨーカカン」とも「ガッコー イカナンダキニ カケン」とも言う。この区別は、第2世にもあるが、第3世にはなく、どちらも「カケン」と言う。

そのほか、次のような例がある。

	第1世	第2世	第3世
死ぬ人	シヌルヒト	シヌルヒト	シヌヒト
買った	コータ、カッタ	カッタ	カッタ
高くなる	タコーナル	タコーナル	タカクナル
書かない	カカン	カカン、カカナイ	カカナイ
来ようと	コート	コート、キョート、コョート	キョート
いない	イナイ、オラン	イナイ、オラン、	イナイ、オラン、

これを見ると、第2世は、一部は第1世と同じであり、一部は第3世への過渡期とも言える様相を示していることがわかる。第3世になって、完全に北海道色となるようである。

池田一小野田の場合もほぼ同じことが言えるようである。

活用形式を動詞から見ていくことにする。

否定形は、第1・2世では、「カカン」が主力で、「カカナイ」はあまり聞かれない。第3世では、意識としては、「カカナイ」が多いと言うが、実際の会話では相当「カカン」が出るようである。この第3世の「カカン」は第1世の西の方言の影響というよりも、むしろ、北海道方言に相当多いものではないかと考えられる。

意志をあらわすのに「ペー」を「カクペー」のように使うのは、第2世からである。

推量をあらわすのには、第1世は「カクデャロー」を使う。このデャは[d_jæ]のような音である。第2世は「カクヤロー」を使う。第3世は「カクベ」であって、完全に北海道方言の話し手ということができよう。以上の関係は「カク」だけでなく、すべての動詞であられる。

過去の打ち消しは、第1・2世は「カカナンダ」であるが、第3世は「カンカッタ」を答えている。ただし、第1世の会話中に「イカンカッタ」が出てきた。これは世代からの影響であろうか。

順接の助詞には、第1世で「サカイ」が聞かれるが、第2世以下にはこれがない。

音便形は、「買う」であれば「カーテ」は第1・2世に聞かれ、また「カッテ」も言うが、第3世では「カッテ」だけである。

命令形では、五段活用動詞では共通語形と同じであるが、以下は次のようになっている。

	第1世	第2世	第3世
起きる	オキヨ, オッキョマ	オキヤ, オキマ	オキレ
見る	ショ, ミレ	ミレ	ミレ

出る	デヨ, デイ, デレ	デイ, デレ	デレ
来る	コイ	コイ	コイ
する	シェイ	シレ, セー	シレ, セー
いる	—— (オレ)	イレ	イレ

「来る」を除いて、第3世になると、北海道共通語の命令形語尾の「レ」が確定し、ほとんどそれだけとなる。第2世は、それへの移行の段階として、第1世の言語をもまだ反映している、ということができる。

可能をあらわす形についても、ほぼ同様である。第1世は「ミレル」のような言いかたはほとんどしないが、第2世からこの形があらわれはじめ、第3世で「ミレル」が確立する。「する」についても「シレル」と言うほどである。

形容詞では、いわゆる連用形に特色がある。「安い」であれば、安くなる・安くない・安くて、は、この順に、第1・2世では「ヤスナル」, 「ヤスナイ」, 「ヤステ」となるが、第3世ではすべて全国共通語と同じく「ク」がはいる。「珍しい」でも同様である。「無い」は「ノーナル」など、「よい」は「ヨーナル」などである。「高い」は、第1世では「タコナル」など、上のとおりであるが、第2世は順に、「タコナル」, 「タコナイ」, 「タカテ」と、最後だけ違っている。すなわち、動詞では、第2世が相当北海道共通語化していたが、形容詞では、ほとんど第1世のとおりである。

形容動詞では、終止形に差がある。「静かだ」「立派だ」などの「だ」に当たる部分は、第1世で一番多く使うのは「ジャ」で、「ダ」も言う。そのほか「ヤ」を使うこともあるという。第2世は、「ヤ」と「ダ」とである。第3世はもっぱら「ダ」になる。推量や過去などのあらわしかたは、以上の点から推察できるとおりであるが、推量では、動詞のところでも第1世にあらわれた「デァロー」の形もある。

倶知安―上野でも、事情はほぼ同一である。

動詞では、命令形のレ語尾が第2世ではほとんど出ない点が、池田の場合とは違っている。なお、「買う」の音便形では、第1世は「コーテ」であるが、第2世は、第1世に向かってはこれを使い、その他の場合は「カッテ」を使う。第3世はそのような区別をせずに、「カッテ」だけである。また、雪が、「フリヨル」は現在進行、「フットル」は結果、という区別は、第2世までは、語

によってやや不明確なものもあるが、保存しているが、第3世はすべて、フッテル式に言い、区別はしない。

形容詞で、池田の場合と違うのは、第2世で「ク」がはいる、という点である。すなわち、池田と比べると、第2世は、動詞では北海道化せず、形容詞では北海道化している、ということになるうか。また、池田の第1世では、「タコナル」、「ヤスナル」、「メズラシナル」のようであったが、倶知安の第1世では「タコーナル」、「ヤスーナル」、「メズラシューナル」となっている点も違っている。

6-3 音声について 美唄一橋本で、世代の間に差のあったのは、次のものであった。斜線のところに差が出ている。

	第1世		第2世		第3世
① ていねい	te ^h inei	/	te ^h ine:		te ^h ine:
② { 火事	{ ka ^h ʒi		{ ka ^h ʒi	/	{ ka ^h dʒi
{ 鍛冶	{ ^h ka ^h ndʒi		{ ^h kadʒi		{ kadʒi
③ 肌	ha ^h nda	/	ha ^h da(ときにha ^h nda)		ha ^h da
まゆげ	ma ^h ju ^h nge	/	ma ^h ju ^h ge(ときにma ^h ju ^h nge)		ma ^h ju ^h ge
④ 背中	^h θenaka		^h θenaka	/	^h senaka
⑤ 牛	^h uʃi		^h uʃi	/	^h uʃi
⑥ 汽車	kiʃa		^h kiʃa	/	ki ^h ʃa
鳥	ka ^h rasu		karasu	/	ka ^h ra ^h s.

①は二重母音の発音がどうなっているかである。

②は、ジとヂとの発音を区別するかどうかである。第2世までは区別がある。これらを含めて、第1・2世のモーラ体系の一部は、次のようになる。

tu[tsu]~[tu]	to	ta	te	ti[tʃi]~[ti]	tju[tʃu]	tjo	tja
du[dzu]	do	da	de	di[dʒi]	dju[dʒu]	djo	dja
zu	zo	za	ze	zi	zju	zjo	zja

c- の系列は欠く、ということになる。第3世のモーラ体系は東京方言のそれとまったく同一である。

③は、語中の〔d〕,〔g〕の入りわたりが鼻音化するかどうかである。第2世は、ときどきは鼻音化するが、普通にはしない。第3世は決して鼻音化させない。

④は、[θ], [ð] 音があるかどうかである。第3世になると、[s], [dz] となっている。

⑤は、ウの音が、くちびるを丸めて発音するか、である。第2世までは、西日本的なまるくちの[u]である。

⑥は、/i/, /u/が、特に無声子音に挟まれたとき、無声化するかどうかである。第3世に至って、東京方言と同様無声化させる。

以上を見ると、第2世で変わるものもあるが、第3世で変わるものが多い。高知の音声的特色は、第3世では完全に失なわれていることになる。

池田一小野田では、次のようである。

① 1モーラ名詞などを、第1世は関西風に長く引いて発音する。第2・3世はこの傾向がだんだん薄れていく。3人に尋ねた12語のうち（発音の調査のための全語数は95）、第1世は全部をこのように発音しているのに対して、第2・3世は、具体的な語には出入りはあるが、半数の6語についてこのように発音しているにすぎない。これは、語末の母音が終わったあとはっきり声止め（声門閉鎖）をしないこととも関係があり、1モーラ名詞に限らず、たとえば、「月」[tsu^hki:]のようにあらわれる。このようなものが、第1世に8語ある。

② 逆に、たとえば「銅像」を第1世 [do^hzo^h]、第2世 [do^hzo:]、第3世 [do^hzo] のように、長く発音しないものがある。「牛乳」、「孝行」、「奉公」、「九州」などにあらわれるが、世代による差は見られない。

③ 語中の/n/の持続部が、第1世で、時間的に短いことが注意される。たとえば、「新聞」は [ʃimbu^h] となる。このような語は調査語中12あるが、第1世では6語に聞かれた。第2・3世では、それぞれ1語にすぎない。

④ /e/の発音が非常に狭いことが第1世で注目される。

⑤ 話中の [t], [k], 特に [k] が母音間で有声化する傾向が第1世には強くあらわれている。

⑥ /se, ze/は、第1世では [ʃe], [ze] となるのが普通である。第2世ではごく希にあらわれるが、第3世では会話の中で拾った「絶対」[ze^httai] だけであった。

⑦ 語頭の／r-／を〔d〕の破裂をともなって発するのは第1世だけで、第2世以下にはこの発音はない。／a／、／o／の前で特にいちじるしい。

⑧ その他、特殊な発音としては、第1世の「位牌」〔juːːɸa̠i〕がある。第2・3世はいずれも〔iːha̠i〕であって、〔ɸa〕という音節はあらわれない。第1世でも、このように両唇摩擦がいちじるしいのは、この語だけであって、「九杯」など、同じような音声的環境にあっても、ごくわずかに唇音化する程度である。

以上の8項目について、池田の他の被調査家族での状況を見てみよう。

①については、吉田第2世では小野田のそれよりも長く発音する傾向があり、松浦第3世は小野田のそれよりも長く発音する傾向がある。

②は、吉田ではそれはそれほどあらわれていないが、松浦では第3世まで相当この傾向が見られた。

③も同様であるが、吉田第2世は、他の第2世よりも多くこの現象があらわれる。

④は、吉田・松浦の第1・2世は、／i／と／e／とは、語頭および、二重母音の第2母音要素では区別がない。したがって、「息」も「駅」も〔éːki〕、「鯉」も「声」も〔koːẽ〕である。この両家でも、第3世は／e／の発音がやや狭めながら区別がある。この点で小野田は、第1世でときどきこの区別がいまいになるだけなので、福井の音声を早く失なっているといえよう。

⑤吉田・松浦とも、第2世にもわずかではあるが、この傾向が残っている。

⑥は、松浦第2世にはこの傾向がわずかに残っている。第1世はもちろん両家とも〔ʃe〕、〔ze〕である。

⑦は、第1世はすべてこの傾向があり、第2世では松浦だけに聞かれる。

⑧は、他の人々には聞けなかった。

以上を通観すると、第1世はほとんど福井の特徴を保存しているのに対して、第3世はそれをほとんど失なっているということがわかる。家族によって、福井色の失なわれる速度の速い遅いがあるようである。たとえば、小野田がいちばん速く、松浦がいちばん遅い。

倶知安―上野の場合は次のようである。

① 第1世は／kwa／，／gwa／というモーラを持っている。これに対して、第2世以下はこのモーラを持っていない。

② 「歯」を第1・2世は[haʔ:]と言うのに対して、第3世は[ha]のようである。すべて、第3世だけが1モーラ名詞を持っている。

③ 語中の[d], [g]の入りわたりが鼻音化するのは、第1・2世だけである。第3世は鼻音化することはない。もっとも、第2世は多少動揺している。「窓」「釘」は、第1世[-maʔdo], [-kuʔgi], 第2世[maʔdo~mado], [kuʔgi~kuʔgi], 第3世[mado], [kuʔgi]のようになる。

④ 3世代を通じて変わらない特徴としては、語頭の／e／が[e]と発音される点と、たとえば、「孝行」「牛乳」を[ko:ko], [gju:pɯ]のように、全国共通語で3モーラ以上の語の語末長母音が短くなる点とがあげられる。

以上それぞれの場合を通じて言えることは、第3世になれば、第1世の持ってきた出身地の方言的発音は非常に薄くなる、という点である。第2世は、それへの過程にある、と言ってよからう。あるいは、多少第1世寄りという印象が強いようである。

6-4 アクセントについて 美唄—橋本では次のようになる。

第1・2世のアクセントはまったく同じであり、しかも、高知方言のアクセント体系を、次のように全然くずしていない。

				「○○○○」 友達
		「○○○」 桜	「○○○○」 金持	
	「○○」 鼻	「○○」 鏡	「○○」 からかさ	
「○」 戸	「○○」 花	「○○」 心	「○○○○」 あいさつ	
	○「○」 雨	○「○○」 薬	○「○○」 紫	
		○「○○」 兎	○「○○」 化物	
			○「○○○」 小刀	

2モーラ名詞の5つの類の歴史的統合も、Ⅰ／Ⅱ・Ⅲ／Ⅳ／Ⅴのようで、高知方言と同様である。

第3世は、4モーラ以上の語は型がほぼ一定しているが、2モーラ以下の語は型が不定で、本人も高低配置の差を意識していない。すなわち、部分的には「一型化」していると見てさしつかえない。3モーラ語については、不安定で

ある。たとえば、「花が～鼻が」、「橋が～箸が」は、日によって時によって、
 「〇¹〇△, 〇¹〇¹△のように発音し、しかも、「〇¹〇△と〇¹〇¹△とを聞かせて
 も、どちらが「花が」か「橋が」かというようなことはわからない。4 モー
 ラ語はこれが「紫」なら〇¹〇¹〇〇, 「小刀」なら〇¹〇〇〇¹で安定している。

池田・小野田は、第1世の出身地が「一型アクセント」の地帯であるので、
 第1世には、もちろんアクセントがない。また、第2・3世にもアクセント意
 識はないようである。たとえば、3 モーラ語では、現象的には、〇¹〇¹〇を基
 調とし、1 モーラ助詞がつくと、〇¹〇〇¹△となるが、発音してみても、聞き
 分けることはできない。

俱知安・上野では、第1・2世が

{ 鼻が「〇〇△ ¹ 」	{ 箸が「〇〇△ ¹ 」	{ 飴が「〇〇△ ¹ 」	{ 栗が「〇〇△ ¹ 」
{ 花が「〇 ¹ 〇△」	{ 橋が「〇 ¹ 〇△」	{ 雨が「〇 ¹ 〇△」	{ 泡が「〇 ¹ 〇△」

のような区別をはっきり持っていて、いつも変わらないのに対し、第3世は、
 2回聞いたところでは、次のようである。

鼻が	花が	箸が	橋が	飴が	雨が	栗が	泡が
第1回 「〇〇△ ¹ 」	「〇〇△ ¹ 」	「〇〇 ¹ △」	「〇〇△ ¹ 」	「〇〇△ ¹ 」	〇 ¹ 〇 ¹ △	「〇〇△ ¹ 」	「〇〇△ ¹ 」
第2回 「〇〇 ¹ △」	「〇〇 ¹ △」	「〇〇△ ¹ 」	「〇〇 ¹ △」	〇 ¹ 〇 ¹ △	「〇〇△ ¹ 」	〇 ¹ 〇 ¹ △	〇 ¹ 〇 ¹ △

やはり、アクセント意識が薄れていることがうかがえる。一つの語に助詞の
 「が」、「の」、「に」、「も」などをつけて発音してもらうと、一番はじめにたと
 えば〇¹〇¹△になれば、あとにもつづけてそうなるし、何かの拍子で「〇〇△¹」
 に変わると、あとはまたつづけてそうなる、という傾向がある。

以上を通してみると、アクセントは第3世になると無アクセントに近くなる、
 ということができよう。池田で、第3世がアクセント観念のないことは、その
 地域社会でもこの傾向があることを示している。無アクセントの人でも、アク
 セントのある地方に移住したとき、その子や孫は、アクセントを獲得するに至
 る。しかし、この地方は、だれもいないところへアクセントの違う言語を持っ
 ていろいろの人が移住してきたので、それらが衝突した結果、無アクセントが
 生まれたのであろう。それで、池田の第3世もアクセント観念を持つに至らな
 かったものと思われる。

7 第2次調査の結果

7-1 語彙について 調査語を一つずつ見ていくことにしよう。

101. 物の値段を尋ねるときには何と言いますか。「このまんじゅうはひとつ〜」, それから何と言いますか。 ikura~nanbo

ナンボという語を使う人を調べるものである。地域・年齢とも大きな差がない。しかし、性別では、男84%, 女67%で、男の方がナンボを多く使う。全体では77%である。以上の数は、イクラなどをも使うものを含む。

102. これを何と言いますか。この、物を見るものです。 me~managu

東北系のマナグが、どの程度北海道に行なわれているかを見ようとした。しかし、これはこのような都会地では少なくとも非常に少なく、わずかに釧路で男女1人ずつから聞かれたに過ぎなかった。

103. まぶたのへりにぶつとできる小さなできものです。何と言いますか。
うみを持って赤くはれると、むずむずしてかゆいものですが間もなく直ります。 monomorai~nome

これは、地点によって差があるようである。被調査者の何%がその反応を示しているかをおもな里言形について調べてみよう。

	モノモライ	メモライ	メッパ	ノメ	バカ	ノボロ
札幌	83%	10	14	2	2	0
帯広	60	0	38	2	2	6
釧路	13	0	87	11	0	2

東北系のノメが意外に少ないが、釧路にやや見られるのは、ここが内陸部と性格を異にし、東北地方と関係の深いことを示している。モノモライという全国共通語形は札幌に多く釧路に少なく、メッパが釧路に多く札幌に少なく、帯広はやや全国共通語的ながら中間の地位を占めている。これは少なくとも語彙の点で北海道は決して単一でなく、方言的差異が見られることを示すものといえよう。

104. この指は何と言いますか。 kusuriyubi~benisasi

西日本的なベニサンは1回も聞けなかった。

105. 梅干の味はどんなだと言いますか。 suppai~sukai

スッカイなどの東北方言語形は各地点あっても1人ぐらいである。スイなど

の西日本的語形は、帯広で27%あって、やや特異である。性差・年齢差はあまりない。他の地点では、これは釧路で1人あっただけであった。

106. 塩の味はどんなだと言いますか。 karai~syoppai

ショッパイが圧倒的で、他のものでは傾向的なものはあらわれない。

107. 「あさって」の次の日ことは何と言いますか。 siasatte~yanoasatte

	シアサッテ	ヒアサッテ	ヤノアサッテ	ヤナアサッテ
札幌	23%	0	63	17
帯広	42	4	44	15
釧路	11	7	66	18
年齢 0	0	0	33	67
年齢 1	29	3	74	11
年齢 2	24	4	55	16

108. その次の日のことは何と言いますか。 yanoasatte~siasatte

	シアサッテ	ヒアサッテ	ヤノアサッテ	ヤナアサッテ	NR
札幌	44%	2	2	2	50
帯広	29	4	10	10	40
釧路	31	13	3	0	44
年齢 0	33	0	0	0	67
年齢 1	37	16	0	2	45
年齢 2	34	4	13	5	44

上の2問の結果では、シアサッテ・ヤノアサッテの順の東京方言の言いかたが比較的多いのは帯広である。そして、他の2地点は、関東・東北式のヤノアサッテ・シアサッテの順となっている。しかし、このことが、北海道のなかの地域性を示すものかどうかは、はっきり断定できない。とにかく、シアサッテおよびヤノアサッテという言語形式の意味する内容が、このように大きく食い違っているのが、北海道の言語の一つの性格を示しているようにも思える。ヒアサッテが釧路に多いのは、おそらく地域的な特色であろう。のちに述べる音声のところのヒとシの項を見よ。108については無答（NR）が非常に多い。

109. 雨と雪とがまじって降ってくる。何が降ると言いますか。

mizore~amayuki

北海道方言といわれている、アマユキ、アメユキは実数では次のようにあらわれている。

	アマユキ	アメユキ
札幌	1人	0
帯広	1	1
釧路	5	2

これでは、釧路でやや多いが、全体としてはとるに足りないくらいである。

110. 「手に手袋を～」それから何と言いますか。 hameru～haku

結果は圧倒的にハメルであって、あまり問題はない。

111. 冬の寒いときに石炭やまきをたく、暖房のための道具を何と言いますか

sutôbu～sutohu

ストーブ、ストフを合わせて数えると次のようである。札幌3人、帯広5人、釧路7人。これを年齢別に％で出すと、0は50％、1は5％、2は9％となり、いちばん若い2は少し多いが、1と大差なしと認めるならば、大正14年以前に生まれたものに多くあらわれると言えそうである。

112. ストーブの火をかきまぜる棒、先の曲がった鉄の棒のことを何と言いますか。 hikakibô～derekki

デレッキがほとんどであって問題ないが、デレキとなる場合に地域差があるようである。％で示すと、札幌6、帯広6、釧路30となる。すなわち、これは釧路方言と言えそうである。

113. かまどでたきぎ（まき）をたいたあとに残る白いもの、あれのことを何と言いますか。 hai～aku

ハイとアクの％を出してみると次のようである。なお、石炭をたいたあとに残るものについても結果が出ているので、これをも合わせてあげる。

	たきぎ		石炭	
	ハイ	アク	ハイ	アク
札幌	92%	35	19	83
帯広	63	58	40	40
釧路	69	56	8	67

この結果によると、たきぎについてハイ、石炭についてアクのように区別するのが、札幌の特色である。帯広・釧路ではたきぎについては差がなく、石炭については帯広でも差がないが、釧路ではアクが圧倒的なようである。この事

情を明らかにするため、たきぎと石炭とで言いかたを区別するかどうかの観点から整理してみると次のようである。たきぎ～石炭の順にすると、札幌ではアク～ハイが1人、ハイ～アクが24人、帯広でアク～ハイ10人、ハイ～アク7人、釧路でアク～ハイ1人、ハイ～アク18人であった。ここでも帯広は、この区別がはっきりしていないことが示されるわけである。

114. 「かんらん」と言うのですか、大きな葉が巻いて玉になる野菜を何と言いますか。 kyabetu～kaibetu

カイベツの％を出すと次のようである。札幌13, 帯広35, 釧路36。札幌はこの点、やや北海道方言的色彩が薄くなっている、と言うことができる。

115. 魚の名まえ。秋になると、海から川に上がってくる大きな魚。北海道の名産です。何と言いますか。 sake～akiazi

アキアジが圧倒的である。アキアジということを言わない人の％をあげると次のようである。札幌25, 帯広4, 釧路7。札幌が北海道方言色の薄いことは、ここでも明らかである。年齢別では、これらはすべて2, すなわちいちばん若い層であって、若い人の傾向をあらわしている。

116. ×のしるしのことを何と言いますか。 batu～kakeru

カケルを予想していたのであるが、カケジルシを含めて、実数で、札幌1, 帯広5しかなかった。圧倒的多数形はバッテンである。

117. 荷物などを移動させるために持ち上げることを、ふつう何と言いますか。

motiageru～tanagu・tagaku

タナグ・タガクなどは次のようにあらわれている。

	タナク	タナグ	タガク	計
札幌	8%	4	13	25
帯広	4	0	15	19
釧路	28	10	10	48

ここであらわれていることは、釧路でこれが多く使われていることである。また、他のところではタガクの方がむしろ優勢であるのに対して、釧路ではタナクが優勢であることもいちじるしい。なお、上の3つの語形は、1人の被調査者が、2つ以上持つことがない、という点に特色がある。

118. 荷物が重いから、酒屋にちょっと「あずかってこよう」というように、
「あずかる」ということばを使いますか。

「使う」という答の％をあげると次のようである。札幌67, 帯広73, 釧路79。

119. 「こわい」ということばを疲れた、くたびれた、という意味に使いますか。重い荷物を背負って歩いたので「こわい」というふうに。
120. 「あかい」ということばを、明るいことを表わすときに使いますか。ろうそくより電灯の方が「あかい」というふうに。

119 は全員が「使う」であり、120 は全員が「使わない」であった。すなわち、すべてが東北的であって、関西的な影響を受けていない、と言えるようである。

以上を通観して言えることは、全体に東北的色彩が見られるが、札幌がもっとも稀薄であるのに対して、釧路がもっとも濃厚である点である。語彙の面でも、北海道共通語という等質なものはなく、地域により多少の差があるわけである。

7-2 文法について 動詞では、「書く」、「起きる」、「来る」、「する」の4つの語について、若干の活用形を聞いてみた。

まず、「否定形」であるが、書カン式の「ン」がどのくらいあらわれたかを％で示してみよう。

	書く	起きる	来る	する
札幌	2%	0	0	0
帯広	17	8	0	4
釧路	10	3	2	5

札幌では少ないようであるが、他では語によって、ある程度聞かれる。しかし、北海道の言語としては、もう少しこれがあるのではないかと考えられる。調査という場面なので、多少改まったかと思われる。今後調査すべき点であろう。

「意志形」に「べ」を使うものの％を出すと、次のようである。

	書く	起きる	来る	する
札幌	42%	40	31	42
帯広	50	46	40	46

釧路	44	33	46	44
男	76	65	65	73
女	3	3	1	3
男 0	60	80	60	60
男 1	83	53	70	77
男 2	73	69	64	73

語によって、あらわれかたにはそれほどの差がないようである。性別では、ほとんど男だけにあらわれる。年齢的に一定の傾向は出ていない。男であれば「べ」を使うのが、まず北海道共通語と見てよさそうである。

次に「仮定形」に「ダラ」を使って、「書くなら」を「書クダラ」のようにいう者の％をあげてみよう。

	書く	起きる	来る	する
札幌	14%	17	17	21
帯広	60	63	63	52
釧路	74	75	70	80
男	52	53	53	54
女	48	52	48	51

語には関係なく、すこぶる安定している。札幌でいちばん少なく、釧路が比較的東北的で、帯広はその中間よりも釧路寄りという点は、他のいくつかの項目と同様である。性別では、男の方が、わずかながら、この形を多く使う傾向があるようである。

「命令形」では、「起きる」に対する「オキレ」が問題になろう。％で示すと札幌75、帯広77、釧路82となる。「する」に対する「スレ」、「シレ」は合計して、札幌60、帯広73、釧路74である。この数字は、あまり高くないようであるが、共通語形の「オキロ」がそれぞれ、8、15、15、「シロ」がそれぞれ、6、10、10で、しかもそれらは、「オキレ」、「シレ」とも言うというものが大多数であり、かつあとは、「オキナイ？」式の表現が多いのであるから、北海道共通語における命令形は、「オキレ」および「スレ」、「シレ」と断じてよさそうである。「スレ」と「シレ」とでは、札幌・釧路では「スレ」が多く、帯広では「シレ」の方が多いが、これがそのまま地域差を反映しているかどうかははっきりしない。

「仮定形」では、「来る」における、「コイバ」または「コエバ」が問題になる。これは次のようにあらわれる。

	コエバ	コイバ
札幌	10%	14
帯広	40	25
釧路	34	20

「コエバ」か「コイバ」が、必ずしもはっきりしない場合もあるが、ここにあらわれた限りでは、帯広・釧路では「コエバ」の方が多いようである。この場合は、これが東北的であるはずにもかかわらず、釧路の方が少ないことが注目される。

形容詞・形容動詞で問題になるのは、「仮定形」である。東北的に「ダラ」という語尾をとるかどうかである。「ダラ」を%で示すと、次のようである。

	高い	新しい	元気だ
札幌	14%	15	18
帯広	35	42	34
釧路	56	50	66
男	37	38	44
女	28	22	46

「ダラ」が、やはり、他の項目同様、札幌がいちばん少なく、釧路がいちばん多くなっている。形容詞では男女差では、男の方が多いのに、形容動詞の方はほとんど同じとなっているのはおもしろい。

なお、「新しい」には「アタラシ(ー)バ」という方言形がある。これは、札幌4%，帯広0%，釧路15%となっている。やはり釧路がいちばん多い。

以上文法を通観すると、語彙と同様、釧路がもっとも東北的で、札幌がもっとも東北的でないと言えるようである。

7-3 音声について

1. イとエとの区別があるか。

「息」と「駅」という語で聞いている。結果は、釧路で5%(3人)が区別をしていない。「駅」の〔e〕が、〔i〕とは区別があるものの、非常に狭いものが、釧路でそのほか5人、帯広で1人あった。

2. スとシとの区別があるか。

3. ツとチとの区別があるか。

4. ズとジとの区別があるか。

2は「煤」と「寿司」、3は「月」と「土」、4は「知事」と「地図」で聞いている。すべて、区別はする。ただ、上のチがキとなる個人が札幌で1人いた。

5. 語中のカ行子音は有声化するか。

「茎」と聞いた。有声化するものは札幌で1人だけであった。

6. 語中のタ行子音は有声化するか。

「的」と「窓」との区別で聞いている。区別はあるものの「的」の子音がわずかに有声化して〔t〕となったものが釧路に2人あった。

7. 母音は無声化するか。

「北」と「口」との、第1母音が無声化するかどうかを聞いた。無声化しないのは、札幌だけで聞かれた。「北」が12%、「口」が17%である。帯広・釧路では、全員が無声化する。

8. ウの母音は丸いか平たいか。

「兎」と「歌」とで聞いた。結果は、まるくちの〔u〕を出した人の%は次のようである。札幌6、帯広10、釧路13（「歌」では15）である。〔ɯ〕と〔u〕と安定しないものが、釧路に1人いる。

9. 語中のガ行子音は鼻音化するか。

「中学」、「道具」におけるそれらと、語頭のガ行子音とを区別するものの%は次のようである。

	中学	道具	両方とも区別
札幌	35%	37	17
帯広	38	46	23
釧路	82	84	74

釧路が非常に多いのは、やはり東北的な特徴、すなわち、「茎」と「釘」とを区別するものを反映しているものと思われる。

10. ヒをシと発音するか。

「火箸」と「膝」とで質問した。〔ʃ〕および、〔ç〕〔ʃ〕の中間で発音したも

のを合計して、%で示すと次のとおりである。

	火箸	膝
札幌	14%	0
帯広	4	8
釧路	21	20

このほかに、釧路で「火箸」15%、「膝」8%が、[çi] と [ji] との間を動揺している。これを加えると、釧路では、相当この傾向が他の2都市に比べて強い、ということが言えるであろう。これも東北的な特徴と関係がある。

11. シュ、ジュはどう発音されるか。

「手術」、「主人」が調査語である。結果は次のようである。

	手術			主人	手術			
	シュ	シ	両方		ジュ	ズ	ジ	まざり
札幌	55%	38	6	14	29	23	37	6
帯広	44	52	2	2	35	35	27	0
釧路	74	21	2	2	25	52	18	2

「主人」の場合、札幌でシという発音が多いのに、「手術」の場合それほどでもないのはいちじるしい。シが釧路では少ないし、ジも少ないのは一貫しているが、その釧路で、シュから想像されるようにはジュが多くなく、ズというのが最大多数形となっているのは不思議である。これらが、地域的な差を反映しているのかどうかは、にわかには決められないと思う。

以上、音声を通じてみたとき、東北的な色彩はやはり釧路がいちばん濃いようであるが、語彙・文法に比べたとき、その色彩はずっと稀薄である。東北方言でよくいわれる、シ・ス、チ・ツの区別は割にはっきりしている。つまり、北海道共通語は、他の点では相当東北的なものを有しているが、音声的には、東北色を相当落として、東京のそばに近くなっている、と言うことができる。ただし、これは札幌・帯広・釧路という、比較的大きい都会における現象である。もっと小さな都市、あるいは農村ではどのようなになっているかは、これから研究すべきことである。

7-4 アクセントについて この調査では、4モーラ以下の名詞のアクセントについて調査した。ここでは、同音の2モーラ名詞で比較したものを集計して

みよう。調査語は次の6組である。

鼻と(Ⅰ類)～花と(Ⅲ類), 飴と(Ⅰ類)～雨と(Ⅴ類), 橋と(Ⅱ類)～箸と(Ⅳ類), 紙と(Ⅱ類)～髪と(Ⅲ類), 泡と(Ⅲ類)～粟と(Ⅳ類), 雲と(Ⅲ類)～蜘蛛と(Ⅴ類)。

このうち, 「紙と～髪と」「雲と～蜘蛛と」は, 東京ではアクセントがまったく同じであるから, 別に集計することにする。

アクセントで区別する(たとえば, 「花と」が○「○」△, 「鼻と」が○「○△」であるため区別する) 1組に○, 2つ以上のアクセントを1語が持つために区別することのある(たとえば, 「花と」が○「○」△, 「鼻と」が○「○」△とともに, ○「○△」をも持つので, その一方を見れば区別していることになる) 1組に△をつけて, 各人がこの4組で○や△をいくつとったか(0個から4個まで)を数え, 人数の相関表を作ると次のようである。

札幌							帯広						
○△	0	1	2	3	4	計	○△	0	1	2	3	4	計
0	1人	4	1	2		8	0	9人	1				10
1	5	1	3	1		10	1	9	1				10
2	6	3	2			11	2	11	1				12
3	15	5				20	3	12	1				13
4	3					3	4	3					3
計	30	13	6	3		52	計	44	4				48

釧路						
○△	0	1	2	3	4	計
0	3人	1				4
1	6	2	1			9
2	16	5	1			22
3	22					22
4	4					4
計	51	8	2			61

この表は, たとえば, ○が0個(0組), △が0組であった人は, 札幌で1人, 帯広で9人, 釧路が3人であることを示す。

これを見ると, 札幌では比較的△が多いということがわかる。調査方法に精粗の差はないはずであるから, この

ことは非常に特徴的と言えるであろう。ここで, 2つ以上のアクセントを持った語数がどのくらいあったかを調査語12について数えると次のようである。

語数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	平均
札幌	24人	10	5	5	3	2	1	1	1	1.3
帯広	46	11	3	1						0.4
釧路	41	4	1	2						0.2

2つ以上のアクセントを持つものは、いわば動揺しているのである。札幌がもっとも動揺がはなはだしいということができよう。1語も2つ以上のアクセントを示さなかった者は%にすれば、札幌46%，帯広85%，釧路75%である。

サンプルではないが、△という動揺を反映しているものを省いて、区別する組数の平均を出すと次のようである。なお、△が多い札幌は省くのが適当であ

ろう。

	平均	分散	
帯広	1.8	1.51	この結果によると、帯広と釧路との間には、信頼度95
釧路	2.4	1.22	%で、釧路の方が有意差をもって、アクセントで区別することが多いと言える。とは言っても、釧路でも、それほどはっきり区別をする、というわけでもない。内地のアクセントに型の区別のある方言での区別に比べたら、ずっと区別しない、と言うべきであろう。しかし、○も△も0だったもの、つまり、まったく区別しない人の数も札幌1人(2%)、帯広9人(19%)、釧路3人(5%)であって、「一型アクセント」の地方ほどではない。以上から考えて、型の区別はそれほどはっきりしていない、と言うことはできようと思う。

「紙と～髪と」、「雲と～蜘蛛と」は、東京では前に述べたように区別しない。これらについての結果をまとめると、次のようである。

	紙と～髪と			雲と～蜘蛛と		
	区別する	△	区別なし	区別する	△	区別なし
札幌	37%	26	37	21	6	73
帯広	25	4	71	19	2	79
釧路	64	5	31	21	2	77

「雲と～蜘蛛と」の方は、各地で大体同じである。「紙と～髪と」の方は△の多い札幌を除外しても、相当違っている。すなわち、帯広では「区別なし」の方が多く、釧路では「区別する」の方が多い。他の組ではこれがどうなって

いるかを、「区別する」について集計してみよう。

	鼻と～花と	飴と～雨と	橋と～箸と	泡と～粟と
札幌	46%	52	71	31
帯広	56	50	56	17
釧路	52	70	82	18

「泡と～粟と」で「区別する」が少ないのは、これがあまり使われない語、特に「粟」を含んでいるからであろう。「橋と～箸と」はどこでも、いちばん区別するものが多い。しかし、これはいわば知識として習得したからではなからうか。他の組でも、知識の反映と見られる例が調査中に多く聞けたのである。知識であれば、それをアクセントに反映させることができる人が半数以上あるのは、薄れているとは言っても、アクセント観念がやはりあることを示していると思う。

さて、「紙と～髪と」の「区別する」を、「泡と～粟と」を除いた他の3組と比較すると、大体は少ないようである（釧路を除く）。すなわち、東京方言における「区別なし」を多少反映しているのかとも考えられる。

なお、参考のために1モーラ名詞でも区別するかしないかの観点からまとめると、次のようである。

とりあげた調査語は「柄と（Ⅰ類）～絵と（Ⅲ類）」、「日と（Ⅱ類）～火と（Ⅲ類）」である。

	柄と～絵と			日と～火と		
	区別する	△	区別なし	区別する	△	区別なし
札幌	63%	10	27	43	19	38
帯広	46	0	54	29	12	59
釧路	77	8	15	43	10	47

各地とも「日と～火と」の方が、「区別する」が少ないのが共通しているがこれはどういうわけであろうか。釧路でいちばん区別しており、帯広で区別しない。札幌はこの中間にある。この傾向は、前に述べたものでも大体あらわれていたところである。また、「区別する」率にも、1モーラ名詞と2モーラ名詞とで、そう大きな差はないようである。すなわち、2モーラ以下の名詞が不安定である、という、3世代の調査（第1次調査）で得た結論は、大体ここでもあてはまらと思う。

8 今後の調査

以上述べたところによって、世代の差、および都市部における第3世の言語の状態については明らかになったと思う。また、北海道方言も決して単一なものではなくて、地方の差が相当考えられる、という点も明らかとなった。

なお、同世代であっても、年齢の差によって、言語の実態、あるいは共通語化の程度が違うのではないと考えられる。この点について今後さらに調査する必要がある。

また、集団移住地で、今もなお、そのときの子孫が大多数を占めるような地域社会における第3世は、他の今混住地となっている地域社会の第3世とどのように違うか。どんな点に故地の言語を残しているか、なども、ある程度の数について調査することが必要である。

(野元)

言語能力の発達に関する調査研究

A 調査研究の経過と本年度の実施のあらまし

この調査研究は昭和28年度にはじめた。今年度は6年目、もう1年で終る予定である。昭和28年度に入学した児童（甲学級とする）と、昭和29年度に入学した児童（乙学級とする）のひとりひとりについて、小学校6年間に、聞く・話す・読む・書くの言語能力がどのように伸びていくか。その発達のしかたや発達を規定する要因はなにかについて調べている。同一人を6年間追跡的に調べていることが、この研究調査の特色である。このために、東京に実験学校1校、地方の農村地帯に実験学校に準ずる学校1校、各地に協力学校9校を依頼し、その11校の甲学級（約50名）、乙学級（約50名）のひとりひとりについて、テストの調査、観察などをおこなっている。

今年度の実験学校、協力学校（いずれも最初からの継続校）

実験学校	東京都新宿区四谷第六小学校
実験学校に準ずる学校	神奈川県中郡比々多小学校
協力学校	東京都杉並区方南小学校
	東京都中野区新井小学校（乙学級だけ）
	神奈川県逗子市久木小学校
	静岡県静岡市中田小学校
	長野県上水内郡豊野西小学校
	長野県埴科郡松代小学校
	栃木県小山市小山第二小学校
	滋賀県大津市中央小学校
	兵庫県氷上郡北小学校

実験学校は、所員が、ひとりひとりの子どもと直接親しくなり、テスト・観察・調査は、主として所員の手でおこなう学校である。協力学校は、この調査の一部あるいは大部分を、その学校の職員の手でおこなう学校である。

本年度担当所員は、興水実、芦沢節、高橋太郎、村石昭三、研究補助員は、根本今朝男、川又瑠璃子であった。

つぎに今年度のおもなテストや調査の項をあげる。

1. 各学期末のテスト

第1学期

- 1) 漢字読字(100字 52語)
- 2) 読字付帯語い(20語)
- 3) 漢字書字(36字 20語)
- 4) 文章読解(論文, 解説文, 会話文, 物語文, 詩)
- 5) 読速(黙読だけ)
- 6) 語い(A, B)
- 7) 文法(A, B, C)
- 8) 聞く・話す
- 9) 作文A(生活文「ともだち」)
- 10) 作文B(会議報告文, 学習記録文)

第2学期

- 1) 漢字読字(100字 43語)
- 2) 漢字書字(50字 29語)
- 3) 文章読解(事実と意見とを区別する能力, 要約・抜粋の能力, 段落・主題の能力)
- 4) 読速(黙読だけ)
- 5) 語い(A, B)
- 6) 文法(A, B, C, D)
- 7) 聞く・話す
- 8) 作文A(生活文「わたくしのうち」)
- 9) 作文B(感想・意見の文「私の尊敬する人」「給食について」)

第3学期

- 1) 漢字読字(教育漢字 881字)
- 2) 漢字書字(教育漢字 881字)
- 3) 文章読解(詩, 随筆, 児童生活文, 解説文, 説明文, 伝記)
- 4) 読速(黙読だけ)
- 5) 語い(A, B)
- 6) 文法(A, B, C)
- 7) 聞く・話す
- 8) 作文A(生活文「せんせい」)
- 9) 作文B(卒業時の感想・意見)

2. 特別に実施した調査とテスト

- 1) 読書ノートの配布・回収(夏休み中)
- 2) 絵画欲求不満テスト

- 3) 読書調査（児童および家庭）
- 4) 標準読書力診断テスト（阪本式）
- 5) 小学校6年間の子どもの生活の変化に関する調査（実験学校だけ）
- 6) 文法能力に関する特別調査（実験学校だけ）
- 7) オフサルモ・グラフによる調査（実験学校だけ）
- 8) 話し方（説明・伝達能力）の検査（実験学校だけ）

本年度の調査研究の成果のうち、読み書き能力に関する部分は、既刊の研究
所報告『入門期の言語能力』『低学年の読み書き能力』『中学年の読み書き能
力』の続編として、『高学年の読み書き能力』を出すので、そのほうにおさめ
る。

ここには、聞く話すのほうについての成果のうち、すこしまとまったものだ
けを掲げる。 （興水）

B 高学年の聞く話す能力の調査

このことについて、つぎの4項目の研究調査を行なった。

1. **聞きとりテスト** 高学年の児童に、22の問題（問題の構成を参照）のテストをし
た。このうち、問題15までは、中学年までにすでに実施したことがあり、同じ問題に
よる学年発達の傾向をみようとしたもの。

それ以外の問題は、とくに高学年のために実施したものであり、ラジオ放送の再生
による聞きとり能力の問題をくわえた。

2. **話しかたテスト** 15の問題（問題の構成を参照）のテストをした。このうち、問
題11までは、中学年までにすでに実施したことがあり、同じ問題による学年発達の傾
向をみようとしたもの。

それ以外の問題は、とくに高学年のために実施したものであり、話しあい能力の問
題をくわえた。

以上は、学期末に定期的に行なった聞く話す能力のテストであるが、その他調査し
たことはつぎの2つである。

3. **聞く話すことの他人評価自己評価** ふだんの学校生活における児童の聞く話す実
態を他人評価・自己評価の調査形式で、昭和32年11月に行なった。

4. **子どもの生活の実態調査** 小学校6年間における子どもの生活の変化に関する実
態を、家族構成、家庭の文化経済環境、子どもの身体、社会性の発達などについて、
父兄に記入を依頼してしらべた。昭和33年10月実施。

1 問題の構成

1. 聞きとりテストの問題

問題番号と名称	能力	調査時期					
		5—1	5—2	5—3	6—1	6—2	6—3
1. ディズニー映画	要点			○△			
2. ラジオ・ニュース	文脈			○△			
3. 子どもの新聞	詳細			○△			
4. 白鳥	要点			○			
5. 追想	要点			○			
6. 電話の誘い	意図		○				
7. 帽子忘れ	詳細		○				
8. 猫と魚	詳細		○				
9. 雨降りの登校	文脈	△			○		
10. 速達	詳細	△			○		
11. 天気予報	詳細	△			○		
12. さけとつばめ	話題・要点・文脈			○			
13. 動物園	詳細	○△			○		
14. 事故の解説	意図・要点・詳細			○△			○
15. おまわりさん	意図	○△			○		
16. みにくい心	要点・文脈	△			○		
17. 飼い犬	意図	△			○		
18. 長命記録	要点・詳細	△			○		
19. 防火週間	要点・詳細			△			○
20. 科学者	意図・要点・文脈			△			○
21. ニュース解説	意図・詳細・知識			△			○
22. 子どもニュース	判断・詳細			△			○

(注) 調査時期は学年学期をさす。たとえば、5—1は5年1学期をさす。テスト期日はいずれの学期とも学期末である。△○印はその学期で調査したことを示し、△印は昭和29年度入学児童、○印は昭和28年度入学児童をさす。なお、昭和29年度入学児童の第6学年の調査は来年度に研究することになっているので、本報告には含まれていない。(この注の事項は話しかたテストの問題の項にも適用する。)

2. 聞きとりテストの実施要領

- 1) 全部の問題が集団で、いっせいにテストする形式になっている。
- 2) 教師は答案用紙(設問と選択肢だけを用意したもの)を裏返しにさせておいて、問題をゆっくり読んで聞かせる。ただし、問題20, 21, 22は録音

器を使用し、再生して聞かせた。

- 3) 答案用紙を見させ、教師が設問と選択肢を読んで聞かせ、正しいと思うものに○をつけさせた。(ただし、問題によっては自由記入で回答させたり、同一問題による選択肢法と自由記入法との違いをみるために併用したものもある。)
- 4) 答案用紙を裏返しにして、つぎの問題に進んだ。
- 5) 伝えるべき話はすべて一回だけ聞かせ、くりかえさなかった。

3. 話しかたテストの問題

問題番号と名称	能力	調査時期					
		5—1	5—2	5—3	6—1	6—2	6—3
1 ディズニー映画	相手の立場にたって伝える			△○			
2 出張スキー	場にあった話題をとりあげる			△○			
3 追想	聞いた話の主題を伝える			○			
4 電話の誘い	相手の立場にたって伝える		○				
5 お見舞い	話しかた作法			○			
6 とっている新聞	話しかた作法			○			
7 紹介	話しかた作法						
8 応対	話しかた作法		○				
9 道順	相手の立場にたって話す	△○			○		
10 買い物	場にあった話しかた		○				
11 児童会	場にあった話題をとりあげる	△○			○		
12 たたされたママ	経験発表		○				
13 お正月	話しあい					○	
14 給食	話しあい					○	
15 卒業式	話しあい						○

4. 話しかたテストの実施要領

- 1) 集団テストの形式をとったもの、

問題 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11

小集団テストの形式をとったもの、

問題13. 14. 15

個別テストの形式をとったもの、

問題 4. 12
- 2) 聞きとりテスト問題をしたあと、その発展としてつくられたもの、

問題 1. 2. 3. 4. 11. 12

あらかじめ場面設定をさせて、そこでどう話すかをたずねたもの、

問題 5. 6. 7. 8. 9. 10

あるテーマを設定し、それについて話しあいさせたもの、

問題13. 14. 15

3) ペーパーテストの形式で、選択肢法をとったもの、

問題 1. 2. 3. 5. 6. 7. 8. 10. 11

同じくペーパーテストの形式であるが、自由記入法をとったもの、

問題 9

子どもの発言をそのまま録音器に記録したもの、

問題 4. 12. 13. 14. 15

Ⅱ とくに高学年に行なった聞きとりテスト（問題16—22）とその結果

問題16 みにくい心

家に用事があって早く帰らなければならなかった佐藤さんは、掃除が少々遅れてしまったので、掃除が終るや否や、かばんを手にして帰りかけた。そしてかさ立てから、こうもりを勢いよく引きぬいたが、その拍子にほかのもいっしょに引かかったので、そのこうもりは廊下にほうり出されてしまった。だが佐藤さんはあまりにもいらいらしていたので、それにも気づかずに廊下を荒々しくかけていってしまった。それをみて、私はこうもりをもとの所へ置いておくという事にも気がついたが、急に面倒だという気持ちが起り、別の仕事にとりかかろうとしたが、その時、それが私のこうもりである事に気がついた。私は思わず、それをかさ立てにもどした。そうしてしまっから、私は、こんな所に現われてしまった“みにくい心”にびっくりし、顔の赤くなるのを感じた。

ちょっと離れた所で、大山さんが、見ていた。こんな私の心の動きを知らないはずの大山さんまでが、それをあざ笑っているようにみえた。

- (1) “みにくい心”だといったのは、どういうことですか (5—1)** (6—1)
- | | |
|------------------------------------|-------|
| ①* 自分のものだけを大事にする心……………50.0%*** | 62.5% |
| 2 他人のこうもりをほうりだしてってしまう心……………8.0% | 0% |
| 3 あざ笑いながら、人のあやまちをみている心……………10.0% | 4.0% |
| 4 めんどくがって、他人のあやまちを注意しない心……………32.0% | 33.3% |
- (2) 大山さんがあざ笑っているように見たのはなにですか
- | | |
|--------------------------------|------|
| 1 佐藤さんがだれよりも早く家に帰ったこと……………4.0% | 4.2% |
|--------------------------------|------|

- | | | | |
|---|--|-------|-------|
| 2 | かさがろうかにほうり出されたこと…………… | 12.0% | 8.3% |
| 3 | 私が佐藤さんに注意しなかったこと…………… | 4.0% | 6.2% |
| ④ | ほうり出されたのが、自分のかさだったので、思わ
ずかさ立てにもどした…………… | 80.0% | 81.2% |

(注) * 正答を示す。以下、正答の選択肢は、番号を○印でかこんで示す。

** 調査をした学年学期を示す。

*** 各項目における反応率を示す。とくに昭和29年度入学児童の反応率はイタリック数字で示す。以下、問題の結果の表示はこの方式に準じてある。

この問題は小学生新聞にのった児童の作文をとりあげ、聞きとりテスト用に適当に修正したものである。

(1)の設問は話の文脈から、“みにくい心”ということばがさす事実をたずねたものである。正答は1 自分のものだけを大事にする心、である。4も正答といえなくはないけれども、1にくらべればやはり正しさの度合いは低いとみなければならない。2に反応した児童が5年生では8%あるが、これは話の文脈の完全な誤解によるとみるべきであろう。

(2)の設問は、大山さんまでが、それをあざ笑っているようにみえた、のそれはなにをさすか、の文脈の理解の問題ととれるが、そのさすことがらはこの話の要点でもある。この設問の正答は4であって、5年生、6年生とも80%の高い反応率を示している。

設問(1)が設問(2)にくらべて、正答率が低いのは、準正答といったものが選択肢にあったことにもよろうし、また行為にたいする価値の高低を判断することが小学生には困難なためでもあろう。

問題17 飼い犬

こんど飼い犬にたいする東京都の規則ができました。これは皆さんも知っているように、ちかごろ、子どもにかみついて大けがをさせたり、幼児をかみ殺したりする犬がふえてきたからです。わたしの目にふれたこの規則の主な点は次のとおりです。

1. 訓練や運動などの時以外はつないでおくこと。
2. 犬小屋のまわりはつねに清潔にし、公の場所や他人の土地を荒させたり、その中でできないことをさせたりしてはいけない。
3. 犬を飼っていることを示す表札を人の見やすい所にだすこと、
4. 飼い犬を捨てないこと。
5. 犬が人をかんだら、飼い主は保健所にとどけ、その犬に2週間以上口輪

をかけなければいけない。

わたしのように犬のきらいな人間にはまことにありがたい規則であります。われわれがなぜ犬にかまれることをそんなに恐れるかと申しますと、犬には狂犬病という恐ろしい病気があり、この病気にかかった犬ほど人にかみつやすく、いったん狂犬にかまれたら、世にも恐ろしい死にかたをしなければならぬからです。もちろん犬が狂犬病にかからないためのよい注射ができています。しかし飼い主のなかにはこの注射を怠る人がいるので、われわれは決してゆだんができませんのであります。犬にかまれたらたいへんだと思ったほうがよいのであります。

もちろん犬はむやみに人をかむものではありません。かわいくておとなしい犬がたくさんいます。かむくせのある犬をとりしめるために、そんなおとなしい犬までクサリにつないでおくのはかわいそうだと思うかたがたくさんいると思います。また犬を飼っているという表札を出すなんてこっけいだと思う人もあるかもしれません。しかし犬にかまれると、どれだけ恐ろしい結果になるかということを思いますと、このような規則のつくられたのは当然でありましよう。

(1) 規則はどういう目的でつくられたのですか。	(5—1)	(6—1)
① かい主の義務をつよくする……………	4.0%	8.2%
2 犬をもっと大事にする……………	4.0%	4.2%
3 狂犬病の予防をする……………	84.0%	83.3%
4 飼い犬と野犬との区別をつける……………	8.0%	4.2%
(2) このお話を書いた人はどういう人だと思いますか。		
1 自分の犬をだいに飼っている人……………	12.0%	8.3%
2 規則をつくることに骨おった人……………	24.0%	20.8%
3 犬にかまれた人……………	22.0%	18.7%
④ いっぱんの人……………	42.0%	52.1%

この問題は中学生新聞にのった解説文をとりあげ、聞きとりテストむきに適当に修正したものである。

(1)の設問は規則をつくったものの意図をつかませる問題であるが、正答である 1 かい主の義務をつよくするに反応したものは、5, 6年生とも10%にもみえない結果になっている。これは問題としてむずかしすぎたのかもしれないが、あるいは義務といったことばの理解ができなかったものかもしれない。(この点については、来年度のテストで、義務ということばを他のことばにかえて調べることにした。) 4 飼い犬と野犬との区別をつけるに反応率が非常に高い

が、これは書き手の判断であって、規則をつくったものの意図ではない。事実
にたいする児童の理解が書き手の判断にさまたげられたとみることができる。

(2)の設問は解説文の作者はどんな人か、判断させる問題で、正答は4 いっぱ
んの人である。結果からおしてこの種の問題は高学年でもむずかしい。

問題18 長命記録

世界でいちばん長生きした人のほどこ国の人が、ということはいへん興
味があります。それについて、厚生省の立川先生と沼田先生に、世界と日本の
長命記録について聞いてみました。

立川先生 いいつたえによると、ソ連のある坊さんは160才、デンマークの女
の人が185才で死んでいる。イギリスのトーマスという人は16世紀に、女王に
招かれ、ごちそうをたべすぎて152才で死んでしまったと伝えられています。
しかしそれらは戸籍がいかげんな時で、また、昔のことほど、大きく見つも
って伝えられるから信用できない。

沼田先生 戦前では昭和18年の調査で、125才で死んだ女の人の記録がある。
戦後昭和25年の国勢調査で熊本県で116才の男の生存者がわかったが、この人
は翌年になくなった。しかし、日本の戸籍法は明治5年にできたのであるから、
それ以前に生まれた人の生年月日はよほどたしかな証拠がなければ信用できな
い。

(1) 世界でいちばん長生きしたといわれているのは、どこ

国の人ですか。	(5—1)	(6—1)
1 日 本	4.0%	0%
2 イギリス	12.0%	12.5%
③ デンマーク	70.0%	70.8%
4 ソ 連	14.0%	16.7%

(2) 今までの長命記録の年令はどうして信用できないのですか。

① 正確な年令がわかる戸籍ができていなかった	70.0%	79.2%
2 自分で何才だといったことを少し大きく見つもって いた	10.4%	10.4%
3 昔のいいつたえをそのまま信じていた	10.0%	10.4%
4 死んだ年令を正しくおさえなかった	10.0%	0%

この問題は中学生新聞にのった報道記事文をとりあげ、適当に修正したもの
である。

(1)の設問は、書かれた記事に即して詳細な事実を正確に聞きとる問題である。

正答は3 デンマークである。この種の問題にたいする正答率は70％がだいたいの極限のように考えられる。(読解テストの場合には100％の正答率も期待できるけれども、聞きとりテストの場合には、それを期待することはできない。)

(2)の設問は、記事にでているふたりの談話から、共通的な結論として導きだされる、長命記録の年令はどうして信用できないかをたずねたものである。正答は1 正確な年令がわかる戸籍ができていなかったである。他の選択肢、2, 3, 4はいずれも、あるひとりの談話の要点であったり、談話の部分的な理解にとどまった児童が反応する項目で、正答とはいえない。ある話題にたいするいくつかの意見を聞いて、それから共通したひとつの結論をひきだす力をつける必要がある。

問題19 防火週間

これは、ある朝、先生が話してくださったことです。でははじめます。みなさんは、防火週間ということを知っているでしょう。きょうは、その防火週間の第一日です。けさ学校の掲示板に「火の用心」というポスターがはったのを見てください。みなさんの家にも、消防のおじさんたちが「火の用心」と書いたビラを配って行くことになっています。

みなさんは建物が火事になって燃えているのを見たこともあるでしょう。ついこの間も、長野県の学校が火事になって、生徒たちの勉強するところがなくなってこまっているということが、新聞にでていましたね。その写真を見た人もあるでしょう。日本の建物は木と紙で作ってあるので、火事になりやすいのです。

寒くなると、みなさんのうちでは、火鉢を出したり、こたつを作ったりするでしょう。学校でもストーブをたきますね。火を使うことが多くなります。防火週間にあって、みんなで、火に気をつけて火事をおこさないように5、6年生で、「火の用心」のポスターを作ることになりました。あしたの3時間目がちょうど図画の時間ですから、どんなポスターを作ったらよいか考えてきてください。ですから、図画の用意を忘れないようにしましょう。できあがったらみんなの書いたポスターを町にはって、町中の人たちが「火の用心」をするように、わたくしたちも、消防のおじさんたちに力を合わせましょう。話はこれで終わります。

- (1) いま聞いた話で、5、6年生のみなさんがすぐにしなけたばならないことは何ですか。つぎの4つのうちからひとつだけ選んで、その上に○をつけないさい。

1	消防のおじさんと「火の用心」のビラをくばってあ るること……………	(5—3) 16.0%	(6—3) 18.2%
2	新聞に火事の写真が出ていたからみること……………	0%	2.3%
③	図画の時間にどんなポスターを書くか、考えておく こと……………	84.0%	79.5%
4	寒くなったから火ばちを出したり、こたつを作った りすること……………	0%	0%
②	いまの話を聞いてから、みんなで話しあっているうちに、つぎのような話がでま した。なかには、聞きちがいもあるようです。先生の話で、たしかにそう言ったも のの上には○、話とはちがうものの上には△をつけなさい。		
①	日本の家は木と紙で作ってあるので火事になりやす い……………	78.0%	93.2%
△	防火週間で学校じゅうの者が、火の用心のポスター を書く……………	66.0%	93.2%
△	学校の掲示板にみんなの書いた火の用心のポスター をはる……………	72.0%	88.6%
④	長野県の学校が火事で焼けてしまって、生徒がこま ったことがある……………	78.0%	90.9%

この問題は昭和28年度学力水準調査のときだされた聞きとりテストの問題で
あって、本研究では、全国平均の成績と比較するために同一条件で行なった。
ただし、学力水準調査では、第6学年の2学期末に行なったが、本研究では5
年および6年の3学期末に行なったから、その点の違いはある。

参考までに、学力水準調査の全国平均では反応率はつぎのようにになっている。

設問1 1. 24% 2. 3% ③ 64% 4. 4% 無 5%

設問2 ① 86% △ 75% △ 79% ④ 83%

全体的には、本研究の成績の方が学力水準調査の全国平均よりも高くでてい
るが、各々にたいする反応傾向は共通したものである。

ただし、本研究では、(1)の設問にたいする正答率が5年生より6年生の方が
さがっている。これは、この種の問題で話の要点を聞きとる力が6年生で下降
する、と解釈すべきでなく、学級差の問題として扱うことが適当な気がする。

問題20 科学者 ㊤は聞き手 ㊦は話し手

㊤ 現在のお仕事にいたるまでの、きっかけといいますが、どういうことから
こういう仕事にお入りになったのでございますか。

⑩ それはですね、ずいぶん前の話なんですけど、私が大学の2年の時だったと思うんですけど、私の住んでました隣の家から、火事が起りましたですね、そして私の家もほとんど丸焼けになったことがあるんです。そんなことで、火災ということには学生の頃から関心があったんですけどね。ちょうど大学3年の時には、寺田寅彦先生がお元気で講義なんかしておられたところでしてね、そして私がいたのは物理学科なんですけれども、地震学科の学生を相手にしまして、火災論という面白い特別講義をしておられた。それで特別に私どもそれを聞くようにさせてもらいまして、寺田先生から火災論という講義もうかがったこともあるんです。それから大学卒業するとすぐ気象台に入ったわけなんですけど、気象台の中で、気象と災害のことも、問題になるわけですからその中で、火災と気象という関係につきましてね、いろいろ調べてみたいと思うことをやってきたわけです。

⑪ ああ、そうですか。そうすると第1に、家が焼けたうらみをはらそうというわけ……。

⑩ そう、まあ、自分で、火災にあえばですね、いろいろなものをなくなしますしね、非常に不便な思いをしたわけですからね。

⑪ それでもう、立つあたわさるような方もおうおうにしておりますしね、まあ、その結果、いろいろ助かってる例が多いと思うんです。

⑩ いえ、まあ、どれ位助かっておりますか、問題だと思います。

⑪ その中で、われわれの問題と密接なのはこれからの季節になりますと、よく、ラジオ、テレビで火災警報を出されたいということで、火を気をつける、ということになるんですが、あの火災警報がだされると、われわれとしては火を気をつけろ、ですけど、他のなんか施設とか、消防の方ですか、なんか、そういう態勢ができるんですか。

⑩ 消防の方ではそういうことがあるんだと思います。普段ならば、非番で自分の家に帰っていいという人が、特別に消防署につめて、待機しているということもありましょうね。それから消防ポンプがいつでも、出動できるように待ちかまえている、ということもありましょうし、その他にまだ、見廻りをしてたき火なんかしているのをとめるとかいうこともあるんだと思います。

⑪ ああ、おまわりさんなんかもその気になるんですね。

⑩ これは法律でちゃんときまってると思います。

⑪ いえ、あの、火災警報がでてるということを知らずに、かぜが強い時、昔歩いてましたら、おまわりさんから、タバコの火を気をつけて下さい、とちょっと言われましたが……。

⑩ えー、それはね、あのー、火災警報のでてる、でていないにかかわらず、タバコは外ですいながら歩くというのはよくないことですな。

- ㊦ あふないことですね。これから気をつけます。あの火災警報をだす条件ですがね、どういう条件でだすわけですか。
- ㊧ 火災警報の基準というものがきまってましてね、これはだいたい湿度と、これは今、実効湿度というんです。実効湿度というのはいろいろもえるものの含水量に相当するものです。含水量というのは普段測っていませんから、そのかわり実効湿度ということで代用させるのですね。それから風ですね、風が強いときは危ないわけですから、要するに湿度と風ということですね。
- ㊨ 今の実効湿度と、ただの湿度と常識的にいうと、どちらがいますか。
- ㊩ 実効湿度といいますのはね、含水量を代表させたいわけなんですよ。それに、含水量はきょうだけの湿度だけではきまらないわけですね。いろんなものは厚さもあり、あるいは太さもありますからね。その乾燥した日が長く続いていれば、そういうもののシンまで乾燥してるということになります。一日や二日だけでは、そういうものの表面だけがかわいていてそのシンの方はしめっているということがあるんです。だから実効湿度というのは過去の影響まで入れた湿度ということですかね。その影響のしかたは日数の たつほど、その影響は小さくなるような計算をするんですけど、これは簡単な計算ででるわけなんです。
- ㊪ あの一、湿度が低くなると、つまり冬になると、火災が多いということは火を使うせいなんでしょう。か。だいたいどの位の寒さになると火災が多くなるんでしょうね。
- ㊫ 東京なんかですとね、冬は11月位からですね、それから4月くらいで割合に少なくなるということですが、これは統計的に、扱いまして、80%の湿度の日ならば、それに対して平均12件ぐらいの火災がおこっているかという、そういう数をくらべますと、4月と11月を境にして寒い季節には、寒い季節とあったかい季節とずいぶんちがうんです。1倍半から2倍位ちがうんです。同じ湿度に対してですね。だからそれが火のもとになるいろんなものを家の中でも使いますしね。それから他の場所でも使うでしょうがそれが影響してるんだと思います。
- ㊬ なるほど、同じ条件にしてみますと、火を使うということは考えないとなると、温度の低い時より高い方が燃えやすい気がするんですが、これはどうなんでしょう。
- ㊭ 要するに、物がもえるというのは、どうかというと、引火点ですね、温度が引火点まであがらなければ、もえはじまらないわけですからね。引火点までもっていくのに、その時の温度が高ければ簡単にそこまでいくし、低ければ、そのもっていくのに時間がかかってもえにくいということなんでしょうけど、私はしかしこれは、そういうことは本当なんだけれども、自然におこっている気象状態ではね、湿度の影響というものはそうたいしたことはな

い、と思うんです。これはね、引火点というのが250°とか、300°近い温度ですからね。そこへ0°からそこへもっていくにしても、あるいは30°からもっていくにしても、その方はね、一割位のちがいですから、その方はそんなにちがいはないけれども、非常に影響するのは湿度の問題ですね。湿度とか含水量とかね。

㊦ 日本の場合は寒くなって火を使う頃がかんそうする季節でとくに表日本ですね。風が多くなるということがあるんでしょうか、湿度が逆の状態になっていることですね。そういうところでも相当多くなるでしょうか。

㊧ 気候状態がちがえばね、あの一、火災の多い季節はやっぱり、少し変わってきます。今の冬に多いというのは太平洋側の各地ですね。日本海側の方へいくと春が多い季節ですね。冬はかえて少ないです。

(1) この話の中で、いろいろ質問をしている人は、この放送を聞く一般の人にどうしてもらおうと思って、質問をしているのですか。

(5—3) (6—3)

① 火災と気象との関係がわかって、火災についてよく注意してもらう……………	44.0%	56.8%
2 火災警報がでたら、どうすればよいかわかって、火災をださないようにしてもらう……………	2.0%	25.0%
3 この人がいままでどんな研究をしてきたかがわかってもらう……………	8.0%	4.5%
4 冬になると、なぜ火事がおきるのかがわかって、火の用心をしてもらう……………	22.0%	13.6%

(2) この話でももに取りあげていることを3つだけ選びましょう。

1 火災とタバコ……………	46.0%	31.8%
2 消防署の組織……………	16.0%	27.3%
3 火災の不幸……………	42.0%	25.0%
④ この仕事に入った動機……………	48.0%	29.5%
⑤ 火災の原因……………	76.0%	56.8%
6 寒い季節とあたたかい季節……………	26.0%	43.2%
7 太平洋側と大西洋側……………	4.0%	9.1%
⑧ 火災警報……………	58.0%	72.7%

(3) 「じっこうしつど」とはどういうことでしょうか。

1 火災がおきたときのしつど……………	22.0%	20.5%
2 きょう一日の平均しつど……………	12.0%	13.6%
3 風と温度を含めたしつど……………	34.0%	20.5%
④ きょうまでのしつどを含めたじっさいのしつど……………	30.0%	45.5%

(4) 話をしてくださった人と質問をしている人は、それぞれ「かんそう」と「おんど」とについて、どのように考えていますか。

- | | | |
|--|-------|-------|
| 1 ふたりとも、「かんそう」は火事のおきるいちばんの条件であると考えている…………… | 36.0% | 29.5% |
| ② 話をしてくださった人は「かんそう」が火事のおきるいちばんの条件だと考えているが、質問をしている人は「おんど」がいちばんの条件だと考えていた…………… | 30.0% | 43.2% |
| 3 ふたりとも、「おんど」は火事のおきるいちばんの条件であると考えている…………… | 20.0% | 13.6% |
| 4 話をしてくださった人は「おんど」が火事のおきるいちばんの条件であると考えているが、質問をしている人は「かんそう」がいちばんの条件だと考えていた…………… | 14.0% | 13.6% |
| (5) 質問をしている人が、話の中で、「焼けたうらみをはらそうとして」といっていますが、話をしてくださった人の、どういう話をさして言ったのでしょうか。 | | |
| ① 自分の家が焼けたことから、火災と気象との関係を研究するようになった…………… | 26.0% | 40.9% |
| 2 地震がおきると、よく火災がおこることから、火災と気象との関係を研究するようになった…………… | 14.0% | 13.6% |
| 3 隣の家から火がでて、自分の家も焼けたことから、寺田先生の火災論という講義を聞くようになった…………… | 28.0% | 27.3% |
| 4 日本には火災で家をなくす人が非常に多いから、その人たちを助けようとして気象台に入って研究するようになった…………… | 32.0% | 18.2% |

この問題は昭和33年12月2日、NHK第Ⅱ放送で放送された「科学者をたずねて」の一部である。録音器に記録したものを再生して聞かせたものそのままのもの。

設問(1)はH氏にいろいろ質問をしているK氏の質問の意図をたずねた問題であるが、この番組の放送意図の問題でもある。6年の最終で、正答1. 火災と気象との関係がわかって、火災についてよく注意してもらう。が約60%という反応は十分な成績とはいえない。選択肢2, 3, 4はいずれもその意図をささえる部分である。

設問(2)はこの話にてた要点的な話題を選ばせる問題である。正答は選択肢4 この仕事に入った動機, 5. 火災の原因, 8. 火災警報である。ここにとりあげた8つの話題のうち、7 太平洋側と大西洋側をのぞいては、どれも話の中に

でているし、話題の続いた長さからいえば、むしろ正答より誤答としてある話題の方が長くなっている。話題の具体性の点でも誤答としてだした話題の方がより具体的である。それだけに、質問者の意図なり、文章の文脈全体をよくふんまえていないと誤まることになる。

設問(3)は実効湿度ということばの文脈上の理解をたずねた問題である。正答は4きょうまでのしつどを含めたじっさいのしつどである。正答率は6年生でも50%にみえない。

設問(4)は質問をするK氏とそれに答えるH氏との意見にたいする、適切な判断をもった聞きとりをしているか、どうかを調べた問題である。正答は2である。問題18 長命記録の結果とあわせて、ふたつの意見を判断しながら聞く能力は、他の能力にくらべて、より高度であると思われる。

設問(5)は設問(3)と同じく、文脈上の理解をたずねた問題であり、正答は1である。

以上、各設問から全体的な結論をだすならば、話が長くなると、文脈の理解が困難になるということ、しかし意図の理解には関係しないことである。

問題21 ニュース解説（助け合い運動）

きのう1日からNHK歳末助け合い運動が始められております。去年のこの運動には5500万円の義捐金とそれから7万点の見舞品がよせられまして、身寄りのない年寄りや身体の不自由な人たちへの暖かい贈り物となりました。またこの12月は、全国社会福祉協議会や厚生省などの共同主催の社会福祉月間が1か月にわたって行なわれます。年の暮にあたっての国民の助け合いの運動もありますが、いろいろな社会福祉の仕事ぶりを国民に知ってもらうための運動でもあります。しかしこういったいろいろな行事が大きな意味をもっているということは、日本の社会福祉の制度が、まだまだ深く根をおろしていないと、まあ、まことに不十分であるということにもなりましょう。

(1) これはラジオの放送ですが、こういう放送をなんというのでしょうか。

	(5—3)	(6—3)
1 ニュース……………	6.0%	15.9%
② ニュースの解説……………	12.0%	31.8%
3 子どもむけニュース……………	8.0%	0%
4 都民に知らせる広報……………	74.0%	50.0%

(2) 5500万円の義捐金と7万点の見舞品はどのぎょうじによって集められましたか。

① きょねんのNHK助け合い運動	56.0%	38.6%
2 こしの全国社会福祉協議会, 厚生省の社会福祉月間	4.0%	18.2%
3 こしのNHKの助け合い運動	38.0%	31.8%
4 きょねんの全国社会福祉協議会, 厚生省の社会福祉月間	2.0%	11.4%

(3) この放送は何月何日の放送ですか。

1 12月1日	24.0%	36.4%
2 2月	8.0%	25.0%
3 年のくれ	40.0%	9.1%
④ 12月2日	28.0%	29.5%

(4) この人は国民の助け合い運動について、どのような考えをもっていますか。

1 各団体でもっと助け合い運動をしよう	8.0%	25.0%
2 こしの助け合い運動は、きょねんよりさかんになるだろう	18.0%	2.3%
③ 国民のひとりひとりが安心してくらせる制度を国がつくらねばならない	64.0%	65.9%
4 NHKの助け合い運動は不十分である	10.0%	6.8%

この問題は、昭和33年12月2日、NHKで放送されたニュース解説の一部である。

設問(1)は放送番組の知識といったものをたずねた問題であり、正答は2 ニュースの解説である。正答率は5年生で約10%, 6年生でも30%程度にすぎない。いちばん高い反応率は4 都民に知らせる広報に集まっている。これは児童が都内在住者のためのせいもあろうが、ここに反応率が集まったのは、(1)広報は児童が毎朝聞いている番組であり、(2)しかも、1. 3の選択肢にくらべて、広報には解説性が含まれているためであろう。

設問(2)および(3)は話にそくして、詳細なことまで正確に聞く力を調べたものであるが、(3)にはやや要点的な条件も含まれている。

設問(4)は解説者の意図をたずねた問題である。正答は選択肢3で、学年の差はないが、選択肢2および4の反応率が6年生で減少しているところに、発達のあとがみられる。

問題22 子どもニュース

(1) 国のお客さまとして、今、日本を訪問しているフィリピンのガルシア大統領夫妻は今朝、宮内庁からお迎えに行った六頭立ての馬車に乗って、皇居をおたずねしました。そして、天皇、皇后両陛下や皇太子殿下それに三笠宮殿下にごあいさつしました。それから大統領夫妻は午後2時すぎに国会をたずねて、参議院の本会議場で開かれた歓迎の式に出席しました。参議院の本会議場には衆議院と参議院の議員さんたちが多勢集まって、ガルシア大統領をさかんな拍手で迎えました。ガルシア大統領は日本とフィリピンの国旗を飾った正面の席につき、星島衆議院議長の歓迎のあいさつを受けてから、つぎのように演説しました。フィリピンはこの前の戦争で、日本の軍隊にせめこまれ、ひどい目にあいしましたが、日本はその償いをする事を約束しました。また日本は2度と戦争をしないことを誓いました。このためフィリピンの国民はこれからは日本と仲よくすることがいちばんよいことだと考えています。フィリピンのガルシア大統領はこう演説しました。

国会では外国のお客さまの歓迎式をしたのはこれがはじめてです。

この問題は、NHK、子どもニュースの一部を録音器で再生して聞かせるものである。あらかじめ設問を伝えておき、聞かせた後、自由記入形式で答えさせた。その結果を、学年別、性別で整理してみるとつぎのようになった。

	(5—2)			(6—2)		
	男	女	計	男	女	計
(1) だれが日本に来ましたか。						
① ガルシア大統領	89%	90%	90%	100%	96%	98%
② ガルシア大統領の夫人	4%	14%	8%	27%	31%	29%
(2) そして、どこへ行きましたか。						
① 皇居	54%	33%	45%	55%	58%	56%
② 国会	54%	81%	65%	73%	65%	69%
(3) どんな演説をしましたか。						
① フィリピンが日本の軍隊にせめこまれたこと	11%	0%	6%	23%	12%	17%
② 日本がその償いをする約束をしたこと	4%	0%	2%	9%	0%	4%
③ 日本が二度と戦争をしないことを誓ったこと	46%	62%	53%	27%	27%	27%
④ フィリピンは日本と仲よくすること	61%	43%	53%	68%	88%	79%

設問(1)(2)(3)とも、子どもニュースの詳細なことがらの理解をたずねた問題である。各問とも、とくに男女差としてとりあげるものはでていない。また、5年と6年とも反応上のちがいはない。

しかし、6年生は5年生よりもよい成績を示している。設問(3)で、3. 日本が二度と戦争をしないことを誓ったことに、6年生の方に反応率が低くでているが、これは、6年生で反応が5年生よりも、4の全体的、要約的反応に移行したためであろう。

問題によっては、反応率が高いのと低いのとあるが、これは話全体の文脈における重要性の軽重によるものである。

各設問における反応率の全体を平均すれば6年生でも50%にみたない。これは6年生は子どもニュースを聞きとる力が十分でないともみべきであろうか。

しかし、いったい、放送の類は詳細を100%理解することはとても期待できるものでないし、また期待すべきものではない。この問題のごときは、ガルシア大統領が日本に来て、国会で演説し、フィリピンは日本と仲よくしようと言った、という程度に聞きとれば十分といえるのではないだろうか。かりにそんなところに基準を設ければ、6年生になれば十分に、子どもニュースを聞きとる力がついていると考えることができるであろう。

(2) ところで、きのうの夕方、フィリピンのガルシア大統領が夫人といっしょに日本を訪問されました。国賓として六日間滞在されるわけでありすが、きょうは今のニュースにもありましたように、皇居を訪問されました。この後参議院本会議の議場で、衆参両院の議員を前にして、演説予定になっております。外国では国のお客さまを迎えますと、議会の議場でそのお客さまの演説を聞くというしきたりがありますが、日本でははじめてのことです。同じアジアの国の大統領によって、そのしきたりが作られるということは、意義のあることだと思います。

ガルシア大統領は去年の3月に、時のマグサイサイ大統領が飛行機事故でなくなった後を受けまして、副大統領から大統領になった人ですが、詩人でもあり、熱心なカトリック信者でもあります。で、今度の日本の訪問にあたっては、野党やあるいは与党の中にも反対が少なくなかったと伝えられております。戦後13年になるんですが、いまだにフィリピンの人たちの間には、あのいやな戦争の思い出が消えていないわけでありすが、で、大統領はきのうのメッセージの中でも、にがい思い出にふけるよりは両方の国民が2度と

再び戦争をおこさせないよう、固い決意で努力しようということを述べております。そして、日本が武力を使う政策を捨てたということを賞めたたえているのであります。

日本が迷惑をかけた東南アジアの国々では、あの思い出は容易には消えさらないし、また、今なお、日本の再軍備を警戒する気持が非常に強い、ということを知られるのであります。アジアの国という立場にたとうとしている日本として片時も忘れることのできない点でありましょう。

これは前の問題のニュースを聞かせた後、このニュース解説を、

前のニュースになく、このニュース解説にだけ、新しくでてきたことはなにか。よく聞いて答えてください。

と、指示をあらかじめ与えてから聞かせたものである。

新らしくでてきたことがらとして、つぎの点の規準をおさえて、その面から結果をみると、つぎのようになった。

	(5—2)			(6—2)		
	男	女	計	男	女	計
① 6日間滞在すること	0%	10%	4%	23%	31%	27%
② マグサイサイ大統領について大統領になった	54%	33%	45%	82%	38%	58%
③ 詩人であり、カトリック信者である	11%	0%	6%	14%	23%	19%
④ 来日に与党、野党の反対が少なくなかった	4%	0%	2%	18%	12%	15%

この設問は、比較的同種の話題を同時に聞いて、その間の違いを判断する力を調べたものである。全体としては成績が悪く、十分とはいえない。

②マグサイサイ大統領について、ガルシア大統領が副大統領から大統領になった、に反応率が高くでているのは、話の中に、マグサイサイ大統領が飛行機事故でなくなったというショッキングな情報があつてのことであろう。

Ⅲ 話しかた（道順テスト）テストの問題とその結果

この問題は児童が日常、よく経験する、道を歩いていて人にある目的地までの道順をたずねられる、という場面を想定し、そういう時、どのように道順を教えてやることができるか、つまり、道順を相手の立場にたってわかるように

話することができるか、をみたものである。

ここで、相手の立場にたってわかるように話す、はつぎの4点を十分に含めた話しかたをしたか、どうかの評価によってきめた。

1. 現在点からの移動方向を教える。(方向)
2. 移動の過程を教える。(過程)
3. 目標点の位置づけをする。(位置)
4. 目標点の目印(特徴)を教える。(目印)

東京・四谷第六校の設問はつぎのとおり。

学校の門のところで、知らない人に「図書室*はどこですか。」と聞かれました。わかりやすく、教えてあげるには、どのように言ったらよいでしょうか。口でいうとおりに□□の中に書いてください。

(注) 他の協力校では、図書室を他の適当な場所に変更してもよいことにした。

上にあげた4つの評価の観点からすると、その正答例はつぎのようになる。

1. 方向(そこの運動場を右の方に行くと、入口がある。)
2. 過程(入口から階段を3階まであがる。)
3. 位置(あがったすぐ右側の部屋が図書室である。)
4. 目印(図書室という看板がかかっている。)

この調査は、28年度入学児童には、5年1学期、6年1学期に、29年度入学児童には、4年1学期、5年1学期に行なった。

結果はそれぞれの観点別に、どの観点を満たすか、または欠くかということでまとめた。

答の例 <全正答の例>

(N.W) 運動場のまん中を歩いてしょくいん室の左の方の入口からはいて、三階(階のこと)まであがってすぐ右の室が図書室です。札に図書室と書いてあります。

<4を欠く例>

(N.S) ここの校庭をはすにまっすぐ行くと、かいだんのいりくちがあります。そのかいだんを3がいまでいきます。上ったみぎのつきあたりです。

<1および4を欠く例>

(S.H) 三がいの上に三がいはだいたい5、6年のきょうしつがあります6年3組のとなりがとしょしつです。

<2および4を欠く例>

(K.N) つきあたりの出入口をはいて、すぐよこに階段があってその階段を
ずうっと上っていくと、すぐ右手の所にあります。

<3および4を欠く例>

(K.I) このしろいせんがひいてあるとうりにまっすぐいくとかいだんがありま
す。そのかいだんを3がいまでのほればそうです。

	(4—1)			(5—1)			(6—1)		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1 方向	65.5%	52.4%	60%	97%	95%	96%			
				85.0%	71.4%	77.1%	100%	100%	100%
2 過程	51.7%	52.4%	52%	70%	80%	74%			
				60.0%	60.7%	60.4%	86.4%	92.3%	89.6%
3 位置	32.7%	16.7%	25%	37%	35%	36%			
				47.5%	41.0%	43.7%	59.1%	50.0%	54.2%
4 目印	5.1%	9.5%	8.3%	7%	15%	10%			
				12.5%	26.8%	20.9%	13.6%	42.3%	29.2%

4年1学期の調査は高学年とはいえぬけれども、参考までにあげておいた。

4つの観点のうちでは、1方向がいちばん成績がよくて、4目印がいちばん成績が悪い。話すべきことがらが、児童のその時の位置より遠くなるにしたがって悪くなっていっている。現在点の叙述は正確、かつ詳細にわたるが、地点が遠ざかるほど、不正確かつ漠然となるという児童の話しかたの特徴がみられる。しかし、なかには、方向と位置（出発点と到着点）は正しく押えたが、その中間の過程は押えなかった反応の型も比較的目標だった。（協力学校の結果表にも、その傾向がみえる。）

性別では、4目印の押さえかたに差があり、女子の方がよく押さえていた。これは女子の物をみる態度の特徴によるものであろうか。

正答率から学年発達はこの観点にもみられるが、この他、観点以外の全体的な表現叙述にも巧拙がみられた。

なお、参考までに、協力学校の結果をあげると、つぎのようになっている。

	Ko	Na	To	Hi	Bi	Ki	平均
<6—1>							
1 方向	86.0%	70.2%	91.5%	88.5%	80.0%	54.8%	78.5%
2 過程	48.8%	55.3%	91.5%	46.2%	84.0%	64.5%	65.1%
3 位置	60.5%	59.6%	89.4%	76.9%	78.0%	41.9%	67.7%

4	目印	20.9%	61.7%	68.1%	40.4%	38.0%	25.8%	42.5%
〈5—1〉								
1	方向	61.1%	79.3%	93.5%	75.7%	87.2%	74.5%	78.4%
2	過程	83.3%	74.1%	56.5%	48.6%	80.8%	76.4%	69.9%
3	位置	68.5%	79.3%	80.4%	67.6%	61.7%	69.1%	71.1%
4	目印	40.7%	68.9%	28.3%	27.0%	23.4%	40.0%	34.7%

各学校によって、反応率に高低があるが、これは場面規定の条件のちがいによるためである。正答と認める判定のきびしさ、あまさも影響していよう。

Ⅳ 聞く話す力と他の言語能力・要因との関係

1. 聞く話す力と他の言語能力 昭和28年度入学児童が5年3学期に行なった聞く力、話す力のテストと他の言語能力との相関をみたところ、つぎの結果がでた。

でた。		聞く力	話す力
聞く力は話す力にくらべて、どの言語能力とも相関が高く、なかでも読解力との相関が高くてい	漢字読字力	0.28	0.09
ている。そのつぎが語彙力との相関である。	漢字書字力	0.33	0.27
	読解力	0.63	-0.02
	黙読速度	0.34	0
中学年の場合の例をとると、中学年で聞く力	語彙力	0.45	0.11
と相関の高かった能力は文法力と語彙力とであ	文法力	0.27	0.09
ったが、上記の結果では、中学年でそれほど相関	作文(A)	0.37	0.33
	聞く力		0.21
が高くはなかった読解力との相関が高くなり、	話す力	0.21	

語彙力との関係はともかく、文法力との関係はなくなった。こんなところに中学年と高学年との言語能力の相関構造に違いをみることもできるかも知れない。

話す力は中学年の場合と同様に、他の言語能力ととくべつ高い相関を示すことなく、異質な言語能力であることを感じさせる。

2. 聞く話す力とそれを規定する要因 昭和28年度入学児童が5年3学期に行なった聞く力・話す力のテストと、それを規定すると考えられる知能・環境・社会性・読書との相関をみたところ、つぎの結果がでた。

	知能	環境	社会性	読書
聞く力	0.46	0.22	0.28	0.18
話す力	0.28	0.24	0.12	0.26

聞く力は調査した要因とのかぎりでは知能との相関がいちばん高いとでている。知能との相関は、低学年、中学年とも0.4~0.5の相関がでていたが、高学年のこの学期でもとくに変わることがなく、知能との相関あり、というようにでている。

話す力は知能とも他の環境、社会性、読書とも相関が高いというようにはでていない。話す力とは本質的にそういうものと相関がないものか、あるいは、われわれの調査法、問題作成に原因があるのか、さらに検討の余地がある。

3. 聞く話す力と性差 昭和28年度入学児童、および昭和29年度入学児童が高学年の各学期において行なった聞く話すテストの性別による平均得点をくらべると、つぎのようになった。

聞くテスト							話すテスト				
	5—1	5—2	5—3	6—1	6—2	6—3		5—1	5—2	5—3	6—1
男	6.4	7.3	9.7	12.5	5.6	14.4	男	3.4	3.3	3.9	3.2
	11.9	5.2	15.0					2.8		1.3	
女	6.0	5.9	8.8	11.9	4.9	12.3	女	3.3	3.1	4.0	3.4
	10.2	5.1	13.3					3.0		1.2	
平均	6.1	6.4	9.0	12.2	5.2	13.3	平均	3.3	3.2	3.9	3.3
	11.2	5.2	14.5					2.9		1.2	
S. D	1.6	1.5	1.5	2.6	1.0	2.7	S. D	0.8	0.7	1.3	0.9
	2.9	1.0	3.3					1.0		0.8	

(註) 表中の数字は学期末テストの平均点である。学期ごと、また同一学期でも28年度入学児童、29年度入学児童とでは問題数がちがうから、性別の比較をのぞいては、平均点の比較は意味がない。

この結果のかぎりでは、聞く力はどの学期のテストでも男子の方が成績がよく、女子の方が劣っている。話す力については、聞く力の場合ほど男女がいずれがまさるということはいえない。聞く話す力と性差の関係はさらに統計上の詳しい処理を必要とするし、男女のいかなる特性が聞く話す力を差違づけるかこの面の診断にもすすんでいく必要がある。

最後に、高学年の聞く話す調査でえた結果から、さらに、深い考察を加えた上で結論をみいだすのに、注意しておきたい点としてはつぎのようなことである。

1. 聞く力は男子のほうが女子よりまさる。話す力については、男女の優劣はわからない。
2. 聞く力は知能との相関がいちばん高いが、話す力については、わからない。
3. 聞く力は読解力、語彙力と相関が高く、聞く力と他の言語能力との間に中学年とちがった相関構造がある。聞く力、話す力相互の相関はない。
4. 道順の話しかたは現在点の叙述がいちばんやさしい。
5. 聞かせる話が長くなると、文脈の理解が困難になってくる。
6. 同じ話題において、二種の意見の共通点をみいだしたり、そのちがいを判断させることは困難である。 (村石)

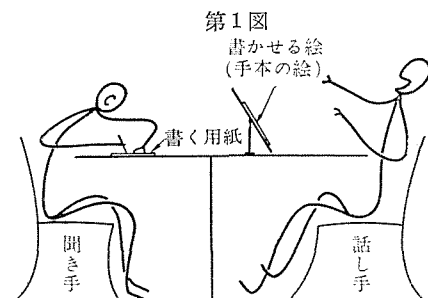
C 卒業時の話し言葉による伝達の実験

1 目的と方法

1) この実験は、小学校卒業時において、話し言葉による伝達能力がどれくらいあるかを、伝達すべき内容を一定にして、調べたものである。伝達内容を一定にするために話し手に一定の絵を見せ、その絵を見ていない聞き手に、話すことによって命令を与え、同一の絵を再現させる、という方法をとった^{注)}。

2) 実験場面の設定は、第1図の通りである。話し手は、絵を見ながら、聞き手に書き方を伝える。聞き手がそれを聞いて、用紙に、絵を書く。この場合、

聞き手は話し手に質問することができ、話し手は、聞き手（書き手）の書く絵を見ることができるが、聞き手は、手本の絵を見ることができない。また、話し手がよほど大きな動作をしない限り、聞き手は、話し手の手振りを見ることができない。

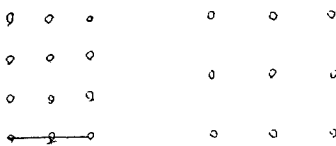


注) この方法は望月衛の「話しコトバと個性」(言語生活64号)からヒントを得たものである。

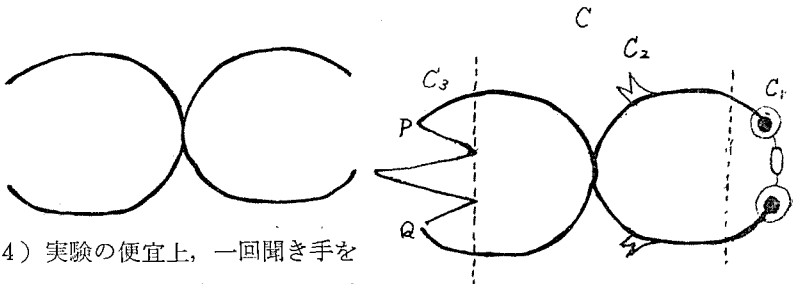
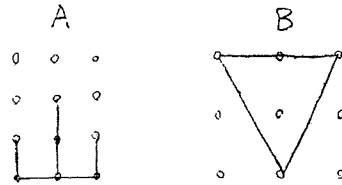
また、話し手は、手をのばして、聞き手の用紙にさわることを禁じられている。

3) 聞き手(書き手)に与えた用紙には、第2図のような絵が書いてある。これは、謄写版ですったものである。話し手に見せた絵は、第3図の通りである。これは、聞き手に与えた用紙と同じものに、鉛筆(細い線)で他の図を書き加えたものである。なお、A、B、C、P、Qなどの記号および点線は、報告の便宜上つけたものであって、原物にはついていない。

第2図 (縮尺 $\frac{2}{3}$, 以下同じ)



第3図



4) 実験の便宜上、一回聞き手を演じたものは、すぐ次の回到話し手の役にまわることにして、実験を流していった。ただし、最初の回到話し手の役を演じたものは、聞き手を演じなかったし、また、最後の回到聞き手を演じたものは、話し手を演じなかった。この実験は4流れにわけて行なったので、話し手だけしか演じなかったものが4人、聞き手だけしか演じなかったものが4人あった。

5) この実験は、1959年3月16日、および19日の2日間に行なった。被験者は、実験学校の6年生、実験を行なったもののうち、録音不良のため結果を見ることができなかったものを除けば、実験組数は37、延べ74人である。

6) 記録法としては、テープレコーダーに録音したほか、観察者が、聞き手(書き手)の書いて行く順序を記録した。

第1表 部分別所要時間の散らばり

部分	所要時間（秒）別成功組數																								不成功 組數	計
	11 }	21 }	31 }	41 }	51 }	61 }	71 }	81 }	91 }	101 }	111 }	121 }	131 }	141 }	151 }	161 }	171 }	181 }	191 }	201 }	211 }	221 }	231 }	241 }		
A	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150	160	170	180	190	200	210	220	230	240	250		
	3	4	6		11	3	3	1	1	1									1						37	
B					5	3	3	2	3			1	1							1					37	
C ₁					3	3	3	5	2	4	2	3	1	2	3	1	1			1					37	
C ₂	1	1				4	3	4	2			2	2		1	1	1		1	1	2		2	1	37	
C ₃	1	1	2	1	2	1	3	1	2	1	2	1	4		1	2			1	1		1	1	1	37	
																									2(365, 446)	
																									2(254, 377)	

Ⅱ 結果と考察

1. 成功・不成功と所要時間 $A \cdot B \cdot C_1 \cdot C_2 \cdot C_3$ の各部分における, 成功組の, 所要時間(秒)別の数, および不成功組の数は第1表の通りである。なお,

- ① Cにおいては, 形がかなりくずれていても, 要素がそろっているものは成功組とした。
- ② Cの成功組の中には, 左右の向きが反対であるものが2組ある。
- ③ 不成功組の中には, (イ)どうしてもできなかったもの, (ロ)狂いや欠部が生じたもの, (ハ)話し手が手をのばして, 聞き手の用紙にさわったり, 指で形を示したりしたもの, の3種がある。ただし, 手や首を振って方向を示しただけのものは, (ロ)に含めていない。

2. 表現上の工夫 表現上の工夫として, 次の3種類のものを認めることができた。

甲: 始めに形の概略, または意味付けをするもの……Aにおいては, 漢字の「山」だということ, Cにおいては, 金魚だということ, C₂においては, ヒレだということ, C₃においては, 尾だということ, ——をそれぞれ始めに言ったものがこれに当たる。なお, Bは三角であること, C₁は顔であること, ——を最初に知らせたものはなかった。

第2表 工夫（甲）使用者の部分別所要時間の散らばり

部分	所要時間（秒）別成功者組數																									不成功 組數	計	
	25以上																											
	11	21	31	41	51	61	71	81	91	101	111	121	131	141	151	161	171	181	191	201	211	221	231	241	251			
A	1				1																					1	3	
C ₁					2		1		1		1															1	6	
C ₂																											1	1
C ₃																	1	1									4	

乙：象徴的表現を用いるもの……C₃において、ローマ字の“W”をもち出したもの、C₂において、ローマ字の“W”“M”をもち出したもの、「山が2つ」「お父さんの帽子」と言ったもの、——が、これに当る。

丙：幾何的補助点を用いるもの……C₃において、左円の中心に点を打たせ、その上下約5mmずつぐらいのところ、点を打たせたもの、C₃において縦の直径を3等分したと仮定した所に点を打たせたもの、C₂において、線をたどらせて点を打たせ、そこからそれぞれ方向と距離を示して点を打たせたもの——がこれに属する。

甲、乙、丙の各種の数、および効果については、次の4か項でのべる。

3. 工夫（甲）と、その効果 A, C₁, C₂, C₃において工夫（甲）を使ったものの、成功不成功および成功所要時間は、第2表の通りである。なお、C₁において工夫（甲）を使ったものは、実際にはないが、C全体として「金魚だ」といってすぐC₁に移ったものを、C₁における工夫（甲）として表示する。

第2表に示した結果を第1表（全被験者）にした結果と比較すると、成功者の割合や所要時間に関する特徴は見られない。ただ、AおよびC₁における不成功例を検討してみると、Aは真中の縦線を最上段までのぼしているもの、また

第3表 工夫(乙)(丙)使用者の部分別所要時間の散らばり

部分	工夫 の 種類	所要時間(秒) 別組数																									不成功 組数	計
		11 }	21 }	31 }	41 }	51 }	61 }	71 }	81 }	91 }	101 }	111 }	121 }	131 }	141 }	151 }	161 }	171 }	181 }	191 }	201 }	211 }	221 }	231 }	241 }	251 以上		
C ₂	(乙)	1	1			1	3	3								1										1	12	
	(丙) 非(乙・丙)											1	1								2			1	1	2	5	8
C ₃	(乙)	1	1	2	1	1																				3	12	
	(丙) 非(乙・丙)					1	1	1	1	4						1	2			1	1	1	1	1	2	3	17	
						1	1	1	1	1																3	8	

(丙)の251秒以上の所には、途中で(丙)方式にかえたものがC₁、C₂とも1組ずつはいっている。

C₁では目玉を二重丸にしていないものであって、ともに、他の一般のあやまりのようにどうしてもできなかったものではなく、話し手の、書き手に対する見落としと解釈できるものである。しかし、Aのあやまりなど、漢字の「山」なら真中の長さは少々長短があってもよいのであるから、こういう工夫そのもののものつ欠陥といえるかも知れない。

4. 工夫(乙), 工夫(丙) 工夫(甲)は、工夫(乙)や工夫(丙)と重なるものがあったが、工夫(乙)を使ったものは、工夫(丙)を使わず、工夫(丙)を使ったものは工夫(乙)を使わなかった。したがって全体を、工夫(乙)を使ったもの、工夫(丙)を使ったもの、工夫(乙)も工夫(丙)も使わなかったもの、の3つに分けることができる。C₂およびC₃について、この3者の、成功不成功、および所要時間を示したものが、第3表である。

第3表に示した結果から、次のことがいえる。

(i) 不成功の出る割合は、工夫(丙)を使ったものに、最も少く、工夫(乙)も工夫(丙)も使わなかったものに最も多い。

(ii) 所要時間は、工夫(乙)を使っ

たものが最も速く、工夫(丙)を使ったものが最も遅い。

以上の結果は、工夫(乙)と工夫(丙)の特徴の違いをはっきり表わしているといえるであろう。なお、次のことは特に注意すべきであろう。

(i) この実験の範囲内では、工夫(丙)を使ったものに不成功が一組もないこと。

(ii) 表には表わさなかったが、C₃において、工夫(乙)を使ったもの(“W”という字を使ったもの)は、1組をのぞいて、すべて、尾の突端(最後尾の凸部の頂)が、PQ線上にあり、厳密には成功したものと言えないこと。

こういったことから、工夫(乙)は速く伝えるのには適しているが、確実さは工夫(乙)におとり、工夫(丙)は伝わり方は遅いが、確実である、ということがいえるようである。

5. 工夫された方式の伝染 以上3種の工夫についてのべたが、これらは、必ずしも、各話し手自身の思いつきであるとはいえない。なぜなら、さきに14)でのべたように、一回聞き手(書き手)を演じたものは、次の回に話し手にまわるので、聞き手役の時に聞きおぼえた前任話し手の工夫を、自分が話し手になった時に、借りて使えるからである。

工夫(乙)、または、工夫(丙)を独自に使い始めたのは、それぞれ3名であって、他は、前任の話し手からひきついだものである。

工夫(甲)のうち、Aにおける2名は、1名が使い始め、1名がそれをうけついだものである。工夫(甲)のうち、C、C₂、C₃に関するものは、後任者にうけつがれなかった。

このように、工夫(甲)はうけつがれにくく、工夫(乙)と工夫(丙)とは、うけつがれやすかった。

なお、工夫の成果がうけつがれるものである以上、第1表～第3表に示した数字は、6年生の伝達能力の規準となり得ない。第3表において、工夫(乙)を使ったものと、工夫(乙)を使ったものが、ほぼ同様にわかれているのは、4流れ(14)参照)のうち、大きな流れであった2ながれの、最初の話し手が、一方は、工夫(乙)を使い、他方は工夫(丙)を使った、という偶然によるものでし

かない。

6. 直線図形（A，B）における、あやまりの原因 AおよびBの不成功組は少ないが、成功組の場合でも、出来上るまでの過程では、書き違いが多く見られた。この、あやまりの原因は、次のように分類することができる。なお、この数は、あやまり箇所を単位としているので、同一組に2か所以上生じているものもあるし、また、後に訂正したものも含まれている。

（i）話し手の側に原因があるもの……23

- ① 話し手自身の図形認識のあやまり、または忘れ…… 2
- ② 出発点の指示をしなかったこと、または、はっきりしなかったことによるもの…… 5
- ③ 方向または到着点の指示を、しなかったこと、または、はっきりしなかったことによるもの…… 7
- ④ 図形指示をしなかったこと（AとB）によるもの…… 2
- ⑤ 相手を見ていなかったことによるもの…… 2

（ii）聞き手の側に原因があるもの……22

- ⑥ 話し手の説明が終らないうちに書き始めたことによるもの…… 5
- ⑦ 話し手の説明を聞きのがしたことによるもの…… 8
- ⑧ 聞き手が、かたまり（AとかBとか）の指示と行や列の指示とを間違えたことによるもの…… 4（ただし、これは④との限界がはっきりしない。）
- ⑨ 聞き手の先入観が邪魔して、話し手の言うことがすなおにうけとれなかったことによるもの…… 5

以上①～⑨を、もう少しくわしくのべる。

- ① Aにおいて真中の縦線が最上部に達したのを見ても、非としなかったもの、Bにおいて上の横線がないまま、次の図形に移ってしまったもの。
- ② Aにおいて、「真中たてに2つ引く」といったもの、Bにおいて、「真中からななめ上に線を引く」といったもの、など。
- ③ A・Bにおいて、方向を言わずに長さだけ言ったもの、Bにおいて、

「一番上の右から、真中にななめに引く」、「一番下の真中から、ななめ右上に線を引く」、など。

- ④ いきなり「左の一番上から、右の一番下まで線を引いて」と言ったので、Aの右上すみからBの左下すみまで線を引いたもの、AからBに移ることを言わないために、A図の上の三点をつらねる直線をひいたもの、など。
- ⑤ 相手を見ていれば、聞き手があやまりをおかした途端に訂正の指示ができるが、見ていないために、あやまりが連続生じたもの。
- ⑥ 出発点の位置を指示したばかりの時に、もう書き始めているもの、など。
- ⑦ 話し手が、「一番下の真中」といった時、「真中」または「一番下」ということに無関心であるもの、話し手が「ななめ」と言っているのに、まっすぐに線をひくもの、など。
- ⑧ 話し手が、Bについて、一番上の左はしの点から、「その左の列の下の方まで線引いて」と言った時、Aの右下すみまで線を引いたもの、など。
- ⑨ Bにおいて、点と点とをななめに結んでもよい、ということになかなか思いが及ばなかったために、「ななめに」といわれても動きがとれなかったり、別の行き方をしたりしたもの、AよりさきにBをやり、Bに影響されて、Aに移ってから「上に」と言われて、ななめ上に線をひいたもの、など。

7. A、Bにおける所要時間の長短の原因 A、Bの所要時間は、Cのように工夫(乙)や工夫(丙)が働いていないので、散らばりが少なく、モードも1つである。A、Bにおける完成までの時間の長さの原因については、次のようなことがいえそうである。

(i) 一般に、あやまり回数の少ないものほど、速く完成した。

(ii) 完成を著しく遅らせる原因は、主として聞き手の側にあった。聞き手の先入観〔6〕⑨〕や早合点〔6〕⑥〕、聞きのがし〔6〕⑦〕などが、ここに大きく働いていた。

- (iii) 偶然的要素が、かなり働いていた。話し手が「右の図」といった時、聞き手が偶然B図のある点をおさえることによって、話し手が「うん、そこから……」と始めるような場合、だいたい時間をかせぐことになる。A、Bについては、こういうものがかなり働いていて、特にA図における30秒未満のものは、ほとんど、これが働いている。

8. Cにおける、所要時間の長短の原因 Cは図が複雑なので、所要時間の長短にしても、A・Bよりとらえにくいだが、傾向として次のようなことがいえそうである。

- (i) すでに4)にのべたように、工夫(乙)、工夫(丙)は所要時間に大きな関係をもつ。
- (ii) さきに7)の(i)(ii)でのべたことは、Cについてもいえるようである。
- (iii) Cのような複雑な図形にあっては、7)(iii)でのべたような偶然性は、あまり働く余地がないようである。
- (iv) Cにあっては、6)の③にあたるようなものが、成功時間をおくらしたり、不成功に終わったりすることの原因になっているようである。

Ⅲ 実例

1) C₂ 不成功の実例

① [C₂ (ひれ) の部分だけを再現する]

H(話し手) あのお(間)二つの丸がつないでるところあんでしょ。

K(聞き手) うん。

H 大きい丸よ。大きい丸。

第4図

K うん

H ちがうわよ。あの。印刷してある丸。

K うん。これね。

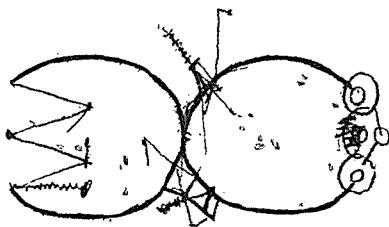
H うん。そ、そのつないでるところからね。

K うん。

H 右の丸にむかってねえ。

K うん。

H 線ひいちゃだめよ。



K うん。

H まだ、(間) 半分ぐらい。

K 線ひくの？

H ちがう。ちがう、あの。ちがうのよ。

K なに？

H 下。線。

K ひくの下に？

H ちがう。(ここで一度中断して、先に C₃へ行く。)[ここまで36秒]

H まん中の、境があるでしょう。

K うん。

H とお(間)、まん中の、境があるでしょ？

K うん。

H 印刷してある丸の。

K こっち。

H ちがう。こっち。境。

K ここ？ ここ？

H そおそ。そこからねえ。右の丸にかけて。

K うん。(間)

H それちょっとつたってって。丸を。

K ん。して。

H 線をつたってって。その位。あー、行きすぎた。もいっかい。その位。その位にねえ。ちょっと前にもどって。その位にねえ。とお。右ったたにななめに。(間) ん。右にね。

K うん。

H ななめ。5, 5センチぐらいに線ひいて。下じゃなくて上に。(間) そのとっからね上。下じゃなくて上よお。(間) そ、ちがう、ちがう。上, 上よお。ちが。そ。

K こっち？

H それからね。右ったたに。右ったたの方にななめに。それ。ちがうのよお。そ、それはなしで。なしで。

K 右ったたって、丸の？

H あっ左ったたの方にねえ。

K うん。

H さっきのとこ。さっきの丸。これ？

K さっきの丸、これ？

H ちがうちがう。さっきの点つけたでしょお。あたしがまちがったの。

K うん。ここ？

H そこじゃなくてさ。
 K ここ？ ここ？
 H ちがう。
 K どこ？
 H あの、あんたいまやったところ。
 K ここ。
 H ちがうわよ。
 K ここ？
 H そっからね。
 K うん。
 H 左に。そそ。あ、そんなに。五ミリぐらい。そのね。三分の一位でいいの。その位からねえ。右にねえ。おりてね。その線につかないでね。
 K うん。
 H そお。ななめにおりて右に。その線につかないでってんの。（間）ななめに。からななめに。次。
 K ここ。
 H ちが。前の線じゃなくてさ。右〔ここまで3分、全体でC₂全部で5分46秒を要している。〕

②〔C₂始めに左側に三角形を書き、次に右側のあるべき場所にうつる。その合計3分50秒。ここでは、左側に粒々の三角形を書くあたりのことを示す。〕

H 丸くなってる線あんでしょお。

K これ？

第5図

H そお。そこの間のへん。ちょっとまん中へん。大体、その線の、上んとこに。

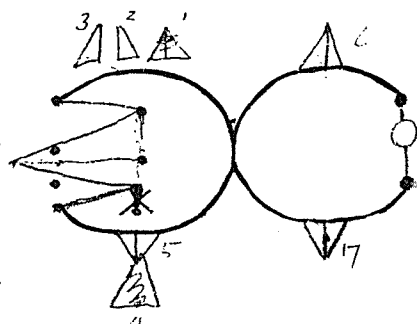
K ここ？

H 三角形二つ合わし、離れたみたいの。

K こおね。

H ええとねえ。ちょっとねえ。

（間）さんか。三角のね。二つかいてみて。



K こおやって？

H さかさま、さかさま。下の方がねえ。そこの方がひらべったいの。

K こお？

H 上の方。そおそお、そおゆう、その半分はならかしてよ。

K こおやって？

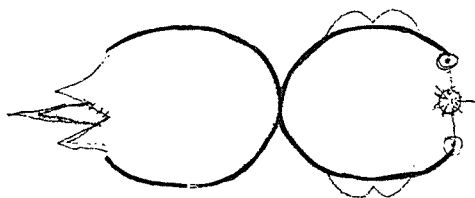
- H そこはならかしてねえ、書くの。
- K ああいけねえ、こおやって。
- H うん。
- K こおやって？ こっちはなかくの？
- H うん。いいよ。そっちは。そっから下にもかくの。その下のね。
- K これとおんなじ？
- H 線にくっつけて。
- K ここ？
- H うん。くっつけないの。
- K くっつけないの？
- H くっつけてかくんだよ。あれ、なんなっちゃった。(笑) その逆さまの。こっちかいたみたいのね。
- K ああそおか。こおか。
- H ちがうよ。線にくっつけてかくんだよ。
- K こおやって
- H その半分のやってみたいの。
- K こおやって。
- H そお。その離らかしてかくの。いいや。そいからね。
- K うん。
- H そこのね。あれ？ 変ななっちゃったあ。(笑) ちがうんだ。目玉の方だ。[というわけで右へうつる。]

2) C₃不成功の実例

○C₃の部分1分16秒。

第6図

- H 今度はねえ。あの。
W, ってゆう字をか
いて。あの。山二つ
- K こっちい？
- H ちがう。しっぽのほ
お。
- K しっぽ？
- H うん。
- K こっちい？
- H そお(間)
- K こお。
- H 山二つかいて。むこおっかたから。
- K こお？
- H しっぽみたいに。



K あっ。しっぽにするの？ こっから。
H ちがう。あの。さっきみたいの。目ん。目から。目んとこあんでしょお。
K うん。
H あそこのところ。
K ここ？ ここは終わったんだろお。
H そお。
K で、こ、こんどこっちだろお。
H そお。
K で、目んとこって、こくらへんでしょお？
H そお
K こっから。
H あの、山二つかくの。
K こっからおおゆう具合に。
H そお。大きく。（間）
K うん。
H まん中の。も一つたりないまん中に。
K え？ こおかな（間）こおかな。
H まん中にもお一つ。なんしろ山書けばいいの。
K へえ。こおかい。
H そお。（間）も少しながく。
K 長く？ ありゃ。（間）
H んと。

3) Aの成功例

○左ね。それね。あの、一番下のまん中の丸から上へ、三ついって（間）。そこで一番はじっこのどっち側でもいいからね。一つ。（間）ううん、ちがうちがう。下から（間）下からね。左手の。そおそお。（間）そっちも。（間）そいでいいの。[31秒]

4) Bの成功例

- ①H その次が右の点のところ。右の点。その下はもいいの。
K これ？
H そおそ。そいから一番上を、三つつなぐの。上を。そ。横に。そしてえ。一番下のまん中の。まん中あ。点。そこから、はじとはじの線をつないで。ちがちがちがちが。一番、いまかいた上の。一番上の。そ、その線に。[38秒]
②H こっちは。今度もお一つのねえ。（間）左から。一番上の左（間）そっからねえ右に線して。右（間）その右からねえ。今ひいたとっからねえ。こんど一番下のまん中まで（間）一番下のまん中。

- K こゆうに？
 H うん。ななめに。ななめ。それからまたねえ。ななめでねえ。上までいくの。
 K どこの上？（間）
 H あー。ん。はすに。はすに上。
 K どこの上だよ？
 H はす上。
 K どこ？ こお？（間）
 H 右。右。右右右。
 K こお？
 H あ、右じゃない。え、左だ。（間）そいで終り。〔54秒〕

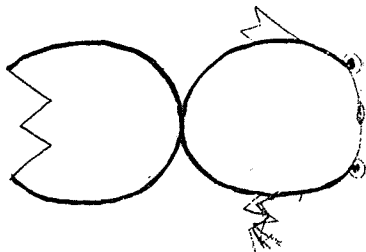
5) C₁の成功例

- H そいからねえ。下の方に円みたいなの
 があってしょお。そこのね、ところが
 あいてってでしょ。

第7図

K はい。

- H そこのところにね、あのお、と。円の
 ようにかいて。円をつくって。そして
 そのね。今やったところのまん中ね。
 書いたところのまん中。そこそこへ細
 長い丸をかいて。（間）細長い丸ちい



さいんでいい。（間）そこからね。（間）いま、つながないうちのはじね。
 そこからね。上へ。あのお鉛筆でたどってって。（間）書いてって、その上
 をその上を、いまかいたる、そこ。そこのところへね。小さい丸をね。ぬり
 つぶして、小さいの。（間）小さい。そ。その。うんと、もっと小さく小さ
 く。そのくらい。そいでぬりつぶして。（間）から、そのまわりへね。かこ
 むよおに丸を書いて。そ、でもお一つむこお。下の方。そこにも同じのをか
 いて。（間）〔1分27秒〕

6) C₂の成功例

- H ねえ、またもお一方のね
 え、丸にねえ。

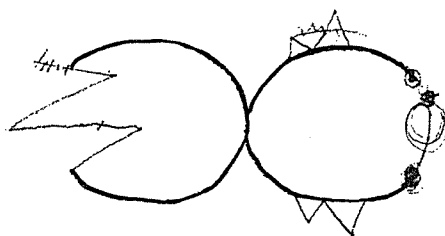
第8図

K もお一方の丸って？

H 今日玉かいたとこね。

K 下？

- H うん。もっと下の方。下
 の線に。ひれ書くんだか
 らさあ。線にそって。

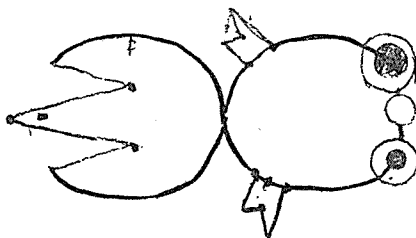


K 線にそって。
H もっと。
K このへん？
H もっと、ずっとむこお。そのへん。ちがうちがう。も少し上。そお。そこにね。ちょっと。すこおし上へ出して。
K はじ
H それからね。また、その線からね。下へもどって。
K うん。
H 下へもどるんだよ。
K ああそっちいっちゃうの？
H ちがう。線の。もとの線のところにもどって。
K だからあ、こお？
H うん
K そんで？
H また出て。
K また出て？
H もすこし長く。
K いって。
H も少し。今の下へさ。下へ。（間）そこで終り。そおゆうの反対側にもかいて。下にも。
K ああこっち。よいしょよいしょよいしょよいしょ。はい。
H いやあ。[1分5秒]

7) C₃ の成功例

○H そいからこんど左の切れ目からねえ。うう上からねえ。
K ここからどおするの？
H ああ。そこまん中あるでしょ？ まあるい。
K まん中でしょ。ここ？
H ああまだいいや。うんとね。まん中。そおそお、そのね。上から下までずっと線、ひっぱらないでね。
K うん。
H 大体その線の三等分した所に点をうって。（間）うった？
K 三等分したところ？

第9図



H うん。うった？

K こお？

H うん。んでねえ。そっから上の三等分のところからねえ、上の切れ目のところまで線ひっぱって。

K こお？

H ちがう。上の切目。(間) そおそお。下のは下の切れ目。(間) それからね。そこの、と。うんとね。切れ目と切れ目の間。(間) ちがう。そう。そっちの切れ目と切れ目の下の切れ目んとこ。その間のね。まん中んとこ点うって。そっから、ちょっとね。うんと。左へ8ミリくらい出たところへ点うって。

K あっと、こっち？

H うん。そ。その辺に。それから。そこでね。あのお。さっきの三等分した所の下。

K ここと？

H うん。ちがう。三等分。そおそお。そっから。

K ここへ？

H ちがう。そこはいっちゃいけないの。8ミリいったところと。

K こことここ？

H そお。(間) それと上も(間)〔2分14秒〕

附記 この実験には、高橋太郎と川又瑠璃子が当った。また録音の文字化の際には、日本女子大学生後藤祥子さんのお世話になった。(高橋太郎)

新聞の文章のわかりやすさに 関する調査研究

A. 調査の目的

新聞の文章を現状よりもさらに読みやすく、理解しやすいものにするためには、用字・用語・文構造・文章構造・記事の組み立て方・扱い方など、いろいろの点で改善を必要とすると考えられる。そして、そのためには、読みやすさ・わかりやすさ（以下、一括して「わかりやすさ」と称する）の条件がどんなものであるかをつかまなければならない。

文章のわかりやすさの条件については、これまでも、いくつかの調査研究の結果が公にされてきたし、われわれの手でも行なってきた。ところが、これまでは、実際の理解度の裏づけなしに、主観的な意見とか、感じとか、あるいは生理的な眼球運動の円滑さなどから、わかりやすさの条件を判定してきた。しかし、そのようにして得られた条件を満たすように書かれた文章が、果たしてほんとうにわかりやすいものであるかどうかは、必ずしも明らかでない。それを明らかにするには、わかりやすさを作りだす条件(要因)と考えられるものが、実際の理解度にどれほど影響するものであるかを調べてみる必要がある。

そこで、われわれは、わかりやすさを作りだす要因と考えられるものについて、その度合をいろいろに変化させたばあい、理解度がどう変わってくるか、つまり、わかりやすさの条件の変化と理解度の変容との相関関係を調べてみようとしたのである。

このようにして、わかりやすさの条件を、実際の理解度との関連においてとらえれば、それによって、新聞の文章を改善する目やすが得られるであろう。ここに、この調査研究の目的がある。

B. 調査の計画および担当者

新聞の文章のわかりやすさに関係のある要因としては、いろいろの事項が考

えられる。この調査では、次の8個条と決め、調査問題作成の基準とした。

1 たてがき・よこがきのちがい

いまの新聞の文章は、たてがきを基調とし、その中に、特殊のページや欄をよこがきにしたもの混じっている。今後、次第によこがきの割合をふやし、将来は全面的によこがきに切り換えることが予想されるが、いまずぐによこがきを全面的に実施しえないのは、伝統的な表記法を急激に変えないようにするためと、一般にはまだたてがきのほうが読みやすいと信じられているからだと思われる。ところが、生理的には、たてがきよりもよこがきのほうが読みやすいはずであり、そのことと、心理的にはよこがきだとわかりにくい、理解しにくいという印象(観念)とが、正面からぶつかり合うというのが、いまの段階での実情であろう。そこで、たてがきとよこがきとでは、どちらが読みやすいか、理解しやすいか、という問題について、実験的に調査してみることが必要である。

このたてがきとよこがきとの比較については、どちらが速く読めるかという問題をも含めて考えることとする。

2 語の難易度のちがい

一般に、むずかしい語よりも、やさしい語のほうがわかりやすいのは当然であるが、それが語としての比較でなく、文章としての比較の問題となると、様子がちがってくると思われる。

難語といっても、難語だけで文章をつづるわけではないから、文脈により、あるていどの推測のつくことが少なくない。文章に読みなれた読者であれば、そのような推測をはたかせることが可能となるわけである。だから、難語を含んでいるからといって、その文章全体の意味が理解しにくいということには必ずしもならない。しかし、その文章のキーワードが難語であったり、あるいは、全体の調子が難語を多く用いた堅い表現であったりすれば、おそらくそうでない文章よりもわかりにくさの度合は高まるにちがいない。

それがどのていどのちがいをもたらすものか、ということ調べてみる必要がある。難易ということには、親近度ということも含めて考えることとする。

3 漢語の複合度の高低のちがい

漢語は複合しやすい。たとえば、「新政権を樹立する」とか「新政権の樹立」とかいうのを「新政権樹立」というようなものである。このような複合は、ことに新聞の文章では、非常に多くあらわれる。二つの漢語が複合するばかりでなく、三つも四つも、時にはそれ以上の複合の行なわれることが少なくない。このような漢語の複合という現象は、文章をわかりにくくしてはいしなないだろうか。現に、われわれの研究室の昭和31年度の調査では、漢語の複合したものが読者にある種の抵抗を与えるらしいということがわかった。それをさらに確かめてみよう、というのが、この事項を取りあげた理由である。

4 文構造の複雑・単純のちがい

単純な構造の文が、複雑な構造の文よりもわかりやすいことは当然であるが、何をもって単純とし、複雑とするかは、問題である。たとえば、文の長さの問題、主述関係・修飾関係を表わす語の位置や距離の問題など、いろいろに考えなければならない。ことに、文を単に文としてでなく、文章の中に位置づけてみたばあい、文構造のちがいが、文章全体の理解とどうかかわるかということが、問題となる。実際の文章についてこの問題を調べてみる必要がある。

5 文章構造の相違

文章は文の連続である。同じ内容の事がらを文章につづるとしても、どれだけの文をどのような順序で配列するかによって、文章の構造が異なってくるわけである。そして、そのような文章構造のちがいが、わかりやすさを支配することが当然考えられる。とくに、新聞の文章における報道性の面から、この問題について調べてみる必要がある。

6 見出しの強調点の相違

新聞の文章には、見出しのつけられるのが普通である。見出しだけを読む、あるいは、見出しによって読もうとする記事を選択する、という読者も少なくない。新聞記事では、見出しは非常に重要である。

ところで、同じニュースでも、見出しの立て方はいろいろありうる。そのような見出しの立て方のちがいが、とくに、記事のどの点を強調して取り出すかというようなことが、記事内容の理解のしかたを変えらるということが、考えられる。見出しは、いわば記事内容の要点であり、表題であるから、見出しの理解が先入観となって、記事の読み取りを規制するのである。

見出しの立て方を変えてみたばあい、その相違が記事全体の内容の理解にどう影響するかということを、調べてみる必要がある。この問題も、新聞の文章のわかりやすさと深いかわりをもつと考えられるからである。

7 リードの有無

主要な記事には、リードのつくことが多い。リードとは、いわば記事内容の要約である。したがって、本文の前にこれがつけられていることは、本文の理解を助けるはずである。それがどの程度に影響のあるものか、ということも、新聞の文章のわかりやすさの条件を明らかにするためには、調査を要する問題である。

8 解説記事の有無

報道記事において、その事実のもたらす意味や、その事がらの起こった経緯や、あるいは、そのことに伴う各種の事情の変化などについて、事実の報道のほかに、解説記事のつけられることが、少なくない。このような解説記事が本文全体の内容の理解を助けることは当然のことと言えるが、それが果たして実際にはどの程度に影響のあるものか、解説記事の有無による理解度のちがいという観点からおさえておくことが必要であろう。

以上の8個条の項目について、調査問題を作成することとしたわけであるが、問題文は実際の新聞記事によることとし、過去1か年間の朝日・毎日・読売3紙の東京版の紙面から、政治記事・社会記事をえらんだ。

また、調査対象は、新聞の読者対象として考えられている義務教育終了程度の能力をもつ者との見地から、また、調査実施の便宜ということから、公立の中学3年生と高校1年生とした。

この調査研究は、第2研究部言語効果研究室に属する次の3名の所員の共同作業である。

永野 賢 林 四郎 渡辺友左

なお、研究補助員1名が所員を助けて調査研究に従事し、臨時作業補助員2名が集計に従事した。

この報告のCおよびDの前半（6まで）は林が、Dの後半（7以後）は渡辺が執筆し、全体を永野が整理した。

C. 調査実施要領

1 調査票の作成

1-1 調査項目とテスト問題 目的に従って8個条の調査項目を定め、それぞれに1個または2個以上の記事を選定した結果、全部で13個の記事ができた。各記事につき、調査の観点に従って、わかりやすさの要因の度合に変化を与え、2種類から4種類にわたる問題文を作った。調査票は問題文と設問とを、すべて別ページにしてあるので、表紙を除いて26ページの調査票になった。以下、問題文記事は略称をもって呼ぶので、調査項目（わかりやすさの要因）と記事の略称と問題文の種類数とを一括して一覧表に示す。

調査項目	記事略称	問題文種類数
1 たてがき・よこがき	船舶輸出	3
	原子炉	3
	エリコン	2
2 語の難易	塩酸	2
	アイク書簡	4
	無きょ出制	2
3 漢語複合度の高低	地方財政	2
4 文構造の複雑・単純	イラク新政権	2
	イレズミ・コンクール	2
5 文章構造の相違	非番巡査	2
6 見出しの強調点の相違	日本脳炎	4
	アイク書簡	4
7 リードの有無	日中貿易白書	2

「アイク書簡」は一つの記事で三つの調査項目を兼ねている。以上で問題文の数は延べ32個になった。

1-2 調査票の体裁 B5判で、表紙とも27ページ。よこがき問題の問題文および設問を除き、他は全部たてがきとした。（この報告書にも、問題文は、たてがきのまま示したが、設問の部分は、ここでは横書きに組みなおして示した。）費用の関係から孔版印刷とし、組み方は、8ポ活字ベタ組み、行間2ミリの15字詰めとした。活字の字形は新聞とは違うが、その点を除けば、一応新聞の組み方と同じになっている。ただし、見出しの活字は新聞のように大きくはなく、4号活字を用いた。

1-3 問題文種類別の配合のし方 前述したとおり、どの記事も2種類ないし4種類の変化をもっている。この変化が被験者のいろいろな群に満遍なくゆきわたらなければならない。ある学校のある学級には、ある記事はA種の問題文ばかりが当たったというようなことがあっては、結果に片寄りが出て、それが問題文の種類別によるものか、学校差や学級差によるか、見分けがつかない。どの学校、どの学級、さらにいえば、学級の中の20名、10名というどんな小さな集団を取ってみても、その中に各種類の問題文が均等にはいつていることが望ましい。こういう配合は、調査票をとじ合わせ、積み重ねたとき、すでにできていなければならない。そうでないと、上から何冊取っても、その中に、どの記事も均等に問題文のバラエティーがあるというわけにいかない。それで、とじ合わせの時に特別の工夫をした。とじ合わす前に、記事ごとに、2種類ならABAB……、3種類ならABCABC……というように、まぜて重ねておき、それを上から取ってとじるようにした。ところで問題文の種類数は多くは2種類であるから、どれもABAB式にまぜたとしたら、問題1でAが当たったものは他でも全部Aというように、組み合わせが一定してしまう。こうなると、たまたま一つの問題に被験者の等質性をこわすような何かの片寄りがあった時、それが全部の問題に累を及ぼすことになるので、これも困る。そこで、まぜ方は記事ごとに方式を変えて、循環をなるべく少なくするようにした。こう

いった点で、印刷者にたいへんむずかしい注文をし、やっかいな組み合わせをしてもらったが、おかげで、結果はよく、かなり小さな集団内でも、各種類の問題文がゆきわたった。

2 被験者の選定

この調査はサンプリング調査ではない。被調査校は、いろいろな点で調査がしやすい学校を選んだ。学年は中学が3年、高校が1年で各4校、1校100名を基準としたので、各校2学級とし、学級の選定は学校に委せた。

被調査者の性質は以上のとおりであるから、以下の記述で、「中学」「高校」という時、いずれも「今回の被調査者の中学3年生、高校1年生」の意味で、それ以上一般におしひろめた意味はない。

被調査校と、被調査者の人数とは、次のとおりである。

東京都千代田区立一橋中学校	117名
東京都中央区立文海中学校	98名
東京都台東区立御徒町中学校	109名
東京都台東区立上野中学校	106名
東京都立九段高等学校	95名
東京都立新宿高等学校	102名
東京都立赤城台高等学校	101名
東京都立小石川高等学校	102名

以上、中学生430名、高校生400名、計830名であった。

3 調査期日

昭和33年の11月中に行なった。

4 整理集計法

被調査者1名にE F I C多孔集計カード1枚を当て、単純集計および相関集計を行なった。

D. 調査の結果

1 たてがきとよこがきとで、読みの速さと理解度とに違いが生じるか

1-1 数量表記法の変化を主とした3種類別 「船舶輸出」記事を問題文にした
3種類別は次のとおりである。

(A)

八月の船舶輸出 十一万三千トン	
運輸省が一日まとめたところによると、八月の船舶輸出許可実績は十一万三千三百九十総トン（十八万千六百五十重量トン）で、本年度に入って全く停滞していた輸出の発注はようやく活発となってきた。これは主としてギリシャ系船主が一九六〇年以降には現在の船腹過剰が調整されるとの見通しを立て、積極的に成約に踏み切りはじめたからである。	三千四百五十総トン）貨物船二隻（一万九千総トン）その他一隻（九百四十総トン）で、これで本年度八月までの許可実績は十六万八千九十総トン（二十五万二千二百五十重量トン）となった。しかし、好調だった昨年同期の十九隻、四十八万九千二百五十総トン（七十八万四千五十重量トン）に比べるとはるかに少ない。
許可の内訳はタンカー三隻（九万隻、六十万総トンに達する模様。	なお現在、引合中のものは三十

(B)

八月の船舶輸出 11万3千トン	
運輸省が1日まとめたところによると、8月の船舶輸出許可実績は11万3千3百90総トン（18万1千6百50重量トン）で、本年度に入って全く停滞していた輸	3千4百50総トン）貨物船2隻（1万9千総トン）その他1隻（9百40総トン）で、これで本年度8月までの許可実績は16万8百90総トン（25万1千2百

出船の発注はようやく活発となってきた。これは主としてギリシャ系船主が1960年以降には現在の船腹過剰が調整されるとの見通しを立て、積極的に成約に踏み切りはじめたからである。

50重量トン)となった。しかし、好調だった昨年同期の19隻, 48万9千2百50総トン(78万4千50重量トン)に比べるとはるかに少ない。

なお現在、引合中のものは30隻, 60万総トンに達する模様。

(C)

八 月 の 船 舶 輸 出 113,000 トン

運輸省が1日まとめたところによると8月の船舶輸出許可実績は113,390 総トン(181,650重量トン)で、本年度に入って全く停滞していた輸出船の発注はようやく活発となってきた。これは主としてギリシャ系船主が1960年度以降には現在の船腹過剰が調整されるとの見通しを立て、積極的に成約に踏み切りはじめたからである。

(93,450 総トン)貨物船2隻(19,000 総トン)その他1隻(940 総トン)で、これで本年度8月までの許可実績は160,890 総トン(251,250 重量トン)となった。しかし、好調だった昨年同期の19隻, 489,250 総トン(784,050 重量トン)に比べるとはるかに少ない。

なお現在、引合中のものは30隻, 600,000 総トンに達する模様。

許可の内訳はタンカー3隻

「原子炉」記事では、数量表記のほかに、片かなによる外来語や外国の地名の表記、ローマ字略号による表記などを含む。問題文の3種類は次のとおりである。

(A)

英原子炉、
伊へ輸出

英国のニュークリア・パワー・プラント会社＝原子力発電新会社、NPPC＝は三十一日夜最初の大規模発電炉の輸出第一号としてイタリアのシメア（SILMEA）社との契約に調印したと発表した。この炉はいわゆるコールドホール改良型で、電気出力二十万キロワット（約五十万人の都市の消費量）で、ローマから約六十五キロ南のラチナに建設され、一九六二年半ばに完成される。

(B)

英原子炉、
伊へ輸出

英国のニュークリア・パワー・プラント会社＝原子力発電新会社、NPPC＝は31日夜最初の大規模発電炉の輸出第一号としてイタリアのシメア（SILMEA）社との契約に調印したと発表した。この炉はいわゆるコールドホール改良型で、電気出力20万キロワット（約50万人の都市の消費量）でローマから約65キロ南のラチナに建設され、1962年半ばに完成される。

(C)

英原子炉、
伊へ輸出

英国のニュークリア・パワー・プラント会社＝原子力発電新会社、NPPC＝は31日夜最初の大規模発電炉の輸出第一号としてイタリアのシメア（SILMEA）社との契約に調印したと発表した。この炉はいわゆるコールドホール改良型で、電気出力200,000キロワット（約500,000人の都市の消費量）で、ローマから約65キロ南のラチナに建設され、1962年半ばに完成される。

1-1-1 「船舶輸出」「原子炉」記事3種類別の読了時間 一応内容をつかみながらなるべく早く1回通読するよう要求して、読了時間を測定した。測定法は、2秒おきに移り変わる数字の文字板を提示して、読了したら、文字板を見て、秒数を調査票に記入させるようにした。中学・高校別に、読了時間の平均秒数と

標準偏差をみたのが、第1表、第2表である。

第1表 「船舶輸出」記事3種類別平均読了時間

	中学			高校			全体		
	人数	平均時間 (秒)	標準偏差	人数	平均時間 (秒)	標準偏差	人数	平均時間 (秒)	標準偏差
A	135	56.62	13.72	145	54.01	13.55	280	55.27	13.26
B	146	56.18	12.48	129	54.98	11.86	275	55.61	12.20
C	148	55.03	12.36	126	53.33	11.98	274	54.28	12.21
計	429	55.92	12.84	400	54.11	12.20	829	55.04	12.57

(注) 中学生の人数が1名たりないのは、読了時間を記入しなかった被験者が1名いたためである。第2表についても同様の事情がある。

第2表 「原子炉」記事3種類別平均読了時間

	中学			高校			全体		
	人数	平均時間 (秒)	標準偏差	人数	平均時間 (秒)	標準偏差	人数	平均時間 (秒)	標準偏差
A	142	38.25	8.80	134	37.61	8.63	276	37.71	8.88
B	134	37.89	8.98	140	38.35	9.01	274	38.13	9.00
C	150	41.17	9.20	126	40.70	9.87	276	41.91	9.52
計	426	39.17	9.12	400	38.86	9.26	826	39.02	9.19

第1表でも第2表でも、ABCとも平均読了時間は相似ており、A～B、B～C、A～Cと対比しても、どこにも統計的有意差は見られない。ただ、第2表のほうで、C群の平均時間が中学、高校ともにやや長いのが、いくぶん目につく。このことについては、次の理解度の項で触れることにする。

1-1-2 「船舶輸出」「原子炉」記事3種類別の理解度 「理解度」と仮りにいうがここでは、これらの記事のあらましや要点を正しくつかみ取るというような内容の理解を問題にするのではなく、もっと表面的な文字面の印象を問題にしている。表記法を変えてみた数量の部分や、固有名詞の部分などが読者の視覚に訴える印象の強弱を見ようとした。被験者には、次のように指示した。「調査票の表紙をめくると、次のページに、一つの新聞記事が印刷してあります。『始め』でいっせいに表紙をめくり、すぐに記事を読み始めます。1回通読したら、こちら（秒数の文字板）を見て、秒数を記入してください。早く読む競争ではありませんから、ふつうの速さで読んでください。秒数を記入したら、記事を

読み返さないで、そのページをめくってください。次のページに、今読んだ記事についての設問がありますから、記事を見ないで、記憶によって、その設問に答えてください。これも、点取り競争ではありませんから、覚えていないことは、書かないで結構です。」この指示がどれだけ徹底したか、確実にはわからないが、テストを実施した時の被験者の状態から見ても、答案の結果から見ても、まずこの指示は守られたものと見てよい。

設問は次のとおりである。

「船舶輸出」については

- | |
|-------------------------------|
| 1. 8月の船舶輸出はおおよそ何トンですか。……………① |
| 2. 現在引合中のものはおおよそ何トンですか。……………② |

「原子炉」については

- | | |
|--|--|
| 1. 原子炉の輸出入契約はイギリスの何会社とイタリアの何会社との間で結ばれましたか。 | |
| 英 { [片かなで]……………① | |
| { [漢字で]……………② | |
| { [ローマ字略号で]……………③ | |
| 伊 { [片かなで]……………④ | |
| { [ローマ字で]……………⑤ | |
| 2. その原子炉の電気出力は何キロワットですか。……………⑥ | |
| 3. ラチナはローマから約何キロ南にありますか。……………⑦ | |

(注) 設問中の点線と○でかこんだ番号とは、今ここで記述の便宜上つけたもので調査票には記していないものである。

被験者は、こういうことを質問されるとは予期しなかったのだろう、どの問いにも無答が非常に多く、半分から8割以上に及ぶものもあった。また、単純再生法の当然の結果として、答えはいろいろに散らばった。答えの正誤を判定した規準は、わずらわしいからここには示さないが、かなり広い巾で正答を認めた。それにもかかわらず正答率はきわめて低かった。「船舶輸出」の①の正答率は第3表のとおりで、ABCの間のどこにも有意差はない。

第3表 「船舶輸出」①正答率

	中学	高校	全体
A	20.0	33.8	27.1
B	24.0	38.0	30.5
C	24.8	34.1	29.1

②にいたっては、どの群でも10%に満たぬ正答率で、比較する意味もない。

新聞記事の中にある数量は、それが読者に何か特別の意味をもたぬ限り、読者はほとんど心にとめて見ることはしないのであろう。今回の調査のような細かい点は問題外である。

ところが、被験者は第1の問題「船舶輸出」で数量をたずねられたため、第2の問題「原子炉」でもそうだと思ったのだらう、こんどは数量の部分だけ、注意して読んだらしい。第4表のような結果があらわれた。

第4表 「原子炉」記事3種類別各問正答率

	中学 (430名)			高校 (400名)			全体 (830名)		
	A(143)	B(134)	C(153)	A(134)	B(140)	C(126)	A(277)	B(274)	C(279)
①	1.4	0	0	2.2	4.2	5.6	1.8	2.2	2.5
②	0.7	4.4	2.6	2.2	14.1	7.3	1.4	9.4	4.7
③	1.4	7.4	4.0	14.9	28.2	25.0	7.9	18.0	13.5
④	7.0	5.9	6.6	23.9	20.4	9.7	15.2	13.3	8.0
⑤	0	1.5	0.7	4.5	0.7	2.4	2.2	1.1	1.5
⑥	35.7	36.0	69.5	40.3	48.6	52.4	37.9	42.4	61.8
⑦	22.4	31.6	31.8	30.6	33.1	45.2	26.4	32.4	37.8

①から⑤までがほとんど問題にならない出来であるのに比べれば、⑥⑦は、相当にできている。そして、C種の問題文を読んだ群が、中高とも成績がいいのが注目される。C群に偶然国語能力の高い者が集まったというような事実はない。(注) C群の成績がよかった理由が外に求められなければ、この問題文の中に求められなければならない。「船舶輸出」記事の結果では、違いらしいものが見えなかったのに、「原子炉」記事では、同じ性質の設問の答えに、どうして、このような違いが見られるのであろう。さきに読了時間を見たときに、「原子炉」のC群がやや時間が長くなっている事実があった。この事実と考え合わせて、一つの推測をしてみたい。

「200,000 キロワット」や「500,000 人」の文字を見たとき、被験者は、おそ

(注) すべての問題文について、各種類に当たった被験者群の国語能力に、群間の差があるといけなないので、各学校の5段階別評価によって度数を調べ、検定した結果、どこにも差は見いだされなかった。Cの1.3項で述べた配慮は、この結果で満されたわけである。

らく、またこの辺をたずねられると思い、0の数をかぞえて、これが「二十万」であり「五十万」であることを確かめたのではなかろうか。それが秒数の増加と、正答率の高さになってあらわれたのではなかろうか。もしこの推測が当たっているなら、C種の表記が読みやすい、わかりやすいとはいえず、むしろ逆だと考えなければならないだろう。

1-2 一般にたてがきとよこがきとの別 「エリコン」記事を問題文にした2種類別は次のとおりである。

(A)

エリコン「三越」へ

——航空展ふたあけ——

- 来る二十日の第六回航空日を記念する日本航空協会主催の航空展覧会は、十六日朝から東京日本橋の三越デパートではじまった。今年末から民間航空はジェット時代に入るので、今度はジェット機を中心にロケット、人工衛星など五百点余の模型やパノラマが展示されている。一階にはさきごろ横浜で陸あげの時騒がれたスイス製誘導弾「エリコン」の二分の一模型、観測用ロケット「カッパー」やドイツ製グライダーなどの実物が並んでいる。
- 七階にはダグラスDC8などジェット旅客機数種の模型と共に、国会で問題になっている航空自衛隊の次期戦闘機の候補になっているグラマンF11F1F、ロッキードF104など四種の大きな模型も出品され、ここでもはげしい売込みを競っているかっこうだ。
- この他、米ソ両大使館も人工衛星のパンガードやスプートニクなどの模型やパネルを出している。二十日の航空日には、東京では「航空の歌」の演奏行進や自衛隊機の編隊飛行などにぎやかな催しものがある。

(B)

エリコン「三越」へ

——航空展ふたあけ——

○来る20日の第6回航空日を記念する日本航空協会主催の航空展覧会は、16日朝から東京日本橋の三越デパートではじまった。今年末から民間航空はジェット時代に入るので、今度はジェット機を中心にロケット、人工衛星など500点余の模型やパノラマが展示されている。1階にはさきごろ横浜で陸あげの時騒がれたスイス製誘導弾「エリコン」の2分の1模型、観測用ロケット「カッパー」やドイツ製グライダーなどの実物が並んでいる。

○7階にはダグラスDC8などジ

ェット旅客機数種の模型と共に、国会で問題になっている航空自衛隊の次期戦闘機の候補になっているグラマンF11F1F、ロッキードF104など4種の大きな模型も出品され、ここでもはげしい売込みを競っているかっこうだ。

○この他、米ソ両大使館も人工衛星のバンガードやスプートニクなどの模型やパネルを出している。20日の航空日には、東京では「航空の歌」の演奏行進や自衛隊の編隊飛行などにぎやかな催しものがある。

1-2-1 「エリコン」記事2種類別の読了時間 第5表が示すとおり、読了時間に有意差はない。ことに高校では、驚くほど一致している。

第5表 「エリコン」記事2種類別、平均読了時間

	中学			高校			全体		
	人数	平均時間 (秒)	標準偏差	人数	平均時間 (秒)	標準偏差	人数	平均時間 (秒)	標準偏差
A	205	73.87	16.69	193	70.09	17.85	398	72.04	17.36
B	212	75.85	17.53	202	70.18	17.16	414	73.08	17.58
計	417	74.88	17.15	395	70.14	17.50	812	72.57	17.48

1-2-2 「エリコン」記事2種類別の理解度 理解度をはかるための設問は次のとおりで、ここでの「理解」は一般の意味の理解に、だいたい近づいている。

今の記事のあらすじをたどり、次の文の□中に適当な語を書き入れてください。（番号に従って、解答欄に書く）

来る□1□日が航空日なので、三越で□2□展が開かれた。会場には誘導弾□3□の□4□大の模型だの、問題の戦闘機□5□や□6□の模型、その他米ソの□7□の模型などが並んでいる。

まず、解答個所ごとの正答率を出して、AB両群間に有意差のあるなしを見よう。

第6表 「エリコン」記事2種類別正答率

	中学（430名）				高校（400名）				全体（830名）			
	A (212)	B (218)	計 (430)	有意 差	A (197)	B (203)	計 (400)	有意 差	A (409)	B (421)	計 (830)	有意 差
①	52.4	55.5	53.9	—	54.8	66.2	60.5	*	53.5	60.6	57.1	*
②	41.0	44.5	42.8	—	60.4	65.2	62.8	—	50.4	54.4	52.4	—
③	59.0	56.4	57.7	—	77.2	86.6	81.9	*	67.7	70.9	69.3	—
④	38.2	45.9	42.1	—	55.3	71.1	63.3	**	46.5	58.0	52.3	**
⑤	26.4	32.1	29.3	—	47.7	52.7	50.2	—	36.7	42.0	39.4	—
⑥	20.8	20.6	20.7	—	40.1	40.3	40.2	—	30.1	30.1	30.1	—
⑦	28.8	31.7	30.2	—	51.8	50.7	51.3	—	39.9	40.8	40.3	—

（注）「有意差」欄の「*」は危険率5%で有意差があること。「**」は、同じく1%で有意差があること、横線は有意差がないことを示す。以下の表でも、これに準ずる。

中学では、どの答えにも有意差はないが、しいて傾向を見れば、③と⑥を除き、あとの答えは、ややB（よこがき）群のほうが出来がいい。それが、高校では、7問中3問に有意差が認められ、いずれも、よこがきのほうが成績がいい。その3問は、①（来る20日）、③（誘導弾エリコン）、④（2分の1大）である。

このように、「エリコン」記事では、読了時間に差が認められず、理解度で7問中3問に、よこがきの優位が認められた。これだけの結果から、よこがきのほうが頭にはいりやすいと断定することは、もちろん、できないが、少なくとも今回の被験者については、現行新聞が用いているたてがき表記のほうがわかりやすいという事実はないことがたしかめられた。さらに、どちらかといえば、よこがきのほうが読みやすいのではないかと考えられる。

1-3 記事を読む速さと学校の国語の成績との関係 被験者の学校の国語の成績と記事読了時間との関係を調べてみた。学校の成績は、正常分配曲線による5段階評価で出している。そこで、読了時間も5段階に区切った。素朴な予想としては、成績の低い者ほど読了に長い時間を要するだろうと考えられたので、成績は低い段階から高い段階へ、時間は長い段階から短い段階へと両カテゴリーを配列し、 $5 \times 5 = 25$ に区分けした度数分布表、すなわち相関表を作った。この相関表から相関係数を算出した。学校の国語の成績といっても、これも毎

第7表 記事読了時間と国語の成績との
関係を示す相関係数

	船舶輸出	原子炉	エリコン
中学 { 男子	0.03	0.19	0.16
{ 女子	0.17	0.01	-0.03
高校 { 男子	0.34	0.12	-0.01
{ 女子	0.19	0.10	0.13

回のテストで動くものであるから、ここで用いた資料が必ずしも、真に学校の国語の成績を示すとは言いきれない。また、学校によって資料の性質も違っていて、一様には比較できない

点もあったが、それ以上の資料は求められなかったから、ここでは、学校から得た資料の妥当性については問題にしないことにする。相関係数を第7表に示す。

係数のいちばん大きいものでも、0.34で、その他は、ほとんど相関関係がないことを示す数字ばかりである。つまり、国語の成績の高い者ほど記事を速く読むという事実はなかったわけで、これは意外であった。

2 語の難易は記事の理解度にどう影響するか —その1—

語の難易度を客観的にきめることは非常にむずかしい。できたとしても、きわめて大規模な調査を必要とする。今ここで難易といったのは、そのような厳密な意味ではない。たまたま問題文にした記事にあらわれた語について、難易の両極を立て、問題作成者が主観的に、中学・高校生にやさしかろう、むずかしかりょうと思うことばを当ててみたまでである。

2-1 「塩酸」記事2種類別の理解度 「塩酸」「アイク書簡」「無きょ出制」と、三つの記事について問題を作ったが、執筆分担のつごう上、第二、第三の記事については、あとで述べることにし、まず「塩酸」記事によってテストした問

題について、その結果を見る。ここでは、耳なれたことばによるくだけた表現と漢語調のややよそよそしい表現とに対する読者の反応の違いを見た。問題文の2種類と設問は、次のとおりである。

(A)

危い！ 交差点に塩酸

築地 転倒続出して大騒ぎ

十一日朝十一時ごろ、中央区築地四丁目都電交差点で約十メートルにわたって塩酸がこぼれていた。ここは中央市場から一時間に二、三千台のトラック、オートバイがひっきりなしに通る地点、スリッブして転ぶオートバイや自転車が続から次。てんやわんやの大騒ぎとなった。築地署から交通巡査が飛んできて整理をするかたわら近くの人がバケツで水をまいたが焼け石に水。三十分後に京橋消防署から消防車がかけつけ道路を洗って騒ぎもおさまった。塩酸をこぼしたのは北区田端町 一九九四、田端運送竹井正太郎運転手のトラックで現場近くでウロウロしていたところを築地署員に見つかった。月島の倉庫から茅ヶ崎に向けて七十本約二トンの稀塩酸を運ぶ途中、ビンが一本割れたもので幸い人命事故はなく、三十五度という薄い塩酸で法規にもふれなかったが、さんさん油をしぼられた。

(B)

危険！ 交差点に塩酸

築地 転倒続出して大混乱

十一日朝十一時ごろ、中央区築地四丁目都電築地交差点で約十メートルにわたって塩酸がこぼれていた。ここは中央市場から一時間二、三千台のトラック、オートバイが通る交通量の多い地点、スリッパして転ぶオートバイや自転車が続出して、交通は大混乱に陥った。築地署から交通巡査が急派されて整理をする一方、近所の人バケツで散水したがとうてい足りない。三十分後に京橋消防署

から消防車が到着、道路を洗って騒動も終った。塩酸をこぼしたのは北区田端町一九九四、田端運送竹田正太郎運転手のトラックで現場近くをはいかしていたところを築地署員に見つかった。月島の倉庫から茅ヶ崎に向け七十本約二トンの稀塩酸を運ぶ途中、ビンが一本割れたもので幸い人命事故はなく三十五度という薄い塩酸で法規にもふれなかったが同運転手は署で訓戒を受けた。

次の文の□の中へ適当な語や文を書き入れてください。(番号に従って解答欄に書く)

- 1 事件のあった築地交差点は①地点である。
- 2 塩酸がこぼれていたため、その地点は②になった。
- 3 ③署から交通巡査が④た。
- 4 近くの人がバケツで⑤たが⑥。
- 5 塩酸をこぼしたトラックの運転手は、現場近くを⑦していたところを見つかった。
- 6 運転手は署で⑧た。

③の「築地署」は、両記事で書き方に違いがないが、そのほかは、問いになった部分は、みな記事文中でのことだが、AとBとで違っている。その違いは、次のとおりである。

A	B
① ～がひっきりなしに通る（地点）	～が通る交通量の多い（地点）
② てんやわんやの大騒ぎ	大混乱
④ 飛んできて	急派されて
⑤ 水をまいた	散水した
⑥ 焼け石に水	とうていたりない
⑦ ウロウロしていた	はいかいしていた
⑧ さんざん油をしぼられた	訓戒を受けた

このような用語の違いが、解答にどうひびいたか、解答箇所ごとの正答率を第8表に示す。

第8表 「塩酸」記事2種類別正答率

	中学（430名）				高校（400名）				全体（830名）			
	A (218)	B (212)	計 (430)	有意 差	A (203)	B (197)	計 (400)	有意 差	A (421)	B (409)	計 (830)	有意 差
①	6.4	9.4	8.1	—	13.8	18.3	16.0	—	10.2	13.7	11.9	—
②	39.9	39.2	39.8	—	37.9	58.9	48.3	**	39.2	48.7	43.9	**
③	66.5	57.0	61.9	*	73.0	75.0	74.0	—	69.5	65.8	67.8	—
④	29.4	18.9	24.4	*	28.1	27.9	28.0	—	29.0	23.2	26.1	—
⑤	60.6	38.2	49.5	**	89.2	66.0	77.8	**	74.3	51.6	63.1	**
⑥	67.9	44.8	56.5	**	86.2	67.5	77.0	**	76.7	55.7	66.4	**
⑦	90.4	26.9	59.1	**	96.6	51.8	74.5	**	93.3	38.9	66.5	**
⑧	64.7	45.8	55.3	**	83.7	81.2	82.5	—	73.9	62.8	67.2	**

中学では、8問中6問に有意差があり、いずれも、くだけた表現によるAのほうが高い。③（築地署）のように、記事の用語に違いのないものにまで差が出ているのはなぜだろう。A群に属した者がB群に属した者より国語能力が高かったのか、それは、前に記したとおり、学校の国語の成績によれば、そういう片寄りはない。それならば、記事全体がAのほうがわかりやすかったために違いのない所まで、よく頭にはいったのかということになるが、そこまでは断定できない。高校では、すこし様子が違って、中学と同じ方向で有意差が出たのは⑤⑥⑦の3問だけであり、②などは逆方向で有意差が出ている。「てん

やわんや」などということばは、問題文作成者は身近なことばと考えて使ったのだが、高校生には、「大混乱」のほうが、よほど身近だったのだろう。

各人の総点を10点として、その平均をみると、第9表に示すとおり、中高ともA群のほうが成績がよく、その差は有意である。

第9表 「塩酸」記事2種類別総点平均と標準偏差

	中学			高校			全体		
	A	B	計	A	B	計	A	B	計
平均点	5.83	3.83	5.14	6.71	6.04	6.38	6.25	5.09	5.60
標準偏差	2.18	2.28	2.52	1.75	2.11	1.98	2.04	2.46	2.35

2-2 「塩酸」記事の理解度と学校の国語の成績との関係 ここでも、理解度を示す総点を5段階に分け、学校の国語の成績の5段階との間で相関表を作り、相関係数を出した。ただし、今度はA群B群を別々に、総点と学校の国語の成績との間の相関表を作り、相関係数を算出した。第10表である。

相関の度合は意外に低い。ことに高校では、ほとんど相関関係がないようである。ABごとに見ると、中高とも、Bのほうが係数が大きい。今、係数の大きい順に群を並べると、中B、中A、高B、

第10表 「塩酸」記事理解度と国語成績との間の関係を示す相関係数

	中学	高校
A	0.26	0.06
B	0.44	0.20

高Aとなる。この順位は、そのまま、被験者が記事を読みながら感じたであろうむずかしさの順序だと考えてもよからう。相対的にいえば、中学生にとってB文はむずかしかったであろうし、高校生にとってA文はやさしかったであろう。そのむずかしかった群では、出来方がやや学校の国語の成績に似ており、やさしかった群では、全く似ていないのである。これは、一つのおもしろい結果だと思うが、その理由をせんさくすることは、今回の調査の目的にそわないから、ここでは、この事実を示すだけにとどめる。

次に、同じく学校の国語の成績を基準にして、成績のいい者とわるい者として記事のAB別の影響がどのように違うかを見よう。学校の成績の5段階評価の上位2段階を合わせて上とし、中位段階をそのまま中とし、下位2段階を合わ

せて下とし、上中下の3階層を作った。各階層の中で、A B両群の出来ぐあい
を比較してみる。第11表がそれである。

第11表 「塩酸」記事2種類別総点平均の国語能力別比較

		中学				高校			
		人数	平均点	標準偏差	A—Bの 有意差	人数	平均点	標準偏差	A—Bの 有意差
上	A	76	6.79	1.87	* *	67	6.82	1.81	—
	B	64	5.03	2.19		54	6.37	1.92	
中	A	87	5.94	2.11	* *	79	6.72	1.68	*
	B	67	3.72	2.09		90	6.13	1.05	
下	A	61	4.48	1.88	* *	49	6.55	1.77	*
	B	75	2.89	2.06		52	5.50	2.48	

中学・高校を各3群に分けた計6群の中でA Bの比較をすると、高校の上群だけが成績が接近しており、有意差がない。高校の中下群では危険率5%で有意差があり、中学ではすべての群で危険率1%の有意差がある。高校の3群をそっくり中学の上ののせて考えることが許されるならば、きわめて大まかにいって、国語能力の低い者のほうが、用語の難易に強く影響されたと見ることができよう。

3 漢語の複合度の高低は記事の理解度に影響を及ぼすか

漢語が非常な結合力・造語力をもつことは広く認められた事実であり、本研究所の書きことば研究室では、その結合の構造を研究している。ここでは、読みやすさの立場から、漢語が複合するほど、語がむずかしくなり、したがってそのような複合した漢語を多く用いて書いた文章全体がわかりにくくなる、という単純な仮説を立てた。

3-1 「地方財政」記事2種類別の理解度 「地方財政」という記事について、2種類の問題文を作った。漢字2字の結合をもって漢語の基本要素と考えて、記事Aでは、なるべく基本要素のままで文章を作り、記事Bでは、やや極端にそれらの要素を複合させて文章を作った。問題文と設問とは次のとおりである。

地方財政の基盤強化

自治庁 の方針 財源に消防施設税など

来年度の予算を編成するに際し減税の問題等を中心に大蔵省と自治庁の意見が対立しているが、自治庁は再建の途上にある地方財政の現況から来年度の予算を編成するに当り、特に地方の財源を充実し確保して地方財政の基盤を強化する意図で、低下した地方の行政施設の水準を引上げて長期にわたり地方の財政を健全化することを強硬に主張し、次の諸点について考

慮するよう要望している。とくに地方の財源を充実すべく消防施設税の創設を打出した点が注目される。さらに自治庁は国、地方を通じて財政支出の合理化を図るため会計年度を国は暦年、地方団体は四月から翌年三月までとする方針で、各方面の意向を打診することになった。

① 地方税の零細な負担を軽減または合理化する。

② 道路の財源を充実するため地方道路税を引上げる。

③ 消防の施設を強化するため保険料を対象として消防施設税を新設する。

④ PTA、消防寄付金など国民生活に直結する行政経費の負担で不当に住民に転嫁されている税外の負担の解消を図る。

(B)

地方財政の基盤強化

自治庁 の方針 財源に消防施設税など

来年度予算編成をめぐり減税問題等を中心に大蔵省と自治庁との間で意見対立があるが、自治庁としては再建途上にある地方財政現況からみて来年度予算編成にあたっては、とくに地方財源充実確保をはかり、その財政基盤強化を期して低下した地方行政施設水準をひきあげ、長期地方財政健全化推進を強く主張し、以下諸点について考慮することを要望している。と

くに地方財源充実のために消防施設創設を打出したことが注目される。さらに自治庁は国、地方を通ずる財政支出合理化をはかるため会計年度を国は暦年、地方団体は四月から翌年三月までとする方針で、各方面の意向打診をする事になった。

①地方税零細負担金軽減合理化をはかる。

②道路財源充実のため地方道路

税を引上げる。

③消防施設強化のため保険料対象の消防施設税を新設する。

④PTA、消防寄付金など国民生活に直結する行政経費負担で住民に不当転嫁されている税外負担解消をはかる。

今の文の主旨をとり□の中にも適当な語を入れてください。(番号に従って、解答欄に書く)

現在、来年度の〔①〕を〔②〕する時期である。その時期に〔③〕と〔④〕との間で意見が〔⑤〕ている。〔⑥〕側が強く主張するのは、地方財政の〔⑦〕化をはかれ
 ということで、具体的な点では消防施設税を〔⑧〕ること、会計年度を国と地方とでかえることなどの方策を出している。その他、地方税の〔⑨〕負担を合理化することや住民に不当に転嫁されている〔⑩〕負担を解消することなどをうたっている。

この問題でも正答の規準はきわめて低くし、①の「予算」を「予算案」「国家予算」「会計予算」「財政予算」などとも書いても正答と認めた。また、③と④の順序が「大蔵省と自治庁」でも「自治庁と大蔵省」でも構わないし、片方だけ書いてあっても、その分は正答とした。設問別の正答率は第12表のとおりである。

第12表 「地方財政」記事2種類別正答率

	中学 (430名)				高校 (400名)				全体 (830名)			
	A (222)	B (208)	計 (430)	有意 差	A (193)	B (207)	計 (400)	有意 差	A (415)	B (415)	計 (830)	有意 差
①	44.1	41.8	43.0	—	66.8	71.5	69.3	—	54.7	56.6	55.7	—
②	26.1	16.3	21.4	*	31.6	40.6	36.3	—	28.7	28.4	28.6	—
③	39.2	29.8	34.7	*	66.8	66.2	66.5	—	52.0	48.0	50.0	—
④	26.6	24.5	25.6	—	60.1	60.9	60.5	—	42.2	42.7	42.4	—
⑤	52.7	56.2	54.4	—	77.2	81.6	79.5	—	64.1	68.9	66.5	—
⑥	27.9	28.4	28.1	—	60.1	53.6	56.8	—	42.8	41.0	41.9	—
⑦	16.7	19.2	17.9	—	33.7	35.3	34.5	—	24.6	27.2	25.9	—
⑧	18.9	16.8	17.9	—	39.9	36.7	38.3	—	28.7	26.7	27.7	—
⑨	5.4	3.4	4.4	—	8.3	11.6	10.0	—	6.7	7.5	7.1	—
⑩	1.4	1.9	1.6	—	9.8	7.2	8.5	—	5.3	4.6	4.9	—

中学で2問だけ有意差が出ているが、いずれも開きは10%に満たぬものであり、注目すべきものとも思われない。また、全体として見たときには、ほとんど問題にならない。そのことは、総点の平均(10点満点)を見れば、いっそうよくわかる。

第13表 「地方財政」記事2種類別総点平均

	中学		高校		全体	
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差
A	3.28	2.31	5.43	2.40	4.28	2.60
B	3.13	2.31	5.38	2.33	4.26	2.58

以上の結果から、この記事とこの被験者に関する限り漢語がこの程度複合しても、理解のさまたげにはならないことがわかる。しかし、わたしどもは、漢語の複合には、やはり問題があると思っている。ただ、複合すればするほど読みにくくなるというふうに機械的に考えることは誤りであろう。漢語がとかく複合するのは、形の上で複合しやすいからというだけでなく、複合させたほうが運用しやすいという機能上の必然性から来ることであろう。その意味では複合がかえって理解を助けている面があるにちがいない。助けになる面とさまたげになる面とを、別々に考えていけば、そこに、複合度と理解度との関係も見出されるかもしれない。今後の課題である。

3-2 「地方財政」記事の理解度と学校の国語の成績との関係 「塩酸」記事について見たのと同じように、「地方財政」記事についても、学校の国語の成績との関係がどうなっているか、第14表で見よう。第14表 「地方財政」記事理解度と国語成績との間の関係を示す相関係数

今度は、高校のB群を除いては、一応の相関関係が成り立っている。高校のA群とB群とで、相関状況にどうしてこのようなちがいがあのかはわからない。こ

	中学	高校
A	0.51	0.46
B	0.53	0.18

の記事についても、「塩酸」記事の第11表で行なったのと同じように、国語能力別にAB比較をしてみたが、今度は6群のどれでも成績は接近しており、有意差は見られなかった。

4 文構造の問題：特定の叙述を主文の主語述語で行なった場合と、修飾語にこめて行なった場合とで、理解度に相違が生ずるか

文構造が単純であるほうが、複雑であるよりもわかりやすいことは、しきりに言われているし、考えただけでも明らかなことである。この方面の研究は、

従来、センテンスの長さに置きかえて進められて来た。しかし、文構造は質の問題だから、これを簡単に量に置きかえることはできない。文構造が単純であれば、センテンスは短くなるだろうし、文構造が複雑ならば、センテンスは長くなるだろう。傾向としてはそうであろうが、センテンスが短かくても、文型が不完全であれば、文構造は単純とはいえないし、センテンスが長くても、単純な構造の文がただ切れずにつながっている場合もある。ここでは文構造の単純ということを、主語と述語とがなるべく短かい距離で直結されているということに限定して考えた。日本語に主語は必要要素でないとか、主語という概

その1 「イラク新政権」

(A)

米国がイラク新政権を承認した。これはダレス米国务長官が明らかにしたようにさきの米英会議で大体決まっていた。会議は長官がバクダッド条約会議出席のためロンドンを訪れた際に行われた。米国は新政権を早速に認めることにあまり乗気ではなかったが、英国は承認を急ぐ必要があった。英国はイラクに大きな石油権益をもつので当面の利害関係にせまられて、強く米国に同調を求めた。

米国内では民主党が議会の外交委員会を中心に、新政権の承認を強く主張した。新政権は国民大多數の支持を得ているのだから、これを承認すれば、今後首脳会談やアラブに対して米国の立場が強くなるというのだ。この主張が政府に強く影響したものとみられる。事実米政府は一方ではアラブ連合がレバノン、イラクなどに浸透するのを非難しながら、アラブの民族主義と正面から対立することは、依然避けており、今後もこの政策を続けるだろう。

米国はジレンマにおちいつている。米政府にはソ連が中近東へ浸透するのがあまりに大きく映る。それで、基本的立場ではアラブをできるだけ理解しようとしていながら実際の政策では、ソ連の浸透への対策が主となり、結果はアラブ民族主義と対立することになる。

(B)

米国のイラク新政権承認は、ダレス米國務長官が明らかにしたように、バグダッド条約会議出席のため同長官がロンドンを訪れた際の米英会談で大体決まっていた。新政権を早急に認めることにあまり乗気でなかった米国に対し、イラクに大きな石油権益をもつ関係上当面の利害関係からも承認を急ぐ必要があった英国は、強く米国の同調を求めた。

主張、米政府に強い影響力をもったものとみられている。事実、一方でアラブ連合のレバノン、イラクなどへの侵透を非難しながら、アラブの民族主義と正面から対立することは依然避けている米政府の政策は今後も続くだろう。基本的にはアラブをできるだけ理解しようとする立場にありながら実際にはソ連の中近東への浸透が米政府にあまり大きく映るため、これに対する政策に重点が移り、それがアラブ民族主義と対立する結果を招くというのが米国のジレンマである。

次の質問に答えてください。(一つだけ○)

- (1) 米国はイラク新政権を承認しましたか
1 承認した 2 承認しない 3 考慮中 4 わからない
- (2) 英国はイラク新政権を承認しましたか
1 承認した 2 承認しない 3 考慮中 4 わからない
- (3) 米国内で民主党の主張はどうでしたか
1 承認せよ 2 承認するな 3 慎重に考えろ 4 わからない
- (4) 中近東問題で、米国はどんな立場に立っていますか
1 アラブ民族主義を支援 2 アラブ民族主義に反対 3 どちらにもふみきれぬ 4 無関心 5 わからない

その2 「イレズミ・コンクール」

(A)

映画「けんか太平記」 拝見

東映はこのところ、さながらイレズミ・コンクールの感がある。皮切りは大川橋蔵の「鳴門飛脚」で橋蔵の不知火小僧が背中一面しらぬい姫のあざやかなところを見せた。つづいて「けんか太平記」では、市川右太衛門の旗本やくざが白波に特大の緋鯉をほる。負けてはならじと東千代之介もぼたんに唐じしという威勢のいいやつをほる。そのほかに十数人のいれずみ男が踊りまくる。

話は右太衛門の旗本やくざが本家のがんこおやじのために、むりやりに御書院勤番に出される

はめとなり、その披露宴に先輩連中を招く。ここが「けんか太平記」のイレズミ・シーンだ。先輩連中が新入りの右太さんを下劣な手段で痛めつけるため、ついに右太さんが勘忍袋の緒をきってバツともろはだをぬぐや背中の緋鯉を出してタンカをきる。このとき、千代之介の木場の小六親分が大ぜいの子分をつけて現われ、全員はなやかないれずみで辰巳の馬鹿踊りを踊るというにぎやかなシーン。

まず右太衛門の背中の緋鯉は二時間余りかかって描き上げた大もの。

千代之介はぼたんに唐じし、子分たちは般若、昇竜、桜、花札、鶴亀など、よくもそろえたと思われるみごとないれずみ。共演の花柳小菊、長谷川裕見子などの女優連もアツと驚いた。

右太衛門、千代之介が踊りぬぐクライマックスはみごとなできばえて小菊のように踊りでブリュッセルまで行った専門家も熱心に見学。背中の美しいいれずみがたがいにからみ合って動くさまは、形容のできないほどのものである。

映画「けんか太平記」 拝見

大川橋蔵が「鳴門飛脚」の不知火小僧で背中一面にしらぬい姫のあざやかないれずみを御披露したのを皮切りに、こんどは「けんか太平記」で市川右太衛門の旗本やくさが白波に特大の緋鯉をほれば、負けてはならじと木場の小六という親分に扮する東千代之介もぼたんに唐じしという威勢のいいやつをはるほか十数人のいれずみ男が踊りまくるという。東映はさながらイレズミ・コンクールの感がある。

この「けんか太平記」のイレズミ・シーンは右太衛門の旗本や

くさが本家のがんこおやじのためにもりやり御書院勤番に出されるはめとなり、その披露宴に先輩連中を招くというところだ。先輩連中が新入りの右太さんを下劣な手段で痛めつけたため、遂に勘忍袋の緒をきった右太さんがバツともろはだをぬいで背中の緋鯉を出してタンカをきいたとき、千代之介の小六が大ぜいの子分をつれて現われ、全員はなやかないれずみで辰巳の馬鹿踊りを踊るというにぎやかなシーン。

まず二時間余を要して背中に緋鯉

を描き上げた右太衛門を先頭に千代之介のぼたんに唐じし、子分たちは般若、昇竜、桜、花札、鶴亀などよくもそろえたと思われるみごとないれずみで、共演の花柳小菊、長谷川裕見子などの女優連をアツと驚かせる。

右太衛門、千代之介が踊りぬくクライマックスはさすがに踊りでブリュッセルまで行った専門家の小菊も熱心に見学するほどのできばえ。背中の美しいいれずみがたがいにからみ合って動くさまは形容のできないみごとなものである。

次の問に答えてください。(一つだけに○)

- (1) 大川橋蔵が「鳴門飛脚」の不知火小僧になって、何の皮切りをしましたか
1 イレズミ 2 イレズミ・コンクール 3 映画 4 踊り 5 わからない
- (2) 右太衛門の何に2時間余りかかりましたか
1 イレズミほり 2 踊り 3 さつえい 4 けんか 5 わからない
- (3) 踊りでブリュッセルへ行ったのはだれですか
1 市川右太衛門 2 大川橋蔵 3 東千代之介 4 花柳小菊 5 長谷川裕見子
6 わからない

念を置くことが日本文法にとつて適当でないという議論もあるが、ここでは、そういう文法論議にはふれない。新聞記事は事実を伝えることが主眼点だから、「何がどうした」が明快にとらえられることがいちばん大事だということで、専ら主語述語を問題にする。

この問題のために、二つの記事を用意し、それらからおのおの2種類ずつの記事文を作った。各問題文と設問は、137ページ以降に示したとおりである。

以上、設問に当たる所で記事文の叙述はどう変わっているか。

「イラク新政権」では

- (1) { A 米国がイラク新政権を承認した。
B 米国のイラク新政権承認は……
- (2) { A 英国は承認を急ぐ必要があった。
B 承認を急ぐ必要のあった英国は……
- (3) { A 米国内では民主党が議会の外交委員会を中心に、新政権の承認を強く主張した。
B 米国内では議会の外交委員会を中心とする民主党が、国民大多数の支持を得ている新政権を承認することは今後の首脳会談およびアラブに対する米国の立場を強めると主張、
- (4) { A 米国はジレンマにおちいっている。
B ……というのが米国のジレンマである。

「イレズミ・コンクール」では

- (1) { A 東映はこのところ、さながらイレズミ・コンクールの感がある。皮切りは大川橋蔵の「鳴門飛脚」で……
B 大川橋蔵が「鳴門飛脚」の不知火小僧で背中一面にしらぬい姫のあざやかないれずみを御披露したのを皮切りに、……という。東映はさながらイレズミ・コンクールの感がある。

- (2) { A 右太衛門の背中へ緋鯉は2時間余りかかって描き上げたもの。
B 2時間を要して背中に緋鯉を描き上げた右太衛門を先頭に……
- (3) { A 小菊のように踊りでブリュッセルまで行った専門家
B 踊りでブリュッセルまで行った専門家の小菊

集計の結果を見ながら、あらためて記事文を見ると、いろいろな所に正誤の判定についての疑問が生じ、結局この問題はあまり適当でなかったことがわかった。設問の各選択枝への支持率は第15、16表のとおりである。

疑問というのはこうであった。「イラク新政権」記事で、米国が新政権を承認したという叙述は、A記事でははっきりしているが、B記事でははっきりし

第15表 「イラク新政権」記事2種類別各問選択枝支持率（選択枝番号に○をつけたのが一応正答としたもの。正答率についてだけ有意検定を施した）

設問	選択枝	中学(430名)				高校(400名)				全体(830名)			
		A (221)	B (209)	計 (430)	有意 差	A (205)	B (195)	計 (400)	有意 差	A (426)	B (404)	計 (830)	有意 差
(1) 米た 国か は承 認し	①承認した	62.0	41.1	51.9	*	75.6	41.0	58.8	**	68.5	41.1	55.2	**
	2承認しない	11.8	21.1	16.3		7.3	10.3	8.8		9.6	15.8	12.7	
	3考慮中	22.2	28.2	25.1		15.1	40.5	27.5		18.8	34.2	26.3	
	4わからない	2.3	7.7	4.9		1.0	5.6	3.2		1.6	6.7	4.1	
	5無答	1.8	1.9	1.9		1.0	2.6	1.8		1.4	2.2	1.8	
(2) 英た 国か は承 認し	①承認した	38.0	50.7	44.2	**	69.8	54.4	62.3	*	53.3	52.5	52.9	—
	2承認しない	34.4	28.7	31.4		12.7	13.3	13.0		23.9	21.0	22.5	
	3考慮中	13.1	8.1	10.7		8.3	14.4	11.3		10.8	11.1	11.0	
	4わからない	8.6	8.1	8.4		8.3	15.9	12.0		8.5	11.9	10.1	
	5無答	5.9	4.8	5.3		1.0	2.1	1.5		3.5	3.5	3.5	
(3) 民主 党の 主張	①承認せよ	38.9	27.8	35.5	*	62.9	50.8	57.0	*	50.5	38.9	44.8	**
	2承認するな	19.0	25.4	22.1		10.2	13.3	11.8		14.8	19.6	17.1	
	3慎重に	24.4	29.7	27.0		12.7	17.9	15.3		18.8	24.0	21.3	
	4わからない	10.0	10.0	10.0		6.8	9.7	8.2		8.5	9.9	9.2	
	5無答	7.7	7.2	7.4		7.3	8.2	7.8		7.5	7.7	7.6	
(4) 米 国 の 立 場	1支援	25.8	27.8	26.7		17.6	17.9	17.8		21.8	23.0	22.4	
	2反対	44.8	40.7	42.8		36.6	23.6	30.3		40.8	32.4	36.7	
	③どちらにも	16.3	16.7	16.5	—	41.0	52.3	46.5	*	28.2	33.9	31.0	—
	4無関心	2.3	1.9	2.1		0	0	0		1.2	1.0	1.1	
	5わからない	3.2	3.8	3.5		1.5	2.6	2.0		2.3	3.2	2.8	
	6無答	7.7	9.1	8.4		3.4	3.6	3.5		5.6	6.4	6.0	

第16表 「イレズミ・コンクール」記事2種類別各問選択枝支持率

設問	選択枝	中学(430名)				高校(400名)				全体(830名)			
		A (225)	B (205)	計 (430)	有意 差	A (202)	B (198)	計 (400)	有意 差	A (427)	B (403)	計 (830)	有意 差
(1) 皮切り	①イレズミ	51.1	67.3	58.8	*	35.6	60.1	47.8	***	43.9	63.8	53.5	**
	②コンクール	38.2	21.5	30.2	**	55.0	29.8	42.5	***	46.3	25.6	36.1	**
	3映画	1.3	3.4	2.3		1.0	2.5	1.8		1.1	3.0	2.0	
	4踊り	3.1	3.4	3.3		0.5	1.5	1.0		1.8	2.5	2.2	
	5不明・無答	6.3	4.4	5.4		7.9	6.0	7.0		7.0	5.2	6.1	
(2) 二時間	①イレズミ	82.7	69.3	76.3	**	95.5	75.8	85.8	***	89.0	72.5	80.8	**
	2踊り	5.8	11.2	8.4		0.5	7.6	4.0		3.3	9.4	6.3	
	3さつえい	3.1	12.2	7.4		0.5	6.6	3.5		1.8	9.4	5.5	
	4けんか	2.2	2.4	2.3		0	3.0	1.5		1.1	2.7	1.9	
	5不明・無答	6.2	4.9	5.6		3.5	7.1	5.3		4.9	5.9	5.5	
(3) ブリュッセル	1 右太衛門	10.7	15.6	13.0		3.5	2.0	2.8		7.2	8.9	8.1	
	2 橋蔵	4.0	6.3	5.1		1.0	0	0.5		2.5	3.2	2.9	
	3 千代之介	12.9	10.7	11.9		4.5	2.0	3.3		8.9	6.5	7.7	
	④小菊	46.7	50.7	48.6	—	65.8	86.9	76.3	**	55.9	68.5	61.9	**
	5 裕見子	3.6	3.9	3.7		3.0	1.0	2.0		3.3	2.5	2.9	
	6 不明・無答	22.2	12.7	17.2		22.3	8.1	15.2		22.3	10.5	16.5	

ていない。本来この記事は、Bが現実のものだが米国がイラク新政権を承認したというニュースを報道するものではなく、先に報道されたそのニュースについての解説をしたものであるから、それを材料にしてAのような記事を作って比較したのは、あまり意味がなかった。英国の承認に至っては、ABともに、「承認した」という事実は書かれていない。承認の事実を一番強く示唆する叙述は、「急ぐ必要があった」という所よりも、むしろ「強く米国の同調を求めた」という所である。とすれば、主語「英国は」と述語「強く米国の同調を求めた」との距離は逆にB記事の方が近い。そのためか、中学ではB群のほうが「承認した」の支持率が高い。しかし、高校では逆で、A群のほうが高い。これはどう解釈したらいいのかわからない。(3)は、記事と設問とがじっくりいっていない。「立場」ということばで「ジレンマ」という気分的なものも意味するし、「対立する結果」という事実をも意味する。「どちらにもふみきれない」という「ジレンマ」につながる選択枝をもって正答と考えたのだが、「対立す

る結果」から引いて考えれば「反対」のほうが正答となろう。この問題作成者のジレンマはA記事でもB記事でも解決されていない。だから、答えの片寄りとしては、高校で、Aでは「反対」に、Bでは「どちらにも」に片寄ったという事実があるが、これをどう評価したらよいかわからない。

「イレズミ・コンクール」でも、(1)の答えはAでは「イレズミ・コンクール」とすべきだが、Bでは「イレズミ」とすべきであろう。記事の書きかえによって意味まで変わってしまったことに気づかなかったのは不注意であった。

以上のようにまずい点がいくつもあって、この2問題は全体として失敗であったが、「イラク新政権」の(3)「民主党の主張」と「イレズミ・コンクール」の(2)「何に2時間余りかかったか」とでは、問題作成に失敗もなかったし、結果も、期待どおりであった。

5 文章構造の問題：文配列の順序は記事理解にどう影響するか

新聞記事の文章構造は、ふつう、見出し、リード、本文の組み立てとして考えられるが、この調査では、見出し、リードはそれぞれ別の問題として扱ったので、ここにいう文章構造とは、本文内の文の配列をさす。ただし、見出しもリードもそなわっている記事から、見出しとリードを除外して扱ったのでは、問題が実際からそれてしまうので、まず着手としては、はじめから見出しもリ

(A)

◇休暇で都内へ私用に出かけた小金井署の火煙鎮治巡査が都電の中から自動車強盗を発見、飛び降りて賊を捕え、警視総監から表彰されることになった。

◇七日午後九時ごろ都電の豊島区日ノ出町停留場付近で、中央区入舟野二の一、山田篤さん運転のタクシーが防犯灯で助けを求めているのを電車の中からみつけた同巡査は、すぐ電車を飛び降り、格闘の末賊を捕え、目白署へ突き出した。

◇賊は千代田区神田神保町三の一、人夫吉田一男(三一)で、山田さんの首を絞め料金を踏み倒そうとしたもの。小金井署では目白署からの連絡ではじめて火煙巡査の手柄を知ったが、同巡査は「当然のことをしただけです」とけんそんしていた。

(B)

◇七日午後九時ごろ、都電豊島区日ノ出町停留場付近を中央区入舟町二の一、山田篤さん運転のタクシーが走っていた。突然乗客の千代田区神田神保町三の一人夫、吉田一男(三一)が山田さんの首を絞め料金を踏み倒そうとしたので、山田さんは防犯灯で助けを求めた。

◇休暇で都内へ私用に出かけた小金井署の大畑錬治巡査が都電の中から防犯灯を見つけ、すぐ電車から飛び降りて格闘の末賊を捕えて目白署へ突き出した。

◇目白署からの連絡で小金井署でもはじめて大畑巡査の手柄を知った。大畑巡査は警視総監から表彰されることになったが同巡査は「当然のことをしただけです」とけんそんしていた。

今の記事はニュースとして、どんな点がおもしろいのですか。次の事項のうち、おもしろさの中心になることがらを三つまたは四つえらんで○をつけてください。

- 1 日ノ出町停留所付近の事件であること
- 2 賊が人夫であること
- 3 大畑巡査が非番中であったこと
- 4 大畑巡査が謙虚な人であること
- 5 電車内で自動車強盗を発見したこと
- 6 自動車の防犯灯が役に立ったこと
- 7 小金井署の巡査が目白で手柄をたてたこと
- 8 大畑巡査が警視総監から表彰されること

ードもない、小さなコラム記事を例にとった。

文の配列も、いろいろな順序が考えられるが、新聞記事の場合は、その目的からいって、そう多面的な技巧は考えられない。論説は別として普通の記事は大体、事実を経過に従って書くことと、それにニュースとしての評価を加えて書くこととである。見出しは評価のあらわれと見ることができる。今回のテストに使ったような見出しのない小記事では、本文自身が見出し、リード、本文のような段どりで書かれている。これを書きなおして、できるだけ事実の経過だけを追った単調な文配列の記事を作った。Bがそれである。

5-1 「非番巡查」記事2種類別の理解の様相 A記事を仮りに評価式と呼び、B記事を事実式と呼ぶ。どちらも、盛られた内容は同じであるが、このように叙述の順序が違ふことによって、ニュースとしての受け取り方に違いが出てくるであろう。設問の選択枝が支持された割合を見よう。

第17表 「非番巡查」記事2種類別選択枝支持率

	中学 (430名)				高校 (400名)				全体 (830名)			
	A (209)	B (221)	計 (430)	有意 差	A (208)	B (192)	計 (400)	有意 差	A (417)	B (413)	計 (830)	有意 差
1	15.3	14.5	14.9	—	4.8	11.5	8.0	*	10.1	13.1	11.5	—
2	11.0	19.5	15.3	*	1.9	6.2	4.0	*	6.5	13.3	9.9	**
3	47.8	43.0	45.3	—	62.5	66.1	64.3	—	55.2	53.8	54.2	—
4	32.5	36.2	34.4	—	31.7	38.5	35.0	—	32.1	37.3	34.7	—
5	79.4	70.1	74.6	*	87.0	72.9	80.3	**	83.2	71.4	77.3	**
6	65.1	69.2	67.2	—	73.1	77.6	75.2	—	69.1	73.1	71.0	—
7	37.8	39.8	38.8	—	31.7	33.9	32.8	—	34.8	37.0	35.9	—
8	27.3	28.1	27.7	—	25.0	23.4	24.2	—	26.1	25.9	26.0	—

中学・高校を通じて有意差が出ているのは、2と5である。1や2は些末な事実と考えられ、AでもBでも支持率は低い、それでも、B記事を読んだ群では、ややそれらへの評価が高くなっている。反対に、5はこの記事でのいちばん主要な事項と考えられるが、それへの評価がBではやや低くなっている。これは、文配列の順序が作用した結果と見られる。

5-2 「非番巡查」記事2種類別の反応と国語の成績 今AB間に支持率の違いが出た選択枝の2と5について、そのような支持率の違いは国語能力とどういう関係になっているかを見るために、学校の国語の成績により上中下の3群に

第18表 「非番巡查」記事設問選択枝2と5との国語能力別支持率

		中学			高校		
		上	中	下	上	中	下
2	A	4.1	14.1	15.9	1.6	0	5.8
	B	14.9	21.1	24.7	6.7	8.6	4.1
5	A	83.6	87.2	65.1	86.9	87.5	61.5
	B	74.6	65.8	71.2	71.7	76.5	79.6

分けて、それぞれの様子を見た。第18表である。

まず目を横に走らせ、A、B各群の中で上中下のへだたりがどうであるかを見る。B群では、一般に上中下間の差があまり見られない。A群では、上と中とはあまり変らないが、下はひとりはなれている。そして、2の支持率は下が高く、5の支持率は下が低い。これはどういうわけであろうか。B記事は平板で、だれが読んでも同じような反応を起すのに対して、A記事はとらえ所があるので、そこを正しくとらえるかどうかの違いが、読解能力の差として、はっきり出てくるというふうに見ることができると思う。今度は国語能力を基準にして、たてにABを比べると、上または上中においては、AB差がはっきりしているが、下においては、ABが接近している。5の方では接近の度をこして片寄りの方向が逆になっている。

結局第18表からいえることはこうである。ニュース価値の評価をしやすいように文章構造を整えたか否かによる読みとり方のちがいは、国語能力の高い者に著しくあらわれ、低い者にはあまりあらわれない。

この結果は、第11表で「塩酸」記事の理解度について見た結果と逆である。用語の難易では、能力の低い者のほうが影響を受ける傾向があったのに、叙述の順序では、能力の高い者のほうが影響を受けた。これは一見矛盾するようであるが、要因の性質を考えてみれば、やはり当然のことである。叙述順序のAB別は、難易のような抵抗量の問題ではなく、質の違う二つの型なのであるからその相違には読解力のある者のほうが敏感に反応するわけであろう。

6 見出しの強調点の相違は記事理解にどう影響するか

「日本脳炎」記事の本文は次のとおり全く同じとし、見出しだけ次の4種類を作って、結局4種類の問題文を作った。

(見出し)

A	日本脳炎対策十分に 都衛生局より要望	C	夜ふかし・寝冷はきんもつ 日本脳炎ことしは多そう
B	蚊をなくそう 日本脳炎ことしは多い	D	予防接種忘れずに 日本脳炎ことしは多そう

恐ろしい日本脳炎の本格的流行期を迎え、都衛生局は九日「ことは昨年三倍くらいの患者（昨年は真性だけで九十九人）が出そうだ」と警告、予防策として、次の事項を守るよう都民に望んでいる。

日本脳炎の発生は、気象条件に大きく左右されるが、ことしは七月下旬から八月上旬にかけて平均気温二十四度以上、日照り時間七時間以上、雨量十ミリ以下と、日脳にはおあつちえの「発生日和」がつづき、この状態は三百七十六人の患者を出した三十一年と非常に似ているという。

予防法としては、病原体のバイカイ役をつとめる蚊の駆除を行うことはもちろん、体力のない中学生以下の年齢の子供は、長い時間直射日光に当たることを避けることが第一。また夏休みだからといって夜ふかしして疲れすぎたり、暑さまけ、寝冷えなどで身体を弱らせないようにすることが大切な予防法の一つ。さらに忘れてならないのは予防接種。九日都衛生局には、十二人の新患者（うち真性二人は死亡）の発生が報告されたが十二人全員が予防接種をしていなかった。

記事の中で、予防法としては次の4つがあげられている。

- ① 蚊の駆除
- ② 直射日光をさける
- ③ 夜ふかし寝冷などをしない
- ④ 予防接種

見出しAは、そのどれをもとりあげず、無色である。Bは①を、Cは③を、Dは④を強調している。設問は次のとおりである。

都衛生局が都民に示した日本脳炎予防法の中で、もっとも根本的方法とされているのはどれですか。（一つだけに○）

- 1 夜ふかし寝冷などで身体を弱らせないこと……………③
- 2 予防接種をすること……………④
- 3 長時間、直射日光に当たらないこと……………②
- 4 蚊を駆除すること……………①

選択枝の順序はこのように本文内の順序とは変えてあるが、今結果を見るには、なるべく混乱をさけるため、選択枝の番号を本文内の順序に置きかえた。それが○でかこんだ番号である。以下この番号を用いる。

A B C D各記事をよんだそれぞれの群で選択枝が支持された度合を見よう。

第19表 「日本脳炎」記事4種類別の設問選択枝支持率

	中学 (430名)				高校 (400名)				全体 (830名)			
	A (103)	B (105)	C (106)	D (116)	A (108)	B (110)	C (87)	D (95)	A (211)	B (215)	C (193)	D (211)
①	24.3	↓37.1	16.1	21.6	35.2	↓52.7	27.6	14.7	29.5	↓45.1	21.2	18.5
②	24.3	21.9	17.0	11.2	4.6	10.1	25.3	5.3	14.2	15.8	20.7	8.5
③	7.8	6.7	↓30.2	7.6	5.6	2.7	↓23.0	4.2	6.6	4.7	↓26.9	6.2
④	40.8	31.4	36.8	52.6	52.8	34.5	23.0	75.8	46.9	33.0	30.6	63.0

矢印は、その見出しが強調した部分を示している。無色の見出しAのもとで選択枝支持の分布を見ると、特殊な圧力がかからない場合の内容評価の順序が、全体で④①②③であることがわかる。そしてB、C、Dと、次々にある部分に圧力のかかった群では、その順序が、

B (①強調).....① ④ ② ③
 C (③強調).....④ ③ ① ②
 D (④強調).....④ ① ② ③

のように変化する。この変化は決してでたらめでない。Aで見られた④①②③の順序を基調としながら、①を強調したBでは①が直前の④を追い越し、③を強調したCでは、③が前の二つ①②を追い越していることがわかる。④を強調したDでは、無論のこと④が1位であり、その支持率は、他の三つより、ぐっと高くなっている。この関係は中高別にみると多少乱れているが、大体において規則的なのがおもしろい。

7 語の難易は、記事の理解度にどう影響するか—その2—

7-1 「無きょ出制」記事2種類別の理解度 「塩酸」記事については、すでに述べた。「アイク書簡」記事については、あとで述べる。ここでは、「無きょ出制」記事について述べよう。まず、問題文を次に掲げる。

社会 保障 制度 審 議 会

「国 民 年 金 制」 案 成 る

社会保障制度審議会（首相の諮問機関＝会長大内兵衛氏）では七日午後、首相官邸で総会を開き、「国民年金制度についての答申案」を決定し、新内閣の成立をまってこれを答申することになった。政府はこの答申を受けてから次の通常国会に「国民年金法案」を提出することを目標に政府案の検討を急ぐことになっているが、国民年金制度のうち、無きよ出の老齢年金は53年1月から、無きよ出の廃疾年金と母子年金は35年4月あるいは7月から、きよ出の年金制度は37年1月からそれぞれ発足させ、順次に国民年金制度の体系を整えていく方針である。

老 齢、 廃 疾、 母 子 三 本 立

無きよ出制は早急に

きよ出制
年金額

老 齢	母 子
三 五 〇 〇 円	二 二 五 〇 円

無きよ出制
年金額

老 齢	母 子
一 〇 〇 〇 円	一 〇 〇 〇 円

七日決定された答申案は前▽第一、制度の立て方略。（月三千五百円）程度とする。文、総説、要綱、補足説明の▽第二、老齢年金①②年金の③無きよ出制の年金は一万八四つの部分から成っているが支給開始年齢はきよ出制の年千円（月千五百円）程度とし、その大要は次の通りである。金は六十五歳、無きよ出制の六歳（就学年齢）以上のもの「前文」略。（大内会長が執年金は七十歳とする。②きよに支給する。）

筆したもので、この答申の意出制の年金額は四万二千円▽母子年金①②母子世帯の範義を説いている（月額三千五百円）程度とす③無きよ出制の年金は一（義務教育終了年齢）未満の

（第一部、総説）略。（学識る。③無きよ出制の年金は一（義務教育終了年齢）未満の経験者委員の今井一男、末高万二千円（月額千円）程度と子（義務教育終了年齢）未満の

信氏が執筆したもので、国民年金の意義、年金財政の問題▽第三、廃疾年金①②廃疾はる。②きよ出制の年金額は二などについての基本的な考え外部障害だけでなく、内部障万七千円（月二千二百五十円）をのべている。）害も含める。年金の支給はす程度とする。③無きよ出制の

（第二部、要綱）（先月中旬べて厳格な意味で症状が完全年金は一万二千円（月千円）の国民年金特別委員会が決定に固定した後に行う。②きよ程度とする。）出制の年金額は四万二千円

(設問)

一郎君は、この記事を読んで、次のような意見を述べました。

一郎「老齢、廃疾、母子年金ともにきょ出制の年金額が無きょ出制の年金額よりも多くなっている。無きょ出制だってお金はチャンとはらうのだから、これでは不公平になる。」

あなたは、一郎君のこの意見をどう思いますか。適当と思うものに○をつけないさい。

(答)

- イ 一郎君の意見は正しい。
- ロ 一郎君の意見はまちがっている。
- ハ どちらとも言えない。
- ニ わからない。

この記事では、「醸出」「無醸出」という、もし漢字をあてるとすれば、本来当用漢字表にはのっていない漢字で表記しなければならぬ、耳にも目にもあまりなれていない語が、記事全体のキーワード(Key Word)となっている。そこで、このキーワードに問題文Aにあるような、その理解を助けるための簡単な注記をつけた場合と、そうでない場合とでは、記事全体の意味理解にどれだけのちがいが生じてくるだろうか。上に掲げたような選択枝を有する設問によって調べてみた。その結果を正答の選択枝(ロ、一郎君の意見はまちがっている)の支持率だけについてみると、第20表のとおりである。

第20表 無きょ出制正答選択枝の支持率

問題文 選択枝	中学 (430名)				高校 (400名)				全体 (830名)			
	A (208)	B (222)	計 (430)	有意 差	A (207)	B (193)	計 (400)	有意 差	A (415)	B (415)	計 (830)	有意 差
ロ、一郎君の意見はまちがっている	57.7	41.9	49.5	**	68.1	44.0	56.5	**	62.9	42.9	52.9	**

A、B二つのグループの間には、危険率1%ではっきりとした有意差を認めることができ、中学・高校とも、Aのほうが正答率が高い。調査票はランダムに配付してあるから、もちろん、両グループの間に能力の差はない。(第21表を参照。この表は、A、B二つのグループを、それぞれの学校の国語科の成績によって段階分けしたものである。表内の数値は、右端の人数を100とする%)

を示す。段階は、1が最優秀、以下2・3・4・5と続く。）

第21表 両グループの国語科成績の比較

国語成績 問題文	1	2	3	4	5	計
A	6.8	25.1	38.4	24.2	5.6	414
B	8.4	23.3	40.3	20.4	7.6	407

7-2 「無きよ出制」記事の理解度と国語の成績との関係 次に、この成績の各段階における選択枝支持率を求めて、A、B二つのグループを比較してみた。そのうち、正答選択枝の支持率についてのみ見てみると、第22表のようになる。この表を見て気づくことは、国語科の成績の良い段階ほど、概して、A、Bの差が大きいこと、および成績の著しく低い段階では、A、Bの両グループの間に有意差が認められないことである。このことは、読解能力のある者ほど、読みやすさ・わかりやすさの条件と考えられるものに速かに順応できること、また読解能力の著しく低い者には難語の注記もほとんど役に立たないことを意味していると考えられる。これは、次にのべる「日中貿易白書」の場合と同様、ひとつの興味ある事実であろう。

第22表 国語科成績と正答選択枝支持率との関係

国語成績	1		2		3		4		5	
問題文	A	B 有意差	A	B 有意差	A	B 有意差	A	B 有意差	A	B 有意差
正答選択枝支持率	75.0	50.0 *	67.3	48.4 *	61.0	47.6 *	56.0	41.0 *	47.8	41.9 —

8 リードに特定の叙述があるかないかということは、記事全体の理解度にもどう影響するか

8-1 「日中貿易白書」記事2種類別の理解度 「日中貿易白書」記事の問題文は次の2種類である。

本文は全く同じで、ただリードに次のような特定叙述があるかないかのちがいがあるだけである。

白書は①日中貿易の重要性を総輸出実績にしめる中共向け輸出量の割合だけで評価してはいけないこと、②今回の中途でのとりやめさえなければ中共市場こそ最も輸出

日中貿易白書

輸出入組合が発表

唯一の拡大市場

四百億円フイ

再開の時を逃すな

日中貿易が中途でとりやめになってから三カ月になるがなお再開の目当てはつかず、関係する業界への影響がジワジワと、広がってきたので、日中輸出入組合(理事長南郷三郎氏)では日中貿易に対する国民全体の理解と協力を得るため日中貿易白書をまとめて七日発表した。白書の要点は次のとおり。

一、貿易が中途でとりやめになった七千万ドルを差引くと、二十七億八千万ドルとなり、昨年の実績を二・七パーセント下回ることになる。しかしこれまで総輸出額の一一・七パーセントしかしめなかった日中貿易の規模はいつまでも固定したものではない。

二、鉄鋼五カ年協定は結ばれたばかりだし、輸出を広げるため輸入市場を他市場から中共市場へかえることも検討されはじめたときだった。対中共市場向け輸出の九〇パーセントが重化学工業品であったことはこれからの日本品の方向と完全に一致するもの、これにコム(対共産諸国輸出統制委員会)が輸出禁止の品目をゆるめた好条件をも考えに入れると、日中貿易は単に一億ドルの規模にとどまるところか、八方ふさがりした。一、中国は世界最大市場の一つである。中国は六億の人口と豊富な地下資源をもった世界最大の国内市場を動員して農業機械、化学肥料、建設資材、燃料、電力、運輸などの各種重工業用品と軽工業用品に対し、比要求を出している。これは第一次、第二次五カ年計画に現われているわけだが、資本主義諸国の貿易も最近五カ年間に四十七カ国相手にふえ、西国を敵としてみる「二つの中国」という態度を示さず、貿易再開の時期をはずさないよう期待する。

三、日本経済にしめる日中貿易の地位
本年度の輸出口標が三十一億五千万ドルであるのに対し、産業別輸出口標が調べた輸出の見込み額は二十八億五千万ドルであったが、これから対中共輸出一億ドルのうちとりやめになってからダメに

一、日本経済にしめる日中貿易の地位
本年度の輸出口標が三十一億五千万ドルであるのに対し、産業別輸出口標が調べた輸出の見込み額は二十八億五千万ドルであったが、これから対中共輸出一億ドルのうちとりやめになってからダメに

の拡大する可能性をもつ市場であったことを主張するとともに、③政府・与党が再開の働きかけをするとき時期をはずさないでほしいと期待している。

このような両者の相違は、被験者の記事全体の理解にどれほどの影響を与えるものなのだろうか。その点を、下に示すような選択枝を有する設問によって確かめてみようとした。結果は、以下に述べるとおりである。

まず、正答の選択枝(ニ)の支持率を、A、B二つのグループ別に求めて、比較してみると、第23表のようになる。

(設問)	
白書は、日中貿易の重要性の評価をどのようにすべきだと主張していますか。次のうち正しいと思うもの一つに○をつけなさい。	
(答)	
イ、中共向け輸出品の内容によって評価すべきだ。	
ロ、中共向け輸出品の内容だけで評価してはいけない。	
ハ、総輸出実績にしめる中共向け輸出品の割合で評価すべきだ。	
ニ、総輸出実績にしめる中共向け輸出品の割合だけで評価してはいけない。	
ホ、わからない。	

第23表 「日中貿易白書」記事の正答選択枝の支持率

問題文 選択枝	中学(430名)				高校(400名)				全体(830名)			
	A	B	計	有意差	A	B	計	有意差	A	B	計	有意差
ニ、総輸出実績にしめる中共向け輸出品の割合だけで評価してはいけない	40.2	23.7	32.1	**	47.0	33.5	40.8	**	43.5	28.3	36.3	**

A、B二つの問題文の間には、その記事理解の上で明らかな有意差を認めることができ、リードに特定叙述のあるAのほうが、正答率が高い。もちろん、A、B二つのグループの間に読解能力の差はない。

第24表 両グループ国語成績の比較

問題文	国語成績					
	1	2	3	4	5	計
A	7.2	22.3	42.0	23.2	5.3	431
B	7.9	26.4	36.4	21.3	7.9	390

（「無きょ出制」の場合と同じく、5段階の国語科の成績によって、各グループを層分けしてみると、第24表のようになる。数字は、右端の総人数に対する百分比を示すが、これによると、両者の間に全く差は認められない。むしろ、理解度の高かったAグループがBグループより若干劣っているとすらいえるかも知れない。）

8-2 「日中貿易白書」記事の理解度と国語の成績との関係 次に、「無きょ出制」の場合と同様、国語科の成績の段階別グループにおける正答率を、問題文ごとに比較してみると、第25表のようになる。4・5の二つの段階を除いて、危険率2％から5％で有意差を認めることができる。また、概して国語の成績のよい段階ほどその差が大ききようである。このことは、読解能力のすぐれている者ほど、文章の読みやすさ・わかりやすさの条件と考えられているものにより敏感に影響される（そのことが、ほかならぬ読解能力なのであろうか）ということを意味していることになる。「無きょ出制」の場合と同様である。

第25表 国語科の成績と正答選択枝の支持率との関係

国語成績	1		2		3		4		5	
問題文	A	B 有意差	A	B 有意差	A	B 有意差	A	B 有意差	A	B 有意差
正答選択枝支持率	71.0	29.0 *	52.1	24.3 *	40.3	27.5 *	39.0	31.3 —	43.5	25.8 —

9 見出し・リードにおける特定叙述の有無、および文章全体の叙述の調子の変化は、記事全体の理解度にどう影響するか

「アイク書簡」の問題は、4種類の問題文からできている。

見出し・リードにおける特定叙述の有無は、記事全体の理解度にどう影響するか、という観点から、記事の本文は全く同じとし、見出し・リードにおいて次のような特定叙述をもつものと、もたぬものと2種類の問題文をつくった。

見出し 米軍は撤退しない

リード ア大統領は、また台湾の米軍は侵略を阻止するため駐留していると、台湾から米軍を引揚げる意思のないことを明らかにしている。

次に、外電の政治記事にありがちな生硬な用語、および文章全体の叙述の調子に若干の手を加えてやわらげたものと、加えないものとのままのものとの2種類の問題文をつくり、この点が、読者の記事全体の理解度にどう影響するかを

中共の説得を頼む

米軍は撤退しない

〔ニューボート十三日発AP〕アイゼンハワー米大統領は十三日、フルシチョフ・ソ連首相の七日付書簡に回答を送り、中共に台湾海峡地域の武力行使を止めさせ、平和交渉を始めるよう中共に働きかけてもらいたいと訴えた。ア大統領はまた、台湾の米軍は侵略を阻止するため駐留しているとのべ、台湾から米軍を引揚げる意思のないことを明らかにしている。

アイク書簡の要旨

フルシチョフ・ソ連首相にあてたアイゼンハワー書簡の要旨は次のとおり。

民および守備隊への定期的補給を困難に始めたというのが事実である。

マ七日付の貴書簡中、台湾地域に危険な状態が存在するといふ点では貴下に同意する

が、危険の根源に関しては同意しない。台湾地域における現在の緊張状態は直接中共の行動により引起されたものであり、国府あるいは米国の行動によるものではない。同地域においてかなり平穏な時期が長く続いたのち、中共は何

れとも核兵器時代における世界の平和と秩序という重大要件を受入れ、領土要求を満足させるための手段として武力を使うことをやめるか、どうかである。台湾地域の米軍は国府に対する条約上の義務を遂行するために行動している

を望んでいる。

マ貴書簡中には、台湾地域に現存する危険の除去に役立つような共通の言葉を発見しようとする努力が見出せないの遺憾である。それとは反対に、貴書簡が現状についてのベ

貴下が、中共指導者に軍事作戦をやめ、台湾問題の平和的解決政策に転ずるよう訴えることを示唆する。

マ台湾問題の平和を妨げる傾きのある問題を解決するため、もし中共指導者が交渉に信頼をおくよう説得されるなら、その時は米國も同じ精神で同じ目的に向つて真剣に努力することを約束する。

台湾問題 米、ソ連に回答

の挑発もないのにいきなり金門島に砲撃を始め、同島の住

マ米政府は台湾地域の緊張緩和の道を見出すため、三年前

ことをねらっているようにみえる。貴下は中共の指導者に過激をいましめるような書簡

中共の説得を頼む

〔ニューボート十三日発「AP」〕アイゼンハワー米大統領は十三日、フルシチョフ・ソ連首相の七日付書簡に回答を送り、中共に台湾海峡の武力行使を止めさせ、平和交渉を始めるよう中共に働きかけてもらいたいと訴えた。

アイク書簡の要旨

フルシチョフ・ソ連首相にあてたアイゼンハワー書簡の要旨は次のとおり。

民および守備隊への定期的補給を困難にし始めたというのが事実である。

米、ソ連に回答

マ七日付の貴書簡中、台湾地域に危険な状態が存在するといふ点では貴下に同意するが、危険の根源に関しては同意しない。台湾地域における現在の緊張状態は直接中共の行動により引き起されたものであり、国府あるいは米国の行動によるものではない。同地域においてかなり平穏な時期が長く続いたのち、中共は何の挑発もないのにいきなり金門島に砲撃を始め、同島の住

マ問題は中共が朝鮮でやったと同様、武力行使によつて野望をとげようとするのか、それとも核兵器時代における世界の平和と秩序という重大要件を受入れ、領土要求を満足させるための手段として武力を使うことをやめるか、どうかである。台湾地域の米軍は国府に対する条約上の義務を遂行するために行動しているであつて、侵略を行うためではなく侵略を阻止するため駐留しているのである。

ジュネーブで始められた大使会談を再開したいとの中共の意向を歓迎した。米国はこの会談によつて台湾問題を解決するため武力に訴えないことを約束する了解ができることを望んでいる。

マ貴書簡中には、台湾地域に現存する危険の除去に役立つような共通の言葉を発見しようとする努力が見出せないのは遺憾である。それとは反対に貴書簡が現状についてのべているところは、事実をありのままのべるよりも、むしろ国際共産主義の野心に役立つことをねらっているようにみえる。貴下は中共の指導者に過激をいましめるような書簡

を發したこともない。私あての書簡が米国の行動を一方的に非難するためのものでなく、平和のための共通の言葉を見出したい希望を反映しているものであるならば、私は貴下が、中共指導者に軍事作戦をやめ、台湾問題の平和的解決政策に転ずるよう訴えることを示唆する。

マ台湾地域の平和を妨げる傾きのある問題を解決するために、もし中共指導者が交渉に信頼をおくよう説得されるなら、その時は米国も同じ精神で同じ目的に向つて真剣に努力することを約束する。

中共の説得を頼む

米軍は撤退しない

〔ニューボート十三日発〕アイゼンハワー米大統領は十三日、フルシチョフ・ソ連首相の七日付の手紙に回答を送り、中共に台湾海峡付近で武力を使うのをやめさせ、平和のための話し合いを始めるよう中共に働きかけをもらいたいとうったえた。大統領はまた、台湾の米軍は外国からの不法な攻撃をはばむためにとどまつてい

アイクの手紙の要点

フルシチョフ・ソ連首相にあてたアイゼンハワー大統領の手紙の要点は次のとおり。マ七日付のあなたのお手紙のうち、台湾地区に危険な状態が存在するという点ではあなたの御意見に賛成しますが、その危険の原因が何かについても賛成できません。台湾地区の現在の緊張した状態は直接中共の行動によつて引き起されたものであり、国民政府や米国の行動によるものではない

米、ソ連に回答

台湾問題

りません。同地区にはかなり平和な時期が長く続いていたのですが、中共はだれも攻撃をしかけないのにいきなり金門島に砲撃を始め、同島の住民や守備隊への定期的補給を行ないたいという中共の考えを喜んで受入れました。米

るためのものでなく、平和のための共通のことは見出し

と思います。

マ台湾地区の平和をさまたげるような問題を解決するため

ことを約束します。

米国の行動を一方的に非難す

台湾問題 米、ソ連に回答

中共の説得を頼む

〔ニューポート十三日発「AP」〕アイゼンハワー米大統領は十三日、フルシチョフ・ソ連首相の七日付の手紙に回答を送り、中共に台湾海峡付近で武力を使うのをやめさせ、平和のための話し合いを始めるよう中共に働きかけてもらいたいとうったえた。

アイクの手紙の要点

フルシチョフ・ソ連首相にあてたアイゼンハワー大統領の手紙の要点は次のとおり。▽七日付のあなたのお手紙のうち、台湾地区に危険な状態が存在するという点ではあなたの御意見に賛成しますが、その危険の原因が何かについては賛成できません。台湾地区の現在の緊張した状態は直接中共の行動によって引き起こされたものであり、国民政府や米国の行動によるものではありません。同地区にはかなり平和な時期が長く続いていたのですが、中共はだれも攻撃をしけないのにいきなり金門島に砲撃を始め、同島の住民や守備隊への定期的補給を

困難にし始めたというのが事の真相であります。

▽問題は中共が朝鮮でやった野望をとげようとするのか、それとも原子兵器時代における世界の平和と秩序という重大な要件を受入れ、領土要求を満足させるために武力を使うのをやめるか、どうかであります。台湾地区の米軍は国民政府に対する条約上の義務を果たすために行動しているものであって、外国を不法に攻撃する不法な攻撃をはばむためにとどまっているのです。

えを喜んで受入れました。米国は、この会談でおたがいが理解し合って、台湾問題を解決するために武力を使わないと約束できるよう希望しています。

▽あなたのお手紙には、台湾地区に現在ある危険をとり除くのに役立つような共通のことは発見しようとする努力が見出せません。これは残念なことであり、それは残念なことです。それは、現状にあなたのお手紙は、現状について事実をありのままのべいているよりは、むしろ国際共産主義の野心に役立つことをねらっているように思われます。あなたは、中共の指導者に過激なことをいましめるような手紙を出したこともありません。私あての手紙が米国の行動を一方的に非難す

るためのものでなく、平和のための共通のことは見出し、たいという希望をうつし出しているものであるなら、私は、あなたが中共の指導者に軍事作戦をやめ、台湾問題を平和的に解決する政策をとるよううたえていただきたいと思ひます。

▽台湾地区の平和をさまたげるような問題を解決するためには、もし中共指導者がおたがいの話し合いに信頼をおくよう説きふせてくださるなら、その時は米国の同じ精神で同じ目的に向って真剣に努力することを約束します。

見ようとした。もちろん、手を加えるにあたっては、記事の内容に増減のないように注意した。

そこで、上の二つの条件を組み合わせると、次のような4種類の問題文ができる。すなわち、

問題文A 見出し・リードに特定叙述があり、かつ文章全体の叙述の調子に手を加えないもの。

問題文B 見出し・リードに特定叙述がなく、かつ文章全体の叙述の調子にも手を加えないもの。

問題文C 見出し・リードに特定叙述があり、かつ文章全体の叙述の調子に手を加えてやわらげたもの。

問題文D 見出し・リードに特定叙述がなく、かつ文章全体の叙述の調子に手を加えてやわらげたもの。

つまり、上にかかげたような四つの問題文ができたのである。

さて、以上のような相違点をもつ4種の問題文をランダムに配付し、それぞれ次に掲げたような選択枝をもつ設問によって、見出し・リードにおける特定叙述の有無、および文章全体の叙述の調子の変化が、被験者の記事全体に対する理解（選択枝支持率）にどれだけの影響を与えるかを見ようとした。結果は以下に述べるとおりである。

（設問）

この記事を読んだ太郎、春雄、秋雄の三君は、おのおの次のように述べました。

太郎 アイゼンハワー大統領は、ソ連と中共が台湾海峡問題の平和的解決に努力するのなら、台湾から米軍を引きあげてもよい、と言っているんだね。

春雄 いや、アイゼンハワー大統領は、台湾海峡の問題を国連が議題にとりあげて、その平和的解決にのり出すのなら、米軍を引きあげてもよい、と言っているんだよ。

秋雄 いやちがうよ。いずれにせよ、アイゼンハワー大統領は、とにかく台湾から米軍を引きあげるなんていうことは言っていないよ。

あなたは、だれの言っていることが正しいと思いますか。正しいと思うものを○で囲んでください。

（答）イ 太郎の言っていることが正しい。

ロ 春雄の言っていることが正しい。

- ハ 秋雄の言っていることが正しい。
ニ わからない。

正答の選択枝〈ハ 秋雄の言っていることが正しい〉の支持率だけについてみると、第26表のとおりである。問題文が四つに分かれているので、中学・高校をふくめた全体についてだけみることにする。この表によると、若干の差ではあるが、C文章（見出し・リードに特定叙述があり、かつ文章全体の叙述の調子に手を加えてやわらげた文章）を読んだグループの正答率が最も高く、A（見出し・リードに特定叙述があり、文章全体の叙述の調子に手を加えないもの）がこれに次ぎ、BとDとは、ほとんど同じで、A・Cとは5%ないし9%弱の開きがある。しかし、有意の差はない。

第26表 「アイク書簡」正答選択枝支持率表

選 択 枝 \ 問 題 文	全 体 (830名)					
	A (228)	B (199)	C (203)	D (200)	計 (830)	有意差
ハ、秋雄の言っていることが正しい	50.0	45.2	53.7	45.0	48.0	—

もちろん、調査用紙は、あらかじめランダムに配付してあるから、おのおののグループの読解能力にかたよりはないはずである。個人個人のそれぞれの学校における国語科の成績の5段階評価によって各グループを層分けしてみると第27表のような分布になっており、大体相似ていることがわかる。

第27表 4グループの国語成績の比較

国語成績 \ 問 題 文	1	2	3	4	5	計
A	8.9	23.7	34.4	25.9	7.1	224
B	6.1	23.0	40.3	24.0	6.6	196
C	8.9	26.1	42.4	16.7	5.9	203
D	6.1	24.2	40.9	22.2	6.6	198

また、5段階評価の各段階内における正答選択枝支持率を問題文ごとに比較してみると、第28表のようになる。表内の数値は、それぞれ（ ）内に示される実人数に対しての百分比である。段階別にみて、問題文相互の間に有意差はない。

第28表 国語成績と正答選択枝支持率との関係

国語成績 問題文	1	2	3	4	5
A	75.0 (20)	60.2 (53)	46.8 (77)	39.7 (58)	31.3 (16)
B	66.7 (12)	37.8 (45)	50.6 (79)	34.0 (47)	46.2 (13)
C	44.4 (18)	64.2 (53)	55.8 (86)	38.2 (34)	50.0 (12)
D	58.3 (12)	56.2 (48)	46.9 (81)	25.0 (44)	38.5 (13)

以上のように、選択枝支持率という点からみて、4種の問題文の間には有意の差は全くないという結果が得られた。これは、問題文の内容が必ずしも適当なものでなかったためではないかと思われる。というのは、問題文が全体として長過ぎたこと、ことがらの性質上、問題文の内容が被験者にあまり興味のあるものではなかったこと、さらに、問題の内容が米ソ、もしくは資本主義陣営と共産主義陣営の対立という問題に直接関係していたこと、この三つが被験者の選択枝支持に大きく作用したのではないかと考えられるからである。被験者の選択枝支持を実際に左右したのは、問題文4種の条件の違いというより、以上の三つのことがからみ合ったもの、さらにいえば、二つの陣営の対立ということについて被験者がもっている公式的な見解であったのではなからうか。第29表のような中学・高校、とりわけ中学における正答選択枝支持の状況をながめた場合、特にこの感が深いようである。

第29表 正答選択枝の支持率

問題文 選択枝	中学 (430名)						高校 (400名)					
	A (125)	B (97)	C (103)	D (105)	計 (430)	有意 差	A (103)	B (102)	C (100)	D (95)	計 (400)	有意 差
へ、秋雄の言っていることが正しい	29.6	24.7	36.9	31.4	30.7	—	74.8	64.7	71.0	60.0	67.8	* AD

10 解説記事の有無は、記事の理解度はどう影響するか

10-1 「FM放送」記事2種類別の理解度 新聞文章、とりわけ報道記事における解説記事の存在は、読者の全体的な記事の理解にどれだけの影響を与えるものだろうか。それを調べる一つの試みとして「FM放送」記事につき、次の2種類の問題文を作成した。

(問題文A)

“ラジオは全部FMに”

郵政省 閣議で切替え要望

田中郵政相は二十七日の閣議で、現在中波で行われているわが国のラジオ放送をすべて、早急にFM(超短波)放送にきりかえるよう検討したいとのべ、了承を得た。

どうする受信機改造

〔解説〕 田中郵政相が現在行

ある。FMは中波にくらべ、電波のとく距離が比較的短いから混信のおそれが少なくなり、それに、FMは音質がよいので、音楽放送には、非常に適している。テレビの音のよいのはFMだからである。従って中波放送は将来、FM放送にきりかえた方がよいことは多くの人が認めており、昨年暮からNHKも実験放送をはじめている。

しかし、これを実施するとなると多くの問題がある。まず放送局の放送設備をきりかえなければならぬが、郵政省の計算では、一局当り五千五百万円ぐらいかかる。そこで郵政省は三十億円程度を補償費として放送局に交付したいといっ

ているが、そうなれば、その予算の獲得が大きな問題となる。

つぎに各家庭の受信については新しく買いかえるか、チューナーという、FMが聞えるようになる機械をとりつけなければならぬが、これは八千円から一万円程度するので、よほど慎重にやらないと問題をおこしかねない。事務的には郵政省の電波管理局が実験放送の結果をみながら、これからFMチャンネル・プランをつくらうという段階で、郵政相の方針にもついて事務当局が本腰を入れて準備をはじめたとしても、実施までには相当の時日がかかるだろう。

(問題文B)

田中郵政相は二十七日の閣議で、現在中波で行われているわが国のラジオ放送をすべて、早急にFM（超短波）放送にきりかえるよう検討したいとのべ、了承を得た。

郵政省 閣議で切替え要望

“ラジオは全部FMに”

現在行なわれている中波放送は、AM放送といって、電波の振幅の大小により音の高低を出す。これに対して、超短波のFM放送は、電波の周波数をかえることによって、音の高低を変化させるものである。FM放送は、AM放送に比して、問題文Aの解説にもあるように、電波の届く距離が短いかわりに、雑音がないし、音質もよい。このため、音楽放送には最も適している。また、外国の強力な中波放送との混信も避けることができる、等の利点をもっている。現にテレビの音もFM放送

(設問)

「ラジオは全部FMに」という郵政大臣の提案は、閣議で各大臣の同意を得ました。したがってわが国のラジオ放送は、いずれFM放送にすべて切替えられることになります。これは、わたしたち一般家庭の受信者にどのようなかわりあいをもっているのでしょうか。正しいと思うものを○で囲んでください。

(答)

- 1 一般家庭の受信者にはなんのかわりあいもない。
- 2 一般家庭の受信者に大きなかわりあいがある。（これを○で囲んだ人は次の問にも答えてください）
- 3 では具体的にどのようなかわりあいがあると思いますか。次に書いて下さい。
- 4 かわりあいがあるか、どうかわからない。

の方式によって放送はされているし、NHKで一昨年暮から実験的に行なっているFM放送の結果も大変よいようである。このようなことから郵政省では、近いよいよ本放送の実施に踏切ることになるようである。

それでは、このようなAM放送からFM放送への切替えという事実を報道するニュース記事が、解説記事（ニュースによって伝達される事がらが、一般読

者に対してもつ意味を解説した文章)を伴なった場合と、そうでない場合とでは、そのニュース記事全体に対する読者の意味理解の上にどれだけの開きがあるだろうか。上に掲げたような選択枝を有する設問によって、その選択枝支持率をみると、第30表のようになる。(表内の数値は、おのおの最下段の人数を100とする百分比。)

第30表 「FM放送」記事の選択枝支持率

(イ) 全体

答	A	B	男	女	男A	男B	女A	女B
1に○	15.3	31.1	18.4	32.6	13.8	23.1	18.5	45.6
2に○, 3に無記入	10.9	7.0	8.0	10.6	8.9	7.1	14.8	6.8
2に○, 3の記入正答	62.4	36.1	57.7	32.6	68.0	47.4	51.1	15.6
2に○, 3の記入誤答	3.5	8.4	5.6	6.7	2.2	9.0	5.9	7.5
4に○	3.5	14.5	7.3	12.4	3.0	11.6	4.4	19.7
無 答	4.4	2.9	3.0	5.1	4.1	1.8	5.3	4.8
計	404	415	537	282	269	268	135	147

(ロ) 中学

答	A	B	男	女	男A	男B	女A	女B
1に○	23.7	41.4	26.1	43.7	21.5	31.0	27.8	57.0
2に○, 3に無記入	15.5	10.2	12.5	13.3	12.6	12.4	20.8	7.0
2に○, 3の記入正答	44.0	20.5	40.9	17.1	51.1	30.2	30.6	5.8
2に○, 3の記入誤答	5.3	10.7	8.0	8.2	4.4	11.6	6.9	9.3
4に○	4.8	14.4	9.1	10.8	5.2	13.2	4.2	16.3
無 答	6.7	2.8	3.4	6.9	5.2	1.6	9.7	4.6
計	207	215	264	158	135	129	72	86

(ハ) 高校

答	A	B	男	女	男A	男B	女A	女B
1に○	6.6	20.0	11.0	18.5	6.0	15.8	7.9	29.5
2に○, 3に無記入	6.2	3.5	3.7	7.3	5.2	2.2	7.9	6.6
2に○, 3の記入正答	81.7	53.0	74.0	52.4	85.1	63.3	74.6	29.5
2に○, 3の記入誤答	1.5	6.0	3.3	4.8	0	6.5	4.8	4.9
4に○	2.0	14.5	5.5	14.5	0.7	10.1	4.8	24.6
無 答	2.0	3.0	2.5	2.5	3.0	2.1	0	4.9
計	197	200	273	124	134	139	63	61

Aの問題文を読んだグループとBの問題文を読んだグループの間には、中学、高校、全体のすべての場合にわたってかなりの開きがある。危険率1%でも完全に有意差を認めることができる。もちろん二つのグループの間には能力の差はない。(第31表を参照。これは前と同様、国語の成績によって、二つのグループをおのおの段階分けし、その全体に対する比率を求めたものである。)

第31表 両グループの国語成績の比較

国語成績	1	2	3	4	5	計
A	8.2	27.0	36.2	21.6	6.9	403
B	6.9	21.5	42.3	23.0	6.2	418

10-2 正答および誤答の内容の検討 次に、設問の選択枝3の記入内容について分析してみよう。同じく正答と認定されたものでも、その内容はさまざまであるが、これを一応三つの類型に分類してみると、第32表のようになる。FM放送への切替という事実のもつ意味を、それぞれのもつ受信機の構造と結びつけてとらえたものが圧倒的に多く、外国のAM放送との混信、音質と音楽放送等の問題に結びつけてとらえることのできるものが非常に少ないことは、A、B二つのグループに共通している。しかしながら、それにしても、受信機の構造に結びつけてとらえることのできたものが、Bグループで35%強にすぎないということは、報道記事における事実的な意味の読みとりということが、いかに困難なものであるかを示していると思う。

第32表 正答の類型

類 型	全体		中学		高校	
	A	B	A	B	A	B
受信機の構造	58.4	35.4	43.0	19.1	74.6	53.0
混信状態	3.9	0.7	0.5	1.4	6.6	0
音楽放送	3.5	1.2	1.0	0.9	7.1	1.5
計	65.8	37.3	44.4	21.4	88.3	54.5

この点は、誤答の内容を検討すると、一層はつきりする。選択枝2に○をつけ、しかも3の記述内容の誤っているものが、全体の場合、Aで5%強、Bで11%弱あるが、いま、そのいくつかの具体例をあげてみよう。

誤答例

- 一軒一軒の差ができず、皆平等になる。(中学 男子)
- 全部FMにすると番組が一つしかできない。(中学 男子)
- ききたいラジオの番組がきけない。(中学 女子)
- 俗悪な番組が減る。(高校 男子)
- 外国の放送まで聞ける。(高校 女子)
- 早く新しいニュースがわかる。(中学 男子)
- よく聞こえ、電気料が減少する。(中学 女子)
- 海外放送が自由に聞けない。(高校・中学 男子・女子)
- 海外放送が聞ける。(中学 男子)

このような結果をみても、新聞文章、とりわけ報道記事の文章の意味理解、さらにはその背後にある事実の意味理解ということがたいへん困難なものであることがわかる。報道記事の中で解説記事がもつ重要性は、当然のことながら、きわめて大きいものといわねばならない。

E. 結果の要約

以上の調査の結果を要約すれば、次のとおりである。

1 たてがき・よこがき

この調査の問題文の程度の長さでは、読了時間に差は認められない。理解度については、設問によっては、よこがきのほうが多少成績のいいものがある。よこがきのほうが読みやすい・わかりやすいと断定することはできないが、たてがきのほうが読みやすい・わかりやすいという事実はない。

2 語の難易

耳なれたことばによる、くだけた表現を含む文章のほうが、漢語調の、ややそよそしい表現を含む文章よりも、わかりやすい。

また、難語が文章のキーワードになっているばあい、その語義の注記があると、文章全体の理解を著しく助ける。逆にいえば、キーワードの語義がわからないと、文章全体の理解が著しく妨げられる。

3 漢語の複合度

問題文の程度の漢語の複合は、理解の妨げにならない。逆に、理解の助けになる面も考えられる。妨げになる面と助けになる面とを考え、漢語の複合度と文章の理解度との相関関係を見いだしていくことが、今後の課題である。

4 文構造

問題設定が適切でなかったので、明確には言えないが、ある特定の叙述を主文の主述関係で行なったほうが、修飾語に含めて行なったものよりも、理解しやすい。

5 文章構造

文の配列の順序のちがいによって、ニュース価値の受け取り方がちがってくることもある。

6 見だし

見だしの立て方（強調点の置き方）のちがいが、本文の記事内容の理解のしかたをかなり強く支配することが認められる。

7 リード

リードの中に、本文の要約・要点が出されていると、記事内容の理解を著しく助ける。

8 解説記事

報道の内容の中心をなす特殊の事実についての解説記事は、全文の理解を著しく助ける。

9 国語科の成績と理解度との関係

全般的に難解な要素を含む文章においては、学校の国語の成績のよい者ほど読みやすさ・わかりやすさの条件と考えられるものに影響される度合いが大きい傾向がある。（たとえば、文の配列のちがいによる文章構造の相違など。）しか

し、語の難易のような、単純な要因については、成績のわるい者のほうが影響を受けやすい。

F. 調査の反省と今後の見通し

本年度の調査の結果は、あらまし以上に述べたとおりであって、十分な成果をあげたとは言いがたい。8箇条の項目についても、あらゆる問題点を尽くしたとは言えないし、仮説の立て方や、問題文の作り方に適切を欠いたものもある。たとえば、「地方財政」記事による“漢語の複合度”の調査については、仮説そのものの検討が不充分であったし“よこがき”についての「船舶輸出」「原子炉」両記事は、仮説と問題文の趣意との間に、食いちがいがあった。また、「日中貿易白書」のように、話題（記事内容）や文章の長さの適切でなかったものもあるし、「イレズミ・コンクール」のように、記事を問題文に作る時の作り方の不適当なものもあった。

このように、調査の手續きに不備な点はあったにしても、調査の目的そのものは、ある程度、果たされたと思う。ただ、実際の新聞記事のどういう点をどのように書きかえたら、よりわかりやすくなるか、という具体的な問題を引きだすまでには、まだまだほどとおいものがある。次の年度以降は、今年度の結果にもとづき、目的に応ずる問題点を明らかにするとともに、調査方法を改良し、調査項目を限定しつつ、掘り下げ、深めて行く方向で、調査研究を継続する予定である。

（永野）

明治時代語の調査研究

A 本年度の仕事

近代語研究室の本年度の仕事は、大きく分けると、つぎの二つであった。

(1) 継続している仕事

『郵便報知新聞』の用語の調査

(2) 新しく始めた仕事

明治初期（1～20年）に刊行された学術・論説的な文献にあらわれた用語の調査

B 仕事の経過

(1) 継続している仕事

本年度は、その整理に当て、併せて、報告書の原稿を作成した。報告書は昭和34年3月に、国立国語研究所報告15『明治初期の新聞の用語』（A 5, 319 ページ）の名で出版された。

なお、助詞・助動詞の整理には、意外に時間がかかり、報告書に収めることができなかったのもので、その概要をこの年報に報告する。

(2) 新しく始めた仕事—明治初期の学術・論説的文献の用語調査—

イ) 必要性

こんにち行なわれている、いわゆる文化語の地盤は、主としてこの時期に形成されたと考えられる。明治初期に刊行されたいくつかの学術・論説的文献にあらわれた用語を調査することによって、われわれはこの領域における用語の形成事情を多少とも見ることができるであろう。

また一方、これらの文献は、比較的硬い文体で書かれたものであるから、文体と用語の関連を、『郵便報知』に引き続いて見ることができるであろう。

報告書ではサンプル以外の紙面から新たに約 8,500 の異なり語を追加した

が、同時代の他の資料からも用語を登録してみたい。

さらに、サンプリング採集と主観的採集の二つの方法を、異なり語の採集能率その他の観点から比較して見たい。

以上いろいろの理由からこの調査を計画した。

ロ) 経 過

い) 資 料

資料として、つぎの22種52冊を選んだ。

原本資料によることを原則とした為に、短期間にそれを収集しなければならず、選定に当っては、資料として適当であったかどうかには多少問題を残した。(注)

1 日本人の作品

- | | | | | |
|------|---------------------|------------------|----|-----------|
| (1) | 山田俊蔵
大角豊次郎 | 近世事情 3編 | 7冊 | 明6.9～7.8刊 |
| (2) | 加藤弘之 | 国体新論 | 1冊 | 明8刊 |
| (3) | 高橋易直(編) | 明治文抄 | 3冊 | 明10.8免 |
| (4) | 同 | 続明治文抄 | 4冊 | 明10.12免 |
| (5) | 福沢諭吉 | 福沢文集 | 2冊 | 明11.1免 |
| (6) | 田口卯吉 | 日本開化小史 | 6冊 | 明11.2免 |
| (7) | 大月曜四郎 | 日本暗射地図教授法 | 1冊 | 明11.7刊 |
| (8) | 渡辺修次郎 | 明治開化史 | 1冊 | 明13.1刊 |
| (9) | 福沢諭吉 | 民間経済録 | 2冊 | 明10.12免 |
| (10) | 同 | 時事小言 | 1冊 | 明14.9刊 |
| (11) | | 東京学士会院雑誌(明治15年度) | 1冊 | 明16.3刊 |
| (12) | 藤田茂吉 | 文明東漸史(内篇) | 1冊 | 明17.9刊 |
| (13) | 青田 ^{みさお} 節 | 内地雑居之準備 | 1冊 | 明19.11刊 |
| (14) | 藤田武城(編) | 文明実地演説(前) | 1冊 | 明20.3刊 |

2 翻訳作品

- | | | | | | |
|------|--|--|--------|-------------|--------|
| (15) | 巴 ^ペ 倫 ^{ロン} 馬 ^{マル} 源 ^{ゲン} 一 ^{イチ} 郎 ^{ロウ} | 見 ^ミ 一 ^{イチ} 郎 ^{ロウ} (独) | 外国交際公法 | 2冊 | 明2.10刊 |
| (16) | 美蘭志 ^{ミランシ} 須英 ^{スエ} 蘭土 ^{ランツ} (英) | 篤 ^{タク} 次 ^ジ 郎 ^{ロウ} | 英氏経済論 | 3冊 | 明4 |
| (17) | チェンバース ^{チェンバース} 前 ^{マゼンバース} 田 ^{マゼンバース} 利 ^{マゼンバース} 器 ^{マゼンバース} | 百科全書
商業編 | 2冊 | 明7.6刊～10.2刊 | |

(注) (7)には、地名等が多く、(13)には、難解な化学薬品名が多い。(3)、(4)、(14)は、原文の再録である。

- (18) 斯島 篤 脩 宇 (英) 消毒新論 1 冊 明 7.10 刊
 (19) 弥林 董・鈴木重孝 兄 (英) 弥兄経済論 8 冊 明 8.11~15.12 刊
 (20) M・デュチャテレット (仏) 娼婦論 2 冊 明10.9 刊
 刀根 宗二郎
 (21) 埃・哥 烈 曼 (仏) 夫婦衛生論 1 冊 明15.9 刊
 平 塚 平
 (22) アルフェース・トッド (英) 英議院政治論(首巻) 1 冊 明15.10 刊
 尾 崎 行 雄

(備考) (11)の中にも二三翻訳を含む。

ii) 方法

前記の必要性にそって、資料を、用語の分量が大体平均するように 8 ブロックに分けた。

1 日本人作品

ブロック No.	資料 No.	
1	1	(7 冊)
2	2, 3, 4, 5	(10 冊)
3	6, 7, 8	(8 冊)
4	9, 10, 11	(14 冊) (11)の翻訳の部分を除く
5	12, 13, 14	(3 冊)

2 翻訳作品

6	15, 16, 17, 18	(8 冊)
7	19	(8 冊)
8	20, 21, 22	(4 冊) 別に(11)の翻訳の部分

用語の採集は、リプリント法と主観法とを併用した。

リプリント法 ページを単位に $\frac{1}{30}$ の間隔でサンプルを無作為に抽出し、そのページの全文をカードに謄写印刷した。カードの採集枚数は、14,980枚であった。表(1)参照。

主観法 リプリント法で採集もれになるかもしれないと主観的に判断した用語を採集する方法である。これもページ単位で $\frac{1}{4}$ の間隔で採集した。採集総枚数は、14,292枚になった。表(2)参照。

表(1) リプリント法による採集データ

ブロック	(1) 全 体	(2) 人 名	(3) 地 名	(4) 数 詞	正 味 (1)-(2)+(3)+(4)	ブロック内 異なり語
1	1,886	74	126	101	1,585	868
2	1,878	11	19	18	1,830	916
3	2,236	72	102	62	2,000	1,125
4	2,086	15	25	85	1,961	970
5	2,054	29	83	27	1,915	1,101
6	1,838	3	11	60	1,764	833
7	1,408	3	15	32	1,358	681
8	1,594	32	16	26	1,520	839
計	14,980	239	397	411	13,933	7,333

(正味 4,828)

表(2) 主観法による採集枚数

ブロック	全 体
1	2,094
2	2,460
3	2,198
4	1,648
5	1,910
6	1,487
7	1,048
8	1,447
計	14,292

iii) 整 理

リプリント法 採集したカードを五十音順に配列した。その順序は、各資料別、ブロック別の順を追って、それぞれ語のふえ方を見ながら進めた。ただし、人名、地名、数詞は、整理の対象外にした。

主観法 本年度は、採集の段階で終り、整理は来年度にゆずった。

iv) 結 果

リプリント法による採集の、書名別の異なり語を見るとつぎのとおりである。

(付 表)

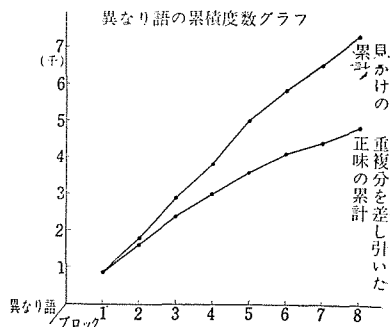
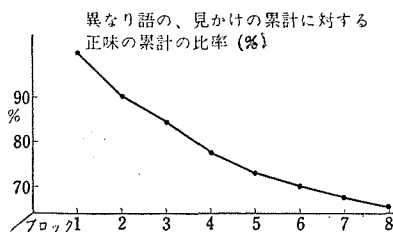
書 名	冊数	採 集 枚 数	異なり語数	異なり語数 採集枚数 × 100 (%)
近世事情	7	1,585	868	54.76
国体新論	1	240	154	64.16
明治文抄(正統)	7	1,080	623	57.68
福沢文集	2	510	304	59.60
日本開化小史	6	1,347	817	60.65

暗射地図教授法	1	50	33	66.00
明治開化史	1	603	387	64.17
民間経済録	2	544	313	57.53
時事小言	1	1,123	626	55.74
学士会院雑誌	1	294	183	62.24
文明東漸史	1	876	582	66.43
内地雑居之準備	1	231	149	64.50
外国交際公法	2	317	185	58.35
英氏経済論	3	878	414	47.15
百科商業篇	2	342	207	60.52
消毒新論	1	227	176	77.53
弥児経済論	8	1,358	681	50.14
娼婦論	2	172	126	73.25
夫婦衛生論	1	718	407	56.68
学士会院雑誌（翻訳）	1	185	132	71.35
英国議院政治論	1	445	284	63.82

また、各ブロックごとの配列を累積して、使用度数を集計した。これを総合配列と呼ぶ。総合配列の結果、すべての異なり語が五十音順に配列された。

(付 表)

ブロック	そのブロック内の 異なり語	見かけの累計	重複を除いた正味の 累計
1	868	868	868
2	916	1,784	1,610
3	1,125	2,909	2,408
4	970	3,879	3,010
5	1,101	4,980	3,639
6	833	5,813	4,089
7	681	6,494	4,421
8	839	7,333	4,828



v) 来年度の予定

このようにして五十音順に配列し終えた語彙表は、来年度にその整理をする予定である。主観法による採集カードと合わせて一つのデータにまとめる。

また、『郵便報知新聞』から採集した語彙をも合わせれば、軟文体作品のそれを欠いてはいるものの、明治初期に行われた各種の用語をできるだけ多く記録にとどめるという必要にはかなうものができると思う。主観法を併用しての用語を採集したのもそれと同じ考え方によるものであった。

さらに、前記必要性の項であれたように、各種のデータを基にして、歴史的調査での方法の検討を行う。(広浜)

C 『郵便報知新聞』の助詞・助動詞の概要

『明治初期の新聞の用語』の調査では、調査単位には、助詞・助動詞を含んでいるが、語彙表の見出し語には、それを外したものを掲げてある。

『明治初期の新聞の用語』には、当然この助詞・助動詞の記述を収めるべきであったが、集計その他に意外に時間がかかって間に合わなかった。以下の概要を併せて御利用いただきたい。なお、用例なども十分に掲げた詳しい報告は、後日改めて何かの形でできるように準備をととのえてある。

はじめに 明治初期の文語文について研究した論文は、余り多くない。従って、この時代の文語文の実相も案外知られていない点がある。たとえば、使用頻度の高い「を」とか「に」とかというような格助詞の用法にも、今日から見ると、かなり変わった用法が見られるのである。その一斑を例文をあげて示すことにしよう。

明治初期の書きことばに用いられている格助詞「を」「に」の用法には、われわれの語感からすれば、ひじょうに奇異に感ぜられるものがかかなり多く見られる。これが一個人の筆癖によるものであれば問題は別であるが、ここには当時いくらかも用例が見られるものであって、一般的な用法であったと思われるものを二三摘出して見ようと思う。

まずこんにちでは、「に」を用いると思われる個所に「を」を用いたものが

ある。(用例の○印はサンプルから、△印はサンプル外から採集した。明 11.5.20. c とは、明治11年 5月20日の新聞 c 層という出典を示している。字体は現行のものに改めたものが多い。)

○～太政復古の基業を策し夙夜勵精献替規畫以て今日の不績^{ひ せき}を賛成^{さんせい}し候段徽感斜^{えいかんなまめ}ならず (明 11.5.20. c)

△討議ノ末起立ヲ命シタルニ本案ヲ賛成スル者 廿七人 (明11.4.16. e)

△又世人ハ～政府ノ處置一モ自由主義ヲ背戾スアレハ喋々之ヲ虐政ト呼ビ～ (明 11.8.8. b)

△～高島氏ノ不撓ノ俠骨ト其功勞ノ偉大ナルヲ感セサル者ナク～ (明11.2.2. e)

「に」の用法にも現代語から見るとかなり変わったものがある。現代語ならば、「を」とか「と」とか「より」などの格助詞を用いるところを「に」で現わしているものがある。

○時計ノ如キハ外飾甚タ麗疎ナルハ其ノ價三十圓ニ下ラス (明10.12.3. b)

△通券一枚ノ價壹弗ナレハ此收入金少ナクトモ四十五萬弗ニ下ラサルベシ (明 11.7.10. d)

△都鄙ニ由テ等差アレハ大抵右ノ錢高ニ基タシク上下セズ (明11.6.26. d)

△三節ニハ附學生徒ノ節散ヲ送レハ其數館主ニ比スレハ甚タ僅少ニテ大抵五分ノ一ニ上下スルト云 (明11.6.26. d)

△但シ其多キ者十兩ニ上ラス少ナキ者二兩ニ下ラス (明11.6.26. d)

△然るニ此三月中收入^{チーブル}の割合にて上進セハ此年度中の收入ハ必らず八九十萬圓^{コウ}ヲ踰るを知ヘシ (明11.8.22. c)

△～爾後一層奮起振作シテ其針路ヲ正理ノ一點ニ指向シ今日ノ名譽ヲ益々皇張スルニ尽力セハ～ (明11.9.21. b)

△～締約會友ト稱スルモノハ此規則ニ遵ヒ會議ニ列シ約束ヲ守リ或ハ會幹委員トナリ此會ノ事業ニ擔任或ハ關與シ各其本分ノ務アルベキ定員ヲ云ヒ～ (明10.12.3. e)

△～起業公債募集の形勢ハ茲ニ廿一日の計算^{マテ}にて千三百五十萬二百圓の額を爲し已ニ募集額ヲ超過する云々～ (明11.7.24. c)

△～彼我景勢ノ相異ナル漸ク今日ノ有様ニ馴致シタルナリ (明11.10.7. b)

「より」の用法にも特異なものがないでもない。

○何に依らず御好みのものを鏡より寫して見せ申さんと言ひけれバ～ (明11.7.27. e)

○所謂人盛ナレバ天ニ勝ツモノニシテ徳川政府ノ嚴法ヨク航海術ノ進歩ヲ妨ケタルヨ

(注) この層は、新聞の欄である。

a 層 (公布・公聞・録事などの公用文) b 層 (社説) c 層 (雑報等の一般のニュース) d 層 (外国からの通信) e 層 (投書その他)

リ外ナラズ（明11.1.10. c）

△～前書之通相定候條右之額 ヨリ 超過不相成様事務施行可致此旨相達候事（明11.2.1. c）

このような用例は、ほかにもまだいろいろあるが、その一端をあげたに過ぎない。一二例見える用例に過ぎないならば、筆者個人の筆癖と言っていいかもしれないが、同様の例が他にいくつも見られるのであるから、当時普通の用法だったのであろう。これらは、前代の文学作品あるいは訓読文に見られる用法であって、この時代かぎりの特別の用法でなかったのかも知れない。いずれにしても、今日のわれわれの目から見て奇異に思われる用法であって、ここに読者の注意を喚起したわけである。

方法 『明治初期の新聞の用語』では、約百二十八万語を母集団とする1年分の郵便報知新聞から約十万の語彙を採集して調査を行なうために、調査対象の全記事を紙面構成の上から五つの層にわけ、行を抽出単位として、どの層も $\frac{1}{12}$ の抽出比で標本を抽出した。われわれは、助詞・助動詞の概観調査を行なうために少なくとも一万程度の標本を必要と考えた。そこで前記の語彙調査で、いわゆる自立語に助詞・助動詞がどんな割合で現われているかを調べたところ、自立語10につき附属語6.5の割合で現われていることを知った。1行当りの自立語の平均は8.810であるから、助詞・助動詞のカードを約一万枚採集するためには、すでに採集されたサンプルから重ねて $\frac{1}{5}$ ずつ抽出すればよい。こうして、無作意に各層から抽出した行数は、次の通りである。

a	b	c	d	e	計
276	360	1,265	139	396	2,436

すなわち、抽出した総行数は、2,436行であるが、この中から助詞10,022（延べ）、助動詞2,829（延べ）

を採集することができた。（2,436行に含まれる自立語の調査単位は延べ20,064である）。

サンプルに現われた限りの用例において、助詞およびそれに準じるものとして取り扱ったものは、次の79種である。

間 ^{あひだ} (接)	だけ (副)	どころか(接)	のみ (副)	や (間)
か (係)	だも (係)	として (格)	は (係)	や (係)
か (並)	つ (並)	とて (格)	ば (接)	やら (副)
か (終)	つつ (接)	とも (接)	ばかり (副)	やら (並)
が (格)	て・で (接)	とも (終)	へ (格)	よ (終)
が (接)	で (格)	ども (接)	ほど (副)	より (格)
かし (終)	で [打消]	な (終)	まで (副)	を (格)
かな (終)	(接)	ながら(接)	まれ (係)	を (接)
から (格)	條 ^{てう} (接)	など (副)	も (係)	を (間)
くらゐ・ぐら	ても (接)	なり (並)	も (接)	をして (格)
ゐ (副)	でも (係)	に (格)	もがな (終)	を ^{もつ} 以て (格)
こそ (係)	と (格)	に (接)	ものか (終)	を ^{もつ} 以て (接)
さへ (係)	と (接)	に ^{おい} 於て (格)	ものから(接)	をや (終)
して (接)	ど (接)	にて (格)	ものを (接)	
すら (係)	と雖 ^{いへど} も (接)	の (格)	や (終)	
ぞ (係)	とか (並)	の (準体)	や (並)	
ぞ (終)	處 ^{ところ} (接)	の (並)	や (接)	

備考 格……格助詞 終……終助詞 副……副助詞
間……間投助詞 準体……準体助詞 並……並立助詞
係……係助詞 接……接統助詞

これらの、助詞または助詞に準じるものとして取り扱った79語の、サンプルにおける延べの使用度数は、10,022であった。

上記の79語を、使用度数の順に示せば次のとおりである。

順位	語	使用 度数	順位	語	使用 度数	順位	語	使用 度数
1	の (格)	2125	14	が (接)	86	27	をして (格)	20
2	を (格)	1671	15	を以て (格)	79	28	條 (接)	16
3	に (格)	1563	16	まで (副)	71	29	處 (接)	15
4	は (係)	1014	17	に於て (格)	60	29	を (接)	15
5	と (格)	682	18	のみ (副)	51	31	か (並)	14
6	て・で (接)	635	19	や (終)	44	31	に (接)	14
7	も (係)	304	20	ど (接)	38	33	など (副)	13
8	ば (接)	250	21	か (係)	35	33	ほど (副)	13
9	が (格)	233	22	か (終)	29	33	や (間)	13
10	より (格)	232	23	ども (接)	28	36	ぞ (終)	12
11	へ (格)	211	24	と雖も (接)	25	36	とて (格)	12
12	にて (格)	106	25	も (接統)	23	38	で (格)	11
13	して (接)	94	26	を以て (接)	21	39	さへ (係)	10

39	ぞ	(係)	10	50	とも	(接)	4	56	をや	(終)	2
39	ながら	(接)	10	54	まれ	(係)	3	68	だも	(係)	1
39	ばかり	(副)	10	54	や	(接)	3	68	つ	(並)	1
43	から	(格)	8	56	間	(接)	2	68	ても	(接)	1
43	として	(格)	8	56	かし	(終)	2	68	でも	(係)	1
45	や	(係)	7	56	すら	(副)	2	68	と	(接)	1
45	よ	(終)	7	56	だけ	(副)	2	68	どころか	(接)	1
47	こそ	(係)	6	56	つつ	(接)	2	68	もがな	(終)	1
48	くらゐ	(副)	5	56	とも	(終)	2	68	ものか	(終)	1
	ぐらゐ			56	な	(終)	2	68	ものを	(接)	1
48	や	(並)	5	56	なり	(並)	2	68	やら	(副)	1
50	かな	(終)	4	56	の	(並)	2	68	やら	(並)	1
50	で〔打消〕	(接)	4	56	の	(準体)	2	68	を	(間)	1
50	とか	(並)	4	56	ものから	(接)	2				

サンプルに現われた限りの用例において、助動詞またはそれに準じるものとして取り扱ったものは、次の32種である。

う	(推量)	しむ	(使役)	ちゃ	(指定)	ます	(丁寧)
き	(過去)	す	(使役)	つ	(完了)	らし	(推量)
けり	(過去)	ず	(打消)	なり	(指定)	らる	(受身)
けん(過去の推量)		「ざり」を含む		ぬ	(打消)	り	(完了)
ごとし	(比況)	た	(過去, 完了)	ぬ	(完了)	る	(受身)
ごとくなり(比況)		だ	(指定)	べし	(推量)	ん(む)	(推量)
さうらふ	(丁寧)	たし	(希望)	まい	(打消の推量)		
さす	(使役)	たり	(完了)	まし	(推量)		
じ	(打消の推量)	たり	(指定)	まじ	(打消の推量)		

これらの、助動詞またはそれに準じるものとして取り扱った32語の、サンプルにおける使用度数は、2,829であった。

上記の32語を使用度数の順に示せば、次のとおりである。

順位	語	使用 度数	順位	語	使用 度数	順位	語	使用 度数
1	なり	(指定) 620	8	さうらふ	(丁寧) 106	14	だ	(指定) 26
2	ず	(打消) 436				15	す	(使役) 18
3	き	(過去) 383	9	り	(完了) 101	16	た	(完了) 16
4	たり	(完了) 266	10	る	(受身) 95	17	けり	(過去) 13
5	べし	(推量) 249	11	ごとし	(比況) 73	18	たし	(希望) 12
6	ん(む)	(推量) 159	12	しむ	(使役) 56	19	ぬ	(打消) 6
7	らる	(受身) 109	13	たり	(指定) 51	20	ます	(丁寧) 5

21	う	(推量)	4	25	まじ(打消の推量)	3	28	さす	(使役)	1
21	ごとくなり(比況)		4	27	まい(打消の推量)	2	28	ちゃ	(指定)	1
21	ぬ	(完了)	4	28	けん(過去の推量)	1	28	まし	(推量)	1
21	じ(打消の推量)		4				28	らし	(推量)	1
25	つ	(完了)	3							

使用度数の分布概観 助詞・助動詞の使用度数を上位から累計して、延べの使用度数に対する％を計算してみると、自立語のそれにくらべて大きな違いがあることを知った。

使用度数	延べ使用度数に対する(%)				
	助詞	助動詞	自立語		
			郵便報知	総合雑誌	婦人雑誌
順位 1～5 の小計	70.4	69.3	6.8	10.2	6.0
順位 6～10の小計	15.6	20.2	3.0	4.0	3.5
計	86.0	89.5	9.8	14.2	9.5

助詞・助動詞の場合は、上位の5語で早く圧倒的大多数の使用度数が出つくしてしまい、上位10語の累積使用度数は、じつに全使用度数の9割近くを占めることが注目される。

文体と用語との関連 『明治初期の新聞の用語』では、自立語で、使用度数の多いもののうちから適当なものをえらんで、硬文体と軟文体での用語の使い分けの状況を調査した。そこで、助詞・助動詞についても、似たような調査をここらみたところ、ほぼ次のような状況が推察された。

	硬文体でよく使われたもの	軟文体でよく使われたもの	候文体でよく使われたもの
助詞	ども(接) のみ(副) や(終) をして(格) をもって(接)	が(接) ど(接)	でう(接) ところ(接)
助動詞	ざり(打消) たり(指定)	ず(打消)	さうらふ(丁寧)

(山田・見坊)

特殊問題の調査研究

同音語の調査

第一資料研究室では、正書法に関する基礎問題についての資料の収集および調査を行なっているが、昭和33年度は、その一環として同音語の調査に着手した。今年度は第1年目である。調査は、松尾拾、市川孝、大久保愛が担当した。

1. 調査の目的

今日、国語改良諸施策の実施に伴って一般文章における、かなのしめる比率が高くなっている。現在、社会に行われている漢字かなまじり文が、しだいに漢字まじりかな文になる傾向であるが、そこから従来は漢字の裏に隠れていた、表記上のいろいろの問題が表に出てきて、新たにその解決をうながす事態を生じている。同音語が問題とされるのもその一つのあらわれであろう。この傾向がさらに進んで、将来、かなばかりで文章が書かれるような事態が、もし起こるとしたならば、同音語がどのような読解上の支障を起こすかを、われわれは、あらかじめ調査しておく必要を感じる。これが調査の第一の目的である。

ただ、その際、この調査の前提には多少のむりを伴うことを考えなければならぬ。もし、かなばかりで文章が書かれるようになれば、必ずや、むずかしいことばづかいや誤解しやすい語は、自然に言いかえられていくであろう。しかし、われわれの研究は現行の文章を基礎としている。そのどの部分が、将来言いかえられる可能性があるかを予測することはできない。したがって、この研究は、現在漢字を用いて書かれている文章がそのままかながきになったとしたら、という想定のもとに考えてゆくほかはない。

さらに、われわれは、同音語による支障が起こる条件を分析してみたい。それは困難な作業を伴うと思われるが、もし、その条件のいくつかを推測し得るならば、進んでその処理の可能性についても検討してみたい。ここに第二の目的を定めた。

2. 調査の資料

この調査は、現代の社会各方面で行なわれている文章を資料にすることが望ましい。しかし、基礎的な大規模な調査を行なうことは、許されない事情にあるので、調査の資料を既成の資料に求めた。今回の調査の基本的な資料として採用したものは次のものである。

I 同音語類音語集（衆議院速記者養成所、昭和29年刊、非売品）

これは、衆議院速記者養成所の用語教科書兼参考書として編まれたもので、語彙は国会の速記録、衆議院記録部編「国会のことば」、日本速記協会編「会議録用字の手引き」その他法令用語辞典の類から選んだもの、また用例は「国会のことば」からとったものであるという。したがって、その範囲が国会における発言に限られるくらいはあるが、具体的な話しことばからの採録として価値あるものと思われる。

II 明解国語辞典

III 広辞林

IV 広辞苑

V 新聞用語辞典

II以下のものはIの欠を補うために調査した。ただし、IV、Vは必ずしも全語彙にわたっては調査しない。補充資料として「広辞林」を選んだのは、この辞書が比較的古風な漢語を採録しており、同音語のリストを作るには、古風な用語であっても、一応採録すべきだと考えたからである。このほか、日本放送協会編の「同音語・類音語」（昭和16年刊）を参考にした。

ところで、資料を上述べたようなものにとる関係で、どうしても手の及ばない部分が出てくることが予想される。

- (1) 連語と単一の語との間の同音語、たとえば、会いたいと相対。辞書には単一の語しか登録されないから、辞書を資料とする限り連語はほとんど出てこない。
- (2) 複合語のある種のもの、たとえば、重大事件と十大事件のようなものは、辞書の構成からすれば、重大と事件とに分けて登録され、重大事件も十大事件も出てくることはない。

このような資料上の欠陥を救うため、採録の際に極力注意することにし、また、別途の資料で補うなどを考慮している。しかし、具体的な文章を資料とし得ないのだから、根本的には解決できない。その点については他日を期することにした。

3. 調査の計画

当初の計画は次のようである。

I 上述の資料からあらゆる同音語をぬき出し

II その語が具体的な文章に用いられたとき、次のような諸点でも全く区別がつかないか、あるいはそのいずれかの点で区別がつくかを推定して検討する。

(1) 位相 (2) 品詞性の異同

(1) 位相については、次のようなものが考えられる。

- (イ) 専門語 専門の分野でしか使われないと思われるもの…法律用語・軍隊用語・理学用語等
- (ロ) 特殊な職業に属する人々、またはある狭い年令層の人々の間では、話しことばにも使われるかもしれないが、一般には話しことば（したがって、これに基く文章）には使われないと思われるもの…阿鰯（海女・尼に対して）
- (ハ) 慣用語句としてしか使われないもの、または慣用語句ほど一定した表現をとらないが、他の語との結びつきが一、二の語に限られているもの…危地・騎虎
- (ニ) 文章語としてしか使われないと思われるもの…危懼・詭計
- (ホ) 現代語としては、話しことば、書きことばを通じてほとんど用いられないと思われるもの…巖客・覇府

(2) 品詞性の異同には、同類の品詞の組み合わせでできる同音語、異品詞の組み合わせでできる同音語が考えられ、前者は後者に比べて、同音語としての支障を起こす可能性が多いと予想される。

III 上述の(1)(2)に基づいて、採録したあらゆる同音語の中から、いくつかのまぎれやすいと思われるグループを推定してぬき出す。

ある語の位相とは、その語が出てくる話の内容を反映しているものであると考えられるから、位相が違うということは、話の内容がおのずから違っていることであろうと想像される。したがって、異なる位相に属する各々の語が、たとえ同じ音であっても、実際には話の内容の違いによって、どちらの意味で使われたかを判断することができるであろう。そう考えられるとすれば、位相が異なるものと位相を同じくするものとを比べれば、まぎれる可能性は前者の方が低いと考えられる。こうして、位相と品詞性の異同によって、同音語のまぎれやすさの段階をつけることが可能かどうかを検討する。

IV 語構成の面から考える。

Ⅲによって得た段階づけは、なお主観的な判断に基づくところが多い。この欠陥を、得られた各グループについて、その語の形態的特徴をとらえることで吟味してみたい。語構成からみた場合に考えられるのは次の点である。

その語が漢字で書かれた場合を考え、

- (イ) 複合語の後半の文字が共通するもの
- (ロ) 複合語の前半の文字が共通するもの
- (ハ) 複合語の前半・後半とも文字が異なるもの

以上の種々の点から見て、同音語の支障を起こし得る条件を分析し、段階づけの可能性を検討する。

4. 調査の実施

昭和33年度は第1年度として、まず前述の資料から同音語をぬき出すことに終始した。抽出したあらゆる同音語の概数は48,000、さらにその中からぬき出した、研究の対象とし得べき同音語のグループは、一部を検討した結果から推せば約6,000と推定される。

なお、当面の対象として取りあげたのは、書きことばにおける同音語の問題であるが、同音語の問題はもちろん話しことばにおけるものも調査しなければならない。上述の調査の範囲でそのための準備も合わせ行なっているが、根本的には社会各方面の談話の録音を資料とする必要があるので、第二次の事業計画として考えたいと思う。

(松尾)

中国の文字改革に関する調査

外国の国語国字問題に関する調査研究のうち、中国大陆を対象とする昭和33年度の調査の概略は次の通りである。資料の収集とその調査には、村尾力が当たった。なお以下の記述は、昭和34(’59)年6月1日現在である。

1. 中国の言語政策の面に重点をおいてながめると、’58年を中心として、大体以下のような動きがあった。

’58年1月の政治協商会議全国委員会において、周恩来首相は「当面の文字改革の任務」と題する報告を行なった。報告は当面の問題として、漢字簡略化、共通語の普及、中国語表音案(ローマ字つづり方)の制定普及の三つをあげ、

それぞれについて説明を行なっている。たとえば、漢字改革について、改革に反対する者はとかく「のどもと過ぎれば熱さを忘る」で、かつて味わった学習の難を忘れがちだ、文盲が漢字を覚えてゆく苦しさを忘れてはいけない、といって改革を説明する。またすでに公布された略字についても、たえず整理と修正をしているが、それが試用でなく正式決定として公布の略字であっても修正を加えてよいといい、また現行略字のいくつかは日本のものを採用したと述べている。ローマ字表音案については、「初めにはっきり言っておきたいのは、これは漢字音の標記や共通語の普及のためのもので、漢字にとって代る表音文字ではないということだ」、(将来の文字をどうするかについては)「今は結論を急ぐ必要はない」という。そして最後に、文字改革は全人民に関わる大事ゆえ慎重にやっている、仕事に欠点があれば改めていく、在来は文字改革の宣伝がたりず誤解さえ受けていた、今後は宣伝に努力して誤解を除きたい、6億の人民が文化的後進状態からぬけ出すため、文字改革を理解し支持し、「促退」でなく「促進」されるよう希望する、と結んでいる。文字だけについて報告の要旨を約言すれば、「一方では漢字の筆画を簡略化し、他方ではローマ字によって漢字注音(ふりがなに相当)する。すなわち、漢字の読みと書きの困難を軽減して、大衆の文字掌握に便ならしめる」ということである。同年2月の第1期第5回全国人民代表大会では、文字改革委員会の呉玉章主任が「当面の文字改革と中国語表音案についての報告」を行なっているが、主旨は周首相報告と同じである。

上記報告がいうように、中国当面の言語文字問題は、文字改革(漢字簡略化とローマ字表音案の普及)および共通語の普及である。またこれらの総合された実際の社会問題として、広大な文盲の識字運動とか共通語普及運動があり、更には少数民族の言語文字問題がある。そして'58年には、全面的国家大躍進の風潮と表裏して、これらの問題、運動にもそれぞれに進展の跡がみられた。

なお上記の共通語(原名は普通話)普及ということには、共通語の確立、その規範化、その学習法に関する研究(語音、語匯、語法すべてを含む)が伴い、少数民族については、少数民族の方言調査とその共通語選定、文字制定という調査研究が伴っている。また'58年には、これら調査研究の立場の確立、すな

わち、いわゆるブルジョワ階級言語理論の批判と新理論の探求という動きもみられた。

2. 漢字簡略化についていえば、'56年1月に、一部は決定、一部は試用として國務院名義で公布されたものは、実際には計545字（ほかに偏旁簡略54種）であり、'58年1月現在で一般の新聞雑誌で実施されていたのは、そのうちの355字であった。

このほか、文字改革委員会と文化部とが共同通知で出した「異体字整理」による整理があって、実際に目にふれる略字（及び略字とみうるもの）は、上記355プラスαである。〔国立国語研究所年報9. p.158参照。〕なお、小学国語教科書の類では、'56年1月公布のほとんど全部が行なわれている。

かくて、一般新聞雑誌でまだ試用されない字が残っている訳であるが、そのうちの70字が'58年5月から試用されることとなり、一般紙上にも登場するようになった。これは、文字改革委員会と文化部との共同通知の形式で出され、まず北京の新聞雑誌から実施し、各省市もできるだけはやく用いるように、となっている。その一端を実例で示せば（・印のもの）

夢乡（夢郷）	坟墓（墳墓）	養录（膳録）	经济栏（經濟欄）
猎师（獵師）	怜爱（憐愛）	邻近（隣近）	山岭（山嶺）
牵制（索制）	疮毒（瘡毒）	丛书（叢書）	盐类（塩類）
阴阳（陰陽）	无故（無敵）	跃进（躍進）	机构（機構）
俘虏（捕虜）	棋盘（棋盤）	凿岩机（鑿岩機）	

の如きものである。かくて國務院公布の個々の簡略字で、決定、試用を問わず一般新聞雑誌で用いられているものは、'59年6月1日現在で計425字となっている（'56年2月1日から260字、同6月1日から95字、'58年5月15日から70字）。

'56年1月公布の54種偏旁簡化による略字は、その一部（30字）を除き、一般新聞雑誌では活字としては用いられていなかった。一部教科書とか一部単行本標題などで用いられるだけであった。しかし、この偏旁簡化による略体活字も、'58年4月からは新聞（人民日報）にも少しずつ現われるようになってきた。たとえば

脹(脹) 張(張) 燒(燒) 曉(曉) 專(專) 傳(傳)
 轉(轉) 違(違) 偉(偉) 圉(圉) 擇(摺) 澤(沢)
 度(度) 撥(撥) 棟(棟) 凍(凍) 練(練) 煉(煉)
 塋(塋) 聾(聾) 橋(橋) 僑(僑) 认识论(認識論)

等々の類である。しかし、日によっては旧字体に戻したり、また同じ日でも記事欄の別によって両体を並用したりして、きわめて柔軟性ある使い方をみせている。

以上のように、略字は次第に通行している訳であるが、その普及とともに、現在の公認略字が少なすぎるという不満がおこってきた。呉玉章の前記報告にも、常用字でまだ簡化されないものとして、鼻、鼠、賽、整、翻、舞、感、その他をあげているが、こうした常用字の全面的簡化要望は当然の勢と思われる。'57～'58年度の関係専門誌にもこうした要望の声はかなり出ており、また実際の手写にはかなり自由に略字が用いられ、時には多少の混乱もおこしているようである。かかる要望にこたえる第2次簡略案も用意され、やがて発表されると伝えられる。またげんに'59年春からは、公刊される大衆向字典の一部には当局の新增簡化字を取り入れたものもある(かように实际的にどしどし進めてゆくやり方は、異体字整理などについても同様である)。たとえば上例諸字についてみると、

鼻(鼻) 鼠(鼠) 賽(賽) 整(整) 翻(翻) 舞(舞) 感(感)

のごとくに簡化されて公刊されている。こうした経緯をここに一言したのは、中国の漢字簡化とは民衆の中に基盤をもっていること、従って全面的に不断に発展する改革であること、またその実施の方法は弾力性に富んでいること、などに注目したからである。

なお古典などの旧文献の出版についてみると、'57年度には、一律に略字や代用字を使用したものがかなり出版され、われわれ外国人には特に読みづらいつい感を与えたが、'58年度からはこの方面での改善の傾向がみえている。現行の代用字(頭髮→頭發とする髮発の類)を避けたほか、単なる筆画簡化で他字との混乱がおきかないような略字をも、旧繁体で印刷する旧文献刊行をみかけるよ

うになってきている。ことに古典の固有名詞などは視覚的にも安定した要素をもつもので、莊子や孫子が→庄子や孙子と改まることには、一部では多少の抵抗を覚えるのであろう。古典と簡略字（筆画簡略字、同音代用字、異体字）の関係は、慎重を要する問題であろう。

漢字に関しては以上のほか、言語政策の一実際面として、呉玉章の前記報告にも述べられているものに、むずかしい漢字（常用でないもの、覚えにくいもの、画数の多いもの等々）を用いた地名を書き換える問題がある。地名書き換えの件は文字改革委員会を中心にはやくから調査されていたが、'58年10月には同会が各省各地の人民委員会あてに、代案を添えて更改の件を建議した。たとえば、邯鄲→含丹、深圳→深鎮（圳と鎮は同音同調）

のごとくで、すなわち、書き換えの代用字とは、書きやすく覚えやすい同音字を原則とする。同音といっても時に声調を異にする場合があり、また当該地方の方言音による同音、つまり標準音からみれば少しく異った場合もある。これらは地方自体の希望によるもので、建議案の方は上記原則にたっている。建議案自体は全国に関連する地名について用意されているが、これらの更改が法律的にいかなる手続でいつ発効するか等については、なお調査未詳である。

3. ローマ字については次の通りである。'56年1月に中国語表音案の草案が広く発表された。これはローマ字字母中Vを除く25字母と、C, q, η, S, Z, の5字母を加えた計30字から成り、できるだけ1音1字母を原則としたものであった。以後1年余これに関する一般の討議改修が行なわれ、'57年11月に至ってその正式草案が国务院全体会議を通過成立した。これはローマ字母26字だけでまかなうもので（さらに、V字は外来語などの専用となっている）、前記1音1字の原則は放棄された。この案が'58年2月の第1期第5回全国人民代表大会を通過し、「漢語表音方案」として正式に成立し、以後各方面で使用されている。方案は、字母表、声母表、韻母表（つづり方の原則を含む）、声調符号、隔音符号の5部からできている。いま具体的な数例を次にあげる（後辺の括弧内は、英文の中で在来通行するWade式系統である。）

中国 Zhongguo (Chungkuo)

北京 Beijing (Peking or Pekin)
広東 Guangdong (Kuangtung or Canton)
青島 Qingdao (Chingtao or Tsingtao)
杏鼎 Xing-xian (Hsing-hsien)
磁器口 Ciqikou (Tz'uch'ik'ou)
毛沢東 Mao Zedong (Mao Tsetung)

以上のように、中国語に基く独自の味をかなり強く反映したものである。われわれ日本人が、このつづりによってこれを日本式ローマ字発音なり、あるいは日本式英語発音しようとしても、ときに困難を伴うものといえよう。

如上の公布までの経過について再言すれば、草案が世に出てから2年を費し、しかも草案とはかなり異なった方案が成立したのであって、この間には一部字典や出版物、識字教育や実験学校において、草案方式が実行されていた訳である。こうした経過を精神的物質的空費とみるか、あるいは社会的な大実験として有意義にみるか、それは人によって異なるであろう。

さてローマ字表音案の当面の目的は、前記の周呉両報告にいうように、漢字への注音として活用し、漢字習得、標準音習得の補助手段として用いることであり、具体的にはまず学校教育にとりいれ、また北方語地区の文盲識字教育に利用し、子供向読物、通俗読物のルビに応用するものである。ある期間後には、電報や各種信号の方面に応用することも考えられている。かくて '58年3月には中央教育部から、'58年秋の新学期以降、小学1年、中学1年、中等高等師範の各1年生は「可能なる限りこれも教学すべき」旨の通知が出され、また文盲の識字教育にも実際に応用されて漢字習得に効果ありとも伝えられる。一般新聞もその紙名題字（ただし題字だけである）の下にそのローマ字書きを加えるようになり、一般単行本の中にも、表紙や扉や奥付などの書名、著者名、発行者名などにローマ字注音するものが出てきた。街頭の各種標示板、看板などの一部にもローマ字注音が少しく行なわれつつあるともいう。もちろん、ローマ字普及を目的として、漢字全文にローマ字注音をした特殊新聞や各種小冊子が出ていることは言うまでもない。

注音という場合、数年前から行なわれている一般刊行物の横組み、横書きは有利な条件を提供しており、各漢字の上にローマ字を並べてゆくのは比較的容

易である（もちろん美醜の問題は論外である）。そして注音は、漢字各字の上に独立して付すことを原則とするが、時には多少の分かち書きを行なう場合もある。たとえば「人民日報」なる題字に対しては、漢字から少しく距離をおいて RENMIN RIBAO の如くにローマ字書きを行なっている。単なる漢字1字ごとの注音形式から、こうした語単位の分かち書き注音へと移行しうるか否かは、将来への大きな問題であろう。ただしいずれの形式にせよ、ローマ字注音する出版物はまだごく少数の特殊出版物だけである。またローマ字をけぎらいする一般感情も少なくないようである。しかし四、五年もたてば、ローマ字を学習した小学生だけでも約1億に達する予定であり、ローマ字はかなり見なれた文字となって、単なる反感とか食わずぎらいはかなり軽減するであろう。

言語学的にみた場合、今後のローマ字文成立の前提条件、準備としては、共通語の確立普及、同音異義語の処置、分かち書きの規制、などが大きな問題であり、後の二者は問題としてわが日本と共通する。これらに対する研究も行なわれており、ことに分かち書きについては、日本の研究に対しても調査が行なわれているように思われる。

なお、'58年9月に中央郵電部は、同年10月1日からローマ字電報を開設する旨の通知を出しているが、その実状についてはなお未詳である。

4. 文字問題に関連するので、文盲一掃運動、識字教育について一言すれば次の通りである。報道('58年)によれば、ここ3～5年内に文盲をなくし、15年ぐらいいさきには全国の青壮年を中卒程度にまで高めたい、という目標のもとに教育活動、識字運動が行なわれている。文盲一掃における在来の一般的基準は、農民の場合、3冊のテキストによる3段階をへて計1,500字見当を覚え、できれば300字ぐらいまでの短文を書くというもので、1日に1時間半ずつ1か月あるいは2か月、実動400～450時間を要しているようである。つまり、1日に平均約30字をたたきこむという訳で、かなり速成強行のゆき方である。この450時間を何とか250時間ぐらいに短縮したいのが一部関係者の希望といわれるが、そういう教学法は確立されていないようである。'58年の大躍進風潮に呼応して文盲一掃運動も大々的に行なわれ、'58年12月現在の報道によれば

学習に参加した青壮年は1億人（それ以前の8年間総計の3倍以上）という強行ぶりである。この数字と社会の急進展とをにらみ合わせて、文字改革は略字の徹底だけで十分ではないか、と説く者も一部に出ているようである。しかし漢字習得という技術面からみただけでも、「復盲現象はかなりきびしい」ようである（一般報道では、復盲率は30%から50%の間にある）。ことに、旧来常識的によくいわれる標準、すなわち「新聞を読むためには3千5百字、大学卒業程度なら五六千字、古典解読には1万字」を要するという標準を考えると、今日の文盲一掃運動と略字だけでは問題解決に不十分のようである。

上記の復盲現象を防止、軽減する手段としても、ローマ字字母は効果があると伝えられ、次第に利用される傾向にあるという。注音識字用としてのローマ字学習（たとえば印刷体小文字を主とする学習）には僅々20時間でたりとか、字母の利用は独習を可能にするゆえ、基準数以上の漢字を習得しうるという報告例もあるし、呉玉章も、某地でのローマ字注音効果を賛美したついでに「こうしたやり方によって3,000～3,500字を覚え、自由閲読ともなれば願ってもないことだ」と希望を述べている。しかし補助手段としてのローマ字利用には限界があろうし、これが十分な解決策とは考えられない。

以上の識字運動を一言でいえば、'58年度の運動は大躍進風潮の中で大強行軍として行なわれ、文字についてみれば、在来の簡略漢字のほかに、ローマ字が補助手段として少しく登場してきた、ということである。（村尾）

国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、次のような文献調査を行った。

I 刊行書の調査

国語学・国語国字問題・国語教育・言語学・言語技術・国語資料・辞典および国文学などの新刊書について、書名・著(編)者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べ、カード化した416冊(1958年1月～12月)の分類目録を作った。

刊行書の分類とその冊数

国語学一般	36	文法指導	3
文法	18	作文	6
方言	13	その他	8
語彙	7	計	75
その他	8	言語学	12
(資料)	9	国文学一般	17
計	91	上古	17
国語国字問題	11	中古	33
言語技術	12	中世	12
マス・コミュニケーション	3	近世	24
辞典・用語集	27	近代・現代	11
国語教育一般	21	作家論	23
学習指導一般	20	詩・短歌・俳句	32
読みの指導	5	文学史	13
読書指導	12	その他	3
		計	185
		合計	416冊

この目録は、下記の雑誌論文、および新聞記事の目録とともに、当研究所編「国語年鑑」(昭和34年版)に掲載されている。

Ⅱ 雑誌論文の調査

当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの逐次刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカード2通を作り，分類別・雑誌別のカード目録を作った。採録した論文・記事の総数は1,948点（1958年1月～12月）に達した。

論文・記事の分類とその点数

国語学		各種用語		5
国語一般	5	名づけの問題		6
国語学上の諸問題	18		計	123
計	23	古典の注釈		
国語史		万葉・源氏・平家・その他		88
国語史一般	9	文 字		
国語史上の諸問題	8	文字一般		12
訓点語	19	漢字・かな		10
計	36	かなづかい		4
音韻・音声			計	26
音韻・音声一般	30	文 体		
音韻の変化	6	文体・表現		32
アクセント	11	近代以前の文体		20
計	47	現代の文体		12
文 法		文学と言語		29
文法上の諸問題	41	翻訳の問題		9
文法の史的・研究	38		計	102
品 詞	19	方 言		
現代語法	18	方言一般		15
計	116	方言の音韻・文法		13
語 彙		各地の方言		
語彙一般	13	（北海道）		2
語句（古語）	63	（東北地方）		13
語句（現代語）	23	（関東地方）		7
新語・外来語	13	（中部地方）		16
		（近畿地方）		3

(中国地方)	15
(四国地方)	8
(九州地方)	9
計	101
敬語	13
話しことば	11
言語技術	
言語技術一般	21
実務技術	4
計	25
マス・コミュニケーション	
新聞	9
放送	21
宣伝	3
計	33
国語問題	
国語問題一般	34
(言語政策)	20
(言語時評)	33
文字の問題	
(国字問題一般)	26
(当用漢字・現代かなづかい)	11
(かな)	8
表記法	
(表記法一般)	13
(送りがな)	9
(横書き・縦書き)	5
(わかち書き)	4
(句読法)	3
共通語と方言	4
ローマ字の問題	22
計	192
国語教育	
国語教育一般	71
指導・学習の問題	96
(改訂学習指導要領)	39

聞く・話す	
(聞くことの指導)	6
(話すことの指導)	32
(話しあいの指導)	19
読むこと	
(読みの指導一般)	13
(読解指導)	57
(読み方の指導)	13
(読書指導)	36
書くこと	
(作文教育)	61
(作文・綴方の指導)	110
(日記・手紙の指導)	13
(文集の指導)	7
文字	
(漢字・かなの指導)	15
(習字の指導)	54
文法	
(文法教育一般)	16
(文法の指導)	27
文学教育	
(文学教育一般)	22
(文学の指導)	33
古典教育とその指導	9
学力・評価	26
新聞・放送の学習	8
国語教科書	13
特殊教育	8
ローマ字教育	
(ローマ字教育一般)	16
(ローマ字の指導)	33
幼児語	15
計	868
国語資料	17
言語学	35
外国語の研究・問題の紹介	8
(外国における国語国字問題)	20
(外国語の研究)	12
外国における日本語研究	4

書 評

計 79

48

合 計 1,948

逐次刊行物の分類と種別数

A 一般刊行雑誌……………169 種

国 語・国文学	45種	総 合 誌	4種
文 学・芸 術	34	中国関係誌	7
国 語 教 育	39	出 版 誌	5
人 文・民 俗	7	そ の 他	25
新 聞・放 送	3		

B 大学・研究所等の紀要・報告類……………104 種

紀 要	48種	論 集	22種
年 報	7	研究報告	27

なお、調査した逐次刊行物は、研究所に寄贈された分（後記、「昭和33 年度に寄贈された図書の一覧(2)逐次刊行物の部」参照）と当所購入による下記の諸雑誌である。

計 量 国 語 学	（計量国語学会）	児 童 心 理	（金子書房）
解 釈 と 鑑 賞	（至文堂）	思 想	（岩波書店）
文 学	（岩波書店）	中 央 公 論	（中央公論社）
文 学 研 究	（文学研究会）	理 想	（理想社）
国語と国文学	（東大国語国文学会）	社 会 学 評 論	（日本社会学会）
声	（丸善KK）	リーダーズ・ダイジェスト	
NHK放送文化	（日本放送協会）		（同日本支社）
教 育	（国土社）	週 刊 朝 日	（朝日新聞社）
教育心理学研究	（国土社）	学 術 月 報	（日本学術振興会）
教 育 心 理	（日本文化科学社）		

Ⅲ 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜き、その整理に当たるとともに、分類別のカード目録を作った。カードの記載形式は、見出し語・（欄名だけで、見出し語のないものは、その内容によって、適宜に題名をつけた。）紙名・筆署名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。調査した紙名は次のとおりで、その切抜数は1,032 点（昭和33年1 月～12月）である。

- (1) 東京出版 (日刊) 朝日 毎日 読売 東京 東京タイムズ 産経時事
日本経済
(夕刊) 朝日 毎日 読売 東京 産経時事 日本経済
- (2) 地方出版 中部日本 同(夕刊)
なお、大阪の山田房一氏、富山の平岡伴一氏など、地方のか
たがたから関係記事のあるごとに恵送されたものがある。
- (3) 特殊新聞 日本読書新聞 図書新聞 週刊読書人 新聞協会報 その他

記事の分類とその点数

国 語		計	28	(たて書き・よこ書き)	
国語一般	22	言語生活	8		20
国語の諸問題	10	話しことば	16	名づけの問題	32
計	32	言語技術	27	敬語の問題	14
国語史	17	実務技術	28	標準語と方言	23
音韻・音声	12	マス・コミュニケーシヨン		計	835
文 法	2	新 聞	15	国語教育	
語 彙		放 送	8	国語教育一般	11
語彙一般	29	宣伝・広告	18	学習指導一般	38
新語・流行語	26	計	41	読むこと	
外来語	18	国語問題		(読書指導)	23
隠 語	38	国語問題一般	60	書くこと	
各種用語	10	言語政策	31	(作文)	4
計	121	(問題語)	44	(習字)	10
文 字		文字の問題		文 字	5
文字一般	6	(国字問題)	16	国語の学力	25
活 字	9	(漢字・漢語)	26	国語教科書	10
計	15	(当用漢字)	473	特殊教育	6
文 体		「当用漢字物語」461 回		ローマ字教育	11
文体表現	28	分を含む。1回を1点		計	143
翻訳の問題	13	と計算した。		言 語	
計	41	(かなづかい)	6	言語一般	7
方 言		表記の問題		外国語	29
方言一般	9	(表記の問題一般)	29	(外人の日本語教育)	5
各地の方言	19	(送りがな)	44	(問題の紹介)	27
		(地名の表記)	17	計	68
				書評・紹介	59
				合 計	1,493

調査紙の種類と記事の点数

朝 日	127	東京タイムズ	52	読 書	36	印刷材料時報	9
(大阪)	22	産経時事	95				
毎 日	163	(大阪)	1	読書人	7	中央タイプ通信	9
(大阪)	6	日本経済	78	図 書	47	北日本	9
読 売	114	(大阪)	1				
(大阪)	5	中部日本	46	新聞協会報	37	富 山	32
東 京	123					合 計	1,032

(上甲・有賀)

図書の収集と整理

前年度に引き続き、研究活動に必要と思われる研究書・参考書・調査資料などを収集し管理した。収集の方針、整理の方法などすべて従来どおりである。

各方面からの寄贈図書も従来と同様、当研究所の書庫の充実に大きな役割を果たしている。また、本年度においては東条文庫の追加として約500点を加えた。

昭和33年度に備えた図書の数は次のとおりである。

単行本	購入	857冊
	寄贈	391冊
雑誌	購入	1,479冊(66種)
	寄贈	945冊(251種)
新聞	購入	15種
	寄贈	3種

本年度末の単行本の蔵書数は24,885冊である。

昭和33年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名(敬称略) 図 書 名

- (1) 単行本 () 内は編著者名。寄贈者と同じ場合は省く。

愛知県教育文化研究所 「十年史」

愛知書院 「日本文学の全貌」(中部国文学会編)

浅野建二 「東北大学蔵本, “踊唱歌”」

粟田寿美衛 「歌集, 苔の花」

石川国語方言学会 「燈心野語」(大北真, 岡文鶴編)

石原千可枝 「歌集谿に住む」

石原忍 「カナ文字とローマ字」

愛媛大学 「大山祇神社連歌」(和田茂樹)

遠藤嘉基 「ことばと文学」

大阪大学附属図書館 「大阪大学図書目録」

天津市教育研究所 「天津のこども Ⅶ 小学校全学年編」「天津のこども Ⅷ 中学校1・2・3学年編」

越智計市 「中学一年生の教育漢字の読み方書き方の指導の記録」

尾鷲市立中央公民館 「尾鷲のことば」(太田寿綱)

賀集寛・久保和男 「三音節動詞の連想価表(統報)」

金沢文庫 「金沢文庫古文書第十輯・第十一輯・第十二輯」

鎌田庄二 「国語教育の実践」

鎌田良二 「阪神間方言語法」

京都大学人文科学研究所 「昭和三十・三十一年度東洋史研究文献類目」

近畿方言学会 「郷語書誌稿続篇」(大田栄太郎)

宮内庁書陵部 「東山御文庫本冀明抄」「図書寮典籍解題歴史篇」「図書寮典籍解題
続歴史篇」「いはでしのぶ」「むくら三」「土右記」「水左記 康平七年春
夏」「水左記 康平七年秋冬」「桂宮本叢書 第二巻・第三巻・第四巻・第
五巻・第六巻・第七巻・第九巻・第十二巻・第十三巻・第十四巻・第十五
巻・第十七巻・第十八巻・第十九巻」

慶応義塾大学 「斯道文庫善本展覧会目録」「図書館蔵和漢書善本解題」

慶応義塾大学文学部 「国文学」

高知大学国語学国文学研究室 「鹿持雅澄遺稿」

語学教育研究所 「大学進学希望者に要求すべき英語の学力の最低基準」

国学院大学図書館 「梧陰文庫目録図書之部」

国立教育研究所 「蔵書目録(私書之部教育)」「蔵書目録(洋書之教育)」「蔵書目録
(洋書の部教科書目録)」

国立国会図書館 「逐次刊行物目録(昭和32年版)」

此島正年 「古代における主格助詞“が”“の”」

小林芳規 「古点の況字統紹」

コロンビア大学図書館 「新書目録」 No. 48, 49, 50, 51, 52, 53, 54, 55

阪倉篤義 「新撰字鏡国語索引」「倭語類解」(京都大学国語学国文学研究室編集)

佐々木信綱 「野村望東尼全集」

三省堂編修所 「明解日本語アクセント辞典」

信濃教育会 「伊沢修二選集」

寿岳章子・樺島忠夫 「山下清の文章」

信州大学図書館 「雑誌目録和文篇(昭和32年)」

菅禄馬 「玄酒(句集)」

全日本教育系大学児童文化連盟 「現在の児童文化における諸問題」

高羽五郎 「スピリッアル修行(原文)」2, 3, 4

竹内強一郎 「漢字の機械化」

田町常夫 「日本語への自動翻訳のための構文操作について」「自動翻訳機」

為貞節穂 「那岐山麓の民俗」「八塔寺周辺の民俗」(岡山民俗学会編)

寺師忠夫 「奄美方言の研究, 第四編(語い)」

天理大学人文学会 「学術雑誌総合目録(昭和20年—32年)」

天理図書館 「お伽草子」「独逸文人自筆集」
 土居重俊 「土佐言葉」
 東京外国語大学 「六十周年記念論文集」
 東京教育研究所 「小学校低学年聞き方指導案の研究―二学年を中心に―」
 東京芸術大学 「収書目録」 No. 23
 東京大学史料編纂所 「大日本史料」第二編之十一，第三編之十四，第五編之二十一，
 第七編之十六，第九編之十三，第十編之九，第十二編之三十九「大日本古文
 書」家わけ第十八，第十九，幕末外国関係文書之二十八「大日本近世史料」
 小倉藩人畜改帳五，唐通事会所目録二「大日本古記録」九曆，後二条師通記
 下「史料編纂所収書目録第一部和漢書刊本編 1」
 東北大学文学部 「東北方言実地調査表（文法の部）」
 東洋文化研究所 「新収和漢図書目録 3（昭和32年度）」「新収和漢図書目録 4（昭和
 32年度）」「新収和漢図書目録 5（昭和33年度）」「アジア地域関係文献速報」
 第 1 号，第 2 号，第 3 号
 仲田庸幸 「田舎教師の記」
 名古屋大学言語学談話会 「長崎県口之津方言素描（Ⅰ）」（南不二男）「現代日本語
 の受身」（石垣幸雄）「クリカエシ」（石垣幸雄）
 西尾光雄 「サ変動詞“ず・する”の補助的用法」
 日本音響学会 「明瞭度試験法の規準」
 日本学術振興会 「昭和31年度総合試験研究報告集録（人文科学編）」「科学試験研究
 報告集録（社会科学編）」「研究報告集録社会科学編昭和33年版」
 日本国語教育学会 「国語の系統学習」
 日本新聞協会・新聞用語懇談会 「外国映画人名の書き方」
 日本新聞協会 「メートル法の使い方」「活字字体統一中間報告書」
 日本放送協会 「スポーツ辞典Ⅱ，相撲」「スポーツ辞典Ⅲ，陸上・水上競技」「ス
 ポーツ辞典Ⅳ，テニス・卓球競技」「テレビの用字・用語と書き方」「メー
 トル実施要領」「放送気象用語集―増補改定資料―」
 服部四郎 「NASALIZATION OF VOWELS IN RELATION TO NASALS」
 林田明 「音声の表現とその効果」
 広島大学国語学研究室 「古本説話集総索引（一）」
 藤林忠 「THE JAPANESE LANGUAGE」
 藤原与一 「方言地理学演習」（愛宕八郎康隆・神部宏泰）
 北条忠雄 「未分化品詞としての声態詞・様態詞の設定」「上代国語における母韻調
 和の吟味」
 放送文化研究所 「第 6 回学校放送調査結果報告書」「音のライブラリー・資料リス
 ト追加」「第一回テレビ学校放送調査結果報告書」「皇室関係放送用語集」
 北海道史料編纂所 「史料所在目録第五集」

松田正義・糸井寛一 「大分県方言の旅第3巻」

三上章 「中称の承前作用」

三沢光博 「国語史概説」

明治書院 「日本文法講座6」

文部省 「国語教育と文法教育」「文章の構成法」「国語の表現に及ぼした英語の影響」「研究報告集録人文編（Ⅰ）昭和33年版」（日本学術振興会）「就職状況等調査報告書（高等学校）」「学術用語集図書館学編」「公用文の書き方一資料集一」「教科書から見た明治初期の言語・文字の教育」「国語問題問答第六集」「全国研究機関通覧（昭和33年版）」「外国学術雑誌補充目録（昭和33年度）」

矢野文博 「脚本に於ける語法の問題」

山崎久之 「“ある” “をる” “ある” の表現価値」「近世前期三人称の主体待遇表現」

陸上幕僚監部 「テレタイプ方式の比較研究に関する総合報告」

BRUCE L. PEARSON 「新時代の文字」

JOHANNES RAHDER 「ETYMOLOGICAL VOCABULARY OF CHINESE, JAPANESE, KOREAN AND AINU」

PAUL HERMAN BUCK 「HARVARD UNIVERSITY LIBRARY ANNUAL REPORT FOR THE YEAR 1956—57」

(2) 逐次刊行物（おもなもの）

愛知学芸大学国語国文学会 「国語国文学報」7集，8集

愛知県教育文化研究所 「研究紀要」12集

愛知県立女子大学 「紀要」9輯「説林」Ⅲ，Ⅳ

青山学院大学文学部 「紀要」2号

秋田大学学芸学部 「研究紀要」7輯，8輯

朝日新聞東京本社記事審査部用語課 「ことば」57～67号

明日香路社 「明日香路」10巻4号～12号・11巻1号～3号

跡見学園 「紀要」3

いずみ会 「IZUMI」25号～30号

茨城大学文理学部 「紀要」8号

牛山初男氏 「信濃」10巻10号・12号，11巻2号（信濃史学会）

宇都宮大学学芸学部 「研究論集」1部，7号

宇和島市教育研究所 「紀要」5集

愛媛県教育研究所 「紀要」24集～26集

愛媛国語研究会 「国語研究」27号

愛媛国語国文学会 「愛媛国文研究」7号

大分県立教育研究所 「研究報告」14輯，15輯

大分県教育庁 「教育広報」9巻12号，10巻1号

大分大学学芸学部 「研究紀要」 7号
 大阪学芸大学 「紀要」 A 6号, B 6号
 大阪市立大学文学会 「人文研究」 9巻2号～11号, 10巻1号～3号
 大阪市立大学文学史研究会 「文学史研究」 9号
 大阪女子大学文学会 「女子大文学」 10号
 大阪大学文学部 「語文」 20輯, 21輯
 太下学園国語科教育研究会 「研究紀要」 2号
 大谷大学 「大谷学報」 37巻4号, 38巻1号～3号
 応用教育研究所 「研究集録」 1集
 岡山県教育研修所 「報告」 20号
 お茶の水女子大学 「人文科学紀要」 11号
 お茶の水女子大学国語国文学会 「国文」 9号, 10号
 尾道短期大学 「研究紀要」 8集
 香川県教育研究所 「教育研究」 11号A, B
 学燈社 「国文学」 1巻1, 2, 5, 6号・2巻1～12号・3巻1～9号, 11号, 12号・
 4巻1～5号
 鹿児島大学教育研究所 「研究紀要」 9巻
 鹿児島大学文理学部 「研究紀要」 7号
 神奈川県国語教育研究会 「国語教室」 2号
 金沢大学教育学部 「紀要」 6号
 カナモジカイ 「カナノヒカリ」 427号～441号
 鎌田良二氏 「国文学研究会報」 16号 (愛媛大学国語国文学研究会)
 関西大学国文学会 「国文学」 20号～24号
 関西大学万葉学会 「万葉」 26号～30号
 関西学院大学日本文学会 「日本文芸研究」 10巻1～3号
 関西学院大学人文学会 「人文論究」 8巻4号, 9巻1号～3号
 観世会 「観世」 25巻1号～12号, 26巻1号～3号
 岐阜大学学芸学部 「研究報告—人文科学—」 6号, 7号
 九州大学国文学会 「語文研究」 8号
 九州大学文学研究所 「文学論輯」 5号
 九州大学文学部 「文学研究」 57輯
 教育技術連盟 「教育技術」 12巻10号～13号, 13巻1号～12号「教育技術・幼児と保育」 3巻10号～12号, 4巻1号～12号「小一教育技術」 11巻10号～15号, 12巻1号～14号「小二教育技術」 10巻10号～15号, 11巻1号～14号「小三教育技術」 11巻10号～15号, 12巻1号～14号「小四教育技術」 10巻10号～15号, 11巻1号～14号「小五教育技術」 11巻10号～15号, 12巻1号～14号「小六教育技術」 10巻10号～15号, 11巻1号～14号「教育技術・中学教育」 2巻10号

～12号, 3巻1号～12号「教育技術・社会科研究」2巻10号～12号「教育技術・社会指導」3巻1号～12号
 京都学芸大学 「学報」A12号, 13号・B12号, 13号
 京都女子大学国文学会 「女子大國文」8号～12号
 京都大学教育学部 「紀要」Ⅳ
 京都大学国文学会 「国語国文」281号～294号
 京都大学人文科学研究所 「紀要」19冊～21冊, 「調査報告」16号「ZINBUN」2号
 京都大学「心理学評論刊行会」 「心理学評論」1巻2号
 宮内庁書陵部 「紀要」8号～10号
 熊本女子大学 「学術紀要」10巻1号
 熊本大学教育学部国文学会 「不知火」11号
 熊本大学法文学会 「法文論叢」10号
 クラブ尖塔(大阪) 「尖塔」31号～34号
 訓点語学会 「訓点語と訓点資料」9輯, 10輯
 高知大学 「学術研究報告」4巻～6巻
 甲南女子短期大学 「論叢」3号
 甲南女子短期大学国語国文学会 「甲南國文」2巻2号, 3巻3号
 甲南大学文学会 「文学会論集」7号, 8号
 神戸市外国語大学研究所 「神戸外大論叢」38～42号「外国学資料」4号
 神戸女学院大学研究所 「論集」5巻1号～3号
 神戸市立教育研究所 「研究報告」28号
 神戸大学国語国文学会 「國文論叢」7号
 神戸大学文学会 「研究」7号
 高野山大学 「論叢」1巻
 語学教育研究所 「語学教育」238号～240号
 国学院大学 「国学院雑誌」59巻2号～11号, 60巻1・2号
 国学院大学国語研究会 「国語研究」8号
 国学院大学和歌文学会 「和歌文学研究」3号～5号
 国語学会 「国語学」31輯～35輯
 「国語教室」友の会(京都) 季刊「国語教室」7～9号
 国際基督教大学 「アジア文化研究論叢」1輯
 国立教育研究所 「所報」38号～42号(終刊号)
 国立教育研究所 「紀要」5—Ⅸ, 7—Ⅱ, 8—Ⅲ・Ⅳ, 10, 11, 12集
 国立近代美術館 「年報」昭和31年
 国立国会図書館 「国際交換通信」13号～29号「公報」9巻5号～12号, 10巻1号～12号, 11巻1号
 古典遺産の会 「古典遺産」5号

「古典と現代」の会 「古典と現代」3, 5, 6号
 駒沢大学 「研究紀要」16号
 駒沢大学史学会 「駒沢史学」7号
 駒沢大学地理学会 「駒沢地理」1号
 埼玉県立教育研究所 「埼玉教育」11巻1号
 佐賀県立教育研究所 「研究紀要」15号, 16号
 佐賀大学教育学部 「研究論文集」8集
 佐賀大学文学会 「文学紀要」1号
 佐賀竜谷学会 「紀要」6号
 相模女子大学学術研究会 「紀要」2号, 4号
 作文の会 「作文教育」5巻2号～10号, 6巻1号～3号
 山陰民俗学会 「山陰民俗」17号
 三省堂出版KK 「文学・語学」7号
 滋賀コトバの会 「みんなのコトバ」4号
 滋賀大学学芸学部 「紀要」8号
 静岡県立教育研修所 「教育研究」5号～7号
 静岡大学「文化と教育」研究会 「文化と教育」97号～104号
 実践女子大学 「実践文学」3号～6号
 信濃教育会 「信濃教育」855号～868号(858号欠)
 島根大学 「論集」4号(社会)8号(人文)(教育)
 昭和女子大学光葉会 「学苑」216号～228号
 初等教育研究会 「教育研究」13巻1号～13号(9号欠)14巻1号～3号
 信州大学 「紀要」7号
 信州大学教育学部 「研究論集」9号
 成蹊学園研究所 「所報」1号
 聖心女子大学 「論叢」11集
 成城大学文芸学部 「成城文芸」13号～17号
 清泉女子大学 「紀要」5号
 総理府統計局 「研究彙報」9号
 大修館 「国語教室」73号～80号「高等国語教室」
 大正大学 「研究紀要」43号
 大正大学国文学会「国文学踏査」復刊2号
 千葉県立教育研究所 「研究紀要」39集
 中央大学国文学会 「中央大学国文」創刊号
 中央大学上代文学会 「上代文学」10号
 中央大学文学部 「紀要」4号～6号
 中国語学研究会 「中国語学」61号, 62号, 65号, 67号

帝塚山学院短期大学 「研究年報」 6号
 電通KK 「電通広告論誌」 15号, 16号
 天理大学おやさと研究所 「日本文化」 37号
 天理大学国文学研究室 「山辺道」 4号
 天理大学人文学会 「天理大学学報」 25輯～27輯「人文学会シリーズ」 1号
 天理図書館 「ビブリア」 10号～12号
 東京学芸大学 「研究報告」 9集(8分冊)(10分冊)
 東京教育大学文学部 「紀要」 19号「紀要」—社会科学論集— 5号
 東京教育大学国語国文学会 「国文学言語と文芸」 1号～3号「国語」 18号, 終刊号
 東京教育大学「未定稿」の会 「未定稿」 5号別冊
 東京女子大学学会 「論集」 9巻 1号
 東京女子大学比較文化研究所 「比較文化」 5号「紀要」 5巻, 6巻
 東京大学教育学部 「紀要」 2巻
 東京大学教養学部 「人文科学科紀要」—国文学・漢文学—Ⅶ
 東京大学新聞研究所 「紀要」 7号
 東京都立大学人文学会 「人文学報」 17号, 18号
 統計数理研究所 「染報」 10号「数研研究リポート」 3号, 4号「統計研究通信」 1号
 同志社女子大学 「学術研究年報」 9巻
 同志社大学人文学会 「人文学」 37号, 41号
 同志社大学文化学会 「文化学年報」 7輯
 東販出版科学研究所 「読書世論調査」Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ
 東北学院大学文経学会 「論集」 33号, 34号
 東北大学教育学部 「研究年報」Ⅶ
 東北大学教養部 「文科紀要」 1集
 東洋大学国語国文学会 「文学論藻」 10号～12号
 東洋大学平安文学研究会 「王朝文学」創刊号
 東洋大学マス・コミュニケーション研究室 「マス・コミュニケーション」 1巻 2号
 東洋文化研究所 「紀要」 14冊, 15冊
 徳島県教育委員会 「教育月報」 99号～109号
 徳島大学学芸学部 「学芸紀要」—人文科学— 7巻
 鳥取県立教育研究所 「研究紀要」 10集
 富山大学文理学部 「文学紀要」 8号
 仲田庸幸氏 「国語研究」 29号, 30号
 名古屋大学国語国文学会 「国語国文学」 1号
 名古屋大学文学部 「研究論集」 7号
 奈良女子大学文学会 「研究年報」Ⅰ

奈良女子大学附属小学校学習研究会 「学習研究」129号, 133号
 日仏会館 「学報」新5巻1号, 2号
 日本音声学会 「音声学会会報」96号～98号
 日本言語学会 「言語研究」33号, 34号
 日本書籍KK 「教育手帖」82号～85号・87号
 日本新聞学会 「新聞学評論」8号
 日本比較文学会 「会報」11号～16号
 日本フランス語学会 「フランス語研究」17号
 日本文学研究会 「文学研究」11号, 12号
 日本文芸研究会(仙台) 「文芸研究」28集～30集
 日本放送協会 「NHK国語講座」4巻1号～6号, 5巻1号
 日本民俗学会 「日本民俗学会報」1号～4号
 日本民族学協会 「民族学研究」22巻102号, 304号
 日本ユネスコ協会連盟 「ユネスコ新聞」218号～251号
 日本ローマ字会 「月刊ローマ字世界」復活1号～3号, 506号～508号
 日本のローマ字社 “RÔMAZI NO NIPPON” No. 69～81
 能楽思潮 「能楽思潮」1号～6号
 花園大学禅文化研究所 「禅学研究」49号
 一橋大学経済研究所 「経済研究」9巻2号～4号, 10巻1号
 広島女子短期大学 「研究紀要」9集
 広島大学学校教育研究会 「学校教育」474号～497号
 広島大学国語国文学会 「国文学攷」19号, 20号
 広島大学文学部 「紀要」13号, 14号
 広島大学方言研究会 「方言研究年報」1巻
 広島中世文芸研究会 「中世文芸」13号, 15号
 福井大学学芸学部 「紀要」8号
 福井漢文学会 「漢文学」7輯
 福岡学芸大学 「紀要」8号
 福岡学芸大学久留米分校教育研究所 「研究紀要」8巻
 福岡女子大学文学部 「文芸と思想」16号
 米国大使館文化交流局 「アメリカーナ」4巻4号～12号, 5巻1号～2号
 放送文化研究所 「調査研究報告」3集「文研月報」83号～94号
 北海道学芸大学 「人文論究」18号
 北海道大学一般教養部 「外国語・外国文学研究」Ⅶ
 北海道大学国文学会 「国語・国文研究」11号, 12号
 穂波出版社 「実践国語」19巻207号～214号 改題「実践国語教育」19巻215号～218号, 20巻219号～221号

三重県立大学 「研究年報」—第一部—3 卷 1 号
 宮城学院女子大学 「研究論文集」13号
 武庫川学院女子大学 「紀要」4 集, 5 集
 武蔵大学学会 「武蔵大学論集」9 号~13号
 明治大学人文科学研究所 「紀要」11号
 明治大学図書館 「増加書目録」82号~94号
 文部省 「初等教育資料」95号~106号 「中等教育資料」7 卷 4 号~15号, 8 卷 1 号
 ~ 2 号
 文部省調査局統計課 「文部統計速報」85号~87号 「教育統計」53号~57号, 「指定
 統計」13号, 15号, 82号
 山形県立教育研究所 「山形教育」67号~72号
 山形大学教育学部国語国文学研究会 「国語研究」10輯
 山口女子短期大学 「研究報告」10号
 山口大学教育学部 「研究論叢」7 卷 1 号~3 号, 8 卷 1 号~3 号
 山口大学文学会 「文学会誌」9 卷 1 号, 2 号
 横浜国立大学 「人文紀要」7 輯
 横浜市立教育研究所 「研究紀要」8 集
 立教大学文学部心理・教育学研究室 「心理・教育学科研究年報」2 号
 立教大学日本文学会 「立教大学日本文学」創刊号
 立正大学文学部 「論叢」8 号~10号
 立命館大学人文学会 「立命館文学」154号~164号
 立命館大学日本文学会 「論究日本文学」8 号, 9 号
 立命館大学平安文学研究会 「平安文学研究」21輯, 22輯
 琉球大学方言研究クラブ 「琉球方言」創刊号
 竜谷大学竜谷学会 「論集」358号~360号
 ローマ字教育会 「ことばの教育」97~110号
 早稲田大学演劇博物館 「早稲田演劇」4 号
 早稲田大学教育学部 「学術研究」7 号
 早稲田大学国文学会 「国文学研究」17輯, 18輯
 早稲田大学史学会 「史観」52冊, 53冊
 SEUER POP “ORBIS” VOL. Ⅷ No.1~No.2
 UNIVERSITY OF LONDON “BULLEIN OF THE SCHOOL OF ORIENT-
 AL AND AF RICAN STUDIES” VOL. 19 No.3 VOL. 20 VOL. 21
 No. 1, 2, 3
 UNIVERSITY OF WASHINGTON “MODERN LANGUAGE QUARTERLY”
 VOL. 19 No.1~No.4

庶務報告

A. 庁舎および経費

(1) 庁舎

所在 東京都千代田区神田一ツ橋 1ノ1

木造モルタル塗, 2階建 建坪 本館 321,709坪

軽量不燃書庫 30,501坪 閲覧室 13,985坪 計 366,195坪

(2) 経費

昭和33年度予算 総額 32,687,000

人件費 22,352,000

事業費 10,335,000

B. 評議員会

会長 土岐善麿 副会長 波多野完治

有光次郎(34.2.4就任) 伊藤忠兵衛 円地 文子

金田一京助 倉石武四郎 桑原 武夫

颯田 琴次 沢登 哲一 時枝 誠記

土居 光知 中島 健蔵 中島 文雄

野村 秀雄 服部 四郎 松方 三郎

松坂 忠則 宮沢 俊義 山崎 匡輔(34.2.3辞任)

C. 組織と職員

(1) 予算定員

教官 32 事務職員 16 合計 48

(2) 組織および職員

	職名	氏名	備考
国立国語研究所	所長	西尾 実	

第1研究部 話しことば研究室	部 長	岩淵悦太郎	
	室 長	大石初太郎 飯豊 毅一 宮地 裕 吉沢 典男 泉 喜与子 吉村 香苗	33. 4. 1採用 33. 4. 1採用
書きことば研究室	室 長	林 大 斎賀 秀夫 水谷 静夫 石綿 敏雄	
	補助員	橋本 圭子	
	"	高木 翠	
	"	岡本美奈子	33. 8. 31辞職
	"	西山 洋子	
	"	鈴木百合子 渡辺 嘉子	33. 4. 1採用 33. 4. 1採用
地方言語研究室	室 長	柴田 武 野元 菊雄 上村 幸雄 徳川 宗賢	
	補助員	白沢 宏枝	
第2研究部 国語教育研究室	部 長	興水 実	
	室 長	芦沢 節 高橋 太郎 村石 昭三	
	補助員	根本今朝男 川又瑠璃子	
言語効果研究室	室 長	永野 賢 林 四郎	
	補助員	渡辺 友左 宮地美保子	
第3研究部	部 長	山田 巖	33. 4. 1第3研究部長に昇任さ せる。 第3部長心得を免ずる。 33. 5. 8第3研究部近代語研究 室長を免ずる。

近代語研究室	室 長	見坊 豪紀	33.5.9第3研究部近代語研究室長に昇任させる。
		広浜 文雄	
	補助員	進藤 咲子	
	"	丸山 敦	33.4.1採用
		石田 秋子	
第4研究部	部長(併)	岩淵悦太郎	
第1資料研究室	室 長	松尾 拾	
		市川 孝	
		大久保 愛	
	補助員	山田 立子	33.9.30辞職
	"	露峰 裕子	33.10.1採用
第2資料研究室	室 長	高橋 一夫	
		村尾 力	
	補助員	織田 滌	
第3資料研究室	室 長	上甲 幹一	
		有賀 憲三	
		高田 正治	
	補助員	山本 征子	33.4.1採用
	兼任所員	遠藤 嘉基	東京大学教授
	"	藤原 与一	広島大学助教授
	"	佐藤喜代治	東北大学教授
庶務部	部 長	尾崎源之助	
庶務課	課 長	三島 良兼	
	課長補佐	名古屋恒太郎	
		鈴木 篁二	
		芳賀清一郎	
		増山 治子	
	補助員	根岸佐代子	
会計課	課 長	黄木得二郎	
	課長補佐	伊藤 仲二	
		三浦 清伍	
		渋谷 正則	
		鈴木 亨	
		西山 博	

図書室	補助員	江頭 健一	33.6.30辞職
		吉田芳太郎	
		伏見 と志	
		金田 とよ	
		岡本 まち	33.7.18採用
		加藤 雅子	
図書室	非常勤職員	藤田 尚	
	室長(併) (併)	三島 良兼	
		鈴木 篁二	
		芳賀清一郎	
	補助員	大塚 通子	

D. 内地留学生受入れ

全国都道府県から内地留学生を迎えて、研究の便をはかっている。次にその氏名・研究題目などを掲げる。

氏 名	学 校	研究題目	期 間
井原 功	徳島県勝浦郡勝浦町立	小学校の国語学習指導にお	昭和33. 6. 1から
	生比奈小学校教諭	ける文法の取扱いについて	" 33. 8. 31まで
竹井典雄	宮崎県宮崎市立大宮小	国語科における表現指導に	昭和33. 8. 1から
	学校教諭	ついて	" 34. 1. 31まで
佐藤性一	東北大学教育学部附属	児童の聞き方指導について	昭和33.10. 1から
	小学校教諭		" 34. 3. 31まで

E. 日誌抄

1958. 5. 13 第38回国立国語研究所評議員会
議事
1. 昭和33年度の研究計画
 2. その他
5. 29～30 第17回文部省所轄ならびに国立大学付置研究所長会議（日本
学術会議で）
6. 19～20 第9回文部省所轄機関事務協議会（箱根強羅で）
10. 16～17 第11回文部省所管研究所事務協議会（九州大学で）

11. 6～7 文部省所管研究所長会議第3部会（神戸大学経済経営研究所で）
11. 14 埼玉県羽生市羽生部会国語研究部五月女栄次郎（羽生市立井泉中学校教諭）以下12名研究所見学
12. 2 第39回国立国語研究所評議員会
議事
1. 研究事業の中間報告
 2. その他
12. 20 国立国語研究所創立記念日
1959. 2. 27 第40回国立国語研究所評議員会（臨時会）
議事
1. 会長，副会長の選出
 2. その他
3. 6 国立国語研究所創立10周年記念祝賀式
ところ 千代田区神田錦町3丁目28番地
学士会館
1. 開会
 2. あいさつ
国立国語研究所長 西尾 実
 3. 祝辞
文 部 大 臣 橋本 竜伍
日本学術会議会長 兼重寛九郎
国立教育研究所長 関口 隆克
国語学会代表理事 時枝 誠記
日本芸術院会員 山本 有三
 4. あいさつ
国立国語研究所評議員会長 土岐 善麿
記念出版 国立国語研究所論集1
ことばの研究

3. 7 国立国語研究所創立十周年記念講演会
ところ 千代田区神田一ツ橋
一ツ橋講堂
現代語の発展のために
あいさつ
国立国語研究所長 西 尾 実
明治初期の書きことば
所員 山 田 巖
現代語の標準
所員 林 大
話しことばの文法
所員 大 石 初太郎
これからの日本語
所員 岩 淵 悦太郎
- 3.31 第41回国立国語研究所評議員会
議事
1. 昭和34年度研究事業計画
 2. その他

昭和 35 年 2 月

国立国語研究所

東京都千代田区神田一ツ橋 1-1

電話 九段 (331) 代表 4295

UDC 058:495.6

ND C 810.5

—国立国語研究所刊行書—

昭和24年度	国立国語研究所	年報	1
昭和25年度	国立国語研究所	年報	2
昭和26年度	国立国語研究所	年報	3
昭和27年度	国立国語研究所	年報	4
昭和28年度	国立国語研究所	年報	5
昭和29年度	国立国語研究所	年報	6
昭和30年度	国立国語研究所	年報	7
昭和31年度	国立国語研究所	年報	8
昭和32年度	国立国語研究所	年報	9

国立国語研究所報告1	八丈島の言語調査	
国立国語研究所報告2	言語生活の実態 —白河市および付近の農村における—	(秀英出版刊) ¥ 300.00
国立国語研究所報告3	現代語の助詞・助動詞 —用法と実例—	
国立国語研究所報告4	婦人雑誌の用語 —現代語の語彙調査—	
国立国語研究所報告5	地域社会の言語生活 —鶴岡における実態調査—	(秀英出版刊) ¥ 600.00
国立国語研究所報告6	少年と新聞 —小学生・中学生の新聞への接近と理解—	
国立国語研究所報告7	入門期の言語能力	
国立国語研究所報告8	談話語の実態	
国立国語研究所報告9	読みの実験的研究 —音読にあらわれた読みあやまりの分析—	
国立国語研究所報告10	低学年の読み書き能力	
国立国語研究所報告11	敬語と敬語意識	
国立国語研究所報告12	総合雑誌の用語(前編) —現代語の語彙調査—	
国立国語研究所報告13	総合雑誌の用語(後編) —現代語の語彙調査—	
国立国語研究所報告14	中学年の読み書き能力	
国立国語研究所報告15	明治初期の新聞の用語	
国立国語研究所報告16	日本方言の記述的研究	(明治書院刊) ¥ 900.00

国立国語研究所資料集1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)	
国立国語研究所資料集2	語彙調査 —現代新聞用語の一例—	
国立国語研究所資料集3	送り仮名法資料集	
国立国語研究所資料集4	明治以降国語学関係刊行書目	(秀英出版刊) ¥ 300.00

国立国語研究所共著	高校生と新聞	(秀英出版刊) ¥ 280.00
日本新聞協会共著	青年とマス・コミュニケーション	(金沢書店刊) ¥ 280.00
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和29年版)	(秀英出版刊) ¥ 450.00
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和30年版)	(秀英出版刊) ¥ 600.00
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和31年版)	(秀英出版刊) ¥ 450.00
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和32年版)	(秀英出版刊) ¥ 480.00
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和33年版)	(秀英出版刊) ¥ 480.00
国立国語研究所編	国語年鑑(昭和34年版)	(秀英出版刊) ¥ 500.00

1958~1959

ANNUAL REPORT OF NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Research from April 1958 to March 1959

Research in Sentence Patterns of Colloquial Japanese

Research on the Vocabulary in Magazines: General
description and analysis of loan words

Survey for Linguistic Maps of Japan

Survey on Hokkaidô Dialects

Study of Language Development of School Children

Study in Readability of Newspaper Sentence

Study on the Japanese Language of the Meizi Period

Research in Special Other Problems

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
KANDA-HITOTUBASI, TIYODA, TOKYO